# 壊れるよろい

げんじあきら

## 目次

〇中国の会社が動いた

〇15年前の新製品のクレーム

〇柚木名が中国に雲隠れする

〇家の整理をする

〇酒向に呼び出される

〇狩野と名波の研究所長交代の辞令

〇立派な引き継ぎ書

〇バイオチップ

〇退職の手続き

〇名波の初出勤

〇佐元とマグロを食べる

〇名古屋

〇映画を観に行く
すべて壊れはじめて２０１０・０４１８

〇五味幸助

〇アパートを探す

〇大やけど

〇８７０の部品交換の優先順位

〇研究所の送別会

〇増渕が隣に寝ていて

〇３つの部品の試験

〇中国の会社

〇家の掃除をする

〇中国プロジェクトを手伝えない

〇紛糾した代理店への説明会

〇名波が社長に怒られて

〇陣持の嘆き

〇本社に退職のあいさつに行く

〇佐元の家で

〇森知が正常ではなくなって

〇最後の出勤日

〇増渕

〇筑波山

〇２人目の大やけどが新聞で報じられて

〇だれが責任をとるのか

〇真野から連絡
退職の日２０１０・０５０５

〇役職定年で退職の日

〇佐元が買ったおかしな車

〇柚木名はアメリカにいた

〇佐元は自分で運転して帰ってきた

〇自宅とアパートの交換の電話

〇美薗と新宿で会う

〇人が動く押しボタン

〇赤字で書かれた壊れるよろい

〇青色に変わった壊れるよろい

〇まきのわたる『よろい』

〇美薗からのメール

〇一瞬増渕を見かけた

〇黒い文字の壊れたよろい

〇紫の壊れるよろい

〇下田の外れのラーメン屋

〇漁港

〇下田のスーパーマーケットと先里に似た男

〇ラーメン屋の先里

〇美薗に電話した

〇朝から水処理の勉強をする

〇知美からの連絡

〇海鮮ラーメン

〇東京のラーメン屋食べ歩き

〇知美が荷物を運んできた

〇集中して勉強する

〇真野の転勤

〇三釘製作所に出向く日が明後日になった

〇知美からの電話

〇三釘製作所へ

〇佐元の海鮮どんぶり

〇知美が２往復すると言った

〇友子と保と知美に家を明け渡す

〇２回目の三釘製作所

〇６月20日試運転開始のスケジュール

〇佐元からのケータイメール

〇週末なのに

〇土曜でもみんな仕事をしている

クレームの責任を負って２０１０・０６０７

〇クレームの責任

〇試運転が近づいて

〇佐元からバイバイの電話

〇１号機の最終チェック

名東エレクも途絶えて２０１０・０６１５

〇姿を消した美薗金蔵

〇５万円の報酬でもよかったのに

〇アパートから一歩も出ずに

〇もう１人の狩野

〇もう１人の自分の言い分

〇勘違いしていてゴメンなさい

追いつめられて２０１０・０８１５

〇追い込まれて

〇生き返った？

〇佐元の自宅

〇先里からの手紙

〇溢れる涙

# 役職定年の封書

〇役職定年の封書
狩野隆一は、ちょっと甘かったかもしれないと思いはじめていた。簡単にコトが運ぶと考えていた。
なぜ彼らは、自分が教授になることに反対するのか、理解ができなかった。
最初に声をかけてくれたから行くのにと思っていた。報酬だっていままでの１／４になってしまう。
わけがわからない。
あの若いスタッフの「売りはなんでしょうか？」の質問にカリッときた。
大学に行ってまで商品をつくるつもりはない。
大学教授は売り物がないとなれないのか。
これでは最初の話と違う。面接されているのはこっちだ。
子会社の社長の道もあった。
「もしもし〜なんでしょうか。ああ〜もうタクシーに乗っています。失礼はいいんだけれども〜私がどうなるか見えてないんだけど。大野さんが熱心に誘ってくださるからだけど〜どうしたものか考えています。私も役職定年まで２カ月しかないし〜もう決めないといけないんだけど」
苦言ではないのだが、それに近いことをタクシーの中から大野にした。
「今日は初めてだから？わかりました」とは言ったものの、おもしろくはない。望まれているのだろうか。
狩野には、55歳の役職の定年の封書が人事から送られた時、もう会社に残るこころがなくなった。役員へという話があるかもしれないと思っていた。期待していた。
評価が低すぎる。妻とも離婚する羽目になってしまったのは、中国プロジェクトだった。３年もの間、一度も帰国しなかった。立ち上がらなければ恥だった。終わって帰った時には、妻も息子と娘も出て行った後だった。そのことすらも知らなかった。
それほどに尽くしたと思っている。

それがいきなりの封書である。
妻と息子と娘への毎月30万円の送金も守らなければならない。
もう一人で暮らして10年になる。
息子は大学を卒業しているはずだが、どうしているのだろう。娘は結婚したのだろうか。連絡が途絶えている。
自宅を妻と息子と娘に使ってもらおうと考えている。30万円の送金を20万円にできる。マンション代が助かる。しかし、自分はどこに住めばいいのか。頭が混乱してうまくまとまらない。
狩野隆一は、東証一部に上場する関エトレ株式会社の、研究所の所長である。６年前から所長をやっている。関エトレは、エレクトロニクス関連商品の生産販売をしている。
狩野は、誰もが功績を認めている。尊敬もされている。会社で寝泊まりをするような人である。
会社は、ここ５年くらい、大量の役職定年者が出ることになっている。狩野にとっては、タイミングが良くないとも言える。
なんといっても、３年間の中国工場と研究所の立ち上げは、狩野の実績であった。誰もが認めるものだ。そして、狩野の研究所から、多くの新製品が出ていった。もし自分がいなければ、この会社はどうなっていたのだろうと思う。
最近、ここ２年間、狩野の研究所から、新製品が出ていない。誰も、狩野に意見するものはいないが、飲み屋の話題にはなっている。
「このままでは狩野さんも終わりだよ」
狩野は、そういううわさを承知していないわけではないが、そんな小さなことより、自分の功績の方が、はるかに大きいと考えていた。
それが、いきなりの、役職定年の封書である。ショックは大きい。
５月５日まで、２カ月しかない。
大野二郎は、現代大学の数学の教授である。狩野の先輩にあたる。狩野の、研究成果を商品に結びつける技に惚れて、何かにつけて、狩野からアイデアを取り込もうとしている。
狩野が役職定年を機会に、会社を退職する意向があることを聞いて、現代大学の教授になるように誘っている。大学の根回しをしている。

大学にはじめて出向いた帰りのタクシーで、狩野は、眠ってしまった。疲れているわけではないが、なんとはなしに、眠ってしまった。
いつものように、一人でごはん支度をする。
狩野は、もう10年も一人でごはん支度をしていて、晩ごはんの支度は、手慣れたものである。冷蔵庫の冷凍室は、とんかつ用の肉やすき焼き用の肉や冷凍食品でいっぱいである。冷蔵室に入っているものは少ない。あまり買い物には行かない。
多分、野菜が少ないとは思っているが、一人で暮らしていると、野菜が難しい。たまに買っても、ダメにしてしまう。
野菜のない焼肉どんぶりをつくる。ごはんは昨日の残りをレンジで温めて使う。
難しいことではない。
一人で暮らしているが、空しいと思ったこともあまりない。
忙しく毎日飛び歩いている。研究所の社員も狩野が、何かを決めるのを待っている。自分が止まれば、すべてが止まると考えている。

短い晩ごはんをすませて風呂に入る。
どういうわけだか、こういう習慣になっている。お風呂といっても、湯船に浸かったことはない。すべてシャワーである。どんなに寒い日もシャワーで済ませている。何も不自由はない。
狩野がシャンプーをしていた時に、不意に、左肩が風呂の壁にぶつかった。なんだろう。よろけたのだろうか。もし壁がなかったら、倒れていたのだろうか。
狩野は、健康には自信があった。
今のように整備されていない中国で、３年間、一度も病気もせずに過ごした。時々電話する、妻や息子や娘の声に、ホッとしたものである。
それで十分だった。
壁に左肩がぶつかったのは何だろう。
気持ちがよくない。

狩野の夜は、いつものように静かだ。
訪れる人もいない。大きな家に一人で住んでいる。
役職定年の封書を読み返す。
ここのところ、毎日、夜の日課になった。
事務的な封書である。
人事部長から狩野宛の封書である。
一般社員になって60歳の定年まで働ける。その後も、嘱託として雇用する道も拓かれていると書いてある。
狩野には、その選択はない。
退職すると、退職金は妻に渡すことを約束した。たいした額ではないが、妻は安心できるだろうと思っている。
狩野には、大いなる自信があった。
まだ55歳でもある。
毎晩この封書を見ているが、寂しさはあるが悲しくはない。
狩野は、明日、退職するメールを人事部長にしようと思った。
３月３日である。寒い日だった。

〇先里甲一
１週間後、狩野に夜の誘いがあった。３月10日である。
狩野の前任の研究所長であった先里甲一が嘱託社員を終了するので、ごくろうさん会を、近い人が集まってやるとのことであった。
先里は、実は、研究所が発している新製品の、ほとんどすべての根っこをやってくれている。どういうわけだか、先里が絡まないと、新製品が具体化できない。ここ２年くらい、研究所から、これといった新製品が出ていないが、先里が、嘱託になって、発言権がなくなったからだといううわさがある。
狩野は、表面的には先里をたてているが、実は、よく思っていない。新製品の成果は所長である自分の実績である。自己評価にも、常に、そのように書いてきたが、狩野の実績に記したことのほとんどは、先里が絡む新製品であった。

研究所の実績だから狩野の功績にするのは当然なのだが、しっくりこない。
先里のテーマ以外を取り上げるのだが、ここ２年、ことごとく、うまくいかない。
狩野には、今晩も、実は、気がすすまない。
狩野には、先里なる人物がよくわからない。意味不明な人物である。第一、役職定年になって、一般社員でも会社に残ることがよくわからない。５年も、狩野の下で一般社員だった。しかも、32歳のマネージャーの下で働いた。ゼンゼン理解できない。そして、60になって、定年で退職するのかと思ったら、２年間の嘱託である。給料だって、大幅にダウンした。狩野には、よっぽどお金に困っているのだろうと思うしかない。
狩野には、あり得ない選択である。

「先里さんおつかれさまでした」
狩野は、乾杯のあいさつをさせられた。
幹事が、これからもよろしくと言ったのは何だろう。狩野は、何も聞いていなかった。
「先里さん隣に行っていいですか？」
狩野は、これからもよろしくが気になっていた。
「１Ｇから共同研究してほしいという話があって、狩野さんはまだお聞きになっていないかもしれませんが、受けようと思っているんです」
狩野には、理解できないことだった。反対すべきなのか。
「狩野さんは、もうすぐ役職定年だそうですが」
狩野は、はっきり言わなかった。もう人事部長には、退職する旨のメールを送ったのだが、まだ何も言ってこない。
「役職定年になると、いきなり年をとってしまうのですが、狩野さんはまだ若いし、活躍できそうです」
狩野には、先里に励まされている状況が気に入らない。
先里の態度が気に入らない。先里には、誇りなるものが感じられない。

カラオケの誘いを断って帰ってきた。
先里甲一は、どうも肌が合わない。

狩野が今晩感じたことは、先里も含めて、みんな、自分が役職定年になっても、一般社員になって残ると思っていることだ。誰も狩野の本心をわかっていない。
狩野は、テレビを見るともなく眺めていて、眠くなって、その場で眠ってしまった。このようなことはなかった。就寝時間は０時30分と決めてあった。規則正しい生活をしている。
背もたれの椅子で、目が醒めたのは朝の３時だった。

○中国に行くうわさ

狩野に、先里のごくろうさん会から１週間後、とんでもないところから電話がかかってきた。中国プロジェクトでお世話になった中国の会社であった。工場の管理者として中国で働かないかとの誘いだった。
まずいことに、酒向専務に電話が入った。
仕方がないことだが、狩野に電話をしてもかまわないか、相談したものだ。工場が拡大してどうにもならないからとのことだった。
狩野は、すぐに返事をしなかった。現代大学の話も進んでいる。即答はできないと思った。
どういうわけか、うわさが広がっていた。
次の日の昼食時の食堂で、若い女性の研究員に言われた。
「所長さんは中国に行かれるのですか？」
狩野は、どう反応してよいのか、困った。
「所長に聞いてみようとみんな言ってました」
なんとかつくろったのだが、何かがおかしいと狩野は感じた。

いつものように、狩野の夜は静かだった。
珍しく電話があった。佐元素子だった。佐元は、八重洲の本社にいて42歳独身である。美人ではないが男にモテないタイプではない。なぜか独身である。狩野を尊敬している。狩野の凛とした態度や工学博士や研究所所長などの肩書にも惚れている。狩野は、時々佐元のマンションを訪れている。知れたらタイヘンなことになる。

「明日来る？」
短い会話だが、お互いに大人である。
「あなた役員にしたくないから中国の会社に頼んだらしいけど」
佐元は、驚くべきことをいきなり言った。
「明日詳しく聞くから」
狩野は混乱していることを知られたくなかった。
佐元は、なぜこんなことを知っているのだろう。
なぜ、自分を役員にしたくないのだろう。
役職定年での退職意向はどうなっているのだろう。
考えると混乱してくる。
ウイスキーでも飲もう。

「あなたって相変わらず上手ね」
狩野は、いつも佐元に褒められる。褒めるということはどういうことなのだろう。比較する男がいるのか。
「今日も帰るの？」。
狩野は、決まって０時に、佐元のマンションを出ていた。
お互いに独身である。問題はないが、同じ会社の社員である。しかも、重要人物である。人目につかないようにしてあった。
「昨日の電話だけど」
狩野は切りだしてみた。
「わたしはあなたが役員になると思っていたから聞いてみた」
人事部長と渋谷で飲んだらしい。狩野には、佐元が、どうして人事部長と２人で渋谷に出かけるのか、理由がわからない。
「酒向専務があなたを役員にしたくなくて中国の会社に頼んだ」
とんでもないことを人事部長は佐元に話している。
「私が退職する話も聞いたんだ」
その渋谷の夜何があったのか、もう聞きたくはなかった。
「会社でのあなたは終わった」
冷静に、佐元は狩野に言った。
何かが壊れている。

３月17日だった。

〇佐元素子

狩野は、あくる日、１時間遅れて研究所に行った。
昨日の夜、家に着いたのは１時過ぎだった。睡眠不足ではないが、眠りにつけなかった。
「おはよう〜」
狩野は、いつものように元気がよかった。
「10時30分から会議やります」
何事もないかのように、研究所は動いている。
狩野の机に、人事部長からの封書が置かれていた。
退職金の手続きや年金の手続きなどの、退職に伴う手続きの書類であった。
「会社でのあなたは終わった」
狩野には、佐元の冷静なことばが妙に頭に残っている。
自分が退職するメールをしたのに、なぜか、事務的な封書が送られてくると、腹立たしい。
そもそも、あれだけ狩野に惚れていた佐元素子の、熱が冷めるかのような、冷静さも気に入らない。
いつも、次の日の約束をするのに、昨日は、何もなかった。
狩野が佐元素子に最初に会ったのは、新入社員として、研修に来た時だ。研究所が研修先だった。狩野は、ダントツの若さでマネージャーになっていた。32歳だった。狩野は結婚したばかりで、妻の友子は長男を身ごもっていた。
毎日帰りにやってきては、一緒に帰りたいと言っていた。間違いはなかったのだが、それ以来、コトある度に、誘われていた。
狩野は、間違いを起こしてはならなかった。そう思っていた。佐元素子の気持がどうであれ、受け入れることはできなかった。
狩野が中国から帰ってきて、誰もいなくなっている自宅に着いた３日目に、佐元からケータイに連絡があった。晩ごはんの誘いだった。
「あなた次の研究所長だって」

佐元は、狩野にこう言った。
なぜ狩野が、あれだけ断っていたのに今晩やってきたのか、聞くこともなく、佐元はこう言った。
狩野は、当然だと思っていた。なぜ佐元がこう言ったのか、不思議とは思わなかった。
その日から続いている。
よくここまで、誰にも知られずに、続いている。
狩野には、佐元が、ずっと自分に惚れ続けていると思っている。ただ、佐元が、何を望んでいるのか、話し込んだことがない。いつも、仕事の成果話をしてくれと言われるだけである。いかにも楽しそうだった。
「一緒にいると楽しいそれだけで十分」
佐元が、いつも言う口癖だった。
狩野も、佐元と一緒にいると楽しい時間を過ごせた。何より良かったのは、自由だった。佐元は、狩野の、何をも束縛しなかった。
今もそうである。
「会社でのあなたは終わった」
冷静に言った佐元のことばが気になる。
「会議はじめます」

狩野は、人事部長から送られてきた退職手続きの封書を持ち帰った。
いつものように、自分でごはん支度をした。ピザとめんたいスパゲティーである。おいしい。お店も出せるのではないかと思うくらいにおいしい。狩野には、何をやっても、あるところまでは、必ず上達する自信があった。一人で暮らさなければならなくなったら、料理を人並み以上にこなす自信があった。現に、そうなっている。インターネットが役立っている。イタリアンが得意だが、中華も得意だ。中国で暮らしていた。独り住まいだった。難しい料理はできないが、日本料理も得意だ。
シャワーを終えて、見てもいないテレビをつけて、退職手続きの封書を見てみた。
丁寧に手続きが書かれてあった。年金の手続きなど、イメージが湧かないのに、これを見れば、わかりやすい。

年金で暮らすなど考えてもいない。
年金は60からだそうだが、手続きなどしないだろう。年金で暮らすなど、思ってもいない。
狩野は、提出日だけを控えて、封書をしまった。
この腹立たしさがなんであるのか、よくわからない。
３月18日だった。

〇元妻と逢う
狩野は、元妻の狩野友子に連絡をしなければならなかった。
納得はできないのだが、大学教授になるにしても、中国の会社に勤めるにしても、大幅に、報酬が落ちそうである。あの家は狩野には広過ぎる。毎月の送金額を30万円から20万円に減らしてもらわないと困る。そのかわり、あの広過ぎる家を、友子と息子と娘に使ってほしい。
どういうわけだか、友子から連絡があった。
銀座で夕刻に待っているとのことだった。
「お茶だけでいいです」。
狩野の身勝手さに愛想をつかせたのだが、修正しようもない。ことばも少ない。家族のために、一生懸命に働いた。それは事実である。それなのに、どうして家族に嫌われるのか、よくわからない。
「役職定年で会社を辞めるのですか？」
狩野には不思議である。どうして友子が、こう切り出すのだろうか。確かに、離婚の時に、退職金を全額渡す約束をした。
そのことが心配なのだろうか。
どうして役職定年で狩野が会社を辞める話など知っているのだろう。
「役職定年の日を知ってたから」
友子は、狩野が、役員になれなければ会社を辞めると思っていたと言った。
いつも、これ以上の会話にならない。本当は、どうしてそう思うのか聞いてみたいのだが、狩野は、いつもここで話を止めてしまう。友子が、どうして狩野が会社を辞めてしまうと思っているのか、大事なことである。
会社の中のほとんどの人は、狩野が、役職定年になって、一般社員になっ

て、そのまま働き続けると思っている。
狩野友子や佐元素子だけが、狩野は会社には残らないと思っている。それだけ、狩野のことを、よく知っているのだろうか。
５月末に家を明け渡すことにした。
名義は狩野隆一のままである。収入が減ってしまいそうだから、仕方がない。毎月20万円の送金も約束させた。
狩野の息子の保は、大学を卒業して、食品会社の研究所に勤めているそうだ。今度２年目になる。
娘の知美は大学で心理学を勉強しているそうだ。アルバイトに忙しいそうだ。
狩野は、毎月20万円は少ないかもしれないが、なんとかやっていけるだろう。口数の少ない友子と話ながら、３人の暮らしぶりをイメージしていた。

狩野は、鶏肉の鍋をつくりながら、つくづく思った。どうして、こう曖昧になんでも過してしまうのだろう。もっと、友子の気持ちを聞けばいいではないか。どうして自分勝手に、イメージして、自分で納得してしまうのだろう。
息子の保のことだって、本気で話したことがない。何を考えているのかよくわからないままだった。特に、中国にいた３年間で、保が考えていることが、さっぱりわからなくなった。保の心は、狩野からは、大きく離れてしまった。
娘の知美のことだって、いつからか、話もできなくなっていた。中国の３年間で、何もかも変わってしまった。
狩野は、ごはんを炊くのを忘れた。うどんを調べる。
自分で料理ができるようになって、何も不自由はない。今晩何を食べるのかと考えることが、けっこう楽しくもあった。
買い物も、近所のスーパーマーケットに行く。外食することはほとんどない。独り暮らしもけっこう楽しいと感じている。
狩野は、お金に困ったことはなかった。裕福ではなかったが、高給で勤めている。自宅のローンも10年だった。
お金のことなどどうにでもなると思っていた。

自信があった。
鶏肉の鍋にうどんはおいしかった。
最近、味付けもうまくなってきている。
いつもの狩野の１日が終わろうとしている。静かな夜である。
土曜日３月20日だった。

〇保と知美から電話がある

狩野は、友子と逢った次の日、息子の保から電話があって、驚いた。日曜の昼だった。
「家を出るんだって？」
保は単刀直入に聞いた。
「ああ〜１人では広過ぎて掃除もタイヘンだから」
「じゃ〜準備するから」
「おまえたちはいくらのマンションに住んでるんだ？」
「５万８千円」
「ああ〜けっこうタイヘンだったんだ」
「オレが働きはじめたから」。
「ああ〜お母さんのこと〜頼む」
狩野には、近所の、家族を追い出して苦労させているといううわさが、ガマンならなかった。追い出したわけではない。勝手に出て行った。なのに、うわさは怖い。
狩野には、なんといっても、家族の反乱は痛かった。家族は、自分と一緒に、苦労をしてくれると信じていた。中国プロジェクトを成功させれば先が見えてくる。この会社の成功者としての先が見えてくる。
狩野は、次期研究所長になって、役員になれると思っていた。
現に、狩野は、成功者だった。研究所長になった。
なぜ自分のように、家族も一緒にガマンしてくれないのか、妻や息子や娘たちの気持ちが理解できなかった。
いまだに理解できない。
どういうわけだか。狩野に役員の話はなかった。当然だと誰もが思っていた

のに。

狩野はその夜、晩ごはんの鳥ごはんに忙しかった。
インターネットをテーブルの端に置いて、デジタルの秤が欠かせない。
娘の知美からの電話だった。
火をゼンブ消して最初からやり直そうと思った。
「わたしたち引っ越す準備していいんですか？」
「ああ〜独りで広過ぎて困ってるから」
「お母さんに送るお金10万円少なくしたんですか？」
「何をするにしても今より収入が落ちそうだからお願いした」
知美は大学の授業料は、アルバイトをして自分で行っているそうだ。しばらく話したこともなかったのだが、しっかりしていると感じた。
それにしても、息子も娘も、どうして電話があるのだろう。
何を確認しているのだろう。
狩野には、よくわからなかった。またも曖昧のまま、ありがとうを言っているのだと、勝手に解釈して、そのまま過した。
狩野は、いつも後悔する。もっと娘と話があるのだろうに。なぜ娘と話し込めないのか不思議である。一緒に風呂に入っていた。ずっと狩野のふとんの中で寝ていた。
どうなったのか自分にはわからない。知美に聞けばいいのだが、なぜだか聞かない。
ごはんのスイッチを入れる前に、鳥を入れないといけない。
インターネットのメニューを読むのに必死になった。
いつもこうなる。
鳥ごはんなど、どうでもいいと思う。娘の知美の方が大事だ。
どうして、鳥ごはんに必死になって、知美に聞きたいことが聞けないのか、不思議でもある。

狩野は、シャワーを浴びて、いつものようにテレビをつけて、書類に目を通す。
毎日、研究所の書類は山のように出てくる。紙屑の製造所ではないかと思

う。研究所に入ったら、書類に目を通すヒマがない。お客さんからのクレームの対応に、研究所が引っ張り出される。本社に呼び出されることも毎日のようにある。中国の仕事はどんどん増える。
夜に１時間くらいじっくり考えておかないと、明日の対応ができない。６年前に研究所長になって以来、ずっと、規則正しくやってきた。研究所に遅刻したこともない。車で通っている。
研究所にはお客さんも多い。海外のお客さんもたくさん来られる。説明は、ほとんど狩野がやることになっている。英語も中国語も話せる。
狩野は、会社のことが不思議でならない。５月５日から研究所長を解かれて一般社員になって働けるわけがない。狩野のようなスキルを持った人はそうそういない。会社の規則だからと、事務的に話を進行させてしまう会社が理解できない。
頭が混乱するが、明日の会議の資料を読んでおかないといけない。９時から会議である。また、所長のご意見はどうでしょうかになってしまう。誰も、責任を負いたくないから、決定的なことは言わない。狩野が、何かを言わなければ、何も決まらない。
テレビが坂本竜馬をやっていた。坂本竜馬は勇気があって狩野のようであった。しかし、何かが違っている。狩野は、坂本竜馬のように、泥臭くはない。明治になって政府を仕切る、その後に活躍した人が好きだ。

## 〇狩野の中国行きのうわさと次期所長

次の日月曜日のお昼、研究所から海外の子会社に出向して社長をしている名波高次から電話があった。
「狩野さんの次の所長を打診されたんですが、研究所にお伺いしたいと思っているのですが」
丁寧だった。
「中国の会社の社長をされるそうですけど、いつ発たれるんですか？」
いつの間にか、中国の会社の社長になっている。
返事に困る。まだ何も決まっていない。
狩野には、よく飲み込めていない。何かが、動いている。自分に関すること

なのに、自分が動く歩道に乗ったままのような気がしている。歩いていないのだ。誰かが動く歩道を動かしている。誰かではないのか。何なのか。
結局、来週の月曜日、名波高次が研究所へやってくることになった。名波高次は、生え抜きの研究所員だった。現在50だ。40の時に、新製品で大きなクレームが出て、回収して撤退した。その時の責任者が名波高次だった。狩野は、強く、回収と撤退を主張した。そして、名波は、ベトナムの子会社に出向した。ずっとこの10年間、ベトナムで暮らしている。３年前に子会社の社長になっている。
狩野の知らないところで、動く歩道が動いている。自分もそこに乗っているのを実感した。
このようなことははじめてである。
研究所の人事で、意見を求められないことなど、かってなかった。中国から帰って、一度もない。もう12年くらいになる。研究所にまつわる人事や予算や研究テーマは、狩野の手のひらで動いてきた。
なんとも、妙な感じがする。
自分が、役職定年を機に退職するメールを人事部長に送ったのだから、当然こうなる。わかっているのだが、しっくりこない。

昼から、相変わらず、会議が３つもあって、忙しくした。
狩野は、動く歩道に乗ったままになっている自分が、これでよいのか、考えなければならないと思った。考えるヒマもないくらいに、次々に用事が出てくる。決算も近い。経理からも、あれこれたくさんの宿題が出される。例年、資産の管理のことで、業務監査に叱られている。指示命令書のようなお願い文がメールで届く。
今期の新製品の実績がおもわしくない。63％にしか達しない。このままでは、営業は、責任を研究所に持ってくるだろう。新製品が出なかった分を差し引いて、販売目標未達成の隠れ目標をつくる。３月に入っている。いまさらどうにもならない。
ここ２年、３月になると、このようなことを繰り返している。言い訳文書の作成に追われている。３月は最も忙しい。
来季の新製品の開発目標は、もうすでにつくってある。どう考えても、達成

できないと思うのだが、毎年、未達成分を上乗せするクセになってしまった。
明日、先里甲一と相談してほしいと企画のマネージャーが言っている。
狩野は、先里が好きではない。できたら話をしたくない。
そもそも、研究所の共同研究者に過ぎないはずなのに、何の話があるのだろう。共同研究者を了解した覚えもない。
狩野の前任の研究所長である。もう62歳だ。
会いたくはないが、仕方がない。

〇先里甲一と逢う

狩野は、研究所を22時に出ることになった。このままではまずいと思った。
動く歩道に乗っていてはまずい。
この時間では、好きな料理もできない。寄ったことはないが、帰り道のラーメン屋で、ラーメンとギョーザを食べることにした。
「こんばんわ〜まだやっていますか？」
「11時半までです」
「わかりました〜醤油ラーメンとギョーザと半ライスをお願いします」
まだ若いラーメン屋の主人だった。
一人でやっているのだろう。
「こんばんわ〜遅いですね〜」
誰が話しかけてきたのか、一瞬、わからなかった。先里甲一だった。
「何をしているのですか？」
「ここでアルバイトをさせてもらっています」
狩野には、何のことか意味がわからなかった。
「ラーメンの研究でもしているんですか？」
「いえいえ〜アルバイトです」
「年金あるんじゃないんですか？」
「ああ〜研究費がないんです」
先里の話では、年金は家族の生活費にしかならず、なんらかの研究を続けようとすると、資金が足りないとのことだった。

「今年も共同研究費が研究所から出るんじゃないんですか？」
狩野は、反対するつもりなのに、認めるようなことを言ってしまった。
「たった40万しか払わないのですか？年間ですか」
「私は社員だったし、共同研究者としては難しいんでしょうね」
狩野は、急に、先里にすまないと思ってしまった。
それにしても、なんとも、世渡りが下手だ。狩野に話してくれれば、下請けの会社にだって、大学にだって、海外の会社にだって、いくらでも話をつけられるのにと思った。
「ああ〜どうぞ〜温かいうちに召し上がってください」
「いただきます」
話は、これだけだった。
ラーメンもおいしかったしギョーザもおいしかった。
「どうもごちそうさま」
狩野は、先里に会釈をして店を出た。
アルバイト料はいくらなのだろう。時給で１０００円くらいのものだろう。
全く理解ができない。あの様子では、皿でも洗っているのだろう。

次の日、10時に先里が訪ねてきた。
狩野には、所長室というものがあった。大きな会議室の一部を仕切ったものだ。ケンカまがいの会議があると、所長室にも聞こえてくる。
「昨日はとんだところでお目にかかりました」
先里が、ラーメンを食べてくれたお礼を言った。
狩野には、先里がよくわからない。
「先里さんに話を聞いてくれとのことだったのですが」
「この３つの企画書を狩野さんに渡しておこうと思ったのです」
「来季も、これといった新製品が計画されていないので、私が温めておいた企画を使っていただけたらと思いまして」
狩野には、こういう先里が嫌いである。
これといった新製品が計画されていないということは、狩野を批判している。研究所の社員を批判している。
おかしなことなのだが、研究所のみんなもフツウに話している。

「来季もこれといって新製品ないし」
だからといって、先里が、同じように言うのはおかしい。先里は、もう会社の人間ではないし、研究所の人間でもない。
「預かってもいいですか？」
「説明させていただきたいのですが」
狩野には、この３つの企画を取り上げるつもりなどなかった。ただ、先輩である。預かることだけはしないといけない。
「ああ〜これから会議がありますので〜また時間をつくることにしていただけませんか」
先里は、しぶしぶ承知した。
狩野は、何度か先里の話を聞いている。時々、この会社の社員であるという意味は、といった、とんでもない話をすることもある。社長でもないのにと思う。ほっておいたら、研究所の社員であるという事は、そんな話をされそうである。
狩野が研究所の所長である。いくら先輩でも、そういう話をされたくはない。
「それでは、連絡をお待ちしています」
そう言って先里は部屋を出て行った。
狩野には、先里がよくわからない。昨日の夜、狩野にアルバイト先を知られたことは、まずくはないのだろうか。まるでワルびれたところがない。
ひょっとすると、家族も、みんな知っているのかもしれない。うわさを流しても、意味がなさそうである。
企画のマネージャーを呼んで、先里から預かった３つの企画を渡した。
「これは先里さんから所長へのプレゼントですか？」
「そのような口ぶりだったけど」
「じゃ〜私から聞いておきます」
「ああ〜お願いします」
狩野は、先里と昨日の夜ラーメン屋で会った話をした。
「私もちょくちょく伺います」
企画のマネージャーも知っているようだった。知らないのは、狩野だけかもしれないと思った。

「お金がないんだろうか」
「まだ研究がしたいそうです」
「ああ〜少しはお金かかるからな〜」
狩野には、よくわからなかった。どこかの下請けの会社の顧問にでもなれば、それでやっていけるはずである。どうしてそうしないのだろう。とても理解ができない。

〇社長に呼ばれた
２日後、狩野が研究所に着くと、メモが机に置いてあった。
「社長が９時30分に電話をくださいとのことです」
なんの話か、見当はついている。
「会議はじめます」
狩野は、今日も忙しいスケジュールを組んでいた。
人は、忙しくしていなければ生きていけないかのようなエクスタシーを持っているので、ほっておくと、どんどん忙しくしてしまう。必要とか不必要とかそういうものではなくて、勝手に、スケジュールをつくってしまう。そして安心するのが人である。こんな文章を読んだことがある。先里の文章だった。
先里は嫌いであるが、忙しのエクスタシーとは、よく言ったものだと思う。確かに、ガンガンにスケジュールが埋まってないと不安になる。狩野の手帳は、いつも真っ黒である。

「君は〜大学教授の話があるそうじゃないか」
狩野には、社長がどこからこの話を聞いたのか知りたかった。現代大学教授の話は、大野二郎しか知らない。
「昨日佐元くんにお昼をご馳走した時にだけど」
「違うのかね？」
狩野は困惑した。言葉を濁すしかなかった。確かに、佐元は知っている。ベッドの中での話だ。なんでも知っている。どうして社長に話すのだろう。
「せっかく、酒向専務が中国の会社を世話していたにと思ったんだよ」

狩野には、よく飲み込めていなかった。何かがおかしい。
「会社のあなたは終わった」と言った佐元の言葉が浮き出てくる。
「ああ〜今日は今後のこともあるんだけど、君の慰労会をしようと思って席を用意してあるから。ちょっと一時間ばかりその辺で時間をつぶしてください。会議が１つあるので」
鮒野社長は、時々、狩野を晩ごはんに誘った。
決まって、人事の意見を聞くことだった。営業出身なので、研究所のことに詳しくなかった。
狩野の口が堅いことも承知していて、安心して相談していた。
おかしなことなのだが、狩野のことに関して、一度も相談されたことがない。鮒野社長は、異例なことだが、もう13年も社長をやっていて、会長もいない。権力者である。先里甲一とは同期入社である。49歳で、ヒラの営業部長から社長になった。
いきなり社長になって驚いた話は、もう４回くらい聞かされている。
狩野には、ひょっとして、鮒野の次の社長は自分ではないかと感じたことがあった。やはりメーカーなので、研究所に詳しくなければ、社長は難しい。

狩野は、１時間考えたかった。外に出て、喫茶室でコーヒーを飲んでいた。
一番気がかりなのは、佐元である。
この前から、なにかにつけて、おかしい。わざわざ鮒野社長に、現代大学の教授の話など、することはないだろうに。何を考えているのだろう。ただ、佐元と狩野の関係に気がつくことはないようだ。ますます、佐元がわからなくなる。
「じゃ〜車のところで待っていてください」

食事の後、クラブに０時までいた。
鮒野がいつも使っているクラブだ。鮒野は、狩野を、大学教授になると、女性たちに紹介した。狩野先生に、いきなりなった。
それはそれで気分のワルイものではなかった。楽しい時間だった。
シャワーを浴びるとやっと自分に帰れる。ホッとする。
ケータイを見てみる。佐元から電話があったようだ。

「佐元です、今帰ったのですか？」
眠そうな声だった。
「お昼ご馳走してくださいって言ってたから。狩野くんは中国に行くことになっていると言うから」。
それだけのことで、どうして現代大学のことを話すのか、不思議だった。またいつものように、突っ込んで聞かなかった。曖昧にしてしまう。勝手に想像してしまうワルイクセである。
「もう遅いから、早く寝てください」
こういうことばに弱い。もっと突っ込まないといけないのにと思いながら、歯磨きに行った。

〇中国の会社の日本支社長
次の日。柚木名という中国の会社の日本支社長から電話があった。朝の９時だった。夜北千住で会いたいとのことだった。つくばから北千住まで出かけなければならない。もしかして、雇われる身になるかもしれない。承知する。
どうして昨日の今日なのか、不思議な気もするが、深くは考えないようにした。何かがおかしい。
狩野のスケジュールは、今日も真っ黒だった。

約束のとおりに、狩野は、18時30分に高級焼き鳥のお店に入った。柚木名はすでに待っていた。狭い仕切られた空間だった。
「わざわざすみません〜遠くまで」
きっと八重洲ではできない話があるはずである。北千住ということは、そういうことだ。中国の状況を聞きたかった。
「一時冷えたんですが、最近は勢いを取り戻しました」
リーマンショックのことを言っている。
「鳥のコースになっているので頼んでおきましたから」
狩野は、柚木名とは時々、八重洲で飲んでいる。狩野には、中国のことが気にかかる。せっかく、寝食を忘れて立ち上げたものだ。狩野は、家族のつな

がりを、失った代償でもある。
「狩野さんの中国行きの話しですけど」
やっぱり、この話だった。
「内密にしてほしいのですが、もう自立してやっていけるので資本関係を解消したいと思っているんです」
狩野には驚きだった。
この話は、海外担当の酒向専務や鮒野社長も知らない話だと思った。
「会社の代表のような狩野さんを引き受けたくないのです」
「まだ酒向専務に話していませんね？」
「狩野さんの話が急だったので、とりあえず、それを止めなければと、中国の社長に言われています」
狩野は、翻弄されていると感じた。それぞれの思惑に翻弄されている。いままで、一度だって、狩野が、中国の会社に行きたいという話をしたこともない。翻弄されている。
何がどう動いているのか、絡み合っていてよくわからない。ただ、狩野が苦労して立ち上げた中国の会社のエレクトロニクスの事業は、その後大きくなって、自立しているようである。もう、日本との関係がジャマになっていることが明らかになった。
「この話は、狩野さんだからできることなので、鮒野社長や酒向専務には、内緒にしてほしいんです」
結局、狩野に、身を引いて欲しいということなのである。
自分で身を引いて欲しのだ。
「いつごろ、資本関係の解消の話を持ち出すつもりですか？」
夏には、はっきりさせるとのことだった。
やはり中国そのものが強くなっている。日本の会社の生産場所の一つに過ぎなかった工場が、メーカーとして、世界で独立した会社になろうとしている。やっていけるのだろう。
狩野は、曖昧な返事をすることしかできなかった。
どのように対処すればよいのか、すぐには決めかねた。
おいしいビールだった。鳥もおいしかった。

狩野は、帰りの電車の中で、考え込んでしまう。
佐元が言った「酒向専務は、あなたを役員にしたくないから中国に推薦した」は、一体なんだろう。
「狩野さんが中国に入ってくるのを、とりあえず、止めなければならない。そう中国の社長に言われている」も、一体なんだろう。
おかしな話になっている。狩野がボタンを押したわけでもないのに。
いくら考えても、うまく対処できない。
狩野の帰りは遅かった。シャワーを浴びてテレビをつけて、明日の会議の書類を読もうと思った。
いつの間にか、眠ってしまった。
最近、多くなった。うとうとしていると、そのまま眠ってしまう。
ケータイが鳴っている。
「もしもし狩野ですが」
完全に眠っていた。柚木名からの電話だった。
信じているけど、今日の話は内緒にしてくれとの、念押しの電話だった。そして、驚くようなことを話した。
「狩野さんが、中国の会社が資本関係を解消することに手を貸してくれれば、狩野さんを役員で受け入れようと考えているのですが」
裏切りの誘惑である。そう感じた。
「何をすればいいのですか？」
聞いてみた。
「中国の会社の売上の60％を占めている関エトレの製品を、中国国内製品に切り替えたいのです。売上は多いが、まったく儲けがありません。これからも、抑え続けられそうなので、中国内の競争に負けると思っています」とのことだった。
思い切ったことを考えているのだ。資本関係だって、30％の資本が入っている。うまく抜けないと、しこりが残る。関エトレ内の情報が欲しいのだ。うまく話を切り出したい。
なぜ、北千住で話さないで電話なのだろうと狩野は思った。
あのあと、中国と話をしたのだろうか。
また、狩野の勝手な想像がはじまった。柚木名に聞けばいいのだが。

「もし私が今日の話を酒向専務に話したらどうするのですか？」
思い切って聞いてみた。
「酒向専務は、あなたを外したいんだから、狩野さんの立場がワルクなるだけでしょ？」
狩野には、柚木名が、関エトレの、かなりの部分に入り込んでいると思った。社内では、中国の会社は、子会社だと、みんな思っている。安心している。役員も出している。
「返事は１週間後くらいにします」
狩野は、とにかく、考えないといけないと思った。
うとうとしていたのに、眠られなくなった。

〇佐元と映画を観に行く

狩野が洗濯をしていると、佐元から電話があった。
「明日、映画観に行こうと思うんだけど」
いつもの、いきなりの用事である。
「ここで晩ごはん食べるから」
マンションに行くことになって、０時に帰ることになる。
お互いに、映画など控えていた。
狩野は離婚しているし佐元は独身である。おかしな関係ではないのだが、狩野の立場を重んじてくれていると感じていた。
映画の誘いははじめてである。
狩野は、何かが変わりはじめていると感じた。佐元が、人目につく場所に行こうと言ったことがない。不思議と、関係がバレそうになったこともない。佐元と二人でいるところを見られたことがない。表だったところに２人で出かけたことがない。
佐元の何かが変わってきていると思った。

３Ｄのうわさの映画だった。すごいお金がかかってると思った。
やはり、どこにも寄らずに佐元のマンションへ帰った。
「ごはんやってるからシャワーしてくれば？」

いつものように、タオルと下着を手渡す。佐元は、狩野の下着をどこで買うのだろう。常に新しいものを用意している。もうずっと続いている。狩野は、それを洗濯して使っているが、使いきれないので、古いものから棄てることにしてある。
マンションのシャワーの方が狩野には適していると、いつも感じていた。狩野の自宅のシャワーは、温度が安定しない。時々、急に冷たくなってしまう。佐元のマンションのシャワーは、心地よい。
佐元の料理は和食が多い。料理が得意だ。ご馳走というほどでもないのだが、なんとなく、なごむ。狩野も料理が得意になっている。イタリアンなども得意になった。やはり、佐元のごはんの方がおいしいと思った。

まだ食事が終わっていないのに、佐元はシャワーに行く。いつものことだ。
佐元にはガマンができなくなることが、狩野にはよくわからない。
「こっちいるから」
いつものように、佐元は隣の部屋のベッドへ向かった。
狩野は新潟の辛口のお酒を飲み干してベッドへ向かった。
最近、佐元が激しくなっているように感じる。

「上手〜」
それだけ言って佐元は眠ったかのごとく目を閉じている。
もう結婚しないのだろうか。どういうつもりなのか、一度も聞いたことがない。狩野のワルイクセだ。気になっていることはたくさんあるのだが、突っ込まない。
佐元も、聞きたいことはたくさんあるのだろうが、突っ込んで来ない。二人で、何かが壊れるのを嫌っているのだろう。
「伊豆に桜観に行こうと思うんだけど」
いきなり佐元がつぶやいた。
狩野が黙っていると、佐元は続けた。
「車もいいけど特急の電車で行くから、わたしが手配するから、土曜日と日曜空けておいて」
明らかに、佐元の中で、何かが変わってきている。

あれほど人前には出なかったのに。二人で電車で伊豆に行くと言う。

もう１時になっていた。寒い自宅だった。明日は名波がやってくる。９時には研究所に行かないといけない。
明日のスケジュールを出して、資料を読みはじめた。
10時から会議である。名波との話は、10時までに終わらせなければならない。
狩野には、自分でも何かよくわかっていないが、動く歩道に乗っている感じがしている。自分の意思ではない、誰が動かしているのかもわからない。
まずいと思いながらも、その動く歩道から降りれない。なぜだか、降りれない。

〇名波高次
「おはよう」
狩野が研究所に入った時、名波高次は、すでに玄関のところで、狩野を待っていた。
「おはようございます」
狩野と名波は、スタッフルームを通って、奥の、所長室へ向かった。
「おはよう」
みんなは、名波を視ている。狩野の次の研究所長になるといううわさが飛んでいる。気になる。
研究所のみんなにとって、狩野は、都合のよい所長だった。凛としていて、海外からのお客さんにも、英語でも中国語でも、研究所の説明ができる。
時々、大学からも見学に来る。狩野の方が、教授っぽく見える時もあった。
研究所のみんなにとっては、狩野は、都合がよかった。研究所の体面を保てる人だった。
社内に研究所の体面が保てなくなってきたのは、ここ２年くらいだろう。新製品が、全く出なくなったからだ。あれだけあった狩野の威光が、次第に薄れてきている。
研究所のみんなには、先里の姿が見えなくなって、新製品が出なくなったと

感じている。誰も、狩野の前では何も言わない。
「10時から会議なので、10時まで話しましょう」
狩野は、すぐに、名波に伝えた。
「発表は４月12日だということなので、今日、だいたいのことをお聞きして、一旦、ベトナムへ帰ります」
狩野は、４月12日の話を聞いていなかった。
動く歩道である。狩野のことなに、狩野は何も知らない。
「５月５日は連休なので、わたしは５月６日から研究所に出社します」
名波は、もう自分のスケジュールを決めている。
「今期の研究所の計画は本社でいただきましたので、ここに書かれていないことをお聞きしたいのですが」
だんだんムカついてきているのがわかる。
「新製品がここ２年くらい、これといって出ていないんですが、何が原因と思われますか？」
狩野は、この質問は、10回くらいされている。人事部長にも質問された。
「うちの会社だけではなくて、どこも、今は新製品が難しくなっているのですよ。リーマンショック以来難しいのです。景気が良くなったら購買意欲も出てきて、新製品も出しやすくなります」
いつものように、日本の経済に原因があるかのような言い回しをする。
「私の参考になるような話はないのでしょうか。景気が良くなるだけでは困りますけど」
確かに、次期の研究所の所長としては困ることになる。
狩野は、なぜ困らなかったのだろうか。深く考えたことがない。次々に新製品は出ていった。新製品が出なくなったのは、ここ２年くらいである。
「先里さんは何をなさっているのですか？先里さんは商品の達人だから意見を聞けばいいと言われているのですが」
また先里の話が出てくる。
誰から聞いたのか、名波に聞いてみた。
「国内の営業部長です」
もっと突っ込んで聞いてみたかったが、またいつもの狩野のクセである。勝手に想像して突っ込まない。

「先里さんは１Ｇの共同研究者になっているから、話はできます」
やや安心したような、名波の顔を見て、狩野は、ガッカリした。狩野が所長になって３年くらい、新製品がたくさん出て、国内営業も海外営業も潤った。すべて狩野の実績になっているのに、なぜ、先里の話が出てくるのだろう。しかも商品の達人である。
狩野は、研究所の体面を保つ人と、みんなに思われている。会社の体面を保つ人でもある。きっちりしている。
ただ、あれだけ新製品の実績があるのに、誰も、狩野を、商品の達人とは言わない。
狩野は、先里のケータイの番号を、メモにして渡した。
まだ話をして20分も経っていないのに、もう話は終わったかのような雰囲気になった。
「研究所の中を歩いてきていいですか？」
話が途切れて、名波は、こう言った。
案内をしようと思ったのだが、時計を見て、案内はしないそぶりをした。
「ちょっと行ってきます」

名波は、お昼を一緒に食べて、そのまま本社に帰って行った。
「名波さんは次の研究所長ですか？」
名波は、自分で次の研究所長であると言って回ったのだそうだ。狩野は、ますます動く歩道に乗っているかのような感じを受けた。
関エトレ株式会社の研究所長は重責である。先里の前任者は役員だった。どういうわけか、先里が所長になった時、先里は役員になれなかった。そして、そのまま狩野も役員になっていない。
関エトレは技術の会社である。そこの研究所の所長が役員ではないことは、不思議である。
名波は役員になるのだろうか。
とりあえず、今日は帰ろう。明日もまた忙しい。
狩野は、明日の会議の書類をカバンにしまった。

佐元から留守電が入っていた。

「土曜日わたしのマンションから東京駅に行くから」
４月３日の伊豆行のことだった。伊豆のどこに行くのか、何も言わない。佐元は、狩野が、聞きたくはないことをよく知っている。
「なにが食べたい？ああ〜ムダなこと聞いた」
何度も聞いたことがある。
狩野は、どんな料理でも美味しければ良かった。出てきた料理に、必ず、キレイですと言った。どこに行きたいのかなど、聞いてもムダであることをよくわかっている。宿に着いたら、いい感じですと言うだろうことも承知している。
狩野は、なんでも評価的なのだ。佐元の料理にも評価的である。ただ、常に、プラスのことしか言わない。マイナスのことは、狩野が自分で飲み込んでしまう。
今日の名波もそうだったが、狩野と話をしたがらなくなってきていると思った。酒向などは、まだ一度も中国の話をしてこない。なぜだか、よくわからない。
連絡をくれるのは、佐元だけである。その佐元すら、時々、「会社のあなたは終わった」というようなことをポロっと言ったりする。
「じゃ〜金曜の夜待ってるから」
短い会話なのだが、しっかり意思はつながっていると思った。

〇大野二郎からの電話
「おはよう」
狩野は、54歳だから、まだ若い。声にも元気がある。
「おはようございます」
研究所のみんなは、狩野の役職定年のことをよく知っている。もしかして、退職するかもしれないことも知っている。おつかれさま会を計画してもよいものかどうか迷っている。次の研究所長は決まったようだが、狩野にどう対処していいのか困る。

「お昼から大学に来ていただけませんか」

大野二郎からの電話だった。
すぐに、どうなっているのか聞けばいいのだが、また曖昧にして想像してしまう。狩野は、ワルイクセだと思った。
「13時30分ごろでいいですか？」
とにかく、今日の会議をキャンセルしないといけない。お昼から２つある。朝の会議が１つなので、午前中に回せないか、調整してくれるように頼んだ。

狩野は、ギリギリ13時30分に現代大学に着いた。
大野二郎は玄関で待っていて「経営が苦しくて教授を増やせないから狩野さんの教授は今日ダメになる」そう言った。
「狩野さんが希望するのだったら私が辞めて狩野さんが入ってもらってもいいと思っている」おかしなことになっている。
とりあえず、学長と会うことになっている。
狩野は、こころが萎えていた。そもそも狩野が希望したわけでもない。学長と会って何になるのだろう。電話で断ればよかったと思った。大野を降ろしてまで自分が教授になる気などない。そんなみっともないことはできない。
学長の話は、おかしな話だった。今は、学長といえども、思うように運営できないと嘆いていた。経営委員会のようなものがあるらしい。学校も会社に似てきたのだろう。確かにそうだ。日本で何人もの教授がいるのだろう。想像を絶する数だろう。あなたは何をやってきたのか。成果を求められる。あたりまえなのだろう。狩野には当然のことのように思える。
ながながと話を聞いたのだが、要するに、大野二郎が推薦した狩野隆一の教授就任は、現代大学の教授枠の問題で、はまらなくなったのである。それだけではない。３名減らさなければならないのである。
学長も、太鼓判を押していたそうで、大野二郎に謝らなければならなくなったのだ。
報酬が１／４になっても、少しこころが動いたのは、大学教授という名前だった。おふくろだって喜んでくれると思った。ただそれだけである。大野二郎が動かなければ、話はここまでこなかった。

大野二郎と晩ごはんを食べた。けっこうお酒を飲んだ。
せっかく狩野を確保できていたのに残念であるかのような話を、大野はした。
「狩野さんにはたくさん話があるだろうから急がなければと思った」とも話した。
本当は、怒るべきなのだろう。約束が違うじゃないかと。
狩野には、不思議と怒りはなかった。多分、もっといい話があるはずだから、現代大学の話はこれでいいのではないかと、自分で納得していると思った。
もっといい話があるはずというのは、何だろうか。
大野二郎は、少し酔って、経営委員会のワルクチを、延々として並べていた。話を聞いていて、狩野には、人を育てるという、曳き人のような人は自分にはでなくて、期待もされていないのだと思った。狩野への期待は、成果と体面である。狩野であれば、国際学会でも、内容はともかく、論陣を張れることは確かである。
自分のために教授をしている人と、他者を育てるために教授をしている人がいるようである。多分、他者を育てるために教授をしている人など、少ないのだろう。狩野にも興味はないと思った。

シャワーを浴びて、コーヒーを煎れていた。
動く歩道に乗っている自分を不思議に思った。いままで、こういう感覚になったことがない。中国プロジェクトへの参加も自分が希望した。なんでも自分が考えて動いてきた。
最近のこの流れが理解できない。そもそも、現代大学教授の話など、期待してもいなかったのに、大野二郎の説得に応じた。狩野さんだったら教授をしながら、いくらでも他の仕事ができるからという言葉だった。
狩野は、コーヒーを飲みながら、次第に怒りが大きくなる自分を感じていた。
動く歩道に乗っていてはいけない。降りなければいけないと感じていた。この動く歩道の行先はどこなのだろう。

〇年度末

研究所の年度末は、営業などの年度末とは異なる。年度末だからといって、これといった特別な事柄もない。狩野の研究所では、恒例になっている、17時ごろから全員で食堂に集まって、乾杯をする行事があるくらいだ。
狩野が研究所の所長になって３年くらい、役員から金一封が届いていた。年末をねぎらってくれである。そこに所長がまた足して、ビールとおすしなどで、簡単な乾杯をすることになっていた。
いつからか、役員からの金一封はなくなって、狩野の拠出だけになって、おすしが消えた。渇きモノだけである。
研究所よありがとうとは言い切れなくなっていることを、こういうところに、実感する。

「このデフレスパイラルが続く中、我が社は、昨年度99％の成績を維持できそうであり、満足とはいかないが、けっこうガンバってやってきました。すべては、みなさんのガンバリのおかげです。景気はまだまだ底を打っておらず、苦しい局面が予想されますが、研究所のみなさんの熱心さで、苦境を耐えていけると信じています。来期も、よろしくお願いします」
狩野は、何をやっても無難である。あいさつも、どこからも非難がこない。中国のお客さんとの懇親会を研究所の食堂でやっても、無難なのである。安心できる。安心できるが、淡々と時間が過ぎていくだけのようでもある。
狩野は、自分のことは、何も話さなかった。
研究所のみんなは不思議であった。次の所長も名波に決まっているのを知っている。この席に名波がいないのもおかしい。ベトナムの子会社に、帰っている。
いつもだと、狩野の周りには、研究所の女性たちが集まるのが常であったが、今日は、誰も近寄らない。
狩野は、仕方なく、ビールを持って、みんなの輪の中に入って行った。こういうことは、いままでになかったことだ。
狩野には、常にオーラがあった。中国を立ち上げた。研究所発の商品がたくさんある。社長になるかもしれないオーラだった。

なんといっても、凛としている。
みんなの輪の中に入ると、話題は、狩野の登山の話になる。研究所のみんなも無難なのだ。「これからどうされるのですか？」こう聞きたいのだが、狩野が本音で話してくれるとも思えない。気まずくなるかもしれない。
登山の話が無難である。
狩野が最もよくする登山の話は、家族と剣岳に登った話である。まだ離婚する前で、狩野が中国から帰った年である。友子と保と知美は家を出ていたが、なんとか、元に戻そうと、狩野が企画した。これが、家族で山に登った最後になった。本当は暗い話なのかもしれないが、狩野の剣岳の話は、聞いていても、けっこう楽しい。
どうしておばさんが少ないのか、理解できる。勇気が必要な個所があるのだ。狩野は、身ぶり手ぶりで、その危険な個所の突破を話す。研究所のみんなも、何度か同じ話を聞いている。
それでも、この剣岳の登山の話を狩野にさせておくことが無難なのである。
狩野への二次会の誘いはなかった。
けっこうビールを飲んだ。バス停までかなりあるが、歩いて出ることにした。普段は車で通っている。研究所まで30分はかかる。バスで通えないことはない。
真っ暗である。狩野には、このような真っ暗の中でバス停に向かうことは、いまだかってなかった。研究所でお祝い会があっても、誰かが、送りますと言ってくれた。
３月末とはいえ、けっこう寒い。人通りもない。研究所の中で、次第に、一人だけ、浮いてきていると思った。
これも動く歩道なのだろう。動く歩道はどこかに向かっている。そこから降りなければいけない。

途中のバス停で少しながく止まっていた。運転手さんがいない。トイレでも行っているのだろうか。先里がアルバイトをしているラーメン屋さんの前である。
狩野は、思わず降りてラーメン屋さんに入った。ビールと渇きモノである。お腹が空いた。

「いらっしゃいませ」
先里の声だった。
この人はどういうつもりなのだろう。またしても思ってしまう。
「ギョーザとネギラーメンと半ライスをお願いします」
若い主人に注文をした。
「しょうちしました」
承知しましたとはおかしな言い方である。ラーメン屋なのに。
「今日は年度末だったのですか？」
先里が話しかけてきた。
「名波さんから電話があって４月15日に研究所にお伺いすることにしました」
そうですかと言うしかなかった。
「先里さんは楽しそうだけど」
なぜこういうふうに聞いてみたかったのかわからない。狩野は、先里に聞いた。
狩野は、ここからタクシーを呼んでもらうつもりでビールを注文した。
半ライスとネギラーメンとギョーザを先里が運んできた。
主人は、たばこを吸いに出たのか、いなくなっていた。
先里は、洗い物をしていて、終わってやってきた。
「楽しそうに見えますか？」
先里は言った。
「私にはよろいが何もないからラクなんですよ」
おかしなことを言った。
「みんな捨ててきてやっとかもしれません」
いつものように、狩野の曖昧さがはじまった。こういう会話が、狩野は嫌いである。起承転結でないと気持ちがワルイ。
この短い会話の中でも、狩野は、先里とは分かり合えないと思った。
「ここでアルバイトをしている以外は何をしているのですか」
狩野は話を変えた。
先里研究室を勝手につくって研究しているのだそうである。収入がない研究室だそうで、けっこうタイヘンらしい。

お客さんがやってきた。ラーメンを注文した。先里がラーメンをつくっていた。ラーメンをつくることは簡単なのだろうか。
「ごちそうさま〜すみません〜タクシーを呼んでいただけますか？」

自宅の留守電に柚木名からの伝言が入っていた。
「明日４月１日ですが、北千住のこの前のお店で待っています」

○２度目の北千住
決算で忙しいのだろうに、柚木名は、先に来て、狩野を待っていた。
ここは、都心から少し離れているし、狩野がつくばから出て来るのもラクだし、何よりも、知っている人に出会う可能性が低い。安心して、きわどい話ができる。
「この前のコースを頼んでおきました」
柚木名は狩野を見るなり言った。
「狩野さんの役職定年の日は５月５日ですか？」
柚木名は確認するように狩野に聞いた。
考えてみたら、もう１カ月しかないのだ。まるで、自分のことのようには思えない。
ここの和風の焼き鳥はおいしいのだが、焼き鳥に行くまでに、いろいろ出てくる。早く焼き鳥が食べたいのだが。
「この前の返事ですが」
柚木名は、早速、肝心なことを聞いてきた。
狩野が、関エトレ株式会社として中国の会社に来ることは断るけれど、中国の会社側として、中国の会社が、関エトレから離れることに協力してくれれば、役員として受け入れるというものだった。
はっきり言って、まだ研究所の仕事に忙殺されている。自分のことではあるが、しっかり考えてはいない。
「昨日酒向専務と話しましたが、狩野さんが酒向専務に、中国側の意向を話してないだろうと思いました」
狩野は、そういうことはしない。後指を指されるようなことは嫌いである。

狩野が、中国の会社の誘いに乗るとすると、大義が必要なのだ。狩野には、大義がないと動けない。単なる裏切りはできない。
「多分、狩野さんは裏切りたくないわけでしょ？」
読まれているかのように、柚木名は言った。
「狩野さんは捨てられたのですよ？」
やっと焼き鳥がきて食べようと思ったのに、柚木名は、思わぬことを言った。
「酒向さんは、あなたを役員にしたくないから、私に引き受けてくれと言ったのですよ？」
それは、佐元から聞いてわかっていた。
狩野は、理由を知りたかった。どうして、酒向専務は、自分を役員にしたくないのか。
「もう関エトレのような、日本の地方の会社よりも、中国のエレクトロニクスの会社の方が、世界のメジャーになります」
また驚くようなことを言った。
ここで決断しない狩野を、不思議な人でもあるかのような言い方をする。
「契約書はありますか？」
柚木名はカバンからコピーを１枚出してきた。
これは、狩野も係って仕上げたものだ。多くを書いていない。
資本を30％入れることや技術協力のことや役員の派遣である。
役員は、今は十字幸助が派遣されている。研究所にいた。契約の技術指導の条項と、役員の派遣に該当する。
「この他に、契約書が存在すると思う」
またもや柚木名はおかしなことを言いはじめた。
「前の中国の会社の社長と鮒野社長でメモを取り交わしているらしいのです」
あまりにも契約書が簡単なので、お互いに確認しておこうとメモにしたらしいのだが、前の中国の会社の社長が急死して、その存在が、中国の会社には、わからないらしい。
「これが知りたいのですか？」
狩野は聞いてみた。

お互いにサインでもしていたら、中国の会社が不利であれば、なんとかしないといけない。
これはすごく難しい。狩野も知らない。
「どうしてメモのことを知っているのですか？」
狩野は聞いてみた。
中国の社長が、鮒野に言われたそうである。契約書の追加のメモを預かっているかと聞かれたそうである。
鮒野は、預かっていないのを聞いて、それっきりだそうである。
ここにきて、中国の会社が関エトレから離れる話を出すにあたって、その秘密メモが気になるのだ。

佐元から留守電が入っていた。
「もしもし狩野です」
４月２日の夜何時に来るのかを聞いてきた。明日である。
何時でも行けるのだが、違うことを思いついてしまった。
「８時でいいですか？」
「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
狩野は、佐元が総務の仕事をしていて、文書も管理しているので、中国の会社との契約書に添付されて、メモがあるのか調べてくれるように頼んだ。
佐元は不思議に思ったようだった。そういう頼み事は一度もなかった。佐元は関エトレでは古株である。なんでも情報が手に入る。佐元にカッコつけているのかもしれないが、佐元を頼ったことはない。
「簡単なことだから明日来るまでに調べておく」
狩野は、中国の会社も会社のメモになっていないのだから、関エトレも、会社の正式書類とはなっていないだろうと思った。とりあえず、正式書類になっているかどうかは調べられる。リスクもない。一歩前進だと思った。
狩野は、電話を切って、自分は何をしようとしているのか考えようと思った。
動く歩道から降りようとしているのか。

〇佐元と伊豆へ

佐元は、酢豚と格闘していた。

ひょっとすると、料理は、狩野の方がセンスがあるかもしれないと思っていた。ただ、佐元のようには、格闘はできない。だから佐元の料理はおいしい。

「契約書そこにあるから」

佐元は、契約書のコピーを持ってきていた。総務の社員とはいえ、これはルール違反である。

「これだけですか？」

何も添付されていなかったという話だった。

もっと、佐元に話ができれば、協力してもらえるかもしれないと思ったのだが、佐元をどこまで信用してよいのわからない。

「中国の会社に行くことにしたの？」

佐元は、酢豚を皿に移しながら、こう聞いた。

まだ決めてはいないんだけどと答えるしかない。複雑な状況を佐元に話すわけにはいかない。

変わったビールだった。ワインのような味がする。おいしい。

「これも食べて」

佐元がよくわからない。今日のように、母親になる時もあるし、「会社でのあなたは終わった」と冷静な観察者の時も、「あなたって上手〜」と言う時は街角のオンナのような時もある。

「あなた〜現代大学の教授の話はどうなってるの？」

佐元に話してはいなかった。また、佐元から社長の鮒野に伝わるのではないかと思ってしまう。

「どこの大学も経営が厳しくなって教授枠を減らしているらしい」

それだけ言うと、佐元は、すべてを理解したようである。

「その契約書にメモが添付されていたの？」

いかにも、探してもいいけどという話ぶりだった。しかし、このメモは、中国サイドも正式書類になっておらず、鮒野が、個人的に所有していることは間違いないだろう。

佐元に話すと、お昼ごはんではなくて、おかしなごはんになってしまうような気がした。
「メモが添付されていないことさえわかればいいんです」
狩野は、そう答えた。
「中国に行くかもしれないんだ」
狩野は、何も言わなかった。狩野が、どうして契約書を見てメモが添付されているか調べてくれと言っているのか、佐元が知りたがっていることはわかっていた。
狩野は、佐元との不思議な関係を、いつも考えてしまう。
お互いに、話が途切れるのだ。しばらくして、また違う話を、どちらかがする。そうかといって、緊張関係でもない。狩野の方が、常に、言葉に気をつけていた。佐元は、いつも、察していた。
「明日６時に起きてごはん食べるから」
伊豆である。
佐元の、にこやかな笑顔を見ていると、狩野の佐元への、一部の不信感も飛んでしまう。

「おはよう」
佐元はお弁当をつくっていた。
狩野は、東京駅で買えばおいしそうな弁当がいくらでもあるのにと思った。それでも、佐元は、黙々と格闘している。
「おいしいパン買っておいたから」
コーヒーのいい匂いがした。これだけイースト菌が匂うパンは、どうなっているのだろうと思った。
「どうぞ」
「待ってます」
狩野は、佐元が弁当をつくる様子を、じっと見ていた。何時から起きてやっているのだろうと思った。
「コーヒーできてると思うから」
うながされて、狩野は、佐元と自分のカップに、コーヒーを注いだ。いい匂いである。おいしい。

「楽しそうだけど」
今まで言ったこともないようなことを、思わず言ってしまった。狩野は、自分で驚いてしまった。
明らかに、佐元のことを、今は想っている。狩野は、佐元と一緒にいても、いつも、自分ことしか考えたことがない。自分にとってのコーヒーなのだ。
「楽しいわよ」
どういうわけか、なんで楽しのだろうと、佐元のことを想っている。
何かが変化してきている。それがよくわからない。
依然として、動く歩道に乗っているのは確かなのだが。

「ここ〜津波が来たら飲み込まれるかな〜」
海抜30メートルくらいありそうである。そんな津波など来ない。
狩野は、なぜ佐元が、下田の駅から、タクシーに乗って、こんな海岸線のラーメン屋に来たのか、わからなかった。
「ラーメン食べたいのですか」
佐元は、ここの海鮮ラーメンが有名だからと言った。もう２時を回っている。お昼は少し待ってと３回も言った。
土手の桜がキレイだった。
「すみません〜シャッターいいですか？」
土曜日である。誰もがシャッターを押し合っていた。
面食らった。佐元が、カメラを持ってきたことも知らなかった。佐元は、うれしそうに、土手の桜の下で２人で１枚。海鮮ラーメン屋さんの玄関で２人で１枚撮った。シャッターを押してもらった。
何度も、映りを気にした。
「キレイ？」
こんな佐元を見たことがない。２人で出かけたことがないのだ。映画にだって出かけたことがないし、食事に出かけたこともない。確かに、狩野は離婚して独身で、佐元も独身である。お互いに、責められるものはない。しかし、佐元は、常に、狩野が、自分と一緒にいるところを見られないように気遣った。
なのに、今日は写真である。

「これおいしいけど残念」
大きなドンブリにいっぱいの魚介類だった。佐元には、とても食べられそうもなかった。
「最高」
佐元は感激していた。確かに、おいしい。
「こんなとこよく知ってたな〜」
狩野は、佐元が、どうしてここまで来たのか知りたかった。
「雑誌で紹介されてたとおりだった」
お土産街でもない。向こうにもう１軒、食べ物屋さんが見えるくらいである。
「ここ〜野菜とか自分でつくってるんだね」
桜がキレイだった。満開だろう。なかなか腰を上げない佐元だった。どうせ下田の宿に行くだけである。ここから歩くのだろうか。けっこうある。

「こんにちわ〜おねがいします」
佐元が、ケータイでタクシーを呼んだのには驚いた。
大きくはないが、いかにも温泉宿である。旅館である。
「海が見えるといいな〜わたし」
そんなことは聞いたことがない。そんな話もしたことがない。女将さんが来て、露天風呂の案内をした。
「混浴じゃないのか〜」
とても、会社の佐元を想像できない。
「出る時出るって言って」
理解できなかった。隣の女性用の露天風呂から佐元の声がした。こっちには、４人もお客さんがいた。返事ができない。躊躇していると。
「お願いします」
佐元がまた大きな声で言った。
「わかりました」
４人が、一斉に狩野の顔を見た。
もう佐元は壊れていると思った。狩野が知っている佐元ではない。何かがおかしい。

その夜も、狩野は、佐元が壊れてきている思った。
いつも狩野に「上手ね〜」と言っていた。
「すごいな〜」
「フフ〜露天風呂行こう」
もう０時である。やっているのだろうか。
「誰もいないから一緒に入る」
狩野は驚いてしまった。男の露天風呂に入ってしまった。
もう佐元は、完全に壊れてしまった。
不思議なことに、壊れてしまったと思うのだが、狩野には、心地よかった。
不思議とである。

佐元は、タクシーを呼んで滝へ向かった。今日は、伊豆の滝を回るのだそうである。
もう、佐元は、完全に壊れている。行く先々で、シャッターを押してもらった。一見、夫婦に見えるから、なんともない。54と42である。
おかしなことに、お昼を、また昨日のラーメン屋で食べると言って、タクシーを飛ばした。
「どうしてですか？」
「こんなにおいしいラーメン食べたことがない」
それ以上、何も聞くことがない。狩野は、不思議に思った。佐元は、一人で暮らしている。独身である。やはり、質素に倹約して暮らしている。老後だって心配だろう。それはよくわかる。
なのに、ここからタクシーを飛ばせばどうなるか、見当もつかない。
佐元は、運転手に、観光案内らしきことを聞いていた。
狩野は、佐元が壊れたことが何なのか、考えていた。よくわからない。夜２度も挑まれて睡眠不足である。ウトウトしていた。
「着いたけど」
ビックリした。
「睡眠不足ね」
笑いながら、佐元は、桜の下へ向かった。

「写真撮るから」
昨日より晴れている。いい写真になるのだろう。

〇業界の技術部会
「正式契約書に秘密メモのようなものは添付されていなかったようです」
朝出かける前に、狩野は柚木名に電話した。
柚木名は、中国側の契約書にも添付されていないから、それは、鮒野と中国の会社の前の社長が持っていたものでしょうと言った。
とりあえず、添付されていないことまでわかったのだが、中国側としては、このメモが気になる。わざわざ、鮒野社長が、現在の中国の会社の社長に聞いたことも、気になる。何か、特別の約束でもしているのだろうか。突然に、そのようなメモを暴露されて、中国の会社が見動きとれなくなっても困る。
狩野は、中国の会社の困り方が手に取るようにわかるのだが、これから先は、狩野にも、手が出せない。鮒野一人の問題になってきた。

狩野は、朝ごはんはパンとコーヒーである。インスタントは飲まない。時々は卵を焼いてハムと一緒に食べたりするが、だいたい、パンとバターとコーヒーだけである。
研究所のみんなは、狩野が、世界中のコーヒーを飲み比べて、現在はエクアドル産のコーヒーにしていることを知っている。インターネットで宅配をしてもらっている。パンは、帰り道に、おいしいパン屋さんがある。
本当は、朝ごはんは、ごはんにしたいのだが、時間的に難しいと思ってしまう。やればできるのだろうが、やったことがない。

狩野は、９時にお客さんが待っていることになっていた。器も洗わずに、そのまま、急いで研究所へ向かった。
今日も、10時から会議が、午前中だけで２つある。どうして、こうも会議が多いのだろう。あまり深くは考えたことがない。研究所の会議は、狩野にとって、感じのワルイものではない。最後は、狩野の意向で、物事が決まる

からだ。研究所の外からは、「最近の研究所はフツウのことしかやらない」と言っていることが伝わる。フツウのことをフツウにやるのが難しい。
「おはようございます」
ロビーで響三郎が待っていた。大阪の三新電気の研究室長である。通商産業省と業界の橋渡しのようなことをやっている。狩野は、業界の技術部会のまとめ役をやっている。もう３年もやっている。
響三郎がやってきた主旨を、狩野は聞いていない。
「10時までしか時間がありませんけど」
響は、狩野が役職定年で関エトレ株式会社を退職するのではないかといううわさを聞いてやってきた。
技術部会のまとめ役の任期が３月末なのだ。もう４月に入っている。もし狩野が関エトレを退職すれば、後任人事などでメンドーなことになる。今は、自動延長になっている。
「早くお知らせすれば良かったのですが」
響は、仕方なく、自分が、狩野の後任を引き受けると言った。いまから人選をやっても、なかなかまとまらない。けっこうタイヘンなのだ。だいたい、誰もやりたくはない。
「それでは３月末付けで実施しますから」
慌てて、響は帰って行った。
多分、これから、通商産業省だろう。

話が早く終わったこともあって、20分の時間ができた。
次々にやってくる動く歩道に、ただ足踏みをしているだけである。この動く歩道は、どこへ向かっているのだろう。まったくわからない。狩野には、業界の技術部会のまとめ役をやっていることは、誇りでもあった。国として何かの困りごとがあれば、必ず狩野を通して、業界間の技術の調整を行って、対応した。
狩野の調整力は、便利であっただろう。
多分、業界の技術分野の人達は驚くだろう。アッという間に、うわさが広がるだろう。

狩野の一日が終わったのは、18時であった。通商産業省からも、ねぎらいの電話が入ってきた。
「わたしも勉強させていただきました」
北九州からも電話があった。
「どうもありがとうございました」
みんな、狩野をねぎらった。
社内では、狩野が役職定年で退職することを、誰も、まだ知らない。
はじめて知るのは、４月12日の研究所長交代の辞令だろう。その時、はじめて、役職定年で、狩野が会社を辞めることを知ることになる。
狩野は動く歩道に乗っている感覚だが、今日はじめて、自分にとって、好ましい方向ではない予感がした。何かがおかしい。
今日の会議の会議録を読むともなく、狩野は、考え込んでしまった。
最近は、みんな早く帰る。まだ19時なのに、狩野が最後になってしまうこともある。
守衛の三嶋昭夫がやってきた。研究所が警備を頼んでいる警備会社の嘱託で、夜だけ交代で守衛をやっている。
「今日はみなさん飲み会らしくてどこもいなくなります」
研究所の情報は、狩野より詳しい。時々、社内恋愛の情報を、三嶋からもらったりする。
「三嶋さんは警備会社の嘱託ですか？」
狩野がこういうことを三嶋に聞いたことはない。
「定年で嘱託で働かせてもらってます。狩野さんのように誰も認めてくれませんから」
狩野は、聞かなければよかったと思った。

## ○中国の会社が動いた

水曜日はいつも会議が多い日である。しかし、今日は朝と昼からと、２つしかなかった。
次第に会議が減っているような気がした。
柚木名から呼び出しの電話がかかってきた。北千住で待っているとのこと

だった。

「いつもの頼んでおきました」
柚木名は、時間を惜しむようにタバコを吸った。狩野は、柚木名のタバコの吸い方が嫌いである。タバコそのものが嫌いである。なぜ、タバコのようなものに頼るのか、気がしれない。柚木名の、慌ててタバコを吸う姿が哀れに見える。
「なにかありました？」
ビールを注いでもらいながら、狩野は聞いた。
「中国が動きました」
何を言っているのかよくわからなかった。
「明日フランスの会社とアメリカの会社と販売契約を結ぶと言ってきました」
それは、あり得ないことだった。その販売契約は、酒向の関エトレの営業部隊が行っている。中国の会社で生産したものを、アメリカの会社に出荷している。
「同じ会社ですか」
同業者とのことだった。
おかしなことになる。アメリカの会社のブランド商品を中国の会社で生産して出荷している。
「今度のアメリカの会社は販売会社です」
ブランドは、中国の会社のブランドらしい。価格が極端に安いという。
「酒向さんたちは、アメリカのその販売会社には売れなくなりますけど」
酒向たちが契約しているのは、アメリカのエレクトロニクスのメーカである。
「酒向さんは怒るでしょう」
中国の社長は、かまわないと言っているらしい。何がどうなったのだろうか。あれだけ、秘密メモが気になっていたのは、ほんの１週間前である。狩野に情報を欲しいと依頼した。情報をくれて、中国の会社が、関エトレから離れることに協力してくれれば、狩野を役員で迎えると言った。
「狩野さんは〜私に何か隠していませんか？」

柚木名は、おかしなことを言った。
急に中国の会社の社長が態度を決めたのには理由があると思ったらしい。それは確かだろう。狩野も、そう思う。それか、中国の会社の社長が、意志を固めたかだ。
「私には思い当たらないけど」
他にことばはなかった。
明日アメリカとフランスと契約すれば、明後日には、柚木名は酒向に呼び出される。苦しい立場にたたされる。
アメリカでも大型の量販店に勢いがある。メーカーは、戦々恐々としている。アメリカのエレクトロニクスの会社は、酒向たちに、怒りをぶつけるだろう。
とんでもないことになる。
「中国の社長に何か情報を与えませんでした？」
柚木名は、またも同じことを狩野に聞いた。中国の会社が、関エトレから離れて、独自の動きをしたがっていることを知っているのは、極めて少ない人に過ぎないと言う。中国の会社の経営の首脳陣と、日本支社長の柚木名と、狩野だけであると言う。
狩野が、柚木名を飛ばして、何かの情報を中国側に出したのではないかと疑っている。
「鮒野社長の個人の問題になっているから、私も手が出せません」
狩野は、そう言うしかなかった。
柚木名に中国側から、何か指示がなかったのか聞いてみた。
柚木名に、すぐにクレームが入るから、しばらく知らないことにしておくようにとの、指示があったようだ。
あれだけ秘密メモのことを気にしていたのに、いきなりの動きである。何かの情報が中国サイドに入ったに違いないと、柚木名は思っているのだ。
「他に何か理由は考えられないのですか？」
狩野は、秘密メモではない、別の理由も考えられるのではないかと言った。
多分、明日契約するということは、水面下で、ずっと話が続いていたに違いない。それは、日本支社長の柚木名も知らないことである。もしかして、契約するタイミングを迫られたのかもしれない。中国の会社として、決断をし

なければならなかったのかもしれない。そう思いたい。
しかし、そうであったとしても、これは、微妙であるが、契約違反になるだろう。秘密メモに、違反の場合の罰則条項が書かれてあって、大きな損失になるようなことが発生すれば、とんでもないことになる。
中国サイドは、明日動く理由を、何も話さないそうである。
一瞬沈黙する。
お互いに、それぞれのことを考える。
狩野は、中国サイドが、関エトレから離れることに積極的に協力してくれるのだったら、役員で迎えるということだった。しかし、狩野が、積極的に協力する前に、中国サイドが動いてしまった。狩野がいようといまいと、何も関係がない。
狩野は、中国の会社にとって、必要がなくなったのではないかと思った。
柚木名は、狩野を疑っている。柚木名を飛ばして、中国サイドに情報を流した。狩野が、中国の会社の役員になるためにである。
沈黙してしまう。

シャワーを浴びて、テレビのスイッチを入れて、熱いコーヒーをすすった。
狩野のリラックスタイムである。
明日はメンドーな会議がある。15年も前の業務用の電気商品で、冷却部品から、最近発火事故が２件発生している。
まだ２件なので、何も対応していない。品質保証の部長は、はじめて明日、研究所に、関係者を招集した。もちそん、狩野の研究所所長時代の新製品ではない。関エトレ株式会社は、石橋を叩いても橋を渡らないような会社である。こういうクレームは珍しい。
明日は、研究所長として、意見を求められる。研究所に関係者を集めたことは、この問題を、どこに落としたいのか、はっきりしている。
テレビが、勝手に何かを言っているが、何も聞いてはいない。

**〇15年前の新製品のクレーム**

「この冷却部品の問題について研究所の協力が得られなかったのですが、品

質保証で原因究明の実験をしてきた結果を報告させていただきます」
品質保証担当部長の森知上男の最初のあいさつだった。
狩野は、森知が、研究所が、新製品が売れなくて対応に追われていて、しかも、今期の新製品の準備もできていない苦悩など、わかってはくれないだろうと思った。いつものようにである。
研究所はそれどころではない。下手をすると、研究所の人員をリストラされかねない。とても、クレームが２件で大騒ぎをしている、品質保証と、同じ立場にはたてない。
３人の品質保証のスタッフが、それぞれ20分づつ説明をした。あまりにも事細かくなって、わかりずらい。
研究所のスタッフは、静かに聞いていた。電話で席を外すスタッフも多い。10人いた研究所のスタッフは、３人の説明が終わる頃には、６人になっていた。
狩野は、こういう時も、上手に収める。席を外した４名を呼んで来させた。
「とりあえず、質問があればお願いします」
森知が言った。
誰も、何もことばを発しない。
研究所のスタッフは、それどころではないのだ。
「ああ～詳しい説明をありがとうございました、一つだけ質問させてください」
狩野は、結局、自分に振るしかなかった。
「この２件のクレームが、今後頻発すると考えてるようだけど、その理由を、もっと聞きたいのですが」
森知は驚いたような顔をして、自分のスタッフの３名を見た。
「ああ～耐久性ということはわかったんだけど」
森知は怒っているようであった。
「去年の研究所と品質保証の会議で、ここの部品を新しいものにする検討をしてほしいと要望しました。研究所は何もやっていないと聞きました」
狩野は、よく覚えていなかった。クレームが１件や２件、どの製品にもある。すべてに対処できない。新製品を出すことを会社の上層部は望んでいる。

狩野は、研究所と品質保証の会議の、研究所側のスタッフの顔を見た。無言の中に、まだ手がついていないと言っている。
次の瞬間、森知が、意外なことを言った。
４月になって暖かくなって、いきなりクレームが増えると言って、１枚のＰＣスライドを見せた。
「今年の６月には、毎月20件のクレームになると思う。すべて研究所が何もしない責任です。これは、発火事故なので、人的損傷も考えられます」
確かに、ショートするので、発火する。しかし、それっきりであると狩野は思った。いつものように、森知の話はオーバーであると思った。
「これは会社として対処しなければならないことなので、研究所の責任のような話は止めていただきたい」
狩野は、こう言ったのだが、森知は、状況がよくわかっていないという顔をした。
本当に４月から急にクレームが増えて、６月には、毎月20件ものクレームになるのだろうか。脅されていると思った。
「森知さんの予測は〜どこからきているのですか？あなたの感覚ですか？」
実験の説明を聞いてくれなかったのかと、森知は怒ってしまった。
狩野だけではない、研究所の10人のスタッフには、３人の実験結果の説明と、６月20件のクレームが、どうしても、結びつかない。

午後、狩野は、嫌がる研究所のスタッフを集めて、部品交換の検討会議を行った。
７人しか集められなかった。それどころではない研究所員がたくさんいる。お尻に火がついている。
それでも、狩野は、自分が責められることにはガマンできない。昔からである。大学院時代にも、同じようなことがあった。実験を失敗して学術会議の抄録が間に合わなかった。４人の仲間と教授だった。失敗の直接の原因は、狩野ではないのだが、経時時間を見誤った狩野の責任にさせられた。
仮に提出していた、短い抄録のまま、発表も、曖昧に、実験目的を述べるだけになった。同期の女性の研究者が発表した。教授の顔も潰れた。
物事の大きさ云々ではない。自分に責任が及ぶのであれば、手をつけておか

ないといけないことが、教訓となった。それ以来、ずっと、狩野は、大きな責任を負うようなことは起こらなかった。大学院時代も、関エトレに入ってもである。
狩野には、体面を保つことが何より大事であった。
「１時間でお願いしたいのですが」
研究所の社員には、狩野の体面など、どうでもよかった。追われているのだ。
アイデアを出し渋るみんなをせきたてて、なんとか、いくつかの対策案を出した。
狩野が、全員を見渡したところで、一斉に、席を立とうとした。
自分に命じられると困るという態度である。
もう、研究所と品質保証の連絡の担当者に命じる他はない。
「下野さんお願いします」
やるべきことはわかっている。３つの案を試作して、再現実験をすることである。

○柚木名が中国に雲隠れする
翌朝10時ごろ、佐元からケータイメールが届いた。
「酒向専務が中国に12時の便で行く」
短いものだったが、中国の会社とアメリカとフランスの量販店の契約が、表に出たと思った。あたりまえである。すぐに知れる。
柚木名に電話したが、電源を切っている。研究所の公衆電話から、柚木名の東京事務所にも、客を装って電話してみたが、出張中とのことだった。行先は教えてくれなかった。
柚木名は中国に雲隠れしたことは間違いない。
今日は、午前中は会議がない。珍しいことだ。狩野は、自分のこれからのことを考えなくてはいけないと思った。役職定年日でもあり狩野の退職日でもある５月５日は休みだが、どこかで、研究所のみんなには、あいさつをしないといけない。身体も健康で頭もしっかりしていて、ますます安定して働けるようになっていると思っている。経験がプラスされた。

なのに、どうしてこういうことになってしまうのだろう。まだ55歳である。とても理解に苦しむ。考えていると、次第に怒りがこみ上げてきて、どうにもならなくなる。
１００円の缶コーヒーを買いに行く。狩野のためにレギュラーコーヒーを煎れてくれているのだが、今日は、もうない。
缶コーヒーを開けながら、狩野は、缶コーヒーを買いに行ったのが初めてだと気がついた。狩野のエクアドルのコーヒーが置いてある。しかし、自分でコーヒーを煎れることは少なかった。誰かが、気遣ってくれた。
狩野は、53歳になった時も、自分が役職定年になるなど思ってもみなかった。よくわからないが、自分が、役職ではなく、フツウの社員なるなど、考えも及ばない。
そして、あのいきなりの役職定年の封書である。ショックだった。仕事をすることでのグレードを上げ続けてきた狩野にとって、初めての挫折でもあった。信じられない。
あれこれ考えても、何をすればいいかよくわからない。狩野には、仕事での挫折の経験がないのだ。中国から帰った時に、家族が出て行った後だった時も、大きなショックだった。理解できなかった。しかし、仕事のグレードが順調だった。誰もが、中国の会社がうまく立ち上がったのは、狩野のおかげだと言った。
家族が出て行ったのだが、不思議と、冷静だった。
十和田湖の温泉宿で働いている両親の顔が、フッと浮かんできた。近所に嫁に行った妹がいる。
十和田湖の温泉ホテルで下働きをしている。母親も父親ももう78になる。どうして自分だけが、十和田を出てつくばにいるのか、不思議でもある。ずっと、十和田湖の湖で暮らしたのに。
十和田湖で過した日々が、最近は、なつかしく思える。
15の時に、どうしても秋田の高校に行くと言って、母親を困らせた。３年間の秋田での安アパートでの一人暮らしは、ホントにタイヘンだった。自分で自炊しなければ、いくらお金があっても足りないこともわかった。必死で工夫した。
東京に出てからの６年も、同じように、安アパートだった。秋田と違うの

は、アルバイトをしなければ大学生活ができなかったことだ。秋田での暮らしが東京でもプラスになった。
工学博士になった時、両親も妹も、驚いてしまった。狩野には、行く道の一つだったので、あまり感激もなかった。
それよりも、研究論文の少なさに、いつも焦っていた。
狩野が、いまでも悔しく思っているのは、大学院時代の教授の大城守である。狩野が共同実験で経時時間を間違えて、ひどく叱責されたのだが、その３ヶ月後に、大城は、単独で、論文を発表した。その論文のアイデアは狩野が大城に話したものだった。
大城は、この論文で、一分野を築くことになった。
狩野は、どうしたら自分のチカラが上がっていくのか、身を持って知らされた。それが、関エトレで働く時も、活かされている。
前任の研究所長であった先里は、そういう意味では都合のよい人だった。あたかもサンタクロースのように、成果になりそうなアイデアを投げた。狩野とは違う。狩野だったら、アイデアを盗まれたと思ってしまう。狩野には、盗めそうなアイデアは盗まなければという習性が大学院時代に身に染みている。数年間、研究所長であった先里のアイデアを、盗むでもなく、使った。先里は、おかしな男である。狩野には考えられない。盗めそうなものは盗まないと、這い上がれない。

まだ午前中なのに、ボッとしてしまう。最近、知らずに時間が経過してしまうことがある。
とりあえず、お昼ごはんを食べてこようと思った。12時15分だった。お昼は、賄いを近所のおばさん２人にお願いをしていた。狩野には、けっこう楽しみなお昼だったが、研究所の女性社員には不人気だった。みんな、朝来る時に、コンビニで何かを買ってきて、親しい仲間が集まって、おしゃべりをしていた。

２時から、研究所の研究テーマの進捗会議があった。いつも紛糾する。研究テーマの一覧にそって、一つ一つ状況を確認していく。確認するのは狩野である。研究所のみんなは、この会議が嫌いである。言い訳を考えなければな

らない。担当が出てきて説明することはない。担当マネージャーが説明する。時々、担当マネージャーが説明に困ると、狩野は、担当者を呼ばせた。
エクセルで細かく区切った一覧表が２ページにわたっている。
この会議は、狩野が研究所長になってはじめた。
研究所がやるべきことを全員が理解しなければならない。すべての責任は狩野にある。
なぜこのようなことをやらなかったのか、狩野は、前任者の先里に聞いたことがある。
「どうでもいいテーマばかりになってしまうから」
わけのわからないことを言っていた。
狩野が先里を嫌った一つの理由は、せっかく狩野が苦労してつくった、このテーマ表を無視することである。先里が定年になって、嘱託になって、直接研究テーマを担当しなくなってホッとした。常に、先里は、このテーマ表に掲載されていないテーマの進捗を、営業との意見交換会でプレゼンした。
苦々しく思ってしまう。
２時間半も費やしてしまった。狩野には、このテーマ表の進捗欄に、進捗内容を書き込むことが、研究所長として、最も大事であると考えていた。楽しみでもあった。

〇家の整理をする

狩野は、遅い朝ごはんをすませて、洗濯をしながら、家の片づけをはじめた。
少しづつやっておかないと、家を、友子と保と知美に渡すことになっていた。もうローンは終わっていた。名義は狩野隆一になっている。２階に３部屋と１階に応接兼用で和室が１部屋あった。そして、12畳のリビングとキッチンである。２階には、行ったことがない。洗濯物を干す時に通るくらいである。掃除もしていない。ほこりをかぶっている。
友子と保と知美の、持ち出せなかったものが、１部屋に詰まっている。何があるのか、見たこともない。
狩野が生活に使っているのは、12畳のリビングとキッチンだけである。２０

００冊はあるだろう本も、リビングに集めた。
この家を明け渡す時、この書籍をどうするか、考えなければならない。この書籍は、狩野の宝でもある。宝でもあるのだが、ほとんど、掘り出して調べることはない。すべて、過去の書籍である。狩野の歴史のようなものだ。
狩野は、あまり意味はないとは思いながら、並べて積んである書籍に、満足している。持っていることが満足である。
この書籍の中に、先里から借りた何冊かの書籍がある。先里の机から「読ませてもらっていいですか？」と借りたものだ。
今では、どれが先里から借りたものかわからない。
ワルイとも思わない。
「私は書籍を所蔵しませんからどうぞ」
先里は、ホントにわけがわからない。研究者である。書籍は、研究者の歩みのようなものだ。それが、所蔵しませんとはどういうことであろうか。
わけのわからない先里のことを、あれこれ考えてもはじまらない。今日は、着るものでいらないものを捨てようと思っていた。多分、アパートかマンションに移ったら、こんなに着る物を持てないだろう。実際に必要ない。タンスのものをビニール袋に移しはじめた。
佐元のマンションに泊まった時に、いつも用意してくれている下着が、山のようになっている。佐元は、どんどん捨てるように狩野に言ったのだが、実際、捨てるようなしろものではない。まだ新品同様なのだ。
躊躇するが、こんなにあっても持っていけない。
見ないで、すべてビニール袋に移す。

最近、通信販売で、おいしいラーメンを注文している。乾燥ラーメンだが、けっこうおいしい。近所に食べに行くよりも、短時間につくれる。しかもおいしい。
３回目の洗濯をしている。ついでに、衣がえをしている。まだ夏物には早いが、このチャンスにやらないと、やれないと思った。
友子や保や知美は、狩野の、こういう生活を、思い描けないだろうと思った。まず、０時近くでないと、家に帰ったことがなかった。家は、寝るだけのためにあった。夕食も、ほんとんど外で食べていた。狩野は、研究所の近

所のコンビニのおばさんと仲良しだった。晩ごはんでもない19時ごろの食事だった。
狩野は、友子が、毎晩、食べるのか食べないのかわからない狩野の夕食の用意を、何年も続けていたことが、やっと、最近わかった。
狩野にとって大事だったのは、この立派な家だった。そのためには、他人が羨むほどの仕事の実績が必要だった。そうしてきて、みんな手に入れた。そういう狩野の価値観と、友子と保と知美の価値観が、大きくズレていることを知った時は、驚いてしまった。
「お父さん大きな家をありがとう」と言っていたではないか。

せっかく大量の洗濯をしたのだが、入れる場所がない。またもや、ビニール袋を持ち出してしまった。
もう、ピザが焼けそうである。
最近、ピザ生地も自分でつくっている。安上がりだからやっているわけではない。どうも、自分でつくった方が満足できる。おいしいさは、もう少し修業がいると思っているが、自分の食材の都合で調整できるのが、なんとも都合がよい。
最近の電子レンジはなんでもできる。

ピザがおいしくできた。
なにかよくわからないが、新しい狩野の生活がはじまるような予感がしていた。
最近は、確かに、動く歩道に乗せられていた。しかし、今日は、身辺の整理をしている。かなり整理できた。誰かが動かしている動く歩道から降りて、自分で歩きはじめなければならないと思った。
多分、自分の足で歩く道には、自信がある。
久々のワインが美味しかった。１本空いてしまった。ピザもおいしかった。

〇酒向に呼び出される
日曜である。朝寝をしていた。

狩野は、ケータイの振動音に目が覚めた。
「もしもし」
酒向であった。１時間後に八重洲の本社に来て欲しいとのことだった。１時間では行けない。10時の約束をして、顔を洗った。

守衛に専務室に行くように言われた。
オフィスは、酒向だけだった。眉間のシワが苦悩を表わしている。
「おはようございます」
最近、酒向専務とはいろいろあったのだが、直接会って話をしたことがない。狩野を役員にしたくないので、中国の会社に狩野を紹介したと佐元は言った。その後の中国の会社と狩野の話は、酒向は知らないだろう。
酒向は、中国の会社の契約違反まがいの行為を、狩野に話した。中国に行ってきたが、契約解除されてもかまわないと、中国の会社の社長は言っていて、困ったことになっているらしい。
「鮒野社長はなんとおっしゃってるのですか？」
驚くべきことだった。今の中国の会社経由では、利益がギリギリであり、他社での生産も考えるように指示されたらしい。狩野が３年も、家族も振り返らずに頑張った会社である。関エトレ株式会社のノウハウも、たくさん入っている。まったく意外だった。
酒向の苦悩がわかる。
「わたしに何か用事でもあったのですか？」
至急に新しい会社を探さなければならなくなったので、その仕事を手伝ってほしいとのことだった。
またもやおかしなことになってしまう。確かに、中国の会社のことは、狩野がよく知っている。特に、エレクトロニクスの技術のことや生産に関することでは、狩野が詳しい。酒向の部隊は、販売部隊である。
「具体的には誰が担当するのですか？」
酒向の部下の、真野浩二であるという。
「私は何をすればいいのですか？」
情報が欲しいとのことだった。
「情報だけですか？」

酒向は、ホントに狩野が嫌いだと思った。鮒野社長に対して、狩野の手柄にならないように、新しい中国の会社を探そうとしている。
狩野は、迷った。今日１日あれば、５ページくらいの、最新中国事情くらいの文書は書ける。誰よりも、正確である。現在ゴタゴタしている中国の会社だって、狩野が調べて、決めてもらった会社である。
狩野は、気乗りがしなかった。
「これだけの売上を中国経由でやってるんですからすぐに止めるわけにもいかないでしょ？」
そのようなことを狩野には言われたくないという顔をした。
新しい契約書にするという。狩野は、どういう契約ですか？と聞きそうになった。教えてはくれないだろう。
中国の会社が独自に販売することを了承するという契約だろうと思った。考えてみたら、今の契約は、関エトレ株式会社の都合のよい契約だった。
「君が昔書いてくれた文書があるんだけど」
そう言って、狩野が、中国生産をするための技術供与と生産体制について、会社を訪問して調べた文書を出した。
「これと同じものを書けばいいのですか？」
酒向は、狩野のことを、なんと思っているのだろう。
「君が現代大学の教授になる前に書いてほしいんだけど」
酒向は、狩野の現代大学教授の話が流れたことを知らない。
狩野は、今日書かざるを得ないと思った。酒向に、甘く見られたくはない。頭も下げたくはない。ここで、中国の新しい会社を探すための仕事をやらせてくれないかと頼めば、酒向は、ＯＫしそうである。困っているのだ。
「それだけですか？」
狩野は、もう帰ろうと思った。
酒向は、お昼を一緒に食べようとも言わなかった。
帰って、エレクトロニクス技術と生産体制の中国事情を書こうと思った。これは酒向のためではない。狩野のためである。自分のために書かなければならないと思った。

昨日部屋の整理をして良かったと思った。

今日はもう、そういう気分ではない。必死になって、書いている。ワードの文章を書いている。
頭の片隅に、昨日部屋の掃除をする時には、動く歩道から降りて自分で歩き始めた感覚があったが、また今日は、誰かが動かしている、動く歩道に乗っている感じがしていた。まずいとは思いながら、ワードの文を綴った。
０時になっていた。
これを、酒向に送れば、ビックリするだろう。我ながら、こういうことには長けていると思う。狩野は満足だった。
歯を磨いて、パジャマに着替えて、狩野は、思い切ってエンターを押した。

〇狩野と名波の研究所長交代の辞令
月曜日である。酒向から電話があった。
「やっぱり君はすごい」
もう、今日、狩野と名波の研究所長交代の辞令が出る日である。
どういうつもりですごいと言っているのだろう。よくわからない。
狩野は、酒向に、こう言わざるを得ない状況にしたことが満足だった。
10時に辞令が出た。
パソコンのパブリックホルダに、２行の文章である。
なんともやりきれない。
狩野の退職の辞令は、４月30日だろう。狩野は、カレンダーを見た。
人事から、退職以降の事務手続きで相談したいので４月14日に本社に来るように、メールが入った。
やっぱり、動く歩道に乗っている。

真野浩二からメールが入ってきた。
とりあえず、一緒に中国に行ってくれないかというメールである。真野には、自分で会社訪問の相談もできない。アポイントもとれない。自分で工場を見たり、経営者の話を聞きたいとのことだった。
狩野は、いきなり電話をして一人で中国へ行った。
酒向といい真野といい、狩野の今の状況を知っていないのだろうか。お昼か

ら研究所に行くから時間を空けてくれとのメールが入った。
４時から１時間空けた。
研究所は、狩野と名波の所長交代の辞令が出ても、さして、慌てた様子はなかった。もうみんなの気持ちの整理はできていた。
名波からメールが、研究所全員に入ってきた。
よろしくお願いしますとのことだった。そして、追伸で、狩野へのあいさつだった。４月15日から研究所に出社するとのことだった。異例のことである。
４月15日から名波が出社することで、事実上、狩野の退職が公知となった。研究所の所長の交代は、通常、１か月後くらいに行われる。狩野は退職するのである、

去年の新入社員４人が、話があるからとやってきた。
「所長は５月５日に退職されるといううわさがあるのですが本当ですか？」
こういうことは、新入社員にやらせることが好都合である。
「送別会をやらせていただけますか？」
結局、４月23日に研究所の送別会になった。

真野は、必死になって狩野に聞いた。マネージャーとはいえまだ若い。大きなミッションを抱えたことがない。
真野は、狩野が、今日研究所長交代の辞令があったことなど承知していないかのような態度だった。狩野は、当然のこととして、真野に、ノウハウを伝えるものだと信じているようである。
こういうのは、どこからくるのか、不思議だった。
考えてみれば、つい数年前まで、狩野も、真野とたいして変わりはしなかった。先里はなんでも、自分の持っているものを公開したが、他の研究所の先輩は、公開はしない。なにか聞きたければ相談にのるという態度だった。わからず屋の先輩とは、ケンカになることも多かった。
先里だけは別だった。狩野は、先里が嫌いである。研究所に先里フォルダというものがある。先里が、勝手に、文章にしてストックしてあるものだ。しかも、公開していて、みんなその検索ができる。

一度、狩野が、先里の定年の時に、ディスクがもったいないからと消そうとしたことがある。若い研究者からクレームがきた。それも15人の連名だった。いまだに、先里フォルダを消せないでいる。
「もう時間だけど」
５時近くになって、狩野は真野に言った。
真野には、まだこれからどうしていいのか、イメージができていない。ここで時間ですからと言われても困る。
「所長は、この後用事があるのですか？」
真野は、まだ狩野と話したがっていることはわかっていたが、用事があるからと言った。
「じゃ〜まとめておきますので明日見ていただけますか？」
狩野は、こういう姿勢では、難しいミッションは達成できないと思った。誰かに頼るのはよくない。狩野の経験である。お助けマンはやお手本がいなければ、学習にもならないが、頼ってはまずい。最近の若者は、みんな真野のように、何かに従おうとする。研究所も同じである。だから狩野が忙しかった。
「わかりました」
研究所からつくばの駅にバスを運航している。真野は、狩野から話が聞けないのであれば、研究所に居残っても仕方がない。急いで、バスに向かった。

狩野は、最近、小麦粉の使い方が上手くなったと思っている。薄力粉と強力粉の差もわかってきた。お好み焼きの時は、どういう割合で混ぜて、長芋をどう使えばおいしいのか、わかってきた。
時々失敗があるのは、計測間違いである。小麦粉は、パンをつくるにしてもピザにしてもお好み焼きにしても、計測が大事である。
見るとはなしにテレビを見ながら、お好み焼きとみそ汁を食べる。我ながら、おいしいと思う。
もう10年も、自分で調理をして自分で食べている。あまり外食もしない。何よりも、おいしいと思う。
どうして食事の後にシャワーをするようになったのかわからない。多分、外食しないで帰った時は、お腹が空いている。食事の準備をして、食事を早く

済ませたかったのだろう。
考えてみると、今日の晩ごはんは何にしようなどと考えることも、けっこう楽しくなってきている。あまり深く考えなくても、アイデアがたくさん出る。
またいつもの習慣で明日の会議の準備をはじめる。
このながく続いている習慣はどうなるのだろう。研究所の所長ではなくなった。名波が来れば、自分は会議には出ないだろう。
それでも、明日の準備をしている自分が不思議でもあった。

○立派な引き継ぎ書

研究所長交代の辞令が発表された翌日である。研究所は、何事もなくフツウのようであった。いつものように、狩野は、８時30分には研究所に着いた。
「おはよう」
狩野は、いつも自分からどんどん挨拶して歩いていく。
約束をしていなかったのに、真野が部屋で待っていた。
「おはようございます」
９時30分まで、研究所の総務の陣持三郎と打ち合わせがあった。狩野と名波の研究所長引き継ぎの書類をお願いしてある。
「待っています」
狩野は、真野のような人は困ったものだと思った。もう、自分のミッションしか頭にない。周りが目に入っていない。
コーヒーを飲みながら、陣持との打ち合わせのことを考えていた。名波に、後指を指されたくない。陣持には、その証人にもなってもらいたい。キチンと引き継ぎをやったと言ってほしい。
すでに、10ページのワードの文章ができていた。
陣持は、ずっと狩野を補佐してきた。陣持は、狩野の、凛とした態度が好きだった。狩野の弱音を聞いたことがない。
陣持が入ってきた。
「真野さんすみませんが食堂かどこかで待っていてください」
聞かれてまずい話はないだろうと思ったのか、不思議そうな顔をして、真野

は部屋を出て行った。
狩野は、真野は、気が利かないと思った。多分、うまくできそうもない中国の仕事のことで頭がいっぱいなのだと思った。
陣持は、狩野の意向がよくわかっている。名波が、常に、研究所長の机の上に置いておいてほしい引き継ぎ書をつくろうとしていた。
一言で立派な引き継ぎ書である。
陣持は、本当は、狩野が、これからどうするのかが気がかりであった。狩野である。55歳の役職定年である。もっと立派な仕事になるだろうと予想した。狩野は、自分のこれから先の話を、誰とも話したことがない。陣持も聞きにくいのだ。
「ながい間いろいろお世話になりました」
狩野は、陣持に、お礼を言った。
慌てて、陣持は部屋を出て行った。狩野が、研究所を去る話を自分でしたのははじめてだった。狩野も、おかしな気持になった。これは、動く歩道が、また新しい局面にまで動いたことを表わしている。

10時になると、真野が食堂から所長室に帰ってきた。連絡も何もしていないのだが、勝手に部屋に入ってくる。
「さっき酒向専務に連絡したら狩野所長の連絡を欲しがっていました」
酒向の電話は、真野のミッションは緊急を要するので、できるだけ真野に協力してやってくれという話だった。
狩野には、これは命令なのか依頼なのかよくわからない。もう５月５日で退職する身の狩野である。
おかしなことになっていると思った。みんなが身勝手に思えて、言葉が荒くなってきそうである。狩野の身にもなってほしいと思った。
真野は、次々に狩野に質問をしてはノートに書き込んでいた。次第に嫌気が襲ってくる。
多分、この中国関連の話は、狩野の将来に何ももたらさないだろうと予想できた。何がどうなろうと、５月５日以降の狩野には、なんら関係のないことになるだろうことは、わかっていた。
嫌気が襲うのも当然だった。

真野は、これだけメモをとってどうするつもりだろうと思った。狩野だったら、中国に飛び込んでいるだろうに。
「明日もお願いしたいのですが」
狩野は、一瞬ことばにつまった。
「狩野所長の時間の空いた時でいいですから」
真野は何をしようとしているのだろうか。多分、報告書をつくろうとしている。なんでもそうしたがる。勉強をしてきた人ほど、そうしたがる。報告書をつくって何になるのだろう。研究所の若い人も同じである。レポートをつくりたがる。
真野の中国ミッションなど成功しないだろうと思った。

夕方、陣持と再度打ち合わせをした。
陣持も忙しいのだ。決算をやらなくてはならない。研究所で、今一番忙しいのは陣持である。
３月の費用発生分を４月に繰り延べする交渉も難航しているらしい。研究所の３月の費用を次期に繰り延べても、たいしたことにはならない。それでも、全社で協力すれば、チリも山となる。ボヤきながらも、陣持は、狩野の引き継ぎ書をつくっていた。
８時になったが、これからまだやることがあると言う。一緒に晩ごはんでもと誘ったのだが。

○バイオチップ
狩野は、先里がアルバイトをしているラーメン屋の前で、信号待ちをした。信号が変わって、そのまま、ラーメン屋さんに入った。今日は、自分で晩ごはんをつくる気になれない。
「こんばんわ～」
先里が先に言った。
カウンターしかないお店である。主人が１人でやっている。
「なんにしましょう」
若い主人がいないらしい。先里がつくっているのか。

狩野は、いつものように、半ライスとギョーザとネギラーメンを頼んだ。
先里は、ラーメン屋の主人に見える。エレクトロニクスの研究所の所長をやっていたようには見えない。
「どうぞ」
狩野は、先里が、もうこの店のメニューならば、何でもつくれるようになっていると思った。
狩野は、自分もラーメンをつくることが多い。休みのお昼は、ほとんどラーメンである。それでも、こういう味は出せない。
「先里さんにお聞きしたいことがあるのですが」
狩野は先里に話しかけた。
「先里さんがまだ研究を続けたいテーマはなんですか？」
驚いたことに、バイオチップだった。遺伝子情報などの究極の個人情報を、身体に埋め込んでおいて、たとえスイスで倒れても、スイスの医師が処置ができるようにと考えている、大きなスケールの、予防医学のツールのことである。
先里が、これまで関エトレでやってきたこととは、直接には関連がない。
「ラーメン屋さんのアルバイトで足りるのですか？」
先里の収入は、ラーメン屋の夜だけのアルバイトと、研究所の共同研究者としての収入で、合わせても、年間に70万円にしかならないという。
「先里さんならどこかの会社の顧問などあるのではないですか」
狩野は聞いてみた。
「私は関エトレの人間だから」
先里は、意味不明のことを言った。狩野には、よくわからない。
「じゃ〜年金で生活してアルバイトと共同研究費でバイオチップの研究をしているのですか？」
研究をしているほどのことはではなくて、つくばでのバイオチップ研究の集まりに参加しているとのことだった。
先里は、なんでも話してくれる。フツウは、こういう話はしない。狩野は、ゼッタイにしないだろうと思った。
ましてや、ラーメン屋でアルバイトなどしない。先里の、そういう選択がよくわからない。

「先里さんの今の肩書はなんですか？」
先里は不思議そうな顔をした。狩野が、なんで肩書など聞くのか不思議そうだった。狩野には、まだ62歳の先里の社会的な肩書が気になる。
「名刺は手書きで必要な時にメールアドレスとケータイの番号だけ書きます」
狩野は、１枚名刺を書いてもらった。白い紙に、名前とメールアドレスとケータイアドレスが書いてある。住所が書いていない。住所を書くと、膨大なダイレクトメールになって家族が苦労するとのことだった。
狩野は、先里が、もう社会的な上昇志向をしなくなったと思った。もう諦めたのですか？と言ってしまいそうだった。
狩野は、これからだと思っている。先里のような生き方はできない。先里を見ていると、欲がないように見える。欲がなくなったらおしまいだと思っている。目に張りがなくなってくる先輩たちを何度も見ている。
しかし、先里はちょっと違っている。ラーメン屋でギョーザつくりの話をする時も、目が生きている。狩野に、おいしいギョーザの焼き方を教えてくれる。
「最近教わったばかりだけど」
そう言いながらも、おもしろそうに狩野に話した。先里は何だろう。狩野とは、生き方が違うと思った。

シャワーを浴びて出てくると、大学発ベンチャーの会社をやっている美薗金治から電話があった。
美薗金治は、エレクトロニクス技術者の仲間の一人である。金南大学講師を辞めて、自分の特許である電解膜技術を使っての、キレイな水つくりの会社である、名東エレクという会社をやっている。
「狩野さんの特許も使わせてもらいたいのですが」
思ってもみなかった。狩野の電解膜に関する特許は、関エトレが、電解膜の分野には進出しないので、仕方なく、特許だけとっておこうと、狩野が独自に申請したものである。
「一度名古屋に来ていただけませんか」
美薗とは、エレクトロニクスの技術部会で顔を合わせている。

「今度の土曜日の４月17日はいかがですか？」
狩野には、急ぐ用事もなく、曖昧な返事をした。
「名古屋駅の新幹線の駅まで迎えに行きますので」
11時に名古屋駅で待ち合わせをした。

〇退職の手続き

はじめて退職金を知った。多くはないが、友子に渡す約束をした。保も知美も、気分的にラクになるだろう。離婚して以来、ずっと金策に苦労しただろうと思う。毎月、狩野が振り込む30万円だけが、３人の収入のはずである。10年目になる。
振込先を教えた。友子の口座番号である。２４００万円あれば、少しは、これから先も、計算がたつ。
年金手帳ももらった。
５月５日に、バッチや社員証を人事宛てに送ってくるようにとのことだった。手続きが、キレイに整理されて書かれてある。わかりやすい。
健康保険も、変更しなければならない。年金も自分で納めなければならない。こうやってみると、会社は、個人のために、けっこういろいろなことを代行してくれている。税金を納めることすら代行してくれている。
ちょっと整理しなければ、よくわからない。
これから自分がやらなければならないことを整理しないといけない。けっこうタイヘンである。
人事のみんなの耳が、説明を聞いている狩野に注がれていることがわかっていた。狩野はどうするのだろう。狩野はどうなるのだろう。人事の社員は、みんな気になっていた。
さっきから、外で真野が待っている。昨日は、真野は研究所に姿を見せなかった。何をしていたのだろうか。
「多分よくわかってないから電話することになると思うけどよろしくお願いします」
狩野は、人事の担当の女性社員の名刺をもらった。

真野は、狩野に話を聞いてもらいたいと言った。お昼の弁当も買ってくるから待っていてくれと言って買いに出た。
小さな海外営業部の会議室で、真野が帰ってくるのを待っていた。
もうすぐ、このバッチもなくなる。社員証もなくなる。名刺も使えない。狩野は、関エトレに入社して以来、関エトレの狩野隆一であることに慣れている。狩野隆一よりも、関エトレの狩野隆一で、なんでもできることがあった。会社の信用の方が、狩野の信用よりも、はるかに大きい。これから、狩野隆一だけで動くことに、急に不安を覚えた。
おかしなものである。狩野は、関エトレを引っ張っている一人だと思っていた。狩野隆一がいて、関エトレがあると思っていた。
さびしい気分に襲われてしまった。
「カツ弁当買ってきました」
真野は、狩野がカツ弁当が好きだということを知っていた。
「時間がないから食べながらでもいいですか？」
そう言って、真野は、ワードの文章を狩野に渡した。20ページくらいありそうである。
狩野は、カツを食べながら、文章を斜めに読んでいった。
これは、酒向に与えられた問題の一つを、狩野の話という参考書を基に、解答文を記したものだと思った。
これは、真野のプライドである。しっかりまとめができなければ、丸をもらえないのである。
真野は、よくまとめましたと、狩野が言うに決まっているという顔をして、カツ弁当をほうばっている。
最近は、常にこうなる。真野のミッションは、中国で新しい会社を立ち上げることである。もう何日も真野は狩野にくっついている。そしてこのレポートである。
「ごちそうさま」
真野は、お茶も買ってきていた。
「どうぞ」
狩野は、真野に、何を言えばよいのか迷った。
「酒向さんには見せたのですか？」

とりあえず、聞いてみた。
先に狩野に見せないと失礼だと思うと、真野は言った。狩野が１晩で書いて酒向に送ったものと、大きく変わるものではない。どういうつもりで真野がこれを書いているのか、よくわからない。
「酒向専務から、狩野所長からキチンと引き継ぐように言われてます」
やっとわかってきた。酒向の考えていることが、やっと理解できた。急いで中国の新しい生産体制を立ち上げなければならないのだが、狩野に頼りたくないと言っているのである。
酒向だって、苦しい局面である。それでも、狩野に頼りたくないのだ。よほど嫌われているとしか思えない。頼りたくはないが、狩野の持っているものは、全部吐き出させようとしている。
これは酒向の特色なのか会社はみんなこうなのか、狩野にはよくわからない。
「私が修正するようなことじゃないから」
そう言って、３時までに研究所に帰らなければならないと言った。
真野は、何度も狩野にお礼を言った。そして玄関まで見送りに来た。
もう真野は研究所には現れないだろうと思った。

研究所に向かう電車で、やはり、動く歩道に乗っている自分をどうしたものか、考えていた。気分が沈んでしまう。

## ○名波の初出勤

狩野は、いつののように８時30分に研究所に着いた。
名波は、もう所長室にいた。
「ああ〜机を空けておきましたので」
狩野は、名波が研究所長の机に座るようにうながした。狩野は、机の前の応接セットの椅子に座った。
名波は、カバンから何やら取り出して、引き出しにしまっていた。
陣持が、台車で、ベトナムから送ってきた名波の段ボールを運んできた。
「陣持さんどうもありがとうございます」

名波は陣持にお礼を言った。
「９時30分に全員を集めていますので着任のあいさつをお願いします」
陣持は名波に言った。
「狩野さんから紹介していただきたいのですが」
狩野は、はじめて聞いたが、了解した。こういうことは、狩野は慣れている。陣持も、事前に何も言わなくても、狩野はうまくやってくれると思っている。
全員に、お礼を言わなくてはならない。

狩野のあいさつと名波の紹介は、短いものだった。研究所の社員は、みんなよくわかっている。折り込んでいる。
名波のあいさつは、長引いた。社長から指示されていることを、話した。
狩野が研究所長になった時のあいさつも長くなったことを覚えている。自分が描いていることを、今話さなければ時間がなくなるかのごとくに、必死で話した。今はよくわかる。みんな、自分が思っているほど真剣ではない。ポイントを知ればいいのだ。今度の所長はどういう人で何を大事にするのか。名波のようにゴチャゴチャ話したのでは、皆目見当もつかない。
やっと話が終わって、陣持がおつかれさまと言った。おつかれさまなのだろう、誰も不思議とは思わなかった。
狩野は、名波のあいさつが終わった後、自分の行き場所をどうするか迷った。狩野は、もう研究所長ではない。所長室に勝手に入って行くのもおかしい。
名波が「狩野さんどうぞ」所長室のドアを開けてくれた。
「５月５日までここを使ってください」名波は言った。
「どうもありがとう」
おかしなものである。たった数日で、人は、こうも変われるのだ。
「お昼から先里さんが来ます」名波は言った。
一緒にいてくれとも言われないので、狩野は、その時間は、図書室にでも行っていようと思った。まだ名波がよくわかってない。どうせ名波と先里が話すのは所長室である。一緒に狩野にいてくれと言うのか、席を外してくれと言っているのか、よくわからない。

「私はお昼から用事がありますので研究所を出ます」
狩野は、べつに用事などなかった。しかし、先里はあまり好きではない。
「それでしたら〜先里さんから資料をもらってますのでメールで送っておきます」名波は言った。
どうやら、狩野が外したようである。名波は、当然狩野も同席するものと思っていたようである。
「11時から１時間ですが、引き継ぎをやらせていただいていいですか？」名波が言った。
先里の資料は、新しい商品企画案であった。先里の５つの商品企画案が提案されていた。
「先里さんの５つの商品企画案ですが」
名波は、狩野がどのように考えるか、知りかたかったようである。
「名波さんにメールします」

狩野は、陣持のつくってくれた引き継ぎ書の説明をした。
とても１時間で説明できるものではない。それにしても、陣持は、こういうことが得意であると思った。
「狩野さん一緒に食事でもどうですか？」
狩野が研究所の外で食事をするのは珍しい。少し車を走らせれば、なんでも食べられる。すきやきごはんのお店に入った。
「狩野さんは実績もあってすごい所長ですけど、私は見劣りがしています」
名波は、おかしなことを言った。
「みんなの信頼が得られるか心配をしています」
名波が、少し不安を抱えていることなど知らなかった。
狩野は、このような不安があっても、決して他者に話すようなことはなかった。これからもないだろう。名波は、不安があるという話を自分にして、何を期待しているのだろうと思った。
アドバイスなど何もない。
「狩野さんが研究所長として一番大事にしてきたのは何ですか？」
こういう質問が困る。
本当は、狩野は、狩野スタイルというものをつくってきた。先里にもスタイ

ルがある。先里のスタイルは、研究と商品を結ぶノウハウを基盤にしていた。先里でなければできないと、研究所のみんなが理解している。
狩野のスタイルは、ここ３年くらいで確立したと思っている。研究所の代表としての顔が立派であることに尽きる。研究所のみんなにとって、研究所以外の部門から責められても、狩野の研究所の顔が、最後は守ってくれた。
先里は、時に、申し訳ないと謝ったりして、研究所のみんなを不安に陥れたりする。狩野には、そういう顔はない。
「名波さんの研究所長としてのスタイルを築けばいいんじゃないですか？」
コーヒーを飲みながら、狩野は、やっと言った。
名波は、この短い言葉に感心していた。

## ○佐元とマグロを食べる

今日も８時30分に研究所に入った。
「おはよう」
いつものように、足早で勝手にあいさつして所長室に上がった。
名波の姿が見えない。
「所長は今日は本社のあいさつ回りにでかけてます」
陣持が言った。
陣持は、狩野のエクアドルのコーヒーを出してきて、煎れはじめた。名波がコーヒーなのかお茶なのか、まだ聞いてはいないのだろう。
狩野は、応接セットの椅子とテーブルで社内のメールの返事をしていた。
ケータイのメールも入ってきた。
「築地にマグロを買いに行きます」
佐元からだった。晩ごはんをマンションで食べましょうという合図である。
「了解」
短い返事をした
陣持は、カップを置いて出て行った。
「どうもありがとう」
少しすっぱいのがエクアドルコーヒーの特徴だと狩野は思っている。いい匂いである。

ものすごく静かである。研究所は、本当は、静かだったのかもしれない。狩野は、常に会議をしていた。常に、次の会議の内容を考えていて、忙しかった。慌ただしかった。騒がしいと思っていた。自分が最後は決めなければならなくなるのだ。
この静けさはなんだろう。物音一つしない。
狩野のキーを叩く音だけである。
今日はどうしよう。
何もやることがない。
当然だが、会議の案内は自分には何も来ない。
先里の５つの商品企画を読んでみて、名波にコメントをしようと思った。
先里は、どういう頭を持っているのか不思議である。狩野には、このスタイルはできない。時々、研究所の全員に、１週間期限に、新製品企画を４つづつ出すようにメールしてきた。
「所長は自分がアイデアないからみんなにメールしている」そう言っている研究所の社員もいることは知っていたが、それでもやらざるを得ない。狩野には、先里のように、何もないところから、新製品を閃き出すような芸当はできない。
商品アイデア集を陣持にまとめてもらっている。１４２もある。これも名波に引き継いだ。狩野は、１４２もあるが、どれもダメのような気がする。自分にも閃かないが、研究所のみんなも、いいかげんである。４つを２つにしてくれと交渉に来たりする。
先里は、ちょっと違う。
狩野が、進行に反対する企画が３つある。反対とは言えない。もう研究所長ではない。難しいかもしれないとしてまとめた。先里は、どういうわけか、研究所のみんなが、いかにも反対しそうな企画にする。常に、狩野も反対することが多い。跳び過ぎるのだと思う。
どうも先里の頭の構造がよくわからない。
コメントを書き終えて名波にメールした。
まだ10時30分である。
何もすることがない。
狩野は、困って、車で外に出た。コーヒーでも飲みに行こうと思った。誰も

見ていない気がする。ほんの少し前までは、常に、誰かに観られていると感じていた。常に、視線を感じていた。
今日は、まるで何も感じない。

名波は、とうとう研究所に帰ってこなかった。
狩野は、午後の時間をもて余した。時々陣持が来て「名波さんは今日は直帰だそうです」と狩野に話した。
少し早めに研究所を出た。誰も観ていないと思った。
佐元のマンションに行く時は、駅の駐車場に車を預けて電車で行った。研究所の誰とも会わないように、時間をズラせた。

「おいしそうなマグロでしょ？」
佐元は買い物上手である。
「シャワーしてきて」
まだ真剣そうな佐元の顔を見て狩野はシャワー室へ行った。
マンションのシャワーの方が狩野の自宅よりも快適である。どういう構造になっているのかわからないが、キチンとお湯が出る。自宅のシャワーは、時々、温度が下がったりして、安心ができない。
「お先に」
佐元は、返事もしないで盛りつけしていた。
「白のいいワイン買ってきた」
佐元は、ワインを注いでいた。
狩野は、自分の料理も腕が上がっていると思っている。もう10年も自分でつくって食べている。
佐元の料理も、味があると思っている。
「いただきます」
ワインがおいしかった。
「刺身でもないこれは何だろう」
狩野は、握りすしが佐元の得意料理であることもよく知っている。
「今日は、全部マグロだから」
佐元は得意そうだった。

確かにおいしい。
「あなたが中国行くのはなくなったんだよね」
いきなり佐元は言った。
狩野が小さくうなづくのを待って佐元は続けた。
「退職金奥さんに渡したの？」
狩野は、佐元がなぜこういうことを知っているのか、聞こうと思った。
「狩野さんはすごい人だって人事の担当が話してる」
狩野が、退職金２４００万円の振込先を、友子の口座にしたからである。こういうことは、口外してはいけないのではないかと思った。
「うわさになってるわけじゃないから安心して」
佐元は、狩野が否定しないことで、この話は本当だと思ったようである。
しかし、なぜこういう話を、佐元は狩野にするのだろう。
「あなたワルじゃないのよね」
野菜と果物サラダもおいしかった。特別のドレッシングであるらしい。こういうのは、狩野にはできない。
「明日もここにいるでしょ？」
明日のことを佐元には話していなかった。
「明日は朝から用事あって名古屋に行かないといけない」
狩野は、美薗金治の話をした。自分の特許を使わせてくれと言っていることも話した。
「どこに行くの？」
狩野は、佐元のように、名古屋駅からどこに行くのか聞いていない。行ってみなければわからないと言った。
佐元は小首をかしげていたが、話はそれっきりだった。
「何時に朝ごはん用意すればいいの？」
「11時に名古屋駅だから」
佐元は、計算してしまったのだろう、明日の朝は、佐元が起こしてくれる。

「もうシャワーしてこないと遅れる」
佐元は言った。
昨日はワインを２本も空けた。そのままベッドで寝込んでしまった。朝早く

佐元に起こされた。挑まれた。
佐元は最近変わった。狩野に積極的である。
「今晩もここに帰ってきて」
佐元は命令するように言った。
「明日アカデミー賞で話題の映画が観たいから」
狩野は時計を見た。急ごうと思った。シャワーに行った。佐元は、キッチンに急いだ。

〇名古屋
名古屋からローカル線でいくつかの駅を過ぎた。
美薗金治は、水をキレイにする仕事が、いかに夢のある仕事であるのかを、熱心に話していた。狩野も、確かにそう思う。狩野の特許も、同じ考えであった。水資源が問題である。生き物は、淡水がなければ生きていけない。
「ここで降ります」
いきなりそう言って、美薗は電車から降りた。狩野も、慌ててついていった。
静かな駅だった。駅に美薗の車が置いてある。
「どうぞ」
大学発ベンチャーである。お金はないだろう。どこかの、廃業した工場でも借りなければやっていけない。
10分くらい走って止まった。
「看板は気にしないでください」
以前は、機械部品を生産していた会社らしい。
「汚い所なのですが、大学発ベンチャーなのでお金がありません」
そういうことより、狩野に何を見せようとしてここまで呼び出したのかということである。
「こちらです」
美薗は、工場の奥に狩野を案内した。
「まだミニプラントですけど」
そうい言って、ブルーシートをとった。

「ご存じのように、時間はかかるけれども電力を使わないことが、このプラントの最大のメリットです」
浸透圧だけで動く膜である。
「もうずっと動き続けています」
そう言って、美薗はタンクに溜まった水を、コックを開けてコップに注いだ。そしておいしそうに飲んで見せた。
「どうですか？」
狩野も、促されて飲んでみた。おいしくはないが臭みはない。
「勝手だったのですが、狩野さんの特許を使わせてもらっています。仕事になった時は、しかるべき謝礼を考えています。
確かに、こういうプラントでは、狩野の特許を使うとうまくいく。

美薗は「お昼を食べに行きましょう」と言って、駅前まで、車を走らせた。
「こういうお店しかないとこですけど」と言って、鳥と焼きそばのお店に入った。夜は居酒屋なのだろう。
美薗は、名東エレク株式会社のパンフレットを見せた。すべて英語で書かれてある。社長は美薗金治になっている。３人の取締役がいるが、狩野には聞き覚えがない。美薗が在籍していた大阪の大学から、会社設立の援助を受けていたと書いてある。３千万円である。
そして、美薗の書いた技術文献が添付されていた。
立派なものである。これを、各国を説明して回るのだと言う。すでに、３つの公社から注文が入ってきているらしい。
名古屋の鳥はおいしい。ビールもすすんだ。焼きそばもおいしい。
「狩野さんの特許も使わせていただけたいのですが、役員で入りませんか？」
美薗は、狩野が、名東エレクだけの仕事をしなくてもかまわないと言った。できれば、資本の一部を出してほしいと狩野に言った。
現在の資本金は、出身大学が３０００万円で美薗が１５００万円と書かれてあった。
「１２００万円で専務をやっていただけると助かります」
狩野は、１４００万円の預金があることはわかっていた。１２００万円であ

れば、かまわないと思った。すぐに返事をしそうになって、ビールを飲み干した。
「日を改めて返事をさせていただきますので」

帰りの新幹線で、狩野は考えた。
現代大学の教授の道もなくなり、中国の会社の道もなくなって、美薗の名東エレクに参加することもワルクはないと思いはじめていた。特に、自分の特許を使っていることである。そして、やっている事業が、狩野の考えと一致するし時代性がある。
狩野は、お金を考えてみた。
多分、現在１４００万円くらいあるだろう。かき集めないとわからない。退職金は友子に渡したのであてにはできない。
もしかして、しばらくは、名東エレクからの報酬はないかもしれないので、何かを考えなければならない。
狩野は、秋田時代の３年と東京の大学時代６年間、お金に困っていた。アルバイトが本業になるのではないかと思えるくらいに働いた。若いということは素晴らしい。そして、その時に、自炊が身に着いた。自炊をすれば、少ない収入でもやっていけることがわかっている。
狩野は、関エトレに入社して以来、お金に困ったことがない。自炊が身に着いているからだろう。中国での３年間も、不自由はなかった。
お金に困ったことがなかったので、最近は、お金のことを深くは考えない。多分甘いと思っている。もうすぐ退職である。どうするのか考えなければならない。
ビールがおいしかった。
うとうとしてしまった。気がつたら東京駅だった。

〇映画を観に行く
「今日はまだマグロあるから」
佐元は、そう言って、早く帰ってきた狩野に機嫌が良かった。
「おいしいイカもあるから」

佐元は、時々築地に行くらしい。ついて行ったことはない。
シャワーから出てきた狩野に、佐元は聞いた。
「誰と会ってたの？」
佐元は、イカをつくっていた。
「美薗という人なんだけど」
佐元は、黙っていた。
「私の特許を使って水をキレイにする大学発ベンチャーをやってる人です」
黙ってイカを切っている。
「名東エレクという会社だけど一緒にやらないかと誘われました」
まだ黙っている。
「１２００万円出資しないかという誘いでした」
まだ黙っている。
「大学が３０００万円で美薗さんが１５００万円出資してるらしいんだけど」
そう言って、英語のパンフレットを佐元に見せた。
「その会社に入るの？」
佐元は聞いた。
「専務で来て欲しいと言われているんだけど」
佐元は、パンフレットを見ながら、イカを切っていた。佐元は、こういうのは得意だ。狩野は、魚が好きだが、うまく調理できない。
「今日は白いご飯だから」
佐元は、食事の準備をはじめた。日本酒を出した。

また日本酒を飲み過ぎて、そのまま眠ってしまった。
早朝、佐元に挑まれた。
最近、佐元は大きな声を出すようになった。マンションである。気にならないのだろうか。最近である。
このベッドの音も、最近気になるようになった。前には、音などしなかった。
シングルのベッドに２人で寝ている。
重なっているのだから、シングルのベッドでいいと佐元は言った。

「何時？」
佐元は、このままで何時間もいたいと言っていたのに、急に時間を聞いた。
「８時だけど」
佐元は、ガバッと起きてシャワーに行った。
「朝からだから起きて」
映画のチケットを買ってあるらしかった。狩野も一緒にシャワーに向かった。

佐元は、狩野よりも早くシャワーから出て、パンを焼いていた。コーヒーのいい匂いもしてきた。醤油の焼けた匂いもした。
「パンを焼いたのですか？」
８時に焼き上がるようにセットしておいたと言った。
「９時に出るから」
佐元は、そう言って食事を並べた。手際の良さは、ずっと変わらない。仕事でもこうなのだろう。上司は便利だと思う。
「このパンおいしいです」
佐元は当然という顔していた。
「家を家族に渡すの？」
突飛に佐元は言った。
「いつ？」
「５月31日」
「どうするの？」
不動産会社にアパートを頼んであると言った。まさか、ここに来るとは言えない。ここに来ると言ったら、佐元は、どう言うだろうか。試してみたい気もした。
「サラダ残さないで」
佐元は、母親のように狩野に言って、洗面所に向かった。

お昼を銀座で食べた。佐元はうなぎが食べたいと言った。お店でごはんを２人で食べることなどなかった。ましてや銀座である。本社のある八重洲も近い。少し日本橋の方に歩いておいしそうなうなぎ屋さんを探した。佐元は、

今にも腕を組みそうである。狩野と佐元は、どう映るのだろう。夫婦にも見えるのだろう。子どもがいそうもない夫婦か。２人とも、ビシッとしている。
佐元は、メニューも見ることもなくお店に入って行った。
佐元は、うなぎを食べながら、今観た話題の映画の話をしていた。うなぎが口から飛び出すのではないかと思えるくらいに、話す。よっぽどうれしかったのだろうか。なんだろうか。
最近の佐元はよくわからない。
「わたし払うから」
この前から、佐元がおかしい。
買い物をしても、みんな佐元が払う。
「デパートでおいしいもん買って帰ろう？」
うなぎを食べたばかりなのに佐元はまた食べる話である。
少し歩いたところで佐元のケータイが鳴った。
「ゴメン〜カギこれだから先に帰ってて」
急に佐元がおかしなことを言った。
「急用ができた」
狩野はどうしてよいかわからなかった。
「１時間くらいだから買い物して帰る」
最近の佐元は、ホントにわからない。何があったのかも話さない。
「じゃ〜帰ってます」そう言って狩野は、有楽町駅に向かって歩きはじめた。

# すべて壊れはじめて２０１０・０４１８

〇五味幸助
「おはよう」
いつものように、狩野は、勝手にあいさつして、名波の所長室に向かった。役職定年での退社である。有給休暇も腐るほど余っている。出勤しても、これといった仕事もない。もう会社に来る必要もないのではないかと思う。みんなはどうしているのだろう。狩野は、キレイに辞めなければと思っている。
「お昼から出かけますので」
狩野は、名波に言った。名波も、返事に困るのだが「気をつけて」と言う。
陣持が入ってきた。狩野のエクアドルのコーヒーの匂いがする。名波と狩野に、コーヒーを注いだ。
「なくなるまで使わせていただきます」名波もコーヒー党であるらしい。
陣持は口数が少ない。口数が少ないが、何を考えてるのか、わかりやすい。
今日は、社内メールがない。狩野に連絡をすることがなくなったのだろう。
朝の15分くらいは、会議もできなかった。メールの返事をすることがタイヘンだったのに。
社内のパブリックホルダへも入れなくなった。今月の販売目標の達成率表にも入れなくなった。
名波は、必死になってメールの返事をしているようである。
わかっていたこととはいえ、さびしいものである。狩野が、会社にとって、みんなにとって、無用の人になっている。
もう、30年も、忙しく会社の指示を仰いできた。みんなからの連絡を大事にしてきた。毎日毎日である。
急に何もなくなるのである。パソコンがあっても、やることがない。このパソコンも返さなければならないのだろうが、陣持は何も言わない。
時間をもて余して、狩野は、図書室へ向かった。
「私の個人の書籍があるんだけど研究所に寄贈していいですか？」

陣持がやってきた。そういうつもりで図書室に行ったわけではない。時間を持て余してた。
「わかりました」そう言って、陣持は、狩野の書籍を段ボールに詰めはじめた。50冊はあった。専門書である。

狩野は２時に船橋にある五味里工業株式会社の工場の門をくぐった。守衛さんは、狩野のことをよく知っている。
「こんにちは〜社長がお待ちかねです」
五味里工業は、関エトレの下請けの仕事もやっている。狩野は、何かにつけて、研究所からの仕事を、五味里工業に振った。社長の五味幸助は、狩野が五味里工業を訪問してくれるように、何度も電話をした。やはり、顔を合わせていると、情も移ってくる。五味幸助は、狩野には感謝している。
「こんにちわ〜」
事務所を通って社長室に行く。事務所の社員は、みんな立ち上がって狩野にあいさつをした。
狩野から工場に行くと言ったのは、はじめてである。五味幸助にも、それがどういう意味を持っているのか、承知している。
いつものように工場を見て回った。しばらく来ていない。工場を増設している。
五味幸助と話をしていると時間を忘れる。お互いに技術者である。工場の機械の配置にさえ、グッドアイデアが出ることがある。お互いにしゃべっていると、うまくいく。

夕方、いつものように、中華のお店に行く。部屋が仕切られていて、２人で安心して話せる。
「工場がうまく回ってるようですけど」
五味幸助は、関エトレのおかげだと言った。
中国の紹興市から来ている新作の紹興酒だといって、五味幸助が勧めた。強いが、おいしい。
少しピッチが速い。
五味幸助は、60を過ぎたばかりである。小さな会社ではあるが、一人でここ

まで立ち上げてきた。
「５月５日に退社することにしたんだけど」
狩野は、切り出した。
「承知しています。私どもはみんな知っています」
私どもとは、仕入先の連合会のことである。
「この前の連合会で、鮒野社長から、役職定年が不満で退職する者がいるという話がありました」
狩野には、ものすごく意外だった。意外だったし、この話が、狩野に伝わってないことも意外だった。伝わっていれば、狩野が、今日五味里工業を訪問することもなかっただろう。
「現代大学の教授がダメになったと聞きましたけど」
現代大学教授が流れた話も、鮒野社長に聞いたらしい。
「鮒野社長はあいさつで言ったのですか？」
立食のパーティーで、社長としてあいさつ回りをしている時に、誰かに「狩野さんをどうされるのですか？」と聞かれて答えたものらしい。
鮒野社長が、狩野のことを、よく思っていないことをはじめて知った。
「話そうか迷ったのですが」五味幸助は、こう言った。

狩野は、五味幸助が用意してくれたタクシーに乗って、今日来たことを後悔していた。恥ずかしかった。五味幸助が、今日狩野が五味里工業に来ることを、仕入先の連合会のみんなに話したかどうかである。もっと恥ずかしいことになる。
このようなことは、狩野が最も嫌うことであった。恥ずかしのだ。
それにしても、鮒野の言ったことが気になった。鮒野には、役職定年が不満で会社を辞めるに映るのか。考えてみた。
確かに、狩野は、不満だから会社を辞めるのだ。どうすれば、鮒野社長には良かったのだろう。役職定年になって、一般社員で定年まで働けと言うのだろうか。その選択は、狩野にはない。
いずれにしても、メンドーなことになったと思った。
とりあえずの、５月５日以降の収入を確保しなければならない。今のままではまずい。将来的に、美薗の名東エレクでやっていくにしても、しばらく

は、それもムリだろう。

シャワーを浴びていつものようにテレビをつけてテーブルの前に座った。座イスが妙になじむ。
佐元からメールがきた。
「五味里工業に行ったのはあなたらしくないけど」
短いメールだった。
「もしもし」
狩野は、佐元が、どうして知っているのか聞かないといけないと思った。
五味里工業の関エトレの担当者から本社の仕入れ担当に電話があったそうである。
佐元にも電話がかかってきたらしい。こういう話は、下で横に繋がっている。
「鮒野社長があなたのこと良く言わなかったらしいから、仕入れ先もあなたが行くと困る」
佐元は狩野の知らないことを知っている。
「五味さんに聞くまで知らなかったんです」
言い訳するように狩野は佐元に話した。
佐元のことばはいつも少ない。少ないけれども、決定的なことばばかりである。佐元に押しピンを押されているかのようであった。

○アパートを探す

いつものように、８時30分に研究所の駐車場に車を止めた。永年、この駐車場にはお世話になった。
「おはよう」
いつものように、狩野は、勝手にあいさつして名波の所長室に行く。
「私ちょっと仕入先のあいさつ回りをはじめていますので」
名波はそう言って、午前中も仕入れ先を回るとのことだった。研究所長になると、このあいさつ回りもけっこうタイヘンである。
「気をつけて」

狩野は、お昼からアパートを探しに行かないといけないと思っていた。５月31日には、家を友子に渡さないといけない。とりあえず、歩いてみようと思った。
「昨日岩手の親戚が持ってきたものですが」陣持がおかしを持ってきた。
ティッシュペーパーにまんじゅうらしきものが２つ乗っている。
「どうもありがとう」
パソコンのメールも何もない。エクアドルのコーヒーを飲んだ。どういうわけか、陣持は狩野が好きである。何かにつけて気遣ってくれる。キッチリしていて、急場でも慌てることなくこなす狩野が頼もしく思えるのだろう。
「お子さんたち大きくなったでしょうね」
もう大学生と高校生だと言った。そういえば、あまり狩野と年は違わない。役職定年が近いだろう。陣持は、マネージャーから一般社員になるだろう。会社に残ることは間違いない。聞く必要もない。
「お昼は食堂ですか？」
食堂で食べる時は、申し出ておかないといけない。
「お願いします。食事のあと外出して帰ってきませんけど」
わかりましたと言って、陣持は出て行った。

７年くらい前、狩野が研究所長になる前、食堂で、毎日のように、議論をしていた。狩野は、専用メモを食堂の端に置いてあった。食事をしながら、そのメモ用紙に、図面を描くこともあった。13時のチャイムが鳴るまでに食事を終えることが少なかった。
「狩野さんお願いします」
賄いのおばさんにうながされて、ごはんを食べた。昼休みの食堂は、議論の場であった。いくつかの試作のアイデアが、ここで生まれた。
今の食堂は、静かである。狩野も、一人で食べている。たまに陣持が弁当を忘れた時は、隣で食べる。狩野も陣持も、話をする方ではない。
狩野は、どこからか変わったと思った。多分、研究所長になってからだろう。

狩野は、車で研究所を出たものの、つくばの街の不動産屋さんに、なかなか

車を止められなかった。少し外れないと難しい。守谷まで車を飛ばした。ここだと、あまり心配なく不動産屋に入れる。
表に車を止めて、エンジンをかけたまま、パンフレットを見てみる。相場がわかればよい。６万円くらいだろうか。中に入って情報を得ればいいのだが、いろいろ聞かれると困る。帰ってインターネットにしようと思った。狩野は、自分のことを、やったことがない。アパートを探したのは、30年も前である。陣持が得意としていることが、狩野には、まるでダメだとわかっている。何もできない。アパートさえ探せない。
仕方なく、またつくばまで帰ってきた。
まだ時間があるからいいか。
運転しながら、狩野は、不思議な出来事だと思った。何かわからないが、動く歩道に乗っている。その動く歩道は、どこに行くのかわからない。狩野自身は、金縛りになったように、アパートさえも探せない。自分のことが何もできない。研究所では、陣持を呼べばよかった。

ため息が出てくるのだが、ごはんは食べなければならない。食べることは、狩野は、自分で何でもできる。つくりおきをしてあるギョーザを食べることにした。ごはんを炊かないといけない。ごはんを炊いている間、豆腐を買ってこようと思った。豆腐が食べたい。
狩野は、近所のスーパーマーケットまで豆腐を買いに行きながら、おかしなことになっている自分を考えていた。
昔の、秋田の３年と東京の６年の９年間、生きるために必死だった。コンビニでも働き、焼き肉店でもアルバイトをした。自炊することが、少ない収入でやっていくコツだとわかって、自炊することだけは、今に繋がっている。あの当時の生きるパワーが、今はなくなったと思った。

我ながら、ごはんはおいしいと思う。狩野は、自分のつくるご飯には満足している。インターネットの威力もある。豆腐もおいしい。
おいしいごはんを食べながら、狩野は、自分のゆるぎない自信が揺らいでいるのではないかと思った。
ここ７年くらい、自信が揺らいだことなどない。最も危なかったのは、友子

と保と知美が揃って家を出た時だ。思ってもみなかった。狩野の評価が上がれば、地位が上がれば、家族みんなが、いい想いができる。友子も保も知美も望んでいると思っていた。何かがズレてしまった。大きなショックで自信を失いかけた。
幸いにも、離婚が、狩野の仕事に支障を及ぼすことはなかった。狩野は研究所の所長になった。友子と保と知美が、どうして待ってくれなかったのか、不思議だった。信じくれなかったのか。いまだによくわからない。
研究所の所長になって以来、自信が揺らいだことはなかった。自信満々である。
それだけに、役職定年の封書はショックだった。その後の、「酒向専務はあなたを役員にしたくないから中国の会社に紹介した」と言った佐元の言葉を考えてみても、関エトレにしがみつくことはできないと思う。
狩野には、まだ大きな未来があった。自信がある。
「ガンバロウ」狩野は、小さくうなづいた。

○大やけど
いつものように８時半に研究所に着いた。森知上男たちの品質保証の車が慌ただしく動いている。何があったのかよくわからない。
「おはよう」
いつものように勝手にあいさつして名波の所長室に向かった。
「待ってました」名波が苦しそうな顔で狩野に行った。
業務用機器の冷却部の不具合で、お客さんが大やけどをしたらしい。はじめての実被害だった。
「会議をはじめますのでお願いします」
名波は、どういうつもりでお願いしますと言っているのか、よくわからなかった。まだ５月５日になっていないのだから、会議に出てくれと言われれば断れない。
「おはようございます」森知が狩野にあいさつをした。
「昨日事故のあった現場を訪問してきました」
そう言って、森知が詳しい状況を報告した。明らかに心配していた部品の耐

久性の問題だと言った。
もう疑いのないことだった。
「どうしてここまで放置したのですか？」
名波の質問だが、研究所長としてはまずい質問をしてしまった。
「昨年から今年にかけて、研究所がこの問題を放置したからです」
森知が名波に言った。
「狩野さん、それでいいのですか？」
名波は、こういう人だったのかと、はじめて理解した。この問題を、引き継ぎたくないのだと思った。
「至急に２つやらなければならないことがあります。１つは、設置されている場所すべてが特定できるかどうかです。特定できるのだったら、手分けして、部品を取り換えることです。２つ目は、代替え部品です」
狩野が言った。
「代理店を通じて設置しているところも多く、すべてを特定することは難しいかもしれない」
営業部長の雪乃下勝が言った。
「そういうことを言っている場合じゃなくて、ムリにでも特定して部品交換をしなければタイヘンなことになる」
森知が言った。
雪乃下勝は、その場で営業の担当者に電話をした。今日中にすべての設置場所を特定するように。８７０台という膨大な数である。ひょっとすると、すべてのものが、ダメなのかもしれない。
「狩野さんにお聞きしたいのですが、研究所で代替え部品の検討をはじめていると聞きましたけど」
報告してくれと森知が言った。狩野は、その後何も聞いてはいない。名波は、下野の顔も見ないので、この件は、狩野が名波に引き継いだ時の話のままなのだろう。下野は、自分が話してよいものかどうか、名波と狩野を見た。
「下野さんお願いします」狩野が言った。
下野は、３つの案それぞれに、試作を行っている途中であった。まだ実験をしていない。３つの試作の特徴を詳しく話した。最も可能性が高いのは、３

案だと言った。
「スケジュールをお願いします」
森知は一刻も猶予はならないと言った。
「４月28日にはテストが終了する予定です」
名波は、みんなで手分けしてもっと早くならないかと下野に言った。試作は外注されていて、外注先は、徹夜で作業しているとのことだった。
社長の鮒野から名波に電話があった。ケータイであった。名波は慌てて会議室の外に出て行った。みんな、しばらく話すこともなくなった。なんらかの指示があるだろうと思った。
「鮒野社長から１週間で部品を交換するようにという指示です」
名波は、そのままみんなに伝えた。
８７０台もの数である。すべての代理店にも手伝ってもらわなければできない。とてもムリな話である。まだ代替え部品も決まっていない。
10分休憩することになった。
狩野は、森知とトイレで一緒になった。
「名波さんには代替え部品を３日で仕上げることをお願いして、雪乃下部長には４日目に代理店ゼンブを本社に集めて部品交換の講習会を行うようにお願いをして、森知さんは代理店が部品交換をする指導をすることにしないと、うまくまとまらないと思うけど」
休憩後すぐに、森知が、さっき狩野がトイレで言った案を話した。
誰も異論はなかった。
雪乃下は急いで八重洲の本社へ帰った。タイヘンなことになってしまったと思った。名波と森知は、３つの案をどうしたら３日で仕上げるか話し合った。
狩野は、どうしたものか迷った。
「狩野さんも一緒にお願いします」
森知が言った。
下野は、外注先とさっきから電話をしている。できないものはできないと外注先は言っているようである。１つ目が上がるのは２日後と白板に書き込んでいた。３つ目が上がるのが７日目である、１社で３つやっているから時間がかかる。森知は、３つ目の案を別の会社に依頼するように、名波に頼ん

だ。
狩野は、難しいと思った。試作とはいえ、生産をすぐ行わなければならない。確かめる時間もない。別の会社に持っていくのはまずいと思った。
黙っていた。
結局、下野は、３案とも現在進行している会社で、徹夜で仕上げることになり、３案目の試作は、ダブって、別の会社にも発注することにした。森知が手配した。
狩野は、状況がよくわからずに、１週間で片づけるように指示する社長がよくないと思った。しかし、もともと、昨年から放置した狩野に矛先が向くだろう。黙るしかない。

食堂で名波と一緒にごはんを食べた。名波は、常に食堂でみんなとごはんを食べることにしたのだと言う。食堂は、みんなと顔を合わせることができる。新米の研究所長には、都合のよい場所なのだ。狩野も、食堂でみんなと話したりアイデアを出し合ったりすることが、楽しかった。
名波は、悲痛な顔している。あまりプレッシャーに強い方ではないかもしれないと思った。森知もやってきて、一緒にごはんを食べることになった。
「鮒野社長はどうして１週間と言ったのだろう」
森知が聞くともなく話した。
名波が、状況がよくわかってないので、鮒野の言葉どおり「わかりました」と言ってしまったと言った。
15時に、名波と森知が社長の鮒野に呼ばれているらしい。

ネットで頼んでいる通信販売のめんたいを取り出して、スパゲティーにしようと思った。めんたいはいたみ易い。しかし、冷凍しておくとけっこうもってしまう。晩ごはんの支度がメンドーな時など、便利である。
狩野は、めんたいスパゲティーを食べながら、テレビを見ていた。ニュースである。最近は、商品の故障で出火してやけどなどあると、すぐにニュースになる。しかも一部上場の会社である。
とりあえず、今日は何もなさそうである。
いつものように、狩野は、明日どうすべきか、じっくり考えた。

○８７０の部品交換の優先順位

「おはよう」
狩野は、いつものように、勝手にあいさつして名波の研究所長室へ向かった。
部屋には、すでに名波と森知が待っていた。
「昨日の夜の狩野さんのメールですけど」
お茶をする間もなく森知が話しはじめた。
「多分、８７０はすごい数だから優先順位をつけないと危ないと思うんだけど」
これが狩野の考えだった。
「どうやって優先順位をつけるかだけど」
狩野は、ずっと考えていた。多分、サーモグラフィーで測ればよいと思った。冷却部品の耐久性である。その部分の温度が高くなっているはずである。
「サーモはあったんですか？」
森知は、研究所にあると言って、自分で探しに行った。
名波は、どうしたものか考え込んでいた。
「やっぱり、一斉にすべて取り換えた方がいいと思うんだけど」
名波は言った。
「優先順位をつけると安心して１週間では終わらなくなるし、サーモで測る時間もとられるし」
確かに一理ある。そんなことをやっているヒマがあったら部品を取り換えた方が早い。
森知は、サーモを持ってきた。森知がサーモに詳しかった。
森知は、雪乃下へ電話した。つくばで設置している場所を聞くためである。３か所あった。森知は、つくばの代理店に電話して、事情を説明した。
「とりあえず測ってきますから、それから相談しましょう」
森知は、代理店へ出かけた。
「狩野さんも一緒に行っていただけますか？」
この事前に優先順位をつけて部品交換をしていく案は、狩野の案である。一

緒に行くことにした。

最初に訪れたのは、通商産業省所轄の研究所であった。事情を説明するのに30分を要した。いずれも、簡単に入れるようなところではない。まだ故障の内容を説明もしていないので、時間を要する。狩野は、いい案だけど難しいかもしれないと思ってしまった。やはり、動かないとわからない。
やっと設置場所へ案内された。サーモグラフィーはカメラのようなものである。書類に書き込むことが多いのは当然だろう。
証拠を残すためにビデオで撮影もしたかったが、それもままならない。
運転中であったが、カバーを外して、サーモで温度を撮影した。40度を維持するはずだったが、すでに67度になっていた。
急がないといけない。

午前中に３か所終えるはずであったが、終わったのは、15時になっていた。お昼も食べていない。
つくばの代理店の担当者と別れて、とりあえず、遅いお昼を食べることにした。カツ丼である。
名波が待っているだろう。森知は電話をした。
「３か所測り終えたのでこれから食事をして研究所へ帰りますが、40度であるはずなのに、３か所とも70度近くありました」
カツ丼を食べながら、森知は言った。
「一日で５か所くらいしか測れないかもしれないですね」
思いがけないことだった。これで８７０か所である。計算すればすぐに出てくる。これはタイヘンなことだ。
「狩野さんはどう思いました？」
24日は３つの案の試験をしなければならない。25日は生産に入らないといけない。明日の23日しか猶予はないが、品質保証を総動員して、たとえ40か所でも、測った方がよいと言った。
「40／８７０ですか」
森知は考え込んでしまう。
もし、90度になっているところがあれば、緊急を要するのだ。明日にも噴き

出すかもしれない。

名波は、下野と相談をしていた。今日の夕方、名波と下野は、外注先を訪れることになっている。もしかして、完成するまで帰れないかもしれない。
名波を電話で呼んだ。
名波の顔は、悲痛になってきた。狩野は驚いてしまった。
名波は、測っている時間がないので、それよりも、代理店に早く説明して、部品交換の日程調整をしなければならないと言った。
確かにそうである。もし運転が止められなければ、部品交換などできない。夜中の部品交換作業になってしまうだろう。夜中にできればまだいいかもしれない。終日運転をしている可能性もある。
雪乃下から現在の情報を聞いた。
今日の昼までに正確な情報を得ているのは３６０ヶ所であるという。残りの５１０ヶ所の特定には、２日はかかるという。
エクセルでつくられた一覧表を送ってもらった。詳しく調べてある。３６０ヶ所には終日運転はなかった。深夜であれば部品交換可能である。
「３つの代替え部品の試作はどうですか？」
狩野は名波に聞いた。
「今晩下野と行ってきます」
名波は、行ってみなければわからないと言う。
話しているうちに、本題は、どこかへ行ってしまう。事前に優先順位をつけようという狩野の案から今日がはじまった。
次第に、雪乃下に、代理店と一緒になって、部品交換の日程調整をしてもらうことに、流れが傾いていった。狩野は、多分、すでに、運転中に90度に達しているところもあると思った。今にも、噴き出すかもしれない。しかし、現実として、サーモで計測するなど難しい。
狩野は「天に祈るしかないのか」と、小声で言った。

〇研究所の送別会

朝から名波は、試作を外注している会社へ直行していた。下野は徹夜らし

い。
「おはようございます」陣持が名波の所長室に入ってきた。
「岩手のまんじゅうですが」ティシィペーパーに乗ったまんじゅうを持っていた。
「送別会私も行きますので」
コーヒーを煎れて、陣持は出て行った。
明日から長い連休になる社員もいるだろう。今日送別会をしなければならない。
狩野は、森知のメールを受け取った。
早朝７時の運転時に来てくれというクレームに行ってきたらしい。異常に温度が高いのでというクレームである。八王子であった。
サーモで測ってみたら88度であったらしい。森知は、意を決して、事情をすべて話して、部品交換が済むまで運転を中止するように頼んだという。２日間運転ができないが、運転できない補償は、森知の品質保証が負った。24万円という金額だった。タイヘンなことになった。
異常に熱いという連絡だったから助かったようなものだ。そのまま放置したら、噴き出している。やけどになる。８７０ヶ所である。考えると怖くなってしまう。
雪乃下は、すべての設置場所を特定するのに必死である。ずっと徹夜が続いているようだ。研究所は下野をリーダーに４名が外注先に泊まり込んでいる。３つ目の試作をダブって発注している外注先にも、３名が泊まり込んでいる。名波も一緒である。
森知はクレームの現場に出向いている。
今日は、狩野の送別会である。名波は来るのだろうか。

狩野は、一人で食堂でごはんを食べた。賄いのおばさんがやってきた。
「ながいことお世話になりました」
気のいい近所の奥さんである。おばあさんになったらしい。味付けは関東の味である。狩野はおいしいと思っていた。
「これからどうされるのですか？」
みんながあまり聞かないことも平気で聞いてくる。「考え中です」と答える

ことにしている。うわさがいろいろ流れていた。現代大学の教授であったり、中国の会社の役員であったりである。みんな、狩野は、退職して、もっと上のクラスに入るのだと信じている。
孫の話に振らないといけない。
狩野の食事が終わるまで、ずっと孫の話であった。右の手が顔を触ってくるといった細かなしぐさが楽しいのだ。
夜の送別会には出席できないと言った。

タイヘンナことが起きているのだが、狩野は何もやることがない。ただ、事故の情報がないことだけを祈った。
ながい時間だった。
陣持がやってきた。
「私の車で一緒に行きましょう。狩野さんの車は研究所に置いておいた方がいいです」
陣持は、狩野を家まで送って行くと言っている。どうせお酒が入って、運転ができない。陣持はウーロン茶でもみんなと同じように酔える。
「わかりました」
狩野は、車を研究所に置いて行くことにした。明日は土曜であるが、どうせのんびり家で休んではいられないだろうと思った。
新人４人がやってきた。
時間の確認だった。
「よろしくおねがいします」
狩野が、新人４人に、お願いしますなど、言ったことがない。

幹事４人のあいさつがあっても、座は埋まらなかった。出席予定は41人であったらしい。まだ25人くらいしか集まっていない。
「まだみんな走り回っているので、とりあえず狩野さんにあいさつをお願いして、みんな揃ったところで、再度狩野さんのあいさつをお願いします」
狩野は、名波の歓迎会が終わっていることを、さっき車の中で陣持に聞いた。
「今日は、お忙しいところ、みなさんに集まっていただきまして、ありがと

うございます。現在研究所は、大きなクレームを抱えて、名波所長以下、走り回っている状況です。そんな中、送別会をしていただいて、心苦しく思っています」
名波もまだ来ていない。とりあえずのあいさつにして、あとでキチンとお礼をしようと思った。
10分ほど経った時に、10人くらい一斉に席に着いた。マネージャークラスが誰も来ていない。やっと、やってきた。どこかで会議をしていたらしい。名波以外は、ほぼ揃った。
陣持が車で言っていたが、暮れに発売した新製品にも不具合が見つかって、その対応にも追われているグループがあるとのことだった。もう狩野には、なんの情報も入らない。
「狩野さんのあいさつをお願いしたいのですが、名波所長がもうすぐいらっしゃいますので、一緒にお願いします。しばらくご歓談ください」
狩野は、隣に座った女性の研究員の増渕あやめと話をしていた。
「この前映画館で狩野さんと本社の佐元さんをお見かけしました」
とんでもないことを言った。
「人違いだったらごめんなさい」
一瞬迷った。「私は観に行きましたけど女性はどなたかわかりません」
佐元は、もう他者に観られてもかまわないといった態度である。当然考えられる。
「一緒に出て行かれました」
狩野は、それ以上のことは、何も言わなかった。
「ウソでしょ？」増渕の顔は、こう言っていた。
都合良く、名波が現れた。名波は、あいさつだけにして、またすぐに出かけると言い、末席から狩野へのお別れのあいさつをした。
狩野も、しっかり考えてきていた。しかし、今にも席を立ちそうな名波を見ていて、ながいあいさつはできなかった。伝統ある研究所を、引き継いでいただきたいという話だけにとどめた。
名波は、狩野のところにやってきて、外に出るよう言った。
「明日３つの部品の試験をするのですが、狩野さんも出ていただけますか？」

狩野は、明日の朝はタクシーを呼ぼうと思った。
名波は、そのまま出て行った。狩野の送別会どころではない。
増渕あやめは、しきりに狩野と佐元の話をする。話ながら「狩野さんの歌聴いてみたいよね？」女性研究員を誘っていた。増渕は32歳である。ベテランである。４人の幹事を脅している。２次会をカラオケにしろと言っている。
増渕は酒のクセが良くない。みんな知っている。
狩野は、増渕の隣のいるとヤバイと思い、席を回った。男の研究員は真面目である。

「これから２次会に入ります。わたしの惚れている狩野さんの歌を聴きに行きます。一緒に来てください」
増渕は、勝手に送別会を切り上げた。４人の新入社員は、慌てて、中シメを行った。
いつもは、ここでもう狩野は帰った。いくら誘いがあっても、狩野は帰った。
「送って行こうと思ったのですが、私はここで失礼します」
陣持がやってきて狩野に言った。

〇増渕が隣に寝ていて
今日は３つの部品の試験がある。試験がある。頭が勝手に騒いでいる。
慌てて時計を見た。まだ６時半だった。異常に頭が痛い。
人の手が肩を触ってビックリして飛び起きた。
狩野は、とんでもないことになったと思った。増渕あやめがじっと見ていた。どうしたのか思い出さなければならない。増渕を抱いたのだろうか。思い出せない。なぜ増渕は狩野のベッドにいるのだろう。確かにダブルのベッドである。
カラオケのお店の後に、もう１件寄ったことは覚えている。まだ女性が２人いて男性研究員も３人くらいいた。１時間くらいいて12時になった。
狩野は、もう飲めないと言って、タクシーを呼んでもらった。そしてタクシーへ乗った。そこまでである。それなのに、なぜ増渕がここにいるのだろ

う。頭が混乱していた。
狩野は、くつ下も履いたままだった。シャワーもしていない。
なにも言わずに、狩野はシャワーに行った。
「シャワーしたかったけどスイッチがわかんなくて」
増渕も後に続いた。もうこれはおかしなことになってしまっている。増渕はナイスだった。
「狩野さん玄関で倒れてたから」
驚いた。タクシーを降りた後、カギを開けようとして玄関で倒れていたという。
「一緒に乗っていたのですか？」
すぐ後を走っていたと言った。
「狩野さん重くてタイヘンだった」
ベッドまで連れてきたらしいのだが、その後が気になる。とても増渕を抱けるような状態ではなかったと思う。
「どうもありがとう」
お礼を言うことになるとは思わなかった。

狩野は、増渕が化粧をしている間、朝ごはんをつくった。パンにスープにコーヒーにハムと卵である。10分もあったらできる。
「ごはん食べて出ましょう」
狩野は、増渕を呼びに行った。
「タクシーで研究所に行きますけど、途中で降ろしますから」
増渕は黙ってうなずいた。
一緒にシャワーをした。それだけだろうか。増渕は何も言わない。
「狩野さんのごはんはおいしい」
増渕は、おいしそうに言った。もう、研究所の増渕あやめに戻っていた。
狩野は、何を話してよいのか、迷った。なぜ、増渕は狩野の隣に寝たのだろう。そのままほっておいても、誰も何も言わない。考えてしまう。

賑やかなところまでと増渕は言った。
タクシーの中で狩野は黙っていた。何を話していいのかわからない。

「ここでいいです」
増渕が言った。
「どうもありがとう助かりました」
狩野はお礼を言った。
増渕は、そのまま駅の階段を下りて行った。電車で通っているのだろうか。

○３つの部品の試験
タクシーでも狩野は黙っていた。考え事をしていた。どうしてあそこまでお酒を飲んでしまったのかわからない。増渕がどうして横で寝ていたのかわからない。わからないことだらけである。
「おはよう」
狩野のいつものクセである。誰もいない。今日は土曜日である。そのまま名波の所長室に向かった。
名波は、すでに森知と話し合っていた。
「コーヒー煎れておきました」
名波は狩野に言った。
名波は、狩野のコーヒー好きをよく知っている。
すでに１００度の高温環境で耐久促進テストを行っているという。通常40度にしかならないはずです。しかし40度でテストをしても何日もかかってしまう。時間がない。１００度10時間の促進テストを行うことにしたらしい。
「もしこれでダメだったらどうしましょう」
名波は森知に相談をしている。
「５時間以上耐えていれば、それを使いましょう」
森知の言うとおりである。もう時間がないのだ。今現在でも、噴き出しているかもしれない。
「生産の準備の方は大丈夫ですか？」
狩野は聞いた。
「スタンバイはしているのですが」
狩野は考えた。日産１３０しかできないことは知っている。特殊な部品である。

「ムダになってもいいから今から生産してはどうですか？」
３案すべてではなくて、３つ目の案をスタンバイさせているという。生産現場がまた混乱して、余計なクレームにつながってもまずいと名波が言った。
やはり、名波は、常に慎重にコトを運ぶタイプの人である。こういう時に、本性が現れる。こういうスタイルの人に、大きな仕事はできないと思った。
結局、試験の結果を待つことにした。生産は明日からである。日産１３０である。
今日と明日に事故がなければと祈るしかない。
狩野は、試験の現場を見に行った。１００度とはすごい温度である。１００度10時間である。下野が不安そうに、自信のない顔で計測器を眺めていた。

「お昼を買ってきました」
ケータイが鳴った。森知が牛丼を買い出しに行ったらしい。
４時間が経過しているが、３つの部品ともビクともしない。現在使用している部品は、すでに壊れている。２時間20分であった。
森知は、今の部品がすでに壊れたことで、少しは安堵していた。お昼を食べる元気も出ていた。
「もっと早くこの試験を行えば良かったですね」
森知は、狩野に言った。
狩野は、牛丼を食べながら返事に困った。狩野は、ここ２年くらい、現在販売している商品のフォローをしているヒマがなかった。研究所である。新製品を発売しなければ、所長はクビである。
10時間である。８時からはじめたので、18時までかかる。こうなってきたら、時間との戦いになってきている。
下野から名波に電話があった。
「13時にＡ案が壊れました。来てください」
森知も名波も狩野も、牛丼の箸をおいて、実験室に急いだ。
多分、１５０度くらいでスイッチを切ったのだろう。焼けた匂いが充満していた。
「ｎ＝１しかできないけど仕方がないか」
狩野はつぶやくように言った。

みんな黙っていた。
「それより可能性の高いものと取り替えるのが先決です」
森知の言うとおりである。今現在でも、どこかの現場で火を噴いているかもしれないのだ。確率は非常に高い。
残るはＢ案とＣ案である。Ｃ案は、生産のスタンバイをしている。できれば、Ｃ案が残ってほしい。それも現在の生産会社の試作であるＣ１が残ってほしい。
森知が、ダブッてもいいからと発注したＣ２は、生産になると、メンドーである。生産の実力を知らない。

「雪乃下部長はいらっしゃいますか」
冷たくなりそうな牛丼の残りを食べながら、森知は、雪乃下と話していた。情報交換をしている。明日中に８７０の設置場所をすべて特定できるらしい。明後日26日のすべての代理店を集める手配も進めているらしい。
雪乃下が気になっていたのは、今日の実験の結果である。代理店を集めたものの、現在の部品よりも耐久性が優れていなければ、部品取り替えの説明会を中止しなければならない。
森知は、その心配はないことを雪乃下に伝えた。
「Ｂ案かＣ１かＣ２で決めます」
しっかりした口調で雪乃下に伝えていた。

森知が雪乃下と話している時に、狩野のケータイが鳴った。真野浩二からだった。狩野は名波の所長室を出た。
「昨日経営会議があったのですが、私の案を説明したのですが、保留にされました。お宅にお伺いしたいのですが」
今日は土曜日である。誰も来ることはないのだが、自宅には入れたくない。
「おすし屋さんでも近所にありませんか？ご馳走させてください」
結局、狩野の自宅からそう遠くはないすし屋さんで待ち合わせることにした。どうしてこうも勝手になれるのだろう。狩野は、次第に迷惑だと思うようになっている自分に気がついていた。

結局、Ｂ案もＣ１もＣ２も、18時まで壊れることはなかった。下野はこのまま継続すると言った。どれに決めたにしても、実用値は知っていなければならない。
名波も森知も狩野も、Ｃ１を選択した。現在の部品の生産場所でもある。やりやすい。
森知は、すぐに決定したことを速報として、社内にメールした。短い文であった。下野はが実験報告書を徹夜で書くであろう。
森知は、生産のスタンバイをしているスタッフと外注先に電話をした。今晩から生産をはじめてくれるようにである。最初は時間がかかる。１３０できるのは、明日の夕方であるらしい。
それでも、明後日26日の代理店を集めての説明会には、１３０の取り替え部品があることになる。
森知も名波も狩野も、少しはホッとした。
「狩野さんどうもありがとうございました。もう平気ですから、今日はこれでけっこうです」
名波は狩野に言った。
19時である。狩野は、真野と約束したすし屋に急いだ。19時の約束をした。

〇中国の会社

狩野は、約束の時間を少し遅れた。
真野に、遅れた理由を話そうと思った。真野は、さっきの電話で、狩野がどこにいるのか聞かなかった。自宅にいると思っている。関エトレにとっても、タイヘンなことになっているのだが、真野は、何も知らないだろうと思った。
同じ会社なのに、こういうもんである。
「少し遅れまして」
狩野は言った。
「ビールいただいています」
真野はビールを飲んでいた。

「私もビールをお願いします」
真野は、昨日の金曜日の経営会議の資料を読んでいた。社外秘なのだろうが。そんなことを気にはしておれない。
狩野は、真野が狩野に何をして欲しいのか、それがわからないまま来ていた。経営会議の資料を斜めに読みながら、「何をすればいいのですか？」と聞いた。
「このＡ社がいいと思っているのですが説得力に欠けると言うのです」
社長の鮒野が言うのだそうだ。
「酒向さんは真野さんと同じ意見ですか？」
酒向は、狩野が何と言っているのかをしきりに聞きたがっているのだと言うことだった。酒向は海外営業の担当役員である。生産はよくわからない。そうかといって、狩野に直接聞くことはないだろうと思った。真野を通している。
「酒向さんもＡ社をゼッタイに押すということではないのですか？」
酒向自身が、決め手を持っていないと、真野は言った。
「現在の中国の会社は、その後どうなっているのですか？」
狩野は聞いてみた。
中国の会社は、自社ブランド商品をアメリカとフランスの量販店向けに生産しているという。関エトレ経由のアメリカのメーカーブランドのモノも、生産をしているという。しかし、同じものであるにもかかわらず、価格が大幅に異なり、酒向や真野たちの売上は、目に見えて落ちてくることがはっきりしているらしい。
少なくとも、20％くらいコストを落として生産してくれそうなＡ社を選択しているという。
「Ａ社には当たってみたのですか？」
狩野は、当然、真野はＡ社に行ったものと思っていた。
出張に出ると、一挙にうわさが流れるので、会社として、最終決定ではないけれども、方向を決めておきたいのだと言った。
こういうところが、狩野には理解ができない。まだ会ってもいないのである。何かの理由で、門前払い状態であったらどうするのだろう。狩野は、真野の顔を、マジマジと見てしまった。

鮒野が、説得力がないと言ったのもうなずける。
「狩野さんだったらどうしますか？」
４社を訪問すると言った。狩野は、現在の中国の会社以外であれば、４社しかないと思っている。関エトレと一緒にやれるのは、４社しかない。
真野は、刺身を頼んでいいかと言った。考え込んでしまった。
狩野には、全く理解できない。Ａ社を訪問してうわさが流れたところで、もう中国の会社のアメリカとフランスの量販店向けの商品の生産は、はじまっている。
「もしＡ社も、関エトレの商品を生産するより、直接アメリカに出たがっていたらどうするのですか？」
真野には答えがなかった。
このままでは、真野は、現在の中国の生産会社に替わる新しい生産会社を決めきれないだろうと思った。結局のところ、現在の中国の会社に、生産の委託を続けなくてはならなくなり、提携の主客が逆転することになる。
社長の鮒野が、それでもいいと思っているのだろうか。
狩野のお昼は牛丼だった。しかし空腹になっていた。緊張していたのだと思った。緊張するとお腹が空くのか。握りを頼んだ。
「もし中国に行くことになったら一緒に行ってくれませんか？」
真野は、やはりよくわかってはいないのだ。酒向が、狩野が真野と一緒に中国に行くことを承知するわけがない。
「事情があって、酒向さんは、私が真野さんと中国に行くことに賛成しません」
真野は不思議そうな顔をした。酒向が真野に指示したことは、狩野からしっかり引き継げということだった。なのに、なぜ一緒に中国に行くことに反対するのだろう。真野には理解ができなかった。
「どうしてですか？」
これ以上のコトを、狩野は、真野に話すつもりはなかった。酒向が、真野に、狩野からしっかり引き継げと言っているのは、狩野に頼りたくないからなのだ。会社がどうとか、そういう問題ではない。狩野にもよくわからないが、酒向は狩野が嫌いなのだ。
「私ではアポイントもとれません」

真野は、辛そうな顔をした。
狩野が最初に中国生産を検討した時には、何も情報がないまま飛び込んだ。同じようにすればいいと思った。
「今日狩野さんから意見を聞いたことは話していいですか？」
真野は、いきなり慎重になった。
「月曜に酒向専務と相談しますけど、もし一緒に中国に行くことになったらよろしくお願いします」
まだ真野は、酒向が、狩野と一緒に中国に行くことに反対するという狩野の話を信じてはいない。

21時まですし屋にいた。
狩野の自宅からそう遠くはない。真野がタクシーで送りますと言うのを断って、歩きはじめた。
狩野は、確かに中国では苦労した。必死だった。友子と保を知美という家族を失った。しかし、そこで得た狩野の身体にくっついているものは、けっこうすごいノウハウだということが、次第にわかってきた。
これはすごいものなのだが、もう活かされそうもない。シチュエイションが良くない。残念だと思った。どうしてこういうことになったのだろう。依然として、動く歩道に乗っている自分を感じていた。何度もそこから降りようとするのだが、どういうわけか、また動く歩道が待っているような気がしてならない。この動く歩道はどこへ行くのだろうか。まだ全く予想がつかない。

〇家の掃除をする
暖かい日曜であった。狩野は、今日は家の掃除をしなければならないと思った。そして、アパートを決めないといけない。５月31日には、友子と保と知美に家を渡さなければならない。毎月渡すお金を30万円から20万円に減らすことになっている。
それにしても、５月５日以降の収入の見込みがまだたっていないことも、少しの不安材料になっている。

狩野は、友子や保や知美に、狩野の生活ぶりをとやかく言われるのが嫌である。部屋はキレイにして渡したい。朝から、何も考えずに、掃除機をかけた。自分の引っ越しの際に持ち出すものを集めた。
台所用品がけっこうある。狩野の好きな鍋だってある。持ち出そうと思う。友子や知美の好きな鍋だってあるだろう。持って来るだろう。
布団は２組しかない。これは全部持ち出さないといけない。あれこれ考えながら掃除をしていると、アッという間にお昼になる。
通信販売で頼んだラーメンを食べることにする。乾麺である。
狩野は、この大きな家で、10年を一人で暮らした。何かが大きく変わろうとしているが、自分でもよくつかめていない。
乾麺なのに冷蔵庫に入れてある。送ってくれた時に冷たかったからである。よくわからないままそうしている。
この冷蔵庫も持ち出さないといけない。狩野の引っ越し荷物も、けっこうなものになる。最大の難問は書籍だ。多分、アパートでは、どうにもならないだろう。友子と保と知美に頼まないといけないだろう。どこかの部屋に置かせておいてくれないか。
このラーメンはけっこうおいしい。狩野は、ラーメンをフライパンでつくる。水と具材を煮て、乾麺を入れダシを入れる。通信販売のラーメンでは、醤油味と味噌味と塩味のものが適度に配置されていて、便利である。
ラーメンを食べながらテレビをながめていた。デフレでアパート代も安くなっているそうである。
急に、思い立った。
掃除もいいが、アパートを決めないといけない。

守谷の駅からそう遠くない街道沿いの不動産屋に車を止めた。今日はエンジンを止めた。今日は、少なくとも相談をしなければならない。
「こんにちわ〜」
元気そうな40くらいの背広姿の主人と若い女性の２人だった。他にお客はいない。
「どうぞこちらへ」
うながされるまま、主人らしき男の前に座った。

「部屋をお探しですか？」
多分、いろいろ察することが得意になるだろう。
どう見ても狩野は50を過ぎて見える。立派な家庭持ちにも見える。一軒家を所有しているようにも見える。服装もキチンとしている。息子か娘の部屋探しか、あるいは、狩野のいい人か。
「私が一人で住むことになるんだけど、できるだけ高くない部屋がいいんだけど」
聞いていた店員らしき若い女性が、一瞬狩野を見た。
ここでどうされたのですかなどと聞かれないのが助かる。
「６万円くらいでかまいませんか？」
先に金額を出すと話が早い。
「車をお持ちですが、駐車を含めてですか？」
そうだと答えた。
主人は、ファイルを選択していた。そして、３枚の写真と図面を示した。
「いずれも駅まで遠くなりますけど」
徒歩30分を越える。車だと５分もかからないのだと言う。駅には駐車場がたくさんあって、問題はないと言う。
狩野にとって大事なことは、友子と保と知美に渡すお金を10万円少なくすることだ。駅から遠くても、６万円くらいのところにしないと、意味がない。
「お客さんを案内してください」
主人らしき男は、店員らしき女性に言った。
守谷は、最近アパートがたくさん建っていて空き部屋も多くなってきているということだった。女性店員は、車の運転が上手だった。よくしゃべるが、狩野のプライバシーについては、何も聞かなかった。常識なのだろう。狩野は助かった。
覚悟はしていたが、どこも狭くて押し潰されそうである。狩野は、今は広くて掃除もできないくらいの家に住んでいる。実際使っているのは少しだとしても、部屋に自分が押し潰される感覚はない。
しかし、これはタイヘンである。多分、ラーメンをつくる音さえ、隣に聞こえそうである。友子と保と知美は、こういう所に10年住んでいることになる。それでも、狩野と一緒には住みたくなかったのだ。それがいまだにわか

らない。中国の３年間だって、アパートだったが、３ＤＫの大きなマンションだった。
「気に入りませんか？」
女性店員は聞いてきた。当然気に入らない顔をしているのだろう。
「これ借りて帰っていいですか？明日返事をしたいと思っているんだけど」
女性店員は、かまわないと言った。
少し沈み込んだ雰囲気のある狩野を察してか、女性店員は、街道の、おいしいお店を紹介していた。この近所に住んでいるらしい。

狩野は、つくりおきしてあったギョーザを焼きながら、おかしな約束をしたのではないかと思うようになった。ごはんがまだ炊けてはいない。みそ汁もつくろう。豆腐は今買って帰った。
現実に、狩野が現在使っているスペースは、12畳くらいのものである。１ＬＤＫで足りる。そう思っていたのだが、実際に部屋に入ってみると、全く異なる。その外側が、自分のスペースなのか、他人のスペースなのかで、全く異なる。
当面仕方がない。またしっかりしたポストを得て、収入を得て、大きなマンションにでも変わろうと思った。
それにしても、佐元のマンションはいくらするのだろう。かなりするだろう。古株だから給料も多いのだろうが、狩野が今日回った３件のアパートよりも、はるかに立派な部屋である。
狩野は、部屋を見回した。まず冷蔵庫がどこも入らない。冷蔵庫を持っていけない。友子と保と知美はどうしているのだろう。
狩野は、知美に電話してみた。
狩野は、冷蔵庫のサイズを聞いた。アパートサイズというものがあることがわかった。
「どこに住むことにしたのですか？」
知美が聞いた。
守谷だと言った。
「わたしたち今守谷に住んでるけど交替しますか？」
狩野は驚いてしまった。狩野は、友子と保と知美の住んでいるところを知ら

ないのだ。ずっとつくばだと思い込んでいた。だから、同じつくばに住みたくはなかった。
知美は、友子と保と相談すると言った。
狩野は、大事なことを聞くのを忘れた。家賃を聞かないといけない。
「５万５千円で駅から30分だけど」
おかしなことになってしまった。多分、今友子と保と知美が住んでいるアパートと、そう遠くないアパートに、今日行ったことになる。

〇中国プロジェクトを手伝えない
朝の７時に知美から電話があった。自宅とアパートを交替すると言う。
「お父さん20万しか渡さないけどやっていけるんだろうか」
知美は、保は働いているし、自分もアルバイトで収入が多いので、心配はないと言った。
狩野は、昨日の不動産屋にお礼を言って断った。もしかして、友子と保と知美も、世話になっているかもしれない。
この家の方が広いので、とりあえず、アパートからこっちの家へ荷物を持ち込むことになるだろう思った。
少しは進んだ。この進んだ方向は、動く歩道なのだろうか、よくわからない。

今日は、すべての代理店を本社に集めて部品交換作業を森知が説明しているはずである。代理店も初耳のところが多いだろう。多分、もうすぐ、一気に多くのクレームが噴き出して、タイヘンなことになる。まだこの段階で集まれるのだから、良いのかもしれない。
狩野が気をもんでも仕方がない。
冷蔵庫のような持ち出せないモノを探して回った。この家は広い。ここからアパートに持ち出してもどうにもならないことが多いだろう。狩野が困るのは、台所だろう。もう10年も自炊をしているし、けっこう楽しみにもなっている。鍋だってたくさんあるし、フライパンだってたくさんの種類がある。こんなに持っていけない。友子や知美はどうしたのだろう。すべて新しく

買ったのだろう。フライパンは１つしかなかったのだろう。
考えてみたら、狩野はわがままである。フライパンなど、みんな持っていっても狩野はわからなかった。多分、友子達は何も持ち出していない。
天気がよい。今日は研究所に出向いても、何もやることがない。名波も代理店への説明会に出席しているだろう。
そうこうしていると、お昼近くになった。真野から電話があった。
「やはり酒向専務は、狩野さんと一緒に中国に行くことに反対しました」
真野は、残念そうに狩野に言った。
真野は、まだよくわかっていないらしい。狩野も、難しい酒向の気持ちを察するような話を、真野にはしていない。
真野は、手掛かりがわからないと言った。中国に行くのはよいが、４社を訪問するのはよいが、具体的に、誰に連絡をとればよいのかわからないと言った。
考えてみれば、難しい話ではある。中国の４社とも、関エトレと現在の中国の会社の関係を承知している。それにもかかわらず、関エトレの真野が訪問することは、フツウの仕事だとは思わないだろう。ひょっとして、中国の会社が先にアメリカとフランスの会社に、直接手を出したことを知っているかもしれない。
考えてみれば、難しい話である。
やはり、狩野のような、事情通でなければ、この役は難しいかもしれないと思った。
真野は、狩野に何を言いたいのか、よくわからなくなっている。酒向に内緒にしてまで、狩野に一緒に中国に行って欲しいと頼むのか、ただ、酒向が反対したことを連絡しているのか。
狩野は、この先、この問題に、狩野が首を突っ込むことが難しくなったと思った。やはり、酒向と狩野の関係である。どういうわけだか、酒向は、狩野には頼りたくはないのだ。真野は、純粋である。関エトレのために、この窮地を脱するには、狩野のチカラが必要だと思っている。
「どうして狩野さんに手伝ってもらうのを反対するのか聞いたのですが、もうすぐ関エトレを退社する人だからということでした」
表向きの話としては、もっともなことである。もし適切な人材がいるのであ

れば、このような話にはならない。真野は、適切な人材ではないのだろう。やはり営業畑の人材なのだ。技術畑のことがわからなければ難しい。
そんなことはよくわかっているのだろうが、酒向は真野を指名している。確かに、新しく中国に、生産先を探しに行く人材など、少ないだろう。
「私が真野さんにやってあげられることは、少なくなったと思うんだけど」
真野は、どうしていいのかわからないと言ったまま、電話を切らざるを得なかった。真野が、酒向とケンカをしてまで、狩野を引っ張り出す考えのないことを、狩野は知っている。

これからこういう日が多くなるのだろうか。
今まで、一日のスケジュールが分刻みであった。いくつもの会議が毎日あった。頭をクリヤーにしておくことが、何よりも大切だった。
今日は、何もないに等しい。家に朝からいる。土曜日や日曜ではない。今日は月曜である。毎日がこうなるのかと思うと、信じられない。早く、次のことを考えなければならない。
ピザを焼こうと思った。
ピザ生地を４食分つくることにした。
すべて頭に入っている。ドライイーストをどう使うかもわかっている。片手間にできる。しかも、どう考えても、街のピザ屋さんの台より、自分の台の方がおいしいと思う。台に乗せる具も、魚介など、おいしくできる。チーズも使える。
生地をつくって発酵させていると、森知から電話があった。

## ○紛糾した代理店への説明会

「時間があったら来てくれませんか」
関エトレの八重洲の本社に来てくれと言う。
責任がはっきりしないのだということだった。代理店が交換作業をする費用は代理店が負担してくれと森知が説明したことに対して、やるけれども、しっくりこないと、代理店が言いはじめたらしい。
狩野は、どうしてこういうことをうまく処理できないのか、不思議だった。

狩野は、得意である。自分のやりたいことだけを指図しても、うまくまとまるものでもない。やはり、今回の責任は、明らかに関エトレにある。責任は認めても、一緒に事業を行っている仲間である。窮地を脱するには、お互いに協力しなければならない。確かに責任は、関エトレにあるのだが。
もう17時である。これから狩野が行くと18時30分になる。
「鮒野社長はどうしているのですか？」
中国に出張しているとのことだった。何をしに行ったのだろう。代理店にタイヘンなことをお願いしているのだから、社長があいさつをすべきだった。
着替えをしながら、狩野が行って何を期待するのか、森知に聞いてみた。
「まとめられるのは狩野さんしかいないと名波さんも言うので」
これは困ったことになった。
「説明会は終わったのですか？」
説明会そのものがはじまっていないのだという。もう６時間くらい経っている。６時間くらいもめているのだろうか。
「どうしても今日中に説明会をしなければならないので、お話をして、食事の用意をした方がいいと思いますけど」
狩野は、期待されていることはわかったけれども、どうすればよいのか、アイデアはなかった。代理店によっては、熊本から来ている。北海道もいる。宿泊先も用意しないといけないだろう。
森知と名波は、自分のことだけしか考えていなかったのだと思った。朝の飛行機で北海道を発って、夕方の飛行機で北海道へ帰ってもらうつもりだったのだろう。そういう時間設定である。説明時間だけしか用意されていない。
狩野は、ピザ生地を袋にして、冷蔵庫にしまった。
今日はピザを食べたかった。

狩野が八重洲の本社に着いたのは、18時30分だった。
「前研究所長の狩野さんに事情を説明していただきますので、よろしくお願いします」
森知のこういう態度がおかしい。関エトレとしては、代理店に対しても、申し訳ないことをしている。謝らなければならない。
「遠いところ出向いていただいてありがとうございます」

狩野は、ひょっとして説明したかもしれない、今回の原因を、ことばではあったが、こと細かに話した。ダメなことをダメではないと言ったところではじまらない。
「関エトレとしては、代理店の皆様にも、申し訳ないことしたと考えています」
真剣に聞いていただいているのがわかった。
「私どもとしましては、設置場所のお客さんにご迷惑がかかるのを、承知していますので、しかも、一刻も猶予ができないことを承知していますので、この事業の運命を共同している代理店の方々に、お願いするしか方法がありません」
狩野は、一刻も猶予ができないので、最短時間で部品の交換をしたいことを伝えた。
驚いたことに、代理店の一部から、一刻も猶予ができないことなど、はじめて聞いたとの意見が出た。
営業部長の雪乃下は、狩野に歩み寄って言った。
「一刻も猶予ができないとは言ってこなかった」
狩野は、体面を守ることを重視する。このままでは体面を守れないと、雪乃下に言った。緊急を要すると言わない限り、急きょ集まって説明会をする理由が説明できない。
雪乃下と名波と森知が、壇上に集まって話し合った。代理店は、時計を見ていた。
やはり、責任を曖昧にしておこうと鮒野が言ったそうである。社長が言ったのである。
そこで狩野を呼んだのは、どういう意味があったのだろう。これはこれで困ったことになった。
「どっちが本当のことなのかはっきりしてください」
代理店から声が上がった。
雪乃下も名波も森知も、狩野に道を開けた。
「今日は朝から、社内で少し行き違いがあって失礼しました。私の言っていることを信じていただきたい」
明日にも、高温になって噴き出してケガをされるお客さんがいるかもしれな

いことを危惧していることを伝えた。
「最初からそう言ってくれればよかったのに」
お弁当が運ばれてきて、夕食となった。豪華な弁当だった。
結局、代理店への説明会は、21時で終わった。
まだ最終便に間に合うからと帰る代理店もあった。緊急だとして、明日からの部品交換の手配をするように、それぞれ電話に忙しかった。
「お泊りになる方はお申し出ください」
雪乃下が大きな声を出していた。
いずれにしても、明日から部品交換ははじまることになった。

説明会が終わって、雪乃下と名波と森知は、会場に集まった。
「狩野さんが来なければお流れになったかもしれない」
森知が言った。
「結果オーライなんだけど、代理店が緊急だ危ないということを言いはじめたら収拾がつかなくなるかもしれない」
雪乃下が心配していることと、社長の鮒野が心配していることは同じなのだろう。
結局曖昧にして、説明会だけを流すことはできなかった。
「社長には誰が話しますか？」
森知が聞いた。
名波が話すことになった。
名波は、今日の生産数を電話で聞いた。まだ終わってはいないが、１３０の生産は確実であるらしい。昨日の生産１３０を加えて、２６０となった。昨日の１３０の生産分は、宅急便で配送した。明日朝10時には到着する。毎日、必要な数を連絡してもらって、毎日配送することにしたらしい。

狩野は、シャワーを浴びて、ビールを飲みながら、今日の結果はオーライなのだが、狩野と社長の鮒野とは、うまくいかなくなる新たな要因を抱えたと思った。
体面の保ち方が異なっている。スタイルが違う。鮒野のスタイルより、狩野のスタイルの方が、まともだと思っている。

もう狩野が何を言ってもはじまらない。
鮒野は怒るかもしれないと思った。
遅い時間のニューズを見ていた。
何かがおかしいと思っていた。
どうすればいいのだろう。

〇名波が社長に怒られて

狩野は、通常のように８時30分に研究所に着いた。
「おはよう」
いつものように、狩野は勝手にあいさつをして名波の所長室に向かった。
今日から代理店はタイヘンである。走り回っているだろう。設置場所との交渉で困ったり、特殊な条件であったりした場合は、森知に連絡がいって、関エトレの品質保証が応援をすることになっている。森知は、出払っているかもしれない。名波は、社長の鮒野に、説明に出向いているのかもしれない。
所長室に入ったが、誰もいなかった。後を追うように、陣持が入ってきた。
「名波さんは社長に説明に行きました」
やっぱりそうだと思った。鮒野に、ゴチャゴチャ言われるかもしれない。曖昧にしろと言ったのにと言われるのだろう。
「近所の名物のおかしですけど」
陣持は、ティッシュペーパーにおかしを３つ乗せていた。エクアドルのコーヒーを煎れはじめた。
狩野は、陣持が、あまり情報のないまま、事情を察することが、いつも不思議だと思っていた。それも、的確なのである。陣持独特のチカラなのだろう。国会議員の秘書も、こういうチカラを持つことになるのだろうと思った。
「お昼はここで食べられますか？」
狩野は少し考えて、お願いしますと言った。
多分、午前中は何もすることはないだろう。お昼から名波が帰ってきて、社長の鮒野の怒りを聞くことになるのだろうと思った。
森知から電話が入った。

設置場所の説得に手間取っていると言った。運転しているのを止めなければならない。今晩部品交換をしたいと説得しなければならない。また代理店への部品交換のお願いと同じことが起こる。一刻の猶予もないと言うのか、お願いですから今晩交換させてくれと言うのか。
緊急ではなかったら、ヒマな時にやってほしいのが、ユーザーのフツウの気持である。
「サーモを誰かに届けさせてくれませんか」
森知は、狩野に頼んだ。温度次第では後回しにすることも考えられる。
森知は、富士市にいた。
名波がいないのに、狩野が勝手に決められない。
「品質保証から人を出せませんか？」
仕方なく、森知は、車で向かわせるから準備をしておいてほしいと狩野に言った。
これでは遅々として進まないだろう。狩野が一時提案していた、設置場所の温度の検査をやっておけば、こういう事態は起こらなかった。悔やんでも仕方がない。

お昼になっても名波は帰ってこなかった。連絡もない。
「食事にしませんか？」
陣持が誘った。
べつに何もすることはないのだが、お昼になってしまった。
「人が少ないようだけど」
２つの大きなクレームを抱えて、研究所の所員も、外注先に応援に出ているらしい。研究所は、ガランとした雰囲気である。
サバの味噌煮である。賄いのおばさんの得意料理である。みそ汁も、おいしい。狩野は、みそ汁をおいしくつくれない。なぜだか、まだよくわかっていない。多分、塩の加減を低くしているからだろうと思う。健康には良いのだが、みそ汁などでは、おいしくない。食堂のおばさんのみそ汁はおいしい。ニンジンとじゃがいもと豆腐の煮込みもおいしい。こういう料理では、賄いのおばさんには敵わない。
「今晩よかったら帰りに食事でもどうですか？」

陣持が誘ったのははじめてである。時々、狩野は、陣持を誘ってごはんを食べた。何から何までやってもらっている。嫌な顔をせずに黙々とやってくれる。それは、名波に対してでも同じなのだろうが、狩野は助かった。
帰りに２人でタクシーで出ることにした。いつもは、陣持は自分の車に狩野を乗せる。そして、陣持は、運転手のように、お酒を飲まない。
今日は、自分もタクシーで帰ると言う。

14時になった。やっと名波が帰ってきた。
「おかえりなさい」
名波は、明らかになにかに怒っている。
「私のおかげで鮒野社長に怒られたのでないですか？」
名波の怒りの１つは、現場の状況を全く察せられない社長の鮒野への怒りであった。いかにも責任がないように話してみても、今にも、噴き出して大やけどをするかもしれないのが現状なのだ。つじつまを合わせることは難しい。つまり、社長の責任が逃れられれば、何でもいいのだ。そんなことは、狩野にだってよくわかっていた。しかし、それでは、昨日の事態を収拾できなかった。
名波のもう１つの怒りは、狩野に対するもののようであったが、はっきり言わない。
なぜ狩野を呼んだのかと言われたのではないだろうかと想像した。
「狩野さんが話したことは鮒野社長に話しました」
予想したとおりだった。
狩野を呼んだのは、雪乃下と名波と森知である。もうどうにもならなくなって、夕方になって狩野を呼んだ。そして、昨日はやっと収拾できた。しかし、狩野を呼んだことを話せば、鮒野は怒ることは確実である。
雪乃下も名波も森知も、社長の鮒野が狩野を嫌っていることをよく知らない。狩野でさえ、なぜ社長の鮒野が自分を嫌うのか、よくわかっていない。酒向も同じである。
名波の２つ目の怒りは、名波にも収められないだろうと思った。何を怒っているのか自分にもわからないだろう。これだったら、いっそのこと、自分が話したと言った方が良かったと思うだろう。狩野の名前を出した時点で、鮒

野の怒りは、別のチャネルになると思う。
なんであなたは、そこまで社長に嫌われているのだ。名波は、そういう目をしていた。
「森知さんも今日はタイヘンなことになっているけど」
名波は、状況はよく承知していた。
「ユーザーに対しても昨日の代理店と同じことが起こっているけど」
名波の頭は、混乱直前である。代理店に対して曖昧にしろと言われてできなかった。ユーザーに対してもできないかもしれないジレンマである。
社長の鮒野は、１つの噴き出し大やけどの事故が、今後頻繁に発生するとは思っていないことは確かである。狩野は、責任を明らかにして、至急部品交換をお願いすることがベターであると思った。そこで、社長の責任となったとしても。
狩野がこう思っているだろうことを察すると、余計に、鮒野の狩野に対する怒りが高まるのだろうと思った。狩野は社長の鮒野の体面ではなく、関エトレの体面を重んじる。
名波は、狩野と話をしずらくなったのか、外注先へ出かけた。今日も１３０できるのかが気になった。

## ○陣持の嘆き

陣持は、狩野がはじめて行く所へ案内した。
中華のお店であった。
「今日は私に任せてください」
そう言って、陣持は、フルコースの中華を頼んだ。
ビールと紹興酒である。
いままで、陣持は、自分であまりしゃべったことがない。いつも、狩野の話を聞いている。狩野の凛とした自信にあふれた態度が気に入っている。
「もうお別れなので、話しておかなければならないと思うことがありまして」
陣持は意外な話をはじめた。
３年前まで、現在は会長を辞しているが、理陣幸助という名物経営者がい

た。現在78歳である。関エトレがここまでになったのは、理陣のチカラが大きいと、社員の誰もが思っている。
３年前に、理陣が研究所を訪問した時、理陣への電話を取り次いだ。その時に会議室に電話を回すように頼まれた。たまたまだが、まだ陣持が会議室から出る前に、理陣が話をはじめた。
「次の社長は狩野君にしてください」
理陣は、陣持に聞こえていたなどと、気づかなかった。
現在の鮒野社長の次の社長という意味である。鮒野社長は、今年で13年も社長をやっている。
この出来事は３年前のことである。
「私は、いつかそうなると信じていました」
もちろん狩野は何も知らない。狩野に落ち度もない。何もなければ、狩野が社長になっていたのかもしれない。
「その後、理陣会長が退陣されたので、心配していました」
確かに、３年前くらいからおかしくなっている。
「鮒野社長が気がついて、狩野さんの道を閉ざしたと思います」
嘆かわしいという態度で、陣持は言った。
狩野にもよくわからないところがあった。なぜ鮒野社長は狩野が嫌いであるのか。酒向専務も狩野が嫌いである。もし、次の社長は狩野隆一という天の声を聞いていたならば、納得のいく話である。狩野には、納得はいく。
「はじめて聞きました」
驚いたように狩野が言った。
狩野は、ひょっとして、そいう事態になるかもしれないとは思ってはいた。次の社長は、自分がやるのが適当だと、今でも思っている。気になっているのは、友子と保と知美のことである。そして、内緒にしてある佐元のことである。佐元が自分を裏切っている可能性はある。それも気になる。
ただ、それも、もう決着がついたように感じる。狩野は、５月５日に関エトレを退社する。
考え事をしている狩野に、陣持は紹興酒を注いだ。
「理陣会長が元気だったらなんでもないことだったのに」
陣持は悔しそうに話した。

狩野は、不思議と悔しさはなかった。ただ、なぜこれほどまでに、鮒野や酒向が自分を外そうとするのか、やっと理解ができた。それはそれでスッキリしている。
「こういうことになるのだったらもっと早く話せばよかったと思います」
陣持は話した。
自分が話すことで、壊れてしまうのではないかという不安があったらしい。
よくある話である。うわさになった時点で、潰しにかかるケースもある。理解はできる。
狩野は、陣持を居酒屋に誘った。
食べる物が欲しいわけではなかった。飲み疲れたわけでもなかった。このまま陣持を帰してはいけない気がした。
なんでもない居酒屋である。さきほどの中華料理のお店からさして遠くない。この近所には、研究所の所員が来ることはない。
陣持は、肩の荷が降りたように、話しはじめた。ずっと観察していた。狩野を観察していた。いつか社長になる人をである。
「狩野さんはふさわしい人でした」
何度も陣持が言った。
12時に近くなって、陣持のまぶたが、時々閉じそうになって、狩野は、タクシーを頼んだ。狩野の家に先に着く。狩野は運転手さんにお金を預けて、送ってくれるように頼んだ。陣持は、よくわかっていないようであった。

狩野は、とにかくシャワーを浴びたかった。
もう０時30分である。
陣持の話で、狩野が、疑問に思っていたことのいくつかが解決した。このままでは、切れそうであった部分が見えてきた。明らかに、理陣会長の、次の社長は狩野君だという話を、鮒野社長と酒向専務は知っている。そうでなければ、これほどまでに、狩野を嫌うことはない。
考え事をしながら、シャワーを浴びた。
冷蔵庫から缶ビールを取り出した。
鮒野が狩野に譲るという選択をしなかったのはなぜだろうと考えてみた。
もう13年も社長をやっている。譲るという気などないのかもしれない。社長

在任期間の社内規定を何度も改訂して生き延びてきている。
これほどの執念を持たなければ権力は維持できないかもしれないと思った。
ただ、狩野には、権力を奪い取る考えなどなかった。権力への執着はなかった。ただ、会社の体面は保ちたかった。そのためには自分がふさわしい。工学博士でもある。学歴も体面を保つにふさわしい。
狩野は、やっと気がついたと思った。
これは、権力争いだったのだ。狩野は、権力を争った一方のボスだった。狩野には、権力争いの一方のボスなどという考えはさらさらなかった。しかし、鮒野や酒向にとっての狩野は、敵であった。権力を奪い取られるかもしれない敵であった。
この権力闘争の分け目は、役職定年の封書だった。
理陣が元気であったならば、狩野を役員にしたであろう。役職定年の封書など来ない。役職定年の封書を狩野に出せるかどうかが勝負だったのだろう。
人事部長もグルだったのだろう。
理陣の意向に反して、狩野を闇に葬ることができた。
それにしても、狩野自身が何も理解していなかったのは情けなかった。一戦も交えないで、沈没してしまう戦艦のような感じである。
もし戦いであったならば、戦いは終わっている。狩野は、逃げることになる。

〇本社に退職のあいさつに行く
狩野は、社長の鮒野との約束がとれないまま、本社へ退職のあいさつへ行くことにした。明日からゴールデンウイークである。みんな休みに入る。鮒野にはメールをしたが返事がない。秘書からも返事がない。
「おはようございます」
狩野は、本社でも、研究所と同じように、勝手にあいさつをして、どんどん用事のある部屋へ向かう。
「狩野所長すみません」
受付の女性が呼びとめた。
鮒野社長は外出しているので、後日時間をとりますという連絡であった。酒

向専務も一緒であるらしい。
昨日の陣持の話を聞いてみると、今日狩野が退職のあいさつに伺っても、鮒野社長に会ってもらえないこともうなずける。鮒野社長は、権力争いに勝利したのだ。この先、まだ10年くらいは社長でいられるかもしれない。
狩野は、とにかく、世話になった部長たちには、あいさつをして歩かなければならないと思った。
「おつかれさまでした」
みんな、こう言う。今、狩野と仲が良さそうにしていては、まずいことがわかっている。鮒野は徹底している。考えてみると、狩野は孤立させられたのだ。

狩野は、お昼前本社を出た。
すぐに森知から電話があった。
「部品交換が進まないが、いい考えはありませんか」
幸いなことに、まだ噴き出して大やけどという事態は、１件しか起きてはいない。
代理店には、緊急を要するという話をして、部品交換をスタートした。しかし、ユーザーには、曖昧にして説得をしている。10日後にヒマになるから来てくれという話になるらしい。
森知が、何を言いたいのかわかっている。狩野が、代理店へ話したような文書を書いてほしいのだ。それは、鮒野が了解するはずもない文書である。森知は、まだよくわかっていない。鮒野と狩野の関係である。
森知は、このまま時間が経過すれば、部品が壊れて噴き出す現場が多くなると思っている。これができるのは、狩野しかいないと思っている。
しかし、狩野は、今日退職のあいさつ回りをしているのだ。
「私は、今日退職のあいさつ回りをしているんです。ここで社長に内緒の文書を出せば、笑い者になります」
森知は、自分でそれをやる勇気はない。名波は、もう部品の生産現場に閉じこもっている。
「このままではタイヘンなことが起きます」
森知は悲痛な声を上げた。

狩野には、もう何もできないことがわかっていた。森知か名波か、どちらかが泥をかぶらないと打開できない。狩野には、もう何もできない。ましてや、鮒野社長には、何も期待はできない。

駅でパンを買い込んで研究所に向かった。狩野には、何もすることがない。しかし、どういうわけだか、足が研究所に向かう。
陣持が、狩野の持っていたパン屋の包装紙を見て、エクアドルのコーヒーを煎れに来た。名波はまだ現場だろうか。名波の所長室は、しばらく誰もいなかったかのように、人の気配がしない。
「昨日はどうもありがとうございました。タクシー代払っていただいて」
陣持は狩野にお礼を言った。
「おいしい中華をご馳走になりました」
陣持は、タクシー代のおつりだといって、お金を差し出した。
どうしていいかわからないが、受け取ることにした。
「名波さんはもうすぐ、とりあえず帰ってくるそうです」
陣持は、それだけ言って出て行った。
急いでパンを食べようと思った。狩野は、ここのパン屋のパンをおいしいと思っている。時々は、食堂の弁当ではなくて、駅でこのパンを買ってお昼にすることもある。狩野が自分でつくるパンもおいしい。ただ、これだけ多くの種類をつくることができない。菓子パンのようにはできない。
名波が帰ってくるかもしれない。急いでパンを食べてエクアドルのコーヒーを飲んだ。
名波が、慌てた雰囲気で帰ってきた。
どういうわけだか、不機嫌そうである。
八王子で異常に熱くなってきたので見てくれという連絡が森知からあったのだという。森知は、お客さんの説得にあたっている。
名波は、部下を出せないのだと言った。理由はわかっている。ユーザーに曖昧にしているからだ。うかつなことを話してもらっては困る。名波は困らないのだが、社長の鮒野と衝突する。
慌てて名波は八王子に向かった。
また誰もいなくなった所長室で、狩野は、考え込んでしまった。

何かがおかしい。
鮒野と狩野は、実は権力争いをしていた。通常、権力を持っているものが勝つに決まっている。権力を持たない者が勝つには、本能寺のようにするしかないのか。
ただ、狩野は、権力争いであることを、昨日まで知らなかった。これでは一方的にやられる。事実そうなってしまった。狩野は、闇に葬られた。
いろいろなことを思い返してみた。実は権力争いだったと思ってみれば、納得のいくことが多い。
「あなたを役員にしたくないからあなたを中国の会社に紹介した」そう言った佐元のことばにも納得がいく。なぜ狩野を役員にしたくないかなど、理由など考えてもムダである。これは権力争いだった。
「君は現代大学の教授になるそうじゃないか」
鮒野は、この話にホッとしたのだということがわかった。そして、現代大学の教授が流れたことで、終わったはずの権力争に火が戻ったのだ。

まだ４時だったが、狩野は研究所を出て佐元のマンションへ向かった。タケノコごはんというメールである。
「もし名波さんが帰ってきたらよろしく伝えてください」
陣持にそう伝えて狩野は研究所を後にした。

〇佐元の家で
佐元がこのようなメールをする時は、早めに会社を出る時である。フレックス勤務である。自由が効く。この時間にマンションを訪れても、佐元は必ずいる。
狩野は、チャイムを鳴らした。どういうわけだか、狩野は、この部屋のキーを持っていない。佐元も、狩野の家のキーを持っていない。
「早いじゃない」
もうエプロン姿になっている佐元が出てきた。
「シャワーしていいですか？」
狩野は、昨日から今日にかけて、疲れた。いろいろなことが理解できたが疲

れた。
佐元は、用意してあった下着と狩野の部屋着を持ってきた。
「どうもありがとう」
佐元は、急いでガスへ向かった。料理が気になっている。
４月の後半になるのに、すこし寒い。温かいシャワーを浴びていると眠くなる。どういうわけだか、ここのシャワーだとホッとする。
狩野の着る物は、すべて佐元が用意してくれている。帰りには、狩野は、自分の着てきた古い下着を持って帰る。部屋着は、佐元がまた洗ってくれている。
「どうぞ」
佐元は、ビールを注いでくれた。
「５分くらいかかる」
お願いしますとしかことばがない。
狩野は、ビールを飲みながら、佐元を見ている自分に気がついた。佐元をしっかり見たことはない。佐元は視線を感じたのか、振り返った。
「お腹すいたの？」
そうだと言った。
佐元は、タケノコごはんをフライパンから注いだ。フライパンでごはんを炊いたのだ。なぜだかわからない。理由があったのだろう。
さつま揚げを揚げていた。
「熱い方がおいしいから」
いかにもおいしそうだった。
「お味噌汁もおいしいと思うけど」
確かにおいしい。佐元の食事はいつもおいしい。いい奥さんになるのだろうが、なぜ結婚しないのだろう。結婚しなかったのだろう。そんな目で、狩野は佐元を見ていた。
「わたしもビール飲む」
佐元は、おいしそうにビールを飲んだ。
「おいしいでしょ？みんな」
自信ありげに佐元が言った。
「今日は鮒野社長はいなかったでしょ？」

いきなり、狩野が気になっていることを佐元が話はじめた。
狩野は、総務部には退社のあいさつには行かなかった。総務部に、仲の良い社員がいなかった。それもあるが、佐元と顔を合わせたくない。
「鮒野社長も酒向専務もあなたに会いたくなかったから」
佐元は、さも何でもわかっているかのように言った。多分、狩野よりも、狩野と鮒野のことを知っているだろうと思った。
「私と鮒野社長のことに詳しいようだけど」
狩野は、佐元が、次に何を言うか興味深かった。
「あなたは社長になるはずだった」
狩野は黙ってしまった。陣持のように佐元は知っていたのか。
佐元は、ワインを取りに行った。
「このワインさつま揚げに合うと思って」
佐元はどうなっているのだろう。今日のこの様子を見ていると、狩野は、佐元に愛されている。それは間違いない。しかし、佐元は、狩野のためには動いていないような気がする。
不思議な目をして狩野は佐元を見た。
「なんかあるの？」
狩野は首を振るだけだった。
「食べて食べて」
狩野は、また曖昧にしてしまうのだろうと思った。佐元を曖昧にしては良くない。狩野が動く歩道に乗っているのも、佐元のせいではないかとも思っている。
「明日お休みでしょ？」
佐元が何か考えていそうであるが、休みだと言った。佐元は、名波や森知が必死になっていることを知らないだろうと思った。
「部品交換に行かなくていいの？」
これだからわからなくなる。どうして佐元がこういうことを知っているのか、よくわからない。
「もう私が出ても時間がないから」
明日買い物に行きたいから一緒に行ってくれだった。狩野はよくわからない。佐元がわからない。信用できないわけではない。

「あれだけ見られるのを嫌がっていたのにどうしたのですか？」
佐元は、嫌がってたわけではないと言った。佐元には、聞かなくてはならないことがたくさんある。

佐元は、コーヒーを煎れて食事の片づけをはじめた。
「わたしシャワーしてくる」
佐元のシャワーはながいことが多い。一緒にシャワーをしていても、狩野はすぐに出てくる。
狩野は、コーヒーを注ぎに行った。その横に、意外なメモがあった。
先里と書いてあった。壊れるよろいと書いてあった。
狩野の頭が駆け巡った。ますます佐元がわからない。佐元に、このメモのことを聞くべきなのだろうか。

## 〇森知が正常ではなくなって

まだ朝の５時だった。
狩野は、佐元に挑まれた。佐元は明らかに変わった。恥じらいのようなものも少なくなった。それが嫌でもない。
「ずっとこうしててもキリがない」
佐元は起き上った。
「おいしいごはん食べたいな」
狩野は、多分、ウトウトしてしまう予感があった。
自分のケータイではないかと感じていた。なのにウトウトしていて気持ちが良かった。
佐元が起こした。
「もしもしお待たせしました」
森知からだった。すでに、水戸のお客さんのところへ出向いていると言った。部品交換が遅々として進まず焦っているようであった。
「噴き出してやけどになたのはまだ１件ですか？」
まだ１件だから危機感がないのだと森知は言った。もうすぐタイヘンなことになるのに。

こう何度も森知に危機を聞かされていると、カウントダウンがはじまっているかのように感じる。
森知は、ながながと話した。狩野は、森知がストレスになっていることに気がついた。誰かに話していないと、恐怖が襲うのだろう。困ったことになった。そうかといって、狩野には何もできない。今は、天に任せるしかなくなっている。
１つだけ実行できる手段がある。一刻も猶予ができないことを公表することだ。しかし、公表した時点で、社長の鮒野とは、話もできなくなる。狩野は、もう数日したら社員ではない。説得力もない。

「まだ早いんだけどおいしいごはんできたから」
佐元が起こしに来た。シャワーもして薄化粧もしていた。また布団にもぐりこもうとする。
「起きます起きます」
慌てて狩野はシャワーへ向かった。
まだ７時だった。
狩野は、マンションのシャワーが気に入っている。多分、他の部屋にも、シャワーを使っている音がウルサイだろう。ウルサクなくても、まだ７時だ。寝ているだろう。
「今晩もここだろうか」
佐元は、盛りつけをしていた。返事もしない。佐元が返事をしない時は、あたりまえでしょ？と言っている。
「お酢のサラダだけど」
満足そうに、ごはんとみそ汁をよそって座った。
確かにおいしい。ごはんがおいしい。佐元が、おいしいごはんが食べたいからと言って起きた理由がわかった。
「おいしいでしょ？」
自信ありげに佐元が聞いた。
またケータイが響いた。
「もしもし」
森知であった。

水戸のお客さんも、交換をしてもらえなくて困っていると言った。愚痴になっている。森知は、明らかにおかしい。
佐元は、黙々と食べている。森知は、同じことをさっきから何度も言っている。
「森知さんまた電話をしますから」
そう言って狩野は切った。
「苦しそうね」
佐元は、すべてを承知しているかのように言った。
酢のモノのサラダは絶好だった。おいしい。ホッとする。
「ごはんあるんだろうか」
佐元が喜んだ顔をした。こういう顔を見ていると、心のどこかで佐元を信じていない自分をダメ人間だと思ってしまう。

５月の連休がはじまっている。新宿のデパートも混雑している。佐元は初夏らしい服装をしていた。帽子も素敵だった。キレイに見える。若くも見える。これ以上若くすると、夫婦に見えなくなる。
なぜ急に佐元はこうなったのだろう。あれほど、自分と狩野の関係を知られたくなかったのに。隠れた関係を保ちたかっただろうに。どうしたというのだろうか。
佐元は、バッグの売場にも寄った。ブランド物ではなかったが、欲しそうなバッグをいろん角度から見ていた。
「どうぞ」
驚いたように、佐元は狩野を見た。
「ありがとう」
そう言って、佐元は店員に何かを頼んだ。バッグの中身を入れ替えたいのだ。
「待ってて」
２人でどこかへ行った。
こういう時の男は何もすることがない。視線にも困る。そもそもが男の売場ではない。
「こちらにお座りになってお待ちください」

狩野がジャマになる。お客さんが狩野の方には寄ってこれない。狩野は、少し奥まった椅子に座ってケータイを見ることにした。
森知から２度も電話があったらしい。
出る必要はないとは思ったが、他に何もすることがない。狩野は、階段口を探して、外へ出た。
「もしもし」
森知は、何度も電話したと言った。水戸のお客さんは、やっと、今晩部品交換することを了承してくれたらしい。朝から７時間も使って１件である。これから、水戸の２件目に行くという連絡であった。
困ったことになった。狩野は、もう退社のあいさつもすましている身なのだ。森知は、これからも、何度も連絡をしてくるだろう。狩野が電話に出ないことをなじることになるだろう。この状況の中で、女性と新宿のデパートで買い物を楽しんでいることなど、森知が知ったら、とんでもなく怒るだろうと思った。しかし、狩野には、もうこれを解決させることを期待されていないのだ。森知だけが、何かおかしい。
どう考えても、今日の森知は正常ではない。
狩野が、バッグ売場に帰ると、すでに佐元は、買ったばかりのバッグを持っていた。初夏らしい、さわやかなバッグだった。そういえば、今日の服装に唯一似合わなかったのは、バッグだった。
「どう？ピッタリでしょ？」
自信ありげに佐元は言った。いつもの、狩野にイエスを強要する話ぶりである。

佐元は、観覧車に乗りたかったのだ。電車でここまでは、遠いようで速い。
「デカイな〜近くで見ると」
佐元は、はじめてなのだろう。大きさに驚いていた。
「この遊園地晩ごはん食べられるかな〜」
パンフレットを探しはじめた。
「予約しておくから」
佐元は、観覧車に並んでおいてくれと言った。５月の連休の遊園地の観覧車である。30分で乗れればいいだろう。佐元は、ずっと電話をしている。予約

もいっぱいかもしれない。
まだ日が高い。ケータイが響いた。
「もしもし」
森知である。何度も電話したと言った。３度目だ。もうおかしい。
サーモが研究所にもう１台余ってないか調べてくれという電話であった。
「名波さんが研究所にいると思うので電話してください」
名波はケータイが繋がらないと言った。
「じゃ〜研究所に電話してください」
サーモが欲しいんだったら、研究所の誰でもよい。
「狩野さんは研究所にいるんでしょ？探して電話ください」
森知は、もうおかしい。それとも、狩野がおかしいのだろうか。狩野は、佐元と観覧車に乗ろうとしている。佐元は、晩ごはんの席の予約の電話をしている。
何かが、ものすごくおかしい。名波はどうしているのだろう。
仕方なく、狩野は、名波に電話をした。
「森知さんがサーモがもう１台ないか連絡をほしいそうです」
名波は、部品の外注先にいた。サーモを取りに来るように言ってくれとのことだった。研究所には６名も出勤しているらしい。
狩野は、佐元がまだ電話をしているのを確認して、森知に電話をした。
「狩野さん持ってきてくれませんか」
狩野は、もう言うしかないと思った。
「私は５月５日に退職する身ですから」
森知は、誰か一緒にいる社員に、研究所にサーモを取りに行くように言っていた。

２人が佐元のマンションに帰っていたのは、夜も遅くなってからだった。遊園地のレストランで、よく飲んだ。中華に紹興酒を飲んだ。
「もうわたし何もしたくない」
佐元は、どんどん脱いでいって、ハダカになってシャワーへ行った。狩野は、佐元の洋服を片づけながらケータイを見た。森知から３度も連絡があった。

今日は帰らなくてはならない。明日は、研究所は出勤日なので、退職のあいさつに行かないといけない。送別会はやってくれたのだが、個別のあいさつはしていない。
０時になったら帰ろうと思った。
「もしもし」
狩野は森知に電話した。
森知は、今晩も水戸の１件目のお客さんの部品交換をするという。２件目のお客さんには、10日後にしてくれと言われて、困っているという電話だった。
「狩野さんの責任でしょ？なにやってるんですか」
森知が言った言葉に、狩野は驚いてしまった。
森知は、ずっと、この責任は、狩野にあると思っていたのだ。それは、昨年、森知が、大きな問題になるから部品を検討しておいてくれと研究所に頼んだのに、研究所が動かなかったからだ。研究所長は狩野だった。
狩野は、大きいなため息をついた。
狩野は、０時になったら自宅へ帰ろうと思った。

〇最後の出勤日
「おはよう」
いつものように、狩野は、勝手にあいさつをして、名波の所長室に向かった。
所長室には、誰もいなかった。陣持が入ってきて、エクアドルのコーヒーを煎れはじめた。
「今日が最後ですか？」
５月５日が狩野の誕生日であるが、それまで連休である。研究所は今日が最後の出勤日となる。
「いろいろお世話になりました」
陣持が、朝一番にしてはふさわしくない言葉を使った。
「こちらこそ」
狩野は、ホントに世話になったと思っている。

陣持は寡黙である。コーヒーを煎れて、静かに出て行った。何も言わなくても、陣持の気持はよくわかっている。
個別にあいさつするのだから、自分の帰りがけだろうと思った。朝というわけにはいかない。時間がつぶせない。
名波から電話がきた。
「ちょっと相談があるのですが」
暗い声であった。直行で部品の生産会社にいるとのことだった。
「森知さんから30分おきくらいに電話があって、ケータイにつながらなかったら自宅に電話があって困っているのですが」
やっぱりそうだった。森知は、狩野だけではなくて、名波にも頻繁に電話をしている。不安だから話していたいのだ。多分、これはなんとか症候群と言うのだろうと思った。
狩野は、自分にも頻繁に電話がかかってきていることを告げた。
「どうしたらいいですか？」
狩野にも妙案があるわけではなかった。森知は、もうずっと、熟睡もしていないのだろう。
できるだけ電話で話をしようということになった。他に、うまい考えなど浮かばない。
すぐに森知から電話が入った。
宇都宮のお客さんのところにいて、温度が70度になっていて危ないらしい。しかし、部品交換を明後日の夜にしてくれと言われているそうで、どうしらよいのか、困っているとのことだった。
「狩野さんに責任があるから、宇都宮に電話をして説得してください」
どういう意味か、よくわかっている。
狩野だと、一刻も猶予がないことを話すだろうと思っている。そういう人である。だから狩野を引っ張り出そうとする。しかし、もう難しい。社長の鮒野は、それを許さない。もう退職が決まっている狩野が、個人的リスクを負ったとしても、会社のリスクには転嫁できない。それくらいのことはよくわかっている。
「私は、いまから研究所のみんなにお別れを言うところです」
森知は、何も言わなくなって、電話を切った。

狩野は、エクアドルのコーヒーを飲みながら、考え込んでしまった。
このまま放置すれば、森知はどうなるだろう。どうするだろう。森知の言うように、もうすぐ、８７０の部品の耐久が切れてしまう。使われた頻度も影響するのだろうが、次々に壊れていくだろう。
社長の鮒野は、甘く考えている。部品交換ができるまで、時間があると考えている。だから、会社として責任があることを公表したくない。それは、鮒野の責任を認めることになる。
森知は、もう明日にも、多くの部品が次々に壊れて、噴き出してやけどをすると思っている。しかし、鮒野には、従っている。
名波は、ひょっとすると、部品交換が間に合うかもしれない可能性に賭けているのではないかと思ってしまう。
狩野は、一刻も猶予がないことを公表して、一挙に部品交換をすべきだと考えている。しかし、狩野は、今日、最後の出勤日なのだ。
森知から電話があった。
「宇都宮に電話してくれたのですか？」
もうこれは完全におかしい。森知は、自分の思うように周りが動いてくれるのがあたりまえだと思っている。森知は、狩野の都合や想いなどを無視している。狩野は困った。

「よろしくお願いします」
狩野は、宇都宮のお客さんに電話をした。明後日の夜の部品交換を、今晩にしていただいた。研究所長からのお願いである。前研究所長だが。
狩野は、深くため息をついた。
「今晩の部品交換を了承していただきました」
狩野は、森知に伝えた。森知は、ありがとうも言わないで、すぐに、部下と部品交換の相談をはじめた。
何かがおかしい。いままでいくつの部品を交換できたのだろうか。気になったが、雪乃下に電話しても、何も解決しない気がした。

増渕が入ってきた。何も言わない。ケータイを見てくれと合図をした。
「今晩伺います」

増渕は、狩野の返事を待たずに出て行った。
どういうつもりだろう。意味がわからない。狩野は、森知だけではなくて、自分も混乱してきていると感じた。
増渕は、研究所の狩野の送別会の夜に、酔いつぶれた狩野のベッドの横で眠っていた。朝一緒にシャワーもした。狩野が増渕を抱いた記憶はない。
あれ以来、増渕は、何も連絡してこなかった。そして、今日である。

狩野は、お昼を用意しなかった。社員食堂も頼まなかった。やはり、夕方までいようと思った。狩野は名残惜しかった。あたりまえである。狩野が、凛としているとか、堂々としているとか言われるのは、そう育ててくれたのは、研究所である。研究所には感謝である。
陣持が入ってきた。中華の弁当を買いに行ったと言う。
「一緒に食べていいですか？」
狩野は、これからも、陣持のような人と一緒に仕事をすることはできないだろうと思った。狩野の気持ちを察している。
陣持は、これから狩野がどうするのか知りたいのだろうが、一度も聞かない。中華弁当を食べながら、プロ野球の話をした。陣持は、阪神ファンなのか巨人ファンなのかよくわからない。とにかく、巨人阪神戦に心が躍るらしい。寡黙な陣持が、巨人阪神戦の話を一気に話すのを、じっと聞いていた。
コーヒーとおかしを持ってきた。陣持は、甘党でもある。
名波は、今日も研究所には帰って来ないと言った。
「名波さんに、用事があったら電話をくださいと言ってください」
そう伝えてくれと言った。
「夕方までいらっしゃるでしょ？」
狩野は、うなずいた。
「もしよろしければ、みなさんにあいさつされる時に、つくばの名物ですけど、どうかと思いまして」
足元から、おかしの袋を出した。お別れのあいさつの時に渡せと言う。
「どうもありがとう」
もうこういう人とは、二度と一緒にはなれないと思った。

〇増渕

正式には研究所とお別れをしてきた。今後は、特別に研究所からお呼びがかからない限り、狩野が、研究所に出向くことはない。
狩野は、かぼちゃが食べたくなった。１人で暮らしていると、こういうところが便利である。自分の食べたいものが急に現れても、買い物に行ってつくればよい。つくればよいといっても、狩野のようにはできない人が多いのかもしれない。
いつものように、テレビを聞きながら、晩ごはんを食べる。もう10年も、こうしている。寂しくはない。寂しくはなかった。明日またタイヘンな日がくるからである。
森知は、今日も徹夜で部品交換だろうか。少し前の狩野の生活と似ている。
狩野は、明日はヒマである。予定がないのだ。明日の予定がない生活など、想像ができない。しかし、明日からやってくる。
思ったよりおいしい。かぼちゃはおいしい。

シャワーをして落ち着いた頃、玄関のチャイムが鳴った。多分増渕だと思った。ホントに８時だ。
「こんばんわ」
狩野は、どうしようと決めていたわけではない。
「いいですか？」
増渕は、自分の家のように、手慣れた入り方をした。
「どうぞ」と言った覚えもないのに、増渕は、上がってきた。そして、２人で朝ごはんを食べたテーブルに座った。
「晩ごはん食べたんですか？」
増渕はメロンを取り出して、ナイフを貸してくださいと言った。メロンなどまだ出回っていない。
狩野は、どういう会話をすべきかよくわかっていない。増渕がなぜ来たのかもわからない。
手慣れた手つきでメロンを切ってきた。慌てて狩野は皿を出した。
「おいしいと思うんだけど」

増渕は、先にメロンに手を出した。
「おいしいです」
メロンを食べながら、どうしたものか狩野は迷っていた。そもそもがおかしい。男１人の家に勝手に上がり込むことがおかしい。それよりも、いくら酔っているからといって、一緒に寝ることもおかしい。
「増渕さんはどうしたいのですか？」
思い切って聞いてみた。
「今日だけでいいから帰さないでください」
狩野は、黙り込んでしまった。
「ダメだと言ったらどうするんですか？」
明日も来ると言った。毎日来ると言った。
増渕との関係が、これからどうなるのか、予想もできなかった。ベッドの横に増渕がいたことが、もう決定的な流れになってしまった。ここで拒否しようが、応じようが、流れは変わらないかもしれないと思った。
増渕は、黙って動いた。シャワーに行ったのだと思った。頭が混乱している。

「わたしお寿司買ってきた」
シャワーから出てきた増渕は、紙袋から折を出した。ワインも買ってきていた。このワインはお寿司に合うのだと言った。
狩野はワイングラスを２つ出した。
狩野は、友子といい佐元といい、そして増渕もだが、よくわからない。どうしてこういう判断をするのかがわからない。よく考えて動いてはいないように思う。それでいて、道が決まったりする。
増渕も、何を考えているのだろう。年令だって親子ほども違う。
「明日の朝狩野さんのごはん食べさせてください」
増渕は、研究所の女性仲間と、九州へ旅行をするのだと言った。少しは安心した。増渕は、このままここに居つくことはないのだろう。
「狩野さんはずっと自分でごはんつくってるんですか？」
この前の狩野の朝ごはんがおいしかったらしい。それに、いかにも慣れていたらしい。

狩野は、何を話せばいいのかわからない。研究所に勤務している。狩野も研究所に勤務している。５月５日までは研究所員である。それまでは研究所長だった。上司と部下の関係である。狩野には考えられない関係である。

ワインのせいもあった。狩野は、増渕に誘われるまま、ベッドへ行った。
増渕は若かった。あたりまえである。
鼻にかかった甘い声は頭に残りそうである。

息苦しくなって目が覚めた。増渕に挑まれていた。
増渕の肩越しが明るくなっていた。５時か６時だろうか。
また鼻にかかった甘い声が続いた。

増渕は、そのまま疲れたようにベットに沈んだ。
狩野は、どうしたものか迷った。
ごはんを炊こうと思った。なぜだかわからない。狩野は、朝は、ずっとパンである。ごはんを炊いたことがない。
炊飯器のスイッチを入れて狩野はシャワーへ向かった。まだ６時半であった。狩野は、意味もなく、チカラが抜けている自分に気がついていた。
朝ごはんに何をつくるかを考えていた。さんまの開きが２枚あった。新ジャガとさつま揚げ風にしてみようと思った。朝ごはんである。かき揚げのようにボリュームは欲しくはない。
早速、さんまの開きを取り出して、包丁で叩いて細かくした。新ジャガは、刻んで、さんまとまぶして揚げた。
我ながら素晴らしいと思った。自分で食事をつくっていると、こういうことがおもしろいし楽しい。うまくいくとうれしい。多分、増渕もおいしいと言うだろうと思った。みそ汁をつくりはじめた。
シャワーの音がしている。増渕が起きてきた。
この満足した時間をどう説明すればよいのだろう。

〇筑波山

増渕を駅近くの通りで降ろして、コーヒーショップへ寄った。暖かいし天気も良い。外のテーブルで、のんびりしていた。コーヒーのお替わりもした。
狩野は、これからの自分の生活がどうなるのか、はっきりしていないと思っていた。動く歩道に乗っていて、どこかに向かっていることは確かであるが、向かっている先がわからないし、生活もはっきりしない。
今も、なんとはなしに、のんびりしている。焦らないといけないのではないかと思う。
少し気になることがある。森知から電話がなくなった。30分おきに電話があったのに、ここのところ、何も連絡がない。名波に電話をしてみた。
名波は、やはり研究所に出勤していた。
「森知さんから連絡がなくなりました」
狩野も名波も、森知から連絡がないと、それはそれで心配になってしまう。何か用事があったらヒマだからと名波に伝えておいた。
駐車場へ行く途中に筑波山行きのバスの長い行列が目に止まった。
狩野は、車を筑波山に向けて走らせていた。特別考えがあったわけではない。季節もいい。５月の連休である。多分、この時間には、筑波山の駐車場には入れないと思った。下から、延々と車の列になる。
それでもその長い車の列に向かっている。
山はこの季節はキレイである。狩野は、山育ちである。十和田湖で育った。今の時期の十和田湖は、人で溢れかえっている。やっと暖かくなって、十和田湖の匂いを求めて人が大勢やってくる。
狩野は、山が好きだ。つくばに住んでいると、急に恋しくなっても、登ることができるのが筑波山である。登山電車もあって、時には、革靴で登山電車で頂上に行くことすらある。
やはり、相当な混雑である。筑波山の駐車場に入るには、早朝に限る。10時過ぎのこの時間では、どうにもならない。
狩野は、何も予定がないのだ。とにかく、頂上まで登ってみようと思った。シューズは、幸いなことにスニーカーだった。ペットボトルのお茶を買えば、それで登れる。
11時30分にやっと駐車場に入れた。まだいい方である。後は、どのくらい並んでいるのか見当もつかない。スニーカーにジーンズである。いつも帰り

に温泉に入る宿の前を通って、登山電車とは離れた路を登ることにした。この路は人が少ない。お茶１本が入っている買い物バックを下げて、登りはじめた。
この筑波山にも、友子と保と知美の４人で登ったことがある。まだ知美が４才の頃だった。友子は登山電車で行くと言うのを、説得して、この路を歩いた。友子は知美にさえ置いて行かれた。
なつかしい路である。
この10年、狩野は、１人で山に出かけることが多かった。
忙しい合間に山に行く。八ヶ岳が絶好である。金曜の夜に車を走らせて、小渕沢に車を置いて、茅野から一番のバスで美濃戸口に入って、赤岳直下の行者小屋を経由して、赤岳に登って、そのまま県境尾根を下る。そして、観光客で混雑している清里に降りる。小渕沢でおそばを食べて、暗くなりかけた中央高速をつくばまで帰る。
赤岳は、オーバーだが、自分の庭のように詳しい。
もう12時を過ぎている。ペコペコである。上に行けば、なんでも食べられることを知っている。昔、友子のつくったおにぎりを頂上で広げた。なつかしい。
狩野のスタイルは、登山電車に乗るスタイルである。登山道を歩くスタイルではない。それでもヒマである。ゆっくり登った。いままで、八ヶ岳で、追われるように赤岳に向かったのは何だったのだろう。山に向かってさえも、時間に追われていた。ひょっとすると、時間と戦って生きてきたようなものかもしれない。何かがおかしい。
明日から何もすることがなくなって、急に時間がなくなったような気がする。こんなにゆっくり山に登ったことはない。
頂上の人の声が聞こえてきた。
この路は、いきなり頂上に着いてしまう。
今日は、富士山もまだ見えている。暖かいのに、空気は冷たいのだろうか。
狩野は、登山電車の駅に向かった。食べ物屋さんが何軒もある。
汗もない。登山をしたという感覚はない。散歩をした感じである。景色もいい。
おでんにおそばを食べることにした。

さわやかだった。
これから何もすることがなかったら、筑波山にやってこようと思った。
頂上の食堂は、子どもたちの声で溢れていた。
帰りは、登山電車沿いの急な下りを降りた。一気に降りてしまう。
早く、温泉に浸かりたいと思った。
こんなに近いところにあるのに、最近は、筑波山に来ていない。
「こんにちわ」
狩野の声には、元気が戻っていた。
立ち寄り湯である。この宿に泊まったことはない。筑波山に来た時は、必ずここに寄る。露天風呂はないが、景色が素晴らしい。筑波山の青々した山が見える。この景色を見ているだけでもこころが生き返る。
いつもは、慌てて温泉を出るのだが、慌てる先の時間に何もない。ゆっくりしようにも、時間を余す。おかしなものだ。温泉にゆっくり浸かっていられない。
ここでごはんでも食べてビールでも飲んでと思うのだが、帰りにスーパーに寄って晩ごはんの支度をしようと考えてしまう。明日忙しかったのだ。こんなところでのんびりしてはいられない。
狩野は、自分でも笑ってしまう。明日何もすることがないのだ。

## ○２人目の大やけどが新聞で報じられて

５月の連休である。８時になって、仕方なく起き出した。佐元も連絡がなく、何もすることがない。
コーヒーとパンである。パンに納豆を乗せて焼いた。おいしい。
名波から電話が入った。
「新聞を読まれたと思うのですが」
狩野は、そばの新聞を広げた。３面だろう。下に、すぐわかる記事があった。大やけどである。昨日の22時30分だと書いてある。
「今見ています」
森知は連絡がとれなくなっているとのことだった。本社に９時に集まることになっているのだが、狩野は呼ばれたかどうか聞かれた。

「何も聞いていません」
本社には、電話が鳴り響いているとのことだった。もう名波は本社着いているのだろう。
「誰が本社に集めたのですか？」
広報だと言った。広報は、事情がよくわからない。名波か森知がいなければどうにもならない。こういう時は、狩野が頼りになる。みんな知っているし、狩野自身も、自分が頼りになると思っている。しかし、どうにもならない。
「鮒野社長は来ているのですか？」
まだ姿を見ていないと言う。
狩野は悔やんだ。狩野が提案した、８７０の設置場所の温度を、すべて測って、部品交換の優先順位をつけようと提案した。結局、手当たり次第に部品交換をする方が好ましいという考えになって、狩野も、優先順位の考えを撤回した。
多分、今後１カ月であっても、何も変化しない部品もあるのだろうと思った。危険な部品は、調べればわかるのだ。
後悔してもはじまらない。
もうはじまったのだ。部品の耐久時間がきてしまった。
「いくつくらい交換したのですか？」
８７０のうち１８０が交換できているらしい。少ない。これではタイヘンなことになると思った。
鮒野と森知が現れたらしく、名波は電話を切った。

お昼前になって、関エトレのＨＰを見て、狩野は驚いた。
すでに、耐久性のある部品が８４０生産を終わっている。このまま順調に部品交換を終える予定であると書かれてあった。確かに部品の生産は８４０終わっているのだろう。しかし、部品交換は１８０しか終わっていない。しかも、部品交換の日時で交渉が続いているのだ。
順調に部品交換が行われるとは、どういうことだろうか。
狩野には、何も連絡がない。森知は何をしているのだろうか。

15時30分になった。狩野は落ち着かなかった。予感がした。
名波から電話だった。
「15時に３件目の噴出とやけどの事故がありました」
予感はあたった。
新聞記者からは、すべての設置場所に連絡しなかったのはどういうわけか、聞かれていると言う。
「どうしてですか？」
狩野は、新聞記者と同じことを聞きたい。
朝、鮒野と森知が現れた時には、コメントと対応が決まっていたのだそうで、名波にもわからないということだった。
「お客さんすべてに連絡することはできたわけでしょ？注意してくれるように」
名波は、何も答えなかった。
８７０の設置場所は、すべて掴んでいる。雪乃下がすべてを把握している。代理店も理解している。すべてのお客さんに連絡しようと思ったらできたはずである。
「今はどうしているのですか？」
雪乃下が、すべてのお客さんに注意を呼びかけているそうである。代理店も、注意を呼びかけている。
狩野は、一刻も猶予できないことを公表しなければタイヘンなことになると感じた。注意ではなく、部品交換なのだ。
後手後手に回っている。
「設置場所によってはサーモを持っている所も多いから、測って50度以上あったら連絡をくださいと連絡した方がいいです」
狩野は、こう言いかけて止めた。名波ですら、意見を聞かれていないようであった。意見を言えないだろう。
何がどうなったのか、よくわからない。
森知から電話が入った。
「鮒野社長からですが、明日８時30分に社長室に来てくださいとのことです」
狩野は、森知に、何かを言おうとしたのだが、あまりにも事務的な電話に、

話す意欲を失ってしまった。
「わかりました」とだけ言った。
狩野は、明日の８時30分を予想しなければならない。鮒野が、狩野を頼りにして８時30分に社長室に呼んだのではないことは、はっきりしている。
何かがある。狩野にとって、良くないことだ。
名波に電話をして聞いた。
「わたしも呼ばれています」
名波は言った。
「だれかが責任をとれということじゃないですか？」
狩野か名波か森知の誰かが責任をとらなければ、鮒野に問題が及ぶことになる。記者会見という事態も考えられる。誰が対応するのか。
狩野は、困ったことになったと思った。狩野は５月５日が退職日なのだ。もし狩野が責任をとるとすると、どういうことが考えられるのだろう。わざわざ、顔も見たくない狩野を呼んでいるのである。鮒野が何を言い出すのか、察しはつく。
どうすればよいのだろう。

狩野は、ずっと考え込んでいた。
その後、名波から連絡はない。事故が続いて起こっていないようである。
考えても、よい案は浮かばない。
狩野は、カレーライスをつくっていた。べつに考えてやっているわけではないが、もう身体が習慣のようになっている。晩ごはんをつくらないといけない。苦痛でもない。息抜きでもある。

〇だれが責任をとるのか

８時30分に狩野は関エトレの八重洲の本社に入った。５月の連休中である。社員は誰もいない。忙しく走り回っているのは、冷却部品のクレームで走り回っている社員だけである。
狩野は、鮒野の社長室に向かった。電話が鳴り響いていた。
「おはようございます」

鮒野と森知は、すでにソファーに座っていた。名波の顔は見えない。
「今日記者発表をしなければならない」
鮒野は話しはじめた。
「そもそもは君に責任があることだから、君が対応するように」
狩野は、驚いてしまった。狩野は、もう数日で退社する身である。今後の対応など話せない。
「私に責任をとれということですか？」
鮒野は、昨年森知が研究所に検討を依頼したのに何も手をつけなかったからこうなったと言った。森知が狩野に責任があると言っているのと同じである。
「そもそもこの装置は私が中国の時に売り出されたものです」
狩野は、責任が自分にあるとは思ってはいないことを話した。
「鮒野社長に責任をとらせるつもりですか？」
森知が口をはさんだ。
狩野は、社長なるものは、こういう時に責任をとるためにいるようなものだと思っている。当然、責任は鮒野社長にあるでいいのではないかと思った。社長を辞任するかどうかは、社長の責任のとり方の問題だと思った。
案に、社長だから当然であるというようなことを、狩野は言った。
「お前のおかげで辞任しなければならなくなるかもしれない」
鋭い目をして、鮒野は狩野に言った。
「狩野さんがワルイのに」
森知が最近連絡してこなくなった理由が、やっとわかった。森知には、もう結果が見えている。誰が責任をとるかの問題なのだ。鮒野社長が責任をとらないのは、よくわかっている。森知は、自分に矢が来ないように、先手を打ったのだ。
名波が入ってきた。
名波は、鮒野に意見を聞かれた。
「狩野さんに片づけてもらうのが１番いいような気がします」
名波は、まとめきれるのは狩野しかいないと言っている。それは理解できるのだが、責任をかぶるのも狩野になってしまうような気がした。
本来なら、品質保証の問題である。いくら危ないから代替え部品を検討して

くれと言っておいたとしても、代替え部品を調達して交換するのが品質保証の仕事である。しかし、森知は、うまく立ち回った。

11時に会議室で説明をすることになっていた。説明役が狩野になってしまった。
集まった記者は数人だった。記者からの電話はガンガンにあるのだが、こうして集まって話を聞くとなると、あまり集まらない。まだ、２件の事故だからかもしれない。
鮒野社長は、業界の集まりがあるとかで出かけてしまった。森知も一緒だと言った。酒向は、最初から、この件には顔も見せない。
狩野は、ホワイトボードに図を描いて、顛末を説明した。わかりやすかったと思った。原因もはっきりしていることを、理解してもらった。
「部品交換はどのくらい進んでいるのですか？」
当然のことのように、質問される。
狩野は、雪乃下の顔を見た。雪乃下が資料を持ってきた。
３８０となっていた。おかしいではないか。１８０ではないのか。この場で問い詰められない。狩野は、３８０と説明した。
「８７０のうち３８０ですか？」
ガンバって早く部品交換をしてくれと質問とも激励ともとれることも言われた。
その場は、３８０終わっていて、このまま部品交換が進んで、これ以上の事故は起こらないかもしれないという、楽観的雰囲気が支配した。
記者のみなさんは忙しい。12時前には、配られた食事券を持って、それぞれ食事に出かけた。
狩野は、名波と雪乃下に聞いた。
「１８０ではないのですか？どうして３８０になっていたのですか？」
もし、発表することになったら、３８０を発表するという指示だったと言う。鮒野社長である。
「３８０という数字は何ですか？」
スタンバイしている数字だと言う。数日中には部品交換が終了することが予定されている数字である。

「こんなことまでするのですか」
狩野は、驚いてしまった。

狩野は、近所のスーパーで皿うどんを買った。たまたま目に止まった。皿うどんは時々つくる。昔から、皿うどんは好きだった。簡単につくれる。
狩野は、今日のところは、なんとかしのげたという感じがしていた。責任がどこにあるのかなど、聞かれもしなかった。記者のみなさんは、会社が、実態をキチンと把握しているかどうかに興味がある。そして、対処をしているかどうかである。
狩野は、こういうことは得意である。そして、鮒野や森知が気にしていた、責任の問題が表面に出なかった。
記者から見れば、これは会社に責任がある。そこで、狩野か鮒野か森知かなど、どうでもよいことである。
少々の安堵があった。狩野は、狩野の体面は守れたと思った。狩野が説明役を押しつけられた時には、どうなるかと思ったのだが。
この問題は、今日のところは、しのげたという感じなのだろう。そう考えても、先に厳しい結果が待っている。多分、もっと多くの噴き出し事故が起こってしまう。時間の問題なのだ。
最近、狩野の周辺には、こういう問題が多い。先に明るさの見えない出来事である。
冷却部品問題といい、中国の生産会社問題もである。個人的には、佐元も増渕もわけがわからない。美薗の会社もまだ連絡もない。現代大学は糸が切れたのだろう。招いていて失礼ではないかと思う。鮒野と酒向との争いのようなことも、決着がついていない。
何も片づいていない。先が見えない。
とりあえず。今日はしのげただけだ。

○真野から連絡
いよいよ明日が退職の日である。やはり早くに目が覚めてしまう。近所を歩いてみる。おかしなものだ。こういう目線で近所を歩いたことがない。スー

パーマーケットに急ぐか、コンビニまで急ぐか、のんびり歩いたことがない。
真野から電話が入った。
「お話を聞いてほしいのですが、この前のすし屋に13時にお伺いしてもいいですか？」
中国から帰ってきたのだという。
狩野はヒマである。
４月26日に、真野は、狩野と一緒に中国に行きたいと酒向に言って、拒否されたと伝えてきた。多分、一人で中国へ行ったのだろう。
話を聞いてほしいという意味は、どういうことだろう。
会えばわかるか。
帰って朝ごはんをつくらないといけない。つくるといっても簡単だが。これから、毎朝こうなるのだろうか。これはまずい。まだ55歳である。次の狩野の道を決めないといけない。

13時ピッタリに真野はやってきた。
適当にいくつかのすしを頼んで、真野は資料を引っ張り出した。
４つの会社のパンフレットである。
最初に行ったのは香港に隣接した地域の会社だった。
「すべて断られた理由はなんですか？」
細かい説明をさえぎって、狩野は聞いた。
技術的に、関エトレから得るものがなくなったからだと思うと言った。ここが、狩野が中国に駐在した頃と異なるところである。もう、どこの中国の会社も、自分で技術開発ができる。自分で販売先を探して歩けるようになっている。関エトレと狩野がやった中国の会社の関係では、中国の会社の自由度がなくなってしまうのだ。
「ただの生産委託ではダメなんですか？」
酒向が、いまのところ承知しないそうである。関エトレのノウハウも使われるからだろう。
「十字幸助さんはどうしているのですか？」
狩野の後に、中国の会社に役員で入っている関エトレの社員がどうなってい

るか聞いてみた。
まだそのままだという。30％の資本が入っているのもそのままである。ただ、十字幸助は、見動きがとれないでいるらしい。想像はできる。
狩野は、おすしを食べながら、真野の顔を見てしまった。
最近は、こういう人が多い。自分の困っていることを聞いてほしい。おかしな話しなのだ。狩野は、真野の話を聞かなければならない理由はない。ただ狩野がヒマなだけである。
「狩野さんだったらどうなさいますか？」
この話は難しい話である。
もう関エトレの技術に、魅力がないと言われていることになる。技術の総元締めだった狩野に、あんたは魅力がつくれなかったと言っているようなものである。
狩野にとっては、けっこう辛い話しではある。こういう状況になっていることを、狩野も知らなかった。狩野が考えている以上に、中国の技術進歩のスピードが速いのだ。
「商品企画力がなければこれからの中国とはやっていけないかもしれないですね」
真野の聞きたい答えではないかもしれないとは思いながら、感じたことを、狩野は話した。
「技術的には日本も中国も変わらなくなったことですか？」
コストだけが大きく異なる。圧倒的に中国でつくった方が安いのだ。
販売力と商品企画力がなければ、中国の技術メーカーは、頼りにはしないということだろう。
「私への指示はそういうことではなくて」
真野は、ことばがなくなってきている。酒向に指示されたことは、現実的に、実現できなくなっている。それは、中国の技術進歩によるものと、関エトレの停滞を意味する。酒向の指示は、昔の日本と中国の関係を前提としている。
「酒向さんには話したのですか？」
中国から帰ったばかりだという。連休明けに酒向に話すが、成果がなくて困っているのだ。確かに、真野には成果がない。狩野から引き継げというの

が、真野に課せられたミッションだった。
狩野は、真野の話しを聞いていて、今の自分にも難しいかもしれないと思った。大きな販売力もなければ、商品企画力もない。中国の会社を曳くような魅力を持っていないと思った。
時代が変わってしまった。
狩野が中国に最初に出かけた時は、中国の会社が惹かれていたのは、日本の開発技術や生産技術だった。それが、アッという間に過ぎ去ってしまっている。
「このままでは、酒向さんに報告ができない」
真野は、苦痛な顔をした。
真野は、狩野を頼るしかないのだろう。しかし、狩野は、次第に、遠くなっていく自分を感じていた。多分、日本と中国のエレクトロニクスの関係では、もっとチカラを発揮できるだろうと思う。状況がリアルになれば、チカラが出せる。狩野がそう思えば思うほど、現実は遠のく。鮒野や酒向は、ゼッタイに狩野に出番を与えない。出番を与えて、狩野の社長の芽を拓かせてはまずい。
狩野は、どうすればいいかわからない。
「真野さんの助けにはなれないかもしれない」
真野は、更に困った顔をした。
明らかに時代が変わってしまった。
真野は、酒向から、中国プロジェクトについて、狩野から引き継ぐように言われている。しかし、実態は、引き継ぐようなことではなくて、新しい局面に入っている。中国の会社が必要としているのは、新しい商品企画であり、新しい販売先である。新しい技術は自前で開発できる。
「酒向さんに理解していただかないと困るんじゃないですか？」
真野は、難しいと思っていた。鮒野社長や酒向専務は、依然として、狩野が駐在した中国の時代の中国の会社をイメージしている。考えが変わるとも思えないと思った。
真野は、深いため息をついた。これでは、すしだっておいしくなくなる。
結局、真野にとっては、連休の１日、狩野と会っても、得るところが何もなかった。連休明けての酒向への報告で、叱責を覚悟しなければならない。

ひょっとすると、誰かと交替を言い渡されるかもしれない。
狩野は狩野で、ヒマだからいいようなものの、かえって重いものを抱えたと感じた。

# 退職の日２０１０・０５０５

〇役職定年で退職の日

今日は、狩野の55歳の誕生日である。役職定年の日で退職日でもある。５月の連休で子どもの日だ。
明日会社に行かないということが、どれほどのものなのか、やっとわかってきた。会社に行って忙しくしていると、自分の誕生日に、何も連絡がなくても、さびしくもない。
しかし、今年は違う。
散歩に行こうとしていると、佐元から電話がきた。
「今晩サーモンやるから」
短い電話である。
佐元は、狩野が何もすることがないことをよくわかっている。ただ連絡するだけで足りる。短い会話で足りる。
狩野は、近所をほとんど知らない。住んでいる人もあまり知らない。もう10年も、この家で１人で暮らしているのだが、近所の人と接触することがなかったのだ。回覧板を届けてくれる隣の家の奥さんくらいのものである。散歩に出ても、挨拶されて、曖昧に頭を下げたりする。ぎこちない。
今日も同じである。
最近、スニーカーを履くことが多い。スニーカーなど履いたことがなかった。
美薗から10日14時に新宿で会いたいとの電話があった。用事は何も言わなかった。海外へ出かけたはずである。仕事にはなったのだろうか。これからの狩野の仕事で、最も可能性が高いのは、美薗との仕事である。狩野の電解膜の特許を使ってくれる。関エトレで築いたものではないが、狩野の得意とする分野である。何よりも、世界にキレイな水を提供しようとすることは、狩野の望んでいることでもある。

朝の散歩も30分くらいかかる。少し遠くに出てみるからである。近所なのに

歩いたことがない。不思議である。狩野は、自宅と研究所を往復していただけである。
卵を切らしていた。狩野は、ピザ用につくっていた生地に、ハムを入れて、パンとして焼いた。ピザ用生地は、冷蔵庫でもあまりながくは生きられない。弱ってきておいしくなくなる。メンドーなので、ついつい多めにつくってしまう。
コーヒーとこのパンだけでよい。レタスに、ラッキョウのつゆをまぶしてサラダにする。それだけで何もいらない。
やはり、パンはできたてがおいしい。メンドーなので、６枚切りを買ってくる。毎朝焼けばいいのだが、焼く時間が少しかかってしまう。おいしいのに、手間を惜しんでしまう。
我ながらおいしくできたパンを食べながら、笑ってしまう自分がおかしい。それどころではないのに。

ここのところ数年、５月５日は、佐元のマンションで過している。狩野から行くと言うことはない。常に佐元から電話がある。
サーモンの料理だと言った。大きなサーモンを焼いていた。
「ワインおいしいから」
佐元は、もう飲みながら料理をしている。
狩野も料理は得意である。何か手伝いたいのだが、何をしていいのかわからない。結局、座って佐元を見ていることになる。テレビは、勝手に何かをやっている。声は小さく、何をやっているのかよくわからない。
「先にごはんにするでしょ？」
狩野は、お願いしますとだけ言う。
狩野と佐元の会話は短い。短い会話で足りると言えばそれまでだが、狩野には、本当は、佐元が何を考えているのかよくわからない。
「あなたが社長になるはずだった」
冷静に客観的にこう言う佐元がわからない。
「酒向さんはあなたを社長にしたくないから中国の会社に紹介した」
佐元は、なぜこういうことをさらっと言えるのだろう。
佐元の本音を聞きたくもない気持もある。曖昧のまま、ここまできている。

いつかとんでもないことになるのではないかと、嫌な予感もしないわけでもない。
佐元は、片づけをはじめた。いつも、料理が終わりに近づくと洗い物をする。
「大きいお皿お願いします」
ここでやっと狩野のやることができる。
「あなたずっとわたしを見てるだけなの？」
テレビを見るよりおもしろいと思っている。独特の手際がおもしろい。多分、料理には自信があるだろう。
大きなサーモンである。
「サラダそっちの棚にあるからお願い」
狩野は、サラダと小皿を棚から出してきた。
「パンは焼いてるからちょっと待って」
佐元がパンを焼いているのを見て、狩野もパンを焼こうと思った。見ていると、あまりメンドーなことではない。
「座ってください」
佐元は、ワインを注いだ。
「おめでとう」
55歳の誕生日をおめでとうと言っているのか、退職がおめでとうなのか、よくわからない。
「ありがとう、いただきます」
こんなに大きなサーモンを食べられるのだろうかと思った。大皿いっぱいになる。
インタネットで取り寄せたサーモンであるらしい。佐元は、このサーモンが、どこで獲れて、どう運ばれてを、楽しそうに話している。
「次の仕事は決まったの？」
いきなり佐元が聞いてきた。いままでサーモンの話をしていた。
「あなたのことだから、立派な仕事を探してるんだろうね」
狩野が、どう答えていいかわからない聞き方をする。立派なとは何だろう。
「わたしは、お掃除のおじさんでもいいけど」
狩野は、驚いてしまった。佐元が狩野に惚れたのは、狩野の凛とした姿勢で

あり、安定感であり、信頼感であった。それはよくわかっている。だから狩野が社長をやるとうまくいくと、佐元も思ったに違いない。そういう狩野に、佐元は惚れたのだ。
それが、どうしてお掃除のおじさんなのだろう。狩野は返事に困って、佐元をじっと見てしまった。
佐元は、狩野を見ずに、サーモンにナイフを走らせていた。
「おいしい」

〇佐元が買ったおかしな車
いつものように、ワインを２本か３本空けて、そのままベッドだった。明け方、いつものように佐元に挑まれた。最近の佐元は、狩野を支配している。狩野も佐元に任せている時間が多くなった。
「上手になってるでしょ？」
佐元のことばとも思えないようなことを口にするようになった。

「わたし車買ったから今日は運転を教えてほしいんだけど」
シャワーを浴びながら。佐元はさらっと言った。
佐元と車で出かける時は、いつも狩野が運転していた。佐元が運転免許を持っているのかなど、聞いたことがない。
「用事があるの？」
佐元は、小娘のように唇を尖らせて聞いた。
どうしてこういう仕草ができるようになったのだろう。狩野は、またしても挑んでしまった。シャワーをしながら挑んだのははじめてだった。
「もうふやけちゃう」
佐元は、シャワー室から出て行った。
狩野は、何かしら、いままでにはない満足感に浸っていた。シャワーの温かさを感じていた。

佐元が揃えてくれている下着を着て、バスローブのままテーブルへ向かった。佐元は鼻歌を歌いながら、パンを焼いていた。スープをつくっていた。

「がんばったから卵もだ」
やはり佐元はおかしい。何かがおかしい。
「コーヒーです」
佐元は上機嫌だった。
「今日いいんだよね」
狩野はヒマだった。運転の指導などできるかどうかわからないが、ヒマなのだ。
狩野は着替えてきて、座った。
「すっぴんだけど」
佐元も着替えていた。
「いただきます」
佐元の今日の食べ方は凄い。運動選手はこういうふうに食べるんだろうと思わせる。
「どうしたの？」
食べないで見ている狩野に佐元は言った。
「パンが焼けた」
パンは、やっぱり焼きたてがおいしい。佐元が焼くパンは特においしい。なにが違うのだろう。
「おいしい」
佐元は、自分でつくったマーマレードと言って、ジャムを出してきた。狩野は、ジャムはあまり食べない。甘過ぎる。佐元のジャムは、甘くない素材の香りがよく出ている。
「他に何かありますか？」
佐元は、いくつかのパンにつけるものを出してきた。塩漬けのようなものもあった。
「これもパンにつけるのですか？」
ごはんでもおいしいけどパンでもおいしいと言った」
確かにおいしい。
佐元は、こういう生活が楽しいのだろう。これだけのものをつくっても、パンにつけて食べるのは、毎朝の１回だろう。しかし、目の前には７つの瓶が置かれていた。買ったものはなさそうである。

「これはいちごだけど」
多分、いちごジャムは甘すぎると思って手を出さなかった。
結局、ハムを入れて焼き込んだパンにマーガリンが、１番おいしかった。
佐元は、あれこれ試すように、パンに塗っていた。

有料だが、安くて自由に使える練習場があるというので、埼玉県の奥まで出かけた。茨城にも、いくらでもありそうである。
「運転して行って」
おかしなものである。買ったけれども、マンションの駐車場まで運転してきてもらったらしい。それっきりである。
「いつ買ったのですか？」
１週間前だと言う。中古らしいが、しっかりしている。４輪駆動である。
「あんまりゴチャゴチャ聞かないで」
狩野が、どうして急に車なのかだとか、どうしてバンなのかだとか、どうして４輪駆動なのかだとか、聞きたいことがたくさんあるのを承知しているのだろう。先制された。
狩野は、佐元とのことでは、常にこうなってしまう。曖昧になる。はっきりしないまま、佐元が説明をしたがらない。聞かないでくれと先制される。なぜ車なのか、さっぱりわからない。そして、どうして自分が運転しようとするのか。
「自動車学校行かないと運転免許とれないけど」
運転免許は、昔から持っていると言った。
佐元は、狩野が運転するのを真剣に観察していた。やはり本気なのだろう。自分がこの４輪駆動のバンを運転するつもりなのだ。
「運転する時は３つ先の信号くらいを見て」
佐元は、そんなに先なんか見られないと言った。しつこく言わないといけない。１つ目の信号だけにこだわっていたら、安全な運転はできない。人生何事につけても同じだと思っている。こういう話を、もっと佐元としたいのだが、狩野の話は難しいと言う。

佐元は、練習場の使い方を教えてもらっていた。ながながと話している。何

を話しているのか、よくわからない。
「スタートのとこに行って」
案内してくれる人もいなければ、教えてくれる人もいない。ただ、コースはよく整備されているのではないかと思わせた。スタートから、順路に沿って進む。コースを変えると、他の練習者の迷惑なる。
「１回あなたがやってみて」
こういうコースは、自動車学校以来である。狩野は、ゴールドカードである。車の運転は慎重だ。
佐元の目は真剣そのものだった。
こういう練習場のコースよりは、街を運転する方が、狩野には易しい。人がいたりして、メンドーなのだが、こんなに狭いところは、そうそうない。
佐元では、多分時間がかかると思って、誰もスタートしそうもないチャンスを狙った。
多分、車の運転の得意な人は、箸使いが上手だ。日本食を箸で食べるのが上手だと思う。日本の女優と結婚したＦ１のヒーローがいるが、どうだか、知りたい。彼が、ホントに、箸でごはんをおいしそうに食べるかどうか。
手には、多くのセンサーがある。手は、何かを持とうとしたり、工夫をしたりするのだが、最大の特長は、手で何かを調べることができることだ。ポケットの中のコインが１００円であるか１円であるか、当てられる。狩野だけではなくて、誰でもできる。
時に、手のすべてのセンサーが発火していない人がいる。箸使いが上手ではない。多分、球技が苦手だ。多分、自動車の運転が下手だ。
佐元はどうなのだろう。
佐元のごはんの食べ方は、狩野よりは、はるかにキレイで上手である。狩野は、箸使いが、少しおかしい。完全ではない。
狩野の仮説からすると、佐元は、自動車のハンドル操作が上手なはずである。
佐元は、何度もコースの石に乗り上げた。しかし、気にしないで、どんどん前に進む。思ったより早い時間に１周回ってしまった。
「何回乗り上げた？」
休む間もなく、佐元は、２周目をスタートさせた。

佐元は、５月８日にも予約をした。土曜である。佐元は、６日と７日も有給で休んでいるという。
帰り仕度をしていると、真野から電話があった。
「狩野さんに相談したと言ったら、お前は交替だと言われました」
情けなさそうに、真野は言った。まだ酒向と狩野の関係が理解できていないのだ。酒向は、狩野から引き継げと言っただけだ。
酒向にとっては、理陣が画策した、狩野社長就任を、目覚めさせてはならないのだ。理陣は病気で入院しているが、生きている。影響力が大きい。どんなことをしても、狩野の息の根を止めないといけない。そういうことが、真野にはわからない。
「私に近づくといいことがないかもしれないから」
狩野は、もう連絡をしないように、真野に言った。真野には、まだよく飲み込めていない。
佐元は、狩野と真野の電話を、聞くともなく、察しているかのように、見ていた。
「緊張したからお化粧が崩れた」
佐元は、早く帰りたいと言った。
また今日も佐元のマンションだろうか。

〇柚木名はアメリカにいた
「朝ごはん食べたら帰ります」
狩野は自分で言って驚いてしまった。帰してくださいと佐元に言っている自分に驚いた。佐元も、一瞬驚いた顔をした。いままで、こういう場面はなかった。狩野は、常に０時になったら帰った。狩野は、いつも忙しかったのだ。
５月５日と６日、今日は７日である。
いままでにはない会話だと思いながら、朝ごはんを食べた。佐元は、朝方また狩野に挑んで、機嫌がよい。
「このごろ調子がいいと言った」

キレイになったように感じる。
「土曜はまた車の練習があるから今日もいれば？」
狩野は、とにかく、帰ってメールを見ないといけない。
「じゃ〜今晩またここで晩ごはん食べます」
佐元は、なぜ狩野が、朝帰ってまた夜来るのか、よくわからない。明日また車の練習場に行くのだ。

狩野は、家に帰るとホッとする。おかしなものだ。佐元は、唯一狩野が気を抜ける人である。それにもかかわらず、やっぱり家で１人でいるとホッとする。人間はサルのはずである。仲間がいて安心するのがサルだ。豹とは違う。豹は、隣に豹がいたら気持ちが悪そうだ。
狩野は、自分が豹にでもなったかのようだった。豹のようにはカッコよくない。
とりあえずメールを見る。
何もありはしないのだ。おかしなもので、何もないとガッカリする。たくさんあるとイラつく。狩野だけではないだろう。メールのシステムは、自分勝手を促進する。
少々ガッカリした。
考えてみたら、今までの狩野の生活とはおさらばしようとしているのだ。実際に、５月５日に会社を退職した。いままでの人達は、誰も、何も言ってこない。狩野を頼りもしない。それがあたりまえなのだ。
狩野は、新しい自分の生活を築かないといけないのだ。よくわかっている。それでも、こうして、佐元のマンションから帰ってメールを調べるのは何だろう。
気がつくと、お昼のラーメンをつくっていた。狩野は、休みで家にいる時は、12時なるとラーメンをつくる。そういうふうに身体ができている。ネットで送ってもらったラーメンである。40食を一度に送ってもらっている。醤油と塩と味噌が均等になっている。乾燥麺である。昔は、乾燥麺は、あまりおいしいとは思わなかった。しかし、いまは違う。すごくおいしい。
狩野は、フライパンですべてをやってしまう。フライパンで水からはじめる。野菜や肉や卵やニンニクをどんどん入れていって、乾燥麺を入れて、ダ

シを入れる。
簡単にできる。この方法は、熱くて、時々口の中をやけどする。そして夏は暑い。簡単だけど。
ラーメンのおいしさを感じながら、考え事をはじめた。
狩野は、こんなはずではなかった。まだ55歳である。前途洋々としている。まだ３日目だからしっくりこないのかもしれない。しかし、現代大学の教授にしても、五味里工業にしても、中国の会社にしても、狩野の道が閉ざされていく。こういうつもりではなかった。狩野が望めば、どういう道でも、道が拓けると感じていたし、自信もあった。しかし、思うように進んでいない。進もうとすると道が閉ざされる。
大きなため息をついたところで電話がきた。柚木名正春であった。八重洲から消えて、何日になるだろう。おかしなことになってしまった。
北千住のお店で待っていると言う。約束をした。
「遅くなっても必ず行くから」
狩野は、佐元に伝えた。
「晩ごはん食べないんだ」
食べるから残しておいてくれと言った。
多分、食べられないことはわかっている。しかし、佐元は、もうガッカリしている。今日は何をつくろうかと考えていたはずである。それは、自分が料理をはじめて、やっとわかったことだ。友子が料理をしてくれていた頃には、何も気づかなかった。平気で、用意されていた晩ごはんを食べなかった。友子がお昼に食べていたのだ。おもしろくなかったに違いない。自分だったら文句を言う。友子は、黙って出て行ってしまった。
狩野は、自分が、凛として安定していることはよくわかっている。社長をやってもできるだろう。しかし、何かしらの自分にわからない欠陥があることも承知している。ただ、それが何かわからない。

狩野は、19時ピッタリに北千住のいつものお店に行った。
柚木名正春はすでに来て、狩野を待っていた。
「しばらくです」
柚木名は、営業らしいあいさつをした。

「雲隠れしていました」
アメリカに行っていたと言う。日本では、あまり稼げなくなったと言う。
「アメリカでは順調ですか？」
八重洲の事務所は閉じると言った。社員も解雇すると言う。
「関エトレから離れるんだ」
あれだけ離れたかった関エトレから、いきなり離れてしまった。離れにくいから狩野のチカラを借りようとした。狩野を味方につけようとした。狩野を役員で迎えてもよいと言った。
柚木名にも何があったかわからないと言った。中国の会社は、関エトレを無視するかのように、独自の営業活動をしている。柚木名も、アメリカで営業活動をしている。
関エトレは踏んだり蹴ったりの状態だが、なぜか、踏まれたまま、何もしない。中国の会社を離れようとして別の生産会社を模索しているが、真野の話のように、うまくいかない。完全に、中国の会社のペースにはまっている。
もともと、中国の会社は、前の社長と関エトレの現在の社長の鮒野との密約を恐れていた。
「密約はどうなったのですか？」
ゼンゼンわからないと、柚木名は言った。
「狩野さんもわからないのですか？」
もちろんである。狩野にも、さっぱりわからない。こんな弱腰でいいのかと思う。
このままでいくと、中国の会社は、日本にも営業活動をはじめそうだと言った。八重洲のオフィスは、中国の会社が、関エトレに敬意を払って、関エトレが便利なように、連絡係を置いている。柚木名はその責任者である。中国の会社の新しい日本の営業担当は、関エトレも含めて、日本の会社に営業活動をするのだと言う。
中国の会社が、どうしてそこまで強気でいられるのかわからない。
いずれにしても、狩野を飛び越えて、物事が動いていることは確かだった。

〇佐元は自分で運転して帰ってきた

柚木名は、家族もアメリカに移ると言った。柚木名が日本にいることは、関エトレとの関係上好ましくないと判断したようだ。電車に揺られながら、狩野は、中国での生活を懐かしく思い出していた。これは何だったのだろう。狩野のプライドを賭けて働いた。中国の会社は、関エトレの中国工場のようであった。狩野には、権力の一部がくっついてきた。それが、ゼロになりそうである。
柚木名は、家族が待っているからと言って、早めに帰って行った。もうすぐアメリカに発つのだろう。

意外に早い時間に、佐元は喜んだ。
「どうする？」
酔ってはいたが、食事をしていない。
「ごはんを食べます」
佐元は、鍋を温めながら、着替えるように言った。
狩野は、シャワー室に行った。いつものように、新しい下着がカゴに置かれていた。狩野のシャワーは早い。カラスの行水とはよく言ったものだ。
佐元は、まだバタバタしていた。
「座ってください」
佐元は、ワインを飲んでいた。
「これおいしいから」
グラスに注いで狩野に渡した。冷たくておいしかった。
カツオのフランス風だと言う。狩野にはよくわからない。フランスの人は匂いの強いカツオを好まないだろうに。
フライパンから出したので、油で焼いたのだろうか。最高においしい。
ワインにもピッタリである。いままで北千住で焼き鳥を食べていたのも忘れて、カツオをガンガンに食べはじめた。
佐元は、そんな狩野を、目を細めて見ていた。

またもや酔い潰れてしまった。
このごろは、いつも朝早くに佐元に攻められる。グッスリ眠っているのを、いきなり起こされる。

時々イヤそうな顔をするらしい。佐元は、おかまいなしである。40を過ぎているのに、20歳の娘のようにふるまう。それは、狩野への配慮とかそういうものではない。ただそうしたいのだろうと思った。自然っぽいのだ。
ここ数カ月である。佐元は、魅力を増した。なぜだかわからないし、具体的に、どこがどうとかではない。

佐元は、狩野から離れてシャワーに行った。鼻歌が出ている。狩野は、どうするか迷ったまま、ウトウトしてしまった。気持良かった。
「ごはんもうすぐできるけど」
佐元の大きな声で飛び起きた。慌ててシャワーへ向かった。
狩野は、この部屋のシャワーがスキだ。いろいろ考えたかった。これから佐元とどうすればよいのか、曖昧なままここまできている。決断しないといけない。何を決断するのか、それすらよくわからない。とにかく、今は早くシャワーを出ないと佐元が待っている。
佐元は、もう出かける準備を終えていた。
今日は、また埼玉の有料の自動車練習場である。
「お待たせしました」
狩野は、自分で言って驚いてしまった。いままで、言ったことがない。どうしてこういうことばが出はじめたのか、狩野にもわからない。
「いただきます」
今朝焼いたパンだった。
「おいしい」
思わず、狩野は、感じたままを発した。パンは、やはり焼きたてがおいしい。

「コーヒーあるからお願い」
佐元は、器を洗いながら狩野に言った。
狩野は、棚からカップを出して、コーヒーメーカーからコーヒーを注いだ。
そして、フッと横にあるメモ用紙を見た。
壊れるよろい。
この前、ここで見たのと同じことばである。この前は、先里と、壊れるよろ

いだった。思わず、コーヒーをカップから溢れさすところだった。
佐元に聞けばいいのだが、曖昧にする。狩野のよくないところである。
これは何だろう。先里と佐元の接点など、考えも及ばない。
「15分くらいしたら出るから」
コーヒーカップを出しながら佐元は言った。
佐元は、メモ用紙に視線を移すことはなかった。急ごうという態度である。
「このコーヒー替えたんだけど」
おいしいと言ってもらいたいのだ。やっとこの年になって、家庭を守る立場がわかってきた。
「いい匂いがしておいしいです」
安いショップを見つけたと言った。会社の帰りに買って帰れるのだそうだ。
壊れるよろいの話を持ち出せなくなってしまった。

「横で見てて」
佐元は、見本を見せてくれとも言わなかった。さっさと運転席に乗り込んだ。
縁石に乗り上げるのだが、そのまま進んでしまう。１周目に縁石に乗り上げたのは１か所だった。ホントにペーパードライバーなのだろうか。佐元は、運転が上手である。
３周目が終わって、休憩すると言った。
狩野は、来る時に見かけたおいしそうな中華のお店に行こうと言った。
「自信がありそうだけど」
佐元は、うなずいた。自分でも、思ったよりうまく運転できることに驚いていると言った。
なぜ佐元が車を買ったのか、なぜバンタイプなのか、なぜ四輪駆動なのか、なぜ必死になって運転練習をするのか、聞きたいことがたくさんあった。
「ここで止めて」
狩野は驚いた。
「自分で運転してみたい」
まだ中華のお店は先である。
佐元は、自分でさっさと降りてきて、運転席のドアを開けた。狩野は、仕方

なく運転席から降りて、助手席に向かった。
佐元は、迷うこともなく、四輪駆動のバンを発進させた。
狩野は黙っていた。後を何度も振り返った。佐元は、バックミラーも見るし、サイドミラーも見ている。
「向こうの右にある中華のお店だけど」
どうやって右に入るのかを狩野に聞いた。２車線だから、中に寄って、右折するしかない。佐元は、一旦停止して、右折した。何事もなかったかのように、中華のお店の駐車場に入った。

佐元は、どうしても自分で運転して帰ると言った。狩野は心配だった。なんといっても、まだ２日目である。道路に慣れてもいない。
狩野の方が緊張していると思った。身体が固くなっている。
「ここ何キロ？」
佐元は、制限速度を聞いた。どうして制限速度までスピードを出せるのかわからない。
「もっと早めにブレーキを踏んだ方がいい」
狩野は、余計なことを言わないければならない。
立派なカーナビが付いていた。まだ使い方がわからないからやってくれと言った。佐元は、カーナビの指示どおりに運転をしている。道がよくわからないらしい。
「後は平気？」
狩野に何度も聞く。後の車が近づき過ぎるように感じるのだろう。

佐元は、毎日通勤に車を使用しているかのような雰囲気でドアを閉めた。
佐元は車の運転が上手だ。車の運転には、上手下手がある。狩野は、手の中のセンサーの発火にあると思っている。手の中には、多くのセンサーがあって、情報を頭脳へ伝えている。多くのセンサーがありながら、センサーが発火しなくて頭脳と繋がらないケースがある。箸操作がうまくできないなどに現れる。ハンドル操作も同じだろう。狩野は、勝手に解釈している。
満足そうな顔をして、佐元は部屋に入った。
「今日はしゃぶしゃぶにするから」

佐元は、さっさとシャワーへ向かった。

〇自宅とアパートの交換の電話

狩野は、やっと佐元のマンションから自宅へ帰ってきた。通常のように、０時に帰った。

佐元は、もう有料の自動車練習場には行かないと言った。狩野が何を言ってもムダである。自信過剰ではないのだろう。スピードを出さなかったらチャンと運転できると言った。次の土曜日に、高速を運転するから一緒にいてくれるように頼まれた。

狩野はヒマである。

ゆっくり寝ていても何もないのだが、やはり７時には目が覚めてしまう。不思議なことに、佐元のマンションでは、すぐにシャワーに行くのに、自宅では、そのまま朝食の準備に行く。佐元に挑まれないからか。もう習慣になっているからなのか。

ここのところ、自宅で朝ごはんを食べていない。食パンも余っているし卵も余っているしキャベツも余っている。ハムと一緒にフライパンに任せることにした。

アッという間にできてしまう。

顔を洗っていない。食べたあとに、歯みがきと一緒にしようと思った。

テレビを聴きながら、新聞を見ながら、３つも焼いた卵とハムとキャベツを、つくっておいた醤油味のドレッシングで食べた。

このドレッシングがおいしい。

佐元と一緒にいるのもワルくはないが、やっぱり、こういう１人の時間が、狩野は好きだ。

今日は日曜である。いままでの、忙しい狩野の日曜のようである。

娘の知美から電話だ。

「５月31日に引っ越すけど荷物入れる部屋はあるのですか？」

狩野は、友子と保と知美に、とやかく言われたくはない。片づけをしてきているし、掃除もしてきた。

「冷蔵庫はそのままにしておいてください」

なぜ急に娘なのに他人行儀になったのかもわからないが、アパートに残すものを確認した。
「使い慣れた鍋とか炊飯器とか掃除機は持って行きます」
狩野は、ひょっとすると、冷蔵庫だけかもしれないと思った。
「洗濯機はどうしますか？」
結局、冷蔵庫と洗濯機は、交換することになった。
知美と話していると、一緒に住んでもうまくいくのではないかと思う。フツウのコミュニケーションができる。なんとも、不思議な感じである。狩野には娘だが、知美がどう感じているのかは、わからない。
今日はキッチンを掃除しよう。
狩野は、友子と保と知美が住んでいるアパートを知らない。３人が住んでいるのだから、１ＤＫということはないだろう。しかし、家賃は５５０００円だった。守谷駅からも遠い。３人で細々と暮らしたに違いない。友子は、狩野から離れることで自由になったのだろうか。何度考えても、狩野には理解できないことだった。狩野の、何がイヤなのか。
考えるよりも掃除をしなければならない。キッチンである。

洗濯物を取り入れて、狩野はビールを買いに行った。
今日はお好み焼きをやろう。
フライパンに、大きなお好み焼きをつくる。キャベツやシイタケやタマネギや山いもと卵と小麦粉を焼いて、中に大量の納豆を入れて焼く。それだけである。ビールによく合う。大皿からナイフで切り取って、ピザのように食べる。なんともおいしい。
時々狩野は、自分を笑ってしまう。多分、外から狩野を見ている人は、お好み焼きを楽しみにしている狩野が似合わないだろう。狩野が持っている雰囲気は、お好み焼きやピザではなくて、マグロの刺身とごはんである。それも、自分で庖丁を持つことをイメージできないだろう。
狩野は、ほとんど外食をしない。すべて自分で調理する。外から狩野を見る人は、すべて外食で、しかも、食事をする小料理屋が決まっている感じである。狩野は、決まった小料理屋で食事をするイメージを壊さないように振舞ってきた。

佐元ですら、ここまでの狩野を知らない。佐元は、狩野にごはんをつくらせたことがない。狩野は食べる人が似合っている。つくる人は似合わない。

シャワーを浴びながら、狩野は考えていた。
狩野は、小さいけれど、幸せ感を感じていた。満足感でもある。小さい頃から、何かに追われていた。いまだに、それが何なのかわからない。秋田でも東京でも、安アパートに住んで働いた。学校へ行くというより働いた。何かに追われて働いた。関エトレに勤めても、それは変わらない。いつも、何かに追われていた。今、それが何であるのかわからないまま、追うものが小さくなったような感じがする。必死で逃げていたのに。
お好み焼きにビールとシャワーの温かさに、満足感を得ていた。こういう感じは、何十年もなかった。狩野を追ったものは、何だったのだろう。

〇美薗と新宿で会う

美薗は、新宿のビジネスの待ち合わせなどによく使われる、高級喫茶で待っていた。15時である。夜は、接待があって忙しいらしい。麻のスーツを着こなしていた。フィリッピンから帰ったばかりだという。
美薗は、次々に書類を取り出した。名東エレクのパンフレットをつくっていた。最初の事業は、水の仕事であると書いてあった。エネルギーの仕事も研究中と書いてあった。
役員の中に、狩野隆一の名前があった。専務である。他に専務が２名いる。
美薗は、饒舌だった。タイとフィリッピンで契約を結んだと言った。契約書のコピーを見せられた。あの、まだ試作っぽい機械を、これから製品に仕上げるのだという。大きな金額なので、すべて受注生産になるらしい。
「私は何をするのですか？」
美薗は、製品化する会社と話が進行中なので、しばらく、その会社で、製品を仕上げて商品にしてほしいと言った。スケジュール表もできていた。６月１日から製品化がはじまる。８月１日に３セットの納品をするスケジュールである。３セットで２億４千万円になる。
美薗は、狩野の名東エレク株式会社専務の名刺を１ケース渡した。７月25日

から給料を毎月１００万にしたいと言った。狩野の特許を使っているが、役員報酬に含ませて欲しいと言った。狩野には、断る理由はなかった。ほっておいても、誰も使ってくれないであろう特許である。
美薗は、狩野が、役員でもあり、資本金としていくらでもよいので出資してほしいと言った。そして口座番号を狩野に知らせた。

つくばまでの電車の中で、今後の仕事としてはワルクはないと思った。これだったら、誰もが、狩野らしいと言ってくれるに違いない。報酬も、最初から高くは望んではいけない。自分が高くすればよいことだと納得した。
現代大学教授も消え、中国の会社の役員も消え、五味里工業の役員の話も消えた。もっとたくさんあるはずだったが、関エトレの鮒野社長に、行く手を阻まれてしまった。
名東エレクは、狩野にとって、最後に残ったカードのように思えた。
つくばの駅から、１２００万円を、さっき聞いた、名東エレク株式会社の口座に振り込んだ。

カツオを買って帰った。
オリーブオイルやショウガを加えて、フライパンで焼く。いい匂いがする。白いごはんのおかずに最高である。醤油味のドレッシングにも合うだろう。
狩野は、お金のことが、少しは心配だった。自宅とアパートを交換したのも、先行きのお金が心配だったからだ。今日で、その心配もなくなった。アパートも交換しなくてよくなった。いまさら交換しないとは言えない。
狩野は、新しいワインを取り出した。ほどよく焼けたカツオは、ワインに合った。まだごはんが炊けてない。立ったまま、カツオをつまんだ。

〇人が動く押しボタン
友子から電話があった。
「退職金が振り込まれてきました」
狩野は、いつ振り込まれるのか、聞いていなかった。
「どうもありがとう」

友子が、狩野にありがとうと言ったのは、子どもがまだ小さい時以来だろう。狩野は、ことばを失った。
愛は、人が動く押しボタンだと、誰かが言っていた。電子出版の書籍で読んだことがある。狩野は、明らかに、友子や保や知美を愛している。愛していなかったら、退職金全額を、友子の口座に振り込ませたりしない。
狩野が、友子や保や知美を愛しているから、みんなが、狩野を愛しているとは限らない。ひょっとすると、友子も保も知美も、狩野を愛しているのかもしれない。お互いに愛してはいても、だから一緒に暮らしたいとは、思わないかもしれない。
現に、狩野だって、ここ10年の１人暮らしで、自由を味わっている。佐元さえもいなくて、１人でいる時間が好ましい時がある。だからといって、佐元を愛していないわけではない。佐元が自動車の運転を練習したいと言えば、断ることなどあり得ないのだ。

カツオがおいしかった。白いごはんにおいしかった。
シャワーを浴びながら、愛の話が気になった。どうして、チラッと見た、人が動く押しボタンを憶えているのだろう。
シャワーを急いで出て、狩野は、人が動く押しボタンのことが書いてあった電子出版の書籍を探した。
狩野は、少し読んでいるうちに驚いてしまった。そして、この書籍を買ってダウンロードした。
そう長くはないエッセイだった。
この本には、大人が動くのには、２つのボタンがあって、１つは愛のボタンで、２つ目のボタンは、よろいのボタンだという。
狩野は、佐元のコーヒーメーカーのそばにあるメモの、壊れるよろいという文字が気になっていた。とんでもないところで、ぶつかってしまった気がした。
この本によると、人は誰でも、よろいの風習の中で生きていて、生身は、みな同じだという。一般的に言うところの、よい人とワルイ人の違いは、よろいをたくさん着ているかどうかのことであって、ワルイ人ほど、厚いよろいを着ているらしい。

愛は、人が動く押しボタンで、よろいのボタンも、押しボタンであるらしい。よろいのボタンは常に押されているのに、愛の押しボタンは、なかなか割って入れないらしい。すると、人は、ほとんど、ワルイ人になってしまう。
愛は、よろいによって隠されると言っている。
おかしなことを考える人もいるものだ。
佐元のコーヒーメーカーのそばのメモ用紙に書かれてあったよろいは、このことだろうか。
まさかとは思う。
愛が人が動く押しボタンであることは、間違いはないのだろう。友子に退職金のすべてを振り込んでもらったことでも、わかる。友子を愛していなかったら、そのようなことはしない。友子が狩野を愛しているかどうかは、別の問題である。
けっこう、読み進んでしまった。
狩野は、愛についてなど、考えたことがない。
愛のことなど考える余裕がなかった。言い訳なのだろうか。しかし、この本に書かれてある人が動く押しボタンは、佐元のことを考えても納得がいく。
佐元は、狩野を愛していることになる。おいしいごはんをつくる。
しかし、佐元には、狩野が理解できないことがたくさんある。佐元が動いているのだから、愛なのだろう。それともよろいなのか。
まだよろいがよくわからない。
「あなたが社長になるはずだった」
どうして狩野が知らないことを佐元は知っていたのだろうか。
「この会社でのあなたの居場所はなくなった」
なぜ佐元は、このようなことを狩野に言うのだろう。
これは愛なのか。
なぜ急に自動車の運転をはじめたのだろう。なぜ四輪駆動なのか。なぜバンなのか。
愛が人が動く押しボタンであれば、佐元は、何かを愛している。間違いはない。
もっと気になることがある。

佐元の部屋のコーヒーメーカーの横のメモ用紙だ。
先里と書かれてあった。壊れるよろいと書かれてあった。これは何だろう。
もういくら考えても答えなど出てこない。佐元は佐元だ。
ただ、愛については、少し理解してきた。友子と保と知美と自宅とアパートを交換する。これは何だろう。狩野が言いださなければ実現しなかった。
狩野は、年収が下がるから、毎月30万円振り込むことがタイヘンだから、自宅とアパートを交換して、毎月20万円に減らしてもらった。
狩野のお金の都合ではないか。
友子と保と知美に、もっと広いスペースを与えてやりたいのではないのか。
愛ではないのか。
もし愛だったら、もう10年も過ぎているのだ。友子も保も知美も、10年、狭いアパートで苦労している。やはり、狩野は、愛が薄い。自分で、愛が薄いと思ってしまう。
この本は不思議な本である。
愛など考えたこともないのに、愛を考えさせられてしまう。
それにしても、先里、壊れるよろいが気になる。
先里はどうしているのだろう。
佐元と先里は、どこかで繋がっているのだろうか。狩野もだが、誰も、予想ができないだろう。
佐元は不思議である。多分、社長の鮒野とも繋がっているのではないかと疑っている。酒向とも人事部長もだ。
それに加えて先里となると、頭がパニックになってしまう。

〇赤字で書かれた壊れるよろい

狩野は、昨日決まった、名東エレク株式会社専務の話を佐元にしたくて、今晩ごはんを食べたいと電話した。
まだ朝の散歩に行く前だった。佐元は、これから出勤だと言った。返事をしないまま、急いでいるからと電話を切った。佐元は、断らなかったらＯＫなのだ。いつものことだ。
狩野は、幾分、気がラクになっていた。これからの狩野の生きる道が拓けて

いなかった。それだけではない。収入の道も閉ざされていた。ハローワークに出向くようなことはしたくない。いくらでも収入の道はあるはずなのだ。
しかし、名東エレクの専務になることで、狩野の先は決まった。
歩く歩幅も、広くなったような気がする。人は、こういうものだろう。時間の先が何もイメージできなければ、辛い。それを、一般的には夢と言うのかもしれない。夢がイメージできないと、辛くなる。
左４軒くらい隣の夫婦が、毎日散歩している。狩野と同じくらいの時間である。もちろん、狩野の散歩は、ごく最近である。
「おはようございます」
つい口から出た言葉に、狩野自身も驚いてしまった。足も口も滑らかになっている。

だいたい、佐元は、早く帰っているはずである。狩野がマンションを訪れる日は、早い。
「まだ帰ったばかりだから」
佐元は、まだ着替えもしていなかった。とりあえず、下ごしらえをしているという感じだった。少し遅らせて来たのだが、佐元は、何か用事があったのだろう。
狩野は、ニュースを見ていた。
「ごはん炊いているから見てて」
どういう意味か聞く間もなく、佐元はシャワーへ向かった。キッチンへ行ってみると、土鍋でごはんを炊いているようである。何を見ていればいいのかわからない。狩野は、土鍋でごはんなど炊いたことがない。とりあえず、噴いたら鍋をずらそうと思って、またニュースを見る。政治のニュースだ。
最近は、政治が混乱しているのだろうが、政治のニュースがおもしろい。おもしろいなどと言ってはいけないのだろう。狩野も、けっこう真剣に見てしまうことがある。
「どうだった？」
スッピンにクリーム姿の佐元が聞いた。
慌てて土鍋に向かった。
「うまくいったようね」

狩野は、全く忘れていた。テレビに夢中だった。
「シャワーしてくれば？」
狩野は、まだテレビを見ていたのだが、佐元に促されるように、シャワーへ向かった。
普段は、晩ごはんの前にシャワーはしない。佐元のマンションでは、いつも佐元に、シャワーを促される。それにしても佐元のシャワーは早かった。
今日はワインなのだろうか、ビールなのか、土鍋のごはんが何なのかわからない。狩野は、気がラクになっている自分に気がついていた。
佐元だって気がついていたはずである。狩野の行く道が、ことごとくバツになることを。狩野は、動く歩道に乗せられている感じなのだが、降りようとすると、降り口が、塞がれる。
名東エレク専務で、やっと、動く歩道から降りられる。

鯛ごはんだった。もちろん、狩野はやったことがない。魚と一緒にごはんにするなど、考えたこともない。
おしいしいとは聞いていた。実際においしいものかどうか、佐元の手元を見ていた。
「鯛のお刺身から食べて」
いつの間に鯛が刺身になっている。よくわからない。
「ごはんも鯛だから言って」
狩野は、少し先に食べたいと言った。佐元は、ごはん茶碗を出して、土鍋からごはんをよそった。
とりあえず食べてみたかったのだが、佐元が乾杯をすることを知っていて、ガマンした。
「カンパイ」
ワインを少し飲んで、鯛ごはんに手をつけた。
「こんなにおいしいとは思いませんでした」
佐元は、不思議そうな顔をしていた。鯛ごはんは常においしいらしい。
またワインがおいしい。酔い潰れそうである。
狩野は、名東エレク専務の名刺を佐元に渡した。
箸を置いて、佐元は名刺を見ていた。

「７月25日から毎月１００万円が振り込まれることになっています」
狩野は、自分の特許が使われていることも話した。そして、美薗からもらったパンフレットも見せた。
「おめでとうでいいのかな〜」
佐元は、うれしそうな顔をしているものの、意外そうな顔をしていた。困った顔でもあった。狩野には、なぜ佐元がこういう顔をするのか、よくわからない。
「あなたはエラクなりたいのね」
やっとわかった。佐元の意外そうな顔の理由がわかった。
狩野にとっては、どこまで社会的地位を上げていけるかが、勝負である。もしかすると、関エトレ株式会社の社長になったかもしれない。狩野にはよくわからなかったのだが、勝負に敗れたらしい。そしたら、他の道を模索しないといけない。模索とは、社会的地位を上げることである。

「あなたはエラクなりたいのね」
佐元のことばが気になっていたが、いつものように、曖昧のままである。
「こっちに運んでください」
狩野は、器を運んだ。
「コーヒーできてるから」
ワインも飲みたかったが、コーヒーも欲しい。狩野は、棚からコーヒーカップを取り出して、コーヒーメーカーへ向かった。
「壊れるよろい」
狩野は、驚いてしまった。赤字で大きく、壊れるよろいと書かれてあった。これは、佐元が書いたメモとは言えない。これは何だろう。もう、ずっと書かれてる。そして、いつも、コーヒーができてますと、佐元は狩野に言う。
狩野は、コーヒーを飲みながら、器を洗っている佐元を見ていた。何かがおかしい。佐元が、おかしい。
「テーブルを拭いてください」
狩野は、言われたとおりにテーブルを拭きながら、考え込んでしまう。佐元に聞かなければいけない。壊れるよろいとは何なのか。
やっと佐元がコーヒーカップを取りに行った。

「そこに書いてある壊れるよろいって何ですか？」
思い切って狩野は聞いてみた。
「よろいは壊れるらしいから」
佐元は、どういう意味でよろいと言っているのだろう。よくわからない。
狩野は、ここから先へは、入り込みたくなかった。

〇青色に変わった壊れるよろい
また佐元に起こされた。まだ５時である。
あれから焼酎を飲んだ。どのくらい飲んだのかわからない。いつものように０時に帰るつもりだった。しかし、０時には、狩野は、酔い潰れていた。そして、いつものように朝早く、佐元は狩野を起こす。佐元は今日は仕事である。
狩野は、酔い潰れて眠った後は元気である。佐元もよく知っている。
「キリがない」
佐元がうれしそうにつぶやくのを聞きながら、狩野は、多分眠るだろうと思った。
「ごはんできたけど」
狩野は飛び起きた。そしてシャワーへ走った。
「ここでゆっくりしててもいいんだけど」
佐元は、狩野と一緒にマンションを出るつもりなのだ。あれほど狩野の存在を隠してきた。狩野が、このマンションでは、目に触れないようにしてきた。１８０度変わった。
５月の６時半である。もうみんな起きている。
酔い潰れていたのに、佐元はごはんを炊いていた。朝ごはんを炊いていた。めんたいとめざしである。納豆に卵である。
思わず佐元の顔を見てしまう。
「いただきます」
狩野も着替えていた。佐元が出かける時に一緒に出ようと思った。それにしても、朝ごはんがおいしい。
「洗って行くから」

狩野は、器を運んだ。
「コーヒーできてる」
狩野は、赤字の壊れるよろいを見ることになるのだと思った。
不思議なことに、壊れるよろいの文字は、青色に変わっていた。どういうつもりなのだろう。字が、自動的に赤から青に変わるわけはない。佐元が、青にしたのだ。どういう意味があるのだろう、何だろう。
「わたしにもお願い」
佐元のカップを棚から出した。

狩野は、自宅へ帰る道々、壊れるよろいのことを考えていた。
壊れるよろいということばもあるが、壊れるよろいと佐元の関係が気になるのだ。
なぜ、わざわざ今日の朝、赤字を青字に変えたのだろう。狩野への何かのメッセージだろうか、それとも、酔い潰れている時に、誰か電話があったのか。
狩野は、今日の晩ごはんを、先里が働いているラーメン屋にしようと思った。先日のコーヒーメーカーのメモ帳には、先里という文字と、壊れるよろいの文字があった。これは、コーヒーメーカーの隣にある、固定電話のメモ用紙だ。先里は、あの先里だろうか。それともゼンゼン違う先里なのだろうか。先里と壊れるよろいは、何か関係があるのだろうか。なぜ昨日の夜のメモには、赤字の壊れるよろいが書いてあって、今日の朝は、青字の壊れるよろいになっていたのだろう。
先里には、佐元のことは聞けないのだが、何かのヒントがあるかもしれない。佐元と先里は、誰がどう考えても、繋がらない。多分、話をしたこともないだろう。同じ会社には勤めているのだが、接点があるとは思えない。

狩野は、インターネットで検索してみた。壊れるよろいが頭から離れない。書籍も検索してみた。どこにも該当しない。どういう意味なのかも、調べることができない。多分、佐元に聞くべきなのだろう。
「よろいは壊れるらしいから」
佐元は、こう言っただけである。狩野へのメッセージではなかったら、赤字

の壊れるよろいになったり、青字の壊れるよろいになったりしないだろう。どう考えてもおかしい。
狩野は、自分の曖昧さを悔やんでしまうことがある。佐元に、しっかり聞き出すべきである。
「あなたに関係ないことだから」
多分、佐元は、こう言うに違いない。もう、これ以上先へは進めない。１時間パソコンの前にいた。しかし、何も進まなかった。インターネットの中には、狩野へのヒントらしきものは、何もなかった。
狩野へのメールも、パッタリ途絶えた。
人は、おかしなものだ。狩野がおかしいのかもしれない。退職したら、繋がりが何もなくなってしまう。メールさえ、途絶える。
12時になって、ラーメンをつくろうとして、ガステーブルの前へ行った。最近は、12時になったらガステーブルの前へ行く。そこで、何をしようかと考える。

13時になった。またも狩野は、インターネットで、壊れるよろいを調べた。先里も調べてみた。何も出てこない。
「この前から気になっているのだが、メモ用紙の壊れるよろいは何のことだろうか」
とうとう、狩野は、佐元のケータイにメールした。
５分もかからなかった。返事がきた。
「気にしてくれてありがとう」
これではゼンゼン話にならない。どういうつもりなのだろう。気にしてくれてありがとうとは、なんだ。
余計にわからなくなってしまった。あなたには関係ないからという返事の方がスッキリしたのに。

○まきのわたる『よろい』
19時まで待った。いつもだと、19時には、晩ごはんを食べている。お腹がすいた。

今日は暑い。最近は、ずっと寒い日が続いていた。いきなり夏日である。これでは、ビールを飲まないわけにはいかないだろう。帰りは、タクシーで帰ろうと思った。車を置かせてくれるのだろうか。
とにかく、行ってみよう。

「こんばんわ〜」
幸いなことに、お店はやっていた。先里も働いていた。
「いらっしゃい」
先里が、声をかけてきた。
「おいしいギョーザとネギラーメンとビールをお願いします」
今日も主人はいないのだろうか。先里１人のようである。カウンターしかない。他のお客さんが２組いた。ラーメンとごはんとギョーザを食べていた。
狩野は、カウンターの下にあった本に手を伸ばした。そう厚くはない本らしきものがあった。手作りの表紙っぽい。表紙を見て驚いた。『よろい』と大きな字で書かれてあった。作者は、まきのわたるとひらがなで書かれてあった。まきのわたるとは何だろう。まきのわたるという人が書いた、『よろい』という書物らしい。
狩野は、頭から読みはじめた。
これは物語ではない。まきのわたるという人の考えを記したものだ。エッセイだ。佐元の部屋のコーヒーメーカーの隣のメモ帳に記してあった、壊れるよろいが、このよろいであるのかどうか、よくわからない。ただ、先里とは繋がっている。
「お待ちどうさまでした」
先里が、ビールを出してくれた。そして、ギョーザとラーメンを出してくれた。
「ライスもサービスで付いていますが」
狩野は、お願いしますと言った。先里の顔を見ないで、本を読んでいた。
まきのわたるという人は、人の諸悪の根源は、よろいだと主張している。よろいとは、身体の生身ではなくて、その外側に着けている様々なものを言っているようだ。学歴もよろいと言っている。学歴が諸悪の根源なのだろうか。狩野には納得はできない。時々、こういう異端者的なことを言う人が現

れる。狩野は、高学歴が欲しかった。大学院にも通った。叶わなかったが社長にもなりたかった。みんな、狩野のよろいと言うのだろうか。諸悪の根源なのか。
この本は、狩野の考えとは異なる。頭が痛くなる部類の本である。こんな本を売っているのだろうか。ネットで検索しても、どこにも出てこない。
おかしいと思いながら、ビールを注いだ。ギョーザをつまんだ。
いずれにしても、先里の働いているラーメン屋さんに来て、狩野に、壊れるよろいのヒントがあったことは確かだと思った。
「この本はどうしてここにあるのですか？」
狩野は、先里に聞いた。
「お読みになりたければどうぞ」
持って帰ってもよいと言う。そういうことを聞きたいわけではなかった。
先里の本かどうかも聞きたかった。
「いらっしゃいませ」
時間が時間である。先里は忙しくなった。狩野は、聞きたいことがあったのだが、話ができなくなってしまった。
なぜ先里が勤めるお店のマンガの本と一緒に、この本があるのだろう。わけがわからない。この本は、佐元の部屋にある、メモ用紙の壊れるよろいのことなのか。
考えながら、ビールを飲んでラーメンとごはんを食べた。
先里は、忙しく働いていた。主人はどうしたのだろうか。
「ごちそうさま」
やっと先里がこっちにやってきた。
「この本を貸してください」
先里は、おつりと一緒に、どうぞと言った。
「車を置いて行きたいんですが」
先里は、遠くから、どうぞと言った。忙しそうである。
狩野は、外に出て、温度がちょうどいいのではないかと思った。自宅までかなりある。タクシーを呼ばずに、歩くことにした。いい感じである。

時計を見なかったが、40分は歩いたと思った。５月のこの時期は、さわやか

である。もちろん、はじめてである。こんなに歩くことも、最近はない。
狩野は、シャワーへ向かった。早く出て、まきのわたる『よろい』を読もうと思った。

ウイスキーを氷で割って、用意した。
まきのわたる『よろい』を読みはじめた。
電子出版の書籍であるらしい。検索してみた。驚いてしまった。
この前にダウンロードした『人が動く押しボタン』の作者が、まきのわたるだった。『よろい』もまきのわたるである。
先里から書籍を借りて来たのだが、ダウンロードして、パソコンで読むことにした。狩野は、もうパソコンの方が、読むことに慣れてしまっている。
この本は、明日車を取りに行った時に、戻そうと思った。
まきのわたるによれば、よろいと愛は繋がっている。よろいが大きければ愛がその分だけ隠される。愛が大きければ、よろいがその分だけ小さい。つまり、人として育つということは、よろいで隠される部分を、いかに少なくするかにかかっているということらしい。あかちゃんは、よろいがゼロなので、人間的には、理想的な人なのだという。
あかちゃんが人間の原点など、おかしいと狩野は思うのだが、この本では、真面目に、あかちゃんこそ人間の原点だと言っている。
狩野は、まきのわたるには、とてもついていけないと思った。考えが幼い。途中まで読んだのだが、まきのわたるの言っていることは難しい。それに特殊である。狩野が、そうだと言ったならば、いままでの狩野の人生を否定してしまう。狩野は、必死になって、論文を書き、必死になって働いた。みんな、狩野を称えてくれた。それがよろいと言うのだろうか。
頭が疲れて、スポーツニュースを見ることにした。

〇美薗からのメール

朝の散歩のついでに、車を取りに行こうとした。しかし、ラーメン屋はやっていないだろう。諦めて、いつものように、近所を歩くことにした。昨日、先里に聞いておけばよかった。何時からやっているのか。どこかに電話番号

は書いていないのか。
「おはようございます」
いつもの夫婦にあいさつをしていて、思いついた。
「もしもし」
狩野は、先里のケータイを登録してある。狩野の前任の研究所長である。
11時30分からやっていると言った。夜も11時30分である。12時間勤務だ。
主人と先里は、都合をつけながら、お店をやっているらしい。12時間勤務もフツウにあるのだろう。
狩野は、先里が今日もいるのか聞かなかった。いれば、いろいろ聞いてみたかった。なぜ、ラーメン屋のマンガの本と一緒に、少し小難しい『よろい』などという本が置いてあるのか。

今日も、お昼は、あのラーメン屋さんで食べることにした。また少し時間はかかるが、歩いて行くことにした。
街灯が燈っていない時間に、この通りを通ることなど、最近までなかった。
歩いてみると、おいしそうなパスタのお店があったりして、けっこうおもしろい。
「こんにちわ〜」
狩野は、混んでいそうなラーメン屋に入った。主人が１人で汗をかいていた。席が１つしか空いていない。静かに座ったのだが、ラーメン屋の主人は気がついてくれたのだろうか。
しばらくして、お水を持ってきてくれた。
「ネギラーメンを醤油でお願いします」
狩野は、ここでは、ネギラーメンしか食べたことがない。
先里のことを聞きたかったのだが、答えはわかっていそうで、口に出せなかった。車を置いてもらったお礼を言わないといけない。
「車を置かせてもらってありがとうございました」
ネギラーメンを持ってきてくれた時、狩野は、主人にお礼を言った。
「特別です」
それはそうだと思った。お客さんは、駐車場が埋まっているから店に入ってこない。ワルイことをした。

「この本は先里さんに借りたのですがお返しします」
狩野は、借りて帰った『よろい』を主人に渡した。
主人は、何も言わずに受け取った。
勤め人風の数人が出て行くと、奥さんとそのお母さんらしき人が入ってきた。なにやら、ダンナのワルクチを言っている。この店は、お昼が過ぎても、ヒマにはならないのか。狩野は、主人と話したかったのだが、諦めて店を出た。

買い物をしている時に、ケータイにメールが来た。美薗だった。韓国にいて返事ができなかったと書いてあった。資本を入れてもらってありがたいということだった。約束のとおり。７月25日から１００万円を振り込むと書いてあった。
おかしなもので、こういう返事で、安心が広がる。気が休まる。いままで感じたことのない感覚である。返事がないと、無視されているのではないかと疑ってしまう。毎日多くのメールで困っていた時には、どうでもよかったのに。人は、不思議なものだ。
狩野は、カツオを食べようと思った。今の時期は、カツオが安く食べられる。ワインがどうなっていたか気になった。佐元の影響が大きい。カツオにワインなど、狩野のメニューにはなかった。
狩野には、次第に、安心が広がっていた。美薗の連絡が大きい。

弱火でカツオを焼きながらメールを調べてみた。
美薗からのメールが入っていた。パソコンにメールして、同じものをケータイにメールしている。どっちかにぶつかると思ってくれたのだろう。こういう心配りはうれしい。
狩野は、ごはんではなくて、ピザを焼くことにした。納豆が半分魚のソーセージが半分。最近は、このピザにはまっている。生地はさっきつくったばかりで、まだキチンと発酵していないかもしれない。スイッチを入れれば焼ける状態にしておいた。
とりあえず、カツオを切ろう。
狩野は、こういう時間もけっこう楽しいと感じている。ずっと楽しかったか

ら10年も続いているのだろう。しかし、最近は、なぜかストレスがある。多分、先行きの不安だろう。あれだけ自信満々だったのが、どうもおかしい。動く歩道に乗っている感覚から離れられない。動く歩道に乗せられていると、どこに行くのかわからないためだろう。不安がつのる。
やっと、今日は安心が広がっている。
カツオが、よくできている。よく切れる包丁でなければうまくカツオを切れないだろう。
なんとも、おいしくそうにできた。ネギを細切れにして、振りかけた。

ワインとカツオはよく合う。佐元の料理は参考になる。
ピザのスイッチを入れなければならない。カツオだけで足りてしまう。お昼の遅いラーメンもあって、お腹が空いているわけでもない。ピザをこのままにしておいても困る。スイッチを押しに行った。
最近、よく食べる。このままでは、肥満になるかもしれない。毎日研究所に出勤していた時には、やはり、見てくれに注意した。できるだけ研究所を歩きまわった。誰にもわからないように万歩計を着けていたこともあった。だいたい、１万歩がどういうものか、理解していた。
最近は、多分４千歩もないかもしれない。
このままでは、肥満になるだろう。食べる量を減らさないといけない。しかし、今日のようになってしまう。カツオの半身を焼いてタタキにして、ピザを１枚食べる。どう考えても、肥満につながる。
名東エレクの専務である。気をつけないといけない。
狩野は、今日だけにしようと思った。

〇一瞬増渕を見かけた
どうしていつも早く目が覚めてしまうのかわからない。ヒマなのに。
今日は、佐元のマンションに行かないといけない。明日、高速を運転するのだと言っていた。どうなっているのかよくわからない。狩野が、どうせヒマだと思っている。遠くへ行くのかもしれない。
散歩に出た。いつもの夫婦にも会った。こうやって近所を散歩するのも、あ

と少しになった。交換した守谷のアパートの近所には、散歩できる路はあるのだろうか。考えながら歩いた。
やはり、昨日から安心が広がっている。
このような感覚は、はじめてである。狩野は、働きはじめてからずっと、何かに、追いつめられたことがない。常に、明るい先が見えていた。追いつめられたのは、友子と保と知美の、意外な行動だった。家を出て行ったことだ。よくよく考えてみると、狩野の先行きが、常に明るかったのは、仕事に関する出来事だけだった。もしかして役員になれるかもしれない。もしかして社長かもしれない。常に、明るい未来を夢見ていても、不思議ではなかった。
いまだに、友子と保と知美が、どうして家を出て行ったのか、はっきりとはわかっていない。
狩野自身は、家族に出て行かれたうわさが辛いのだが、自由になれた喜びもないわけではなかった。
友子も保も知美も、狩野から離れて、自由なのだろう。狩野の、何から自由になりたかったのか、よくわからない。

急に暖かくなってきた。朝の散歩とはいえ、汗ばんでくる。
パンを焼いて、卵と野菜を焼きながら、今日の作業を考えた。
引越し荷物を送ってもよいかと電話があるはずである。今日は、準備をして掃除をしておこうと思った。
狩野は、はじめたらとことんキレイにしなければ気がすまない。友子と一緒に暮らした時は、何かをした覚えがない。掃除機を握ったことも洗濯機のスイッチを押したこともなかった。すべて友子がやっていた。
いま、自分がすべてをやってみて、ごはんがおいしいと言ってやればよかった。洗濯物の匂いが良いと言えばよかった。いろいろ思い当たる。

この家は広過ぎる。よく狩野１人で10年も住んだと思う。とにかく、２部屋は、完璧にキレイにした。微生物もいなくなるかのごとくに、キレイにした。
この２部屋に、荷物を移してもらおうと決めた。いくらなんでも、アパート

からの引越しである。荷物が多いわけではない。
お昼は、冷や麦を食べようと思っていた。14時になってしまった。
冷や麦を茹ではじめた。かまぼこの残りとネギを刻んだ。こういうことが、苦もなくできるようになったことがありがたい。
今日は暑くなった。冷蔵庫から氷を出して冷や麦に入れた。やはり、おいしい。こういう感覚は、研ぎ澄まされてきたような気がする。何がおいしいのかすぐにアイデアが浮かびはじめた。
やはり、おいしい。

19時に佐元のマンションに着くように出かけた。佐元からは何も連絡がない。車を止めて電話してみた。自宅に電話した。
「まだゆっくりしてきて」
いきなり佐元が言った。狩野以外の人だったら困るだろうに。番号を間違えることはないのか。
ゆっくりしろと言われても困る。そのまま車を走らせた。
佐元のマンションの、お客さま用の駐車場に入れた。お客さま用の駐車場は予約が必要なのだが、佐元は、何も言っていなかった。かまわず、駐車した。佐元の四輪駆動のバンが向こうに見える。
車を降りようとした時、車がバックして出口へ向かった。増渕の車だと思った。一瞬だが顔を見た。確かに増渕であった。
ここは佐元のマンションの駐車場である。何をしていたのだろう。
確かにバックして行った。狩野の車を追っていたのか。この駐車場から出るのだったら、バックということはない。また考えさせられる出来事が起こってしまった。これは何だろう。狩野は、駐車場の出口まで行ってみた。もちろん、車の影などない。
狩野は、ゆっくり、マンションの階段を上がった。

## ○黒い文字の壊れたよろい

佐元はすぐにドアを開けた。
「まだ時間かかるけど」

増渕は、佐元のマンションに来ていたのだろうか。佐元の様子からは、感じ取れない。
「なにかある？」
佐元は、狩野の雰囲気を察した。
「誰か来ていたのかと思って」
佐元は、忙しくしているのに、余計なことを言わないでといった態度で、狩野の言ったことに、何も答えなかった。
「明日の晩日本料理だから今晩はスペインでいこうと思って」
狩野は、近くに寄って見てみた。狩野には、スペインの料理はわからない。何もできない。
佐元は、火がやっと入ったのか、シャワーへ急いだ。
「見てて」
何を見ていればよいのかわからない。いきなり噴くのだろうか。何をしているのかわからない。音も何もしてない。
コーヒーメーカーの隣のメモ帳を見に行った。
壊れるよろいと、大きな黒い字で書かれてあった。今日は黒なのか。赤になったり青になったりする。何か意味があるのだろうか。
ダウンロードした『よろい』は、途中まで読んだままである。佐元がここに書いてある壊れるよろいは、まきのわたる『よろい』なのだろうか。
「どうもありがとう」
佐元のシャワーは早い。料理中のシャワーは早い。
「シャワーしてきて」
佐元は、狩野を見ずに、命令するように言った。
風呂場には、狩野の下着が置かれていた。狩野は、このシャワーがスキだ。どういうわけだか、自宅のシャワーより落ち着く。何よりも温度が正確だ。知美たちと交換したアパートのシャワーはどうだろうか。あまり期待はできないだろう。
ゆっくりしてきてとは言われなかった。どうなのだろう。

「どうぞ座ってください」
佐元は、ワインを開けていた。いい匂いがする。スパイスが効いている。

「いただきます」
狩野は、お腹が空いていた。
ワインもおいしい。いい感じである。狩野は、自分の先の事が決まってきたことで、安心感に溢れている。少し太るだろうと思っていた。
「明日はどうなっているのですか」
佐元から何も聞いていない。
「明日は８時に出るから」
東名高速に乗るのだという。伊豆に入るらしい。佐元の四輪駆動のバンには、最新のナビがついている。まだ使い方がよくわからないらしい。多分、佐元は方向音痴だろう。聞いたこともないし感じたこともないが、きっと方向がわからない人だろう。カーナビに頼らないと、とんでもないことになる。
またいつものように、ワインを飲み過ぎた。佐元は、残ったらイヤだと言って、途中で飲むのを止めてしまった。よほど明日の運転が気になるのだろう。
こうなってくると、佐元と狩野は、仲の良い洋風居酒屋での飲み友達となる。なぜ今日の壊れるよろいは黒なのか、本当は、そこを聞きたいのだが、まずくなりそうなとことは避けてしまう。避けるというより忘れている。佐元はヤクルトのファンで、狩野はジャイアンツのファンである。佐元は熱くなって、不公平だと言う。みんなジャイアンツへ行きたがる。
もしヤクルトが15連勝すれば、ファンは３倍くらいになるのだからと狩野は言う。サッカーもお互いにスキだ。佐元は、熱くなって狩野に話す。時間を忘れて大きな声を出す。
そのうち、狩野が黙ってしまう。眠ってしまうのだ。
「ごはんどうする？」
日本食だと、こうなる。今日はスペイン料理である。お腹いっぱいである。
佐元も、狩野に聞いてもらえなくなると、仕方なく器を洗う。
狩野は、眠りながら、考えていた。あの黒文字の壊れるよろいのことだ。これはなんだろう。佐元が書いていることは間違いない。しかも、次第に文字が大きくなる。明らかに、狩野に読ませている。どういう意味があるのか、よくわからない。聞いても、また同じ答えが返ってくるだろう。

「よろいは壊れるって言うから」
どういう意味だろうか。
「明日早いからベッドに行って」
佐元はコーヒーを飲んでいた。
「コーヒー欲しいですけど」
佐元は、黙ってコーヒーメーカーに向かった。黒文字の壊れるよろいが書かれてあるところである。
「気分がワルイわけじゃないんでしょ？」。
狩野は、最高に気分がよいと言った。コーヒーもおいしかった。

〇紫の壊れるよろい
またいつものように、佐元に起こされた。このごろは、いつも佐元のペースで進む。狩野は、まだ半分眠っているのだが、気分はよい。佐元に、任せている。上手である。上手になった。
「早いけど用意しようかな」
ここでシャワーへ行ける佐元がうらやましい。このまま１時間くらい眠っていたいと思うのがフツウだろう。
ウトウトしていた。佐元がシャワーから出て行くのがわかった。こっちには帰ってこない。狩野は、仕方なく、シャワーへ向かった。
佐元のマンションでの、この何とも言えないシャワーの温かさは、狩野を癒してくれる。もう何年も、シャワーの前に、こうしてたたずんでいる。退職後ヒマになって、いまさらながら、ありがたさを感じている。
早く出かけるかもしれない。狩野は、着替えてキッチンへ向かった。
佐元は、スペインの朝ごはんだと言った。時間がかかっている。
「食べてて」
佐元は、着替えに行った。
「コーヒー煎れてあるから」
狩野は、コーヒーを飲みたかった。棚からカップを出してコーヒーメーカーへ向かった。
驚いたことに、今日の壊れたよろいの文字は、紫だった。

ペンを探したが、どこにも見当たらない。どこかにあるはずである。少なくとも、黒と赤と青と紫のボールペンがあるはずである。見渡してみたが、どこにもない。どこかの引き出しだろうが、探せない。
狩野は、次第に、色の違う壊れるよろいに翻弄されている自分を感じていた。コーヒーを飲みながら、キッチンに入ってみた。キレイである。佐元の料理を見ていると、料理をしながら片づけをしている。料理が終わった時には、片づけが終わっている。狩野は、佐元の料理を学習して、同じようにしている。友子は、どちらかというと、料理に集中していた。終わって、一挙に片づけをしていた。
狩野は、佐元方式を学習した。
色付きのボールペンは、どこにも見当たらなかった。
仕方なく、テーブルに座って、コーヒーを飲むことにした。
「冷めちゃうとおいしくないから」
そう言いながら、佐元が急いで出てきた。
「わたしのコーヒーもお願い」
佐元は手際がよい。パンのようなよくわからない食べ物を、フライパンから取り分けて、狩野の皿に盛った。
狩野は、紫の壊れるよろいを見ながら、佐元のコーヒーカップにコーヒーを注いだ。
「スープもどうぞ」
おいしそうだった。
「いただきます」
狩野は、お腹が空いていた。おいしい。
「今晩からずっと日本料理だから」
東名高速を走ると言っていた。どこかに泊まるのだろう。旅館なのだろうか。
それにしても、紫の壊れるよろいが気になる。
「土曜日だけど高速混んでるかな〜」
狩野には、よくわからなかった。５月の連休が終わったばかりである。フツウだったら空いているだろう。
「ご馳走さま」

佐元は、軽くうなずいた。狩野の態度を見れば、満足であることがわかる。またしばらくゆっくりしたくなった。
「ゼンブ食べちゃったのか」
佐元は、驚いたように狩野の皿を見た。完食しなければいけないからゼンブ食べているわけではない。おいしいからゼンブ食べた。佐元のごはんは、ホントにおいしい。
佐元は手際がよい。アッという間に器を洗ってしまう。
テレビを見ている狩野の横を通って、多分、化粧に行った。もうすぐ出かけるのだろう。はじめて高速に乗るのだ。緊張しているだろうか。
こんな佐元が、なぜ独身でいるのか、よくわからない。何も聞いていない。たくさん話をしているのに、肝心なことは何も知らない。曖昧のままにしてある。部屋の様子から、オトコの匂いがしない。狩野に隠すこともないという態度である。ケータイだって、置きっぱなしである。今でも、テーブルの上に置いてある。狩野が、調べようと思ったら調べられる。佐元は、狩野に無防備なのだ。
狩野は、佐元に対して、無防備ではない。狩野のケータイには、メンドーなことがいろいろある。増渕のことが佐元にはメンドーになるだろう。電話は消していない。美薗のことも佐元にはメンドーだろう。大野のことも。友子も保も知美も、みんな佐元にはメンドーだ。狩野のケータイは、ポケットに入れっぱなしである。佐元のように、テーブルに置きっぱなしということはない。
佐元だって、いろいろあることはわかっている。人事部長とも酒向とも鮒野とも。先里はどうなっているのだろう。佐元のケータイを見れば、いろいろなことがわかるのだろう。
なぜ佐元は、ケータイをテーブルの上に置きっぱなしなのだろうか。狩野には理解ができない。佐元は、昔からケータイをテーブルに置きっぱなしではなかった。いつからか、そうなった。はっきりわからない。そう遠い昔ではない。
「そのままでいいの？」
佐元は、何も用意をしない狩野を見て言った。狩野は、佐元のマンションには、何も置いていない。下着すら、佐元が用意してくれたものを持って帰

る。
「このままだけど」
佐元は、大きめのバッグを持っていた。この中に、狩野の下着も入っている。狩野は、下着をどんどん捨てなければ、下着だらけになる。
「コーヒー飲んだら出るから」
そう言って、テーブルの上のケータイをしまって、コーヒーを飲みはじめた。

〇下田の外れのラーメン屋
佐元は、この前、埼玉の自動車練習場から佐元のマンションまで、自分で運転して帰って以来、車に乗ってはいないだろう。
土曜日の都内である。空いているとはいえ、田舎の路ではない。緊張している様子もなく、高速道路への入り方に迷いもなく、スムースに運転できている。このごろのカーナビは凄い。的確である。佐元から、狩野に話しかけられないようにという雰囲気が伝わる。ナビのお姉さんの声に集中している。高速道路に入って、やっと狩野の声に耳を傾けはじめた。
「なにかある？」
なにを言えばよいのかわからない。
「あなた最近変わった」
急に佐元がおかしなことを言った。
前なら、狩野が、こと細かくナビをやったのだと言う。ウルサイのだ。
「あなたの息子さんとかそういうのがイヤなんだよね」
佐元に、ここで、こんなことを言われるとは思わなかった。
「ずっと黙っていてくれてありがとう」
おかしなことになってしまった。狩野は、佐元が、ナビのお姉さんの声に集中しているから話しかけなかった。あたりまえなのだが、以前の狩野は、こんなではなかったらしい。自分勝手だったのだろう。自分がナビをやりたくてしゃべってしまったのだろう。
「休憩するから」
そう言って、佐元は、ウインカーを左に倒した。

佐元は、楽しそうだった。お腹が空くと言って、たこ焼きを食べた。自分の運転について、狩野に何も求めなかった。思ったより、キチンと運転できていることを、佐元自身も、よくわかっている。
「このたこ焼きおいしい」
そう言って、もう１パック買いに行った。
佐元がたこ焼きをパクついている姿は、いままで見たことがない。
車の運転というのはおもしろいもので、自分で運転しなければ路を覚えない。自分で運転しなければ、ドライブのリーダーシップをとらない。
今日の佐元は、いままでの佐元とは違う。なんでも自分で決めている。狩野に聞かない。
「出るけど」
佐元は、そう言って先に車に向かった。車に向かう姿も、今日が３回目の道路運転とは思えない雰囲気がある。
「シートベルトお願い」
佐元が、こうなるとは思わなかった。ずっと狩野の運転する車に従っているだけの佐元しかイメージになかった。何がどうなったのかよくわからない。佐元を変えるものが、何かあったことは事実である。

佐元は、伊豆に向かった。
狩野に運転を変わってくれとは言わない。もう今日はずっと自分が運転すると決めているかのようである。伊豆の道は道路幅が狭いところも多いのだが、佐元は、慣れた道でも走るかのように、スムースに運転をした。なかなか休憩もしなくなった。どこかへ向かっている。できるだけ早く、そこに着きたいのだろう。
「トイレ行きたい？」
佐元は、仕方がないといった様子で狩野に聞いた。
「お願いします」
どこからか狩野と佐元のいままでの立場が逆転している。佐元がリーダーシップを発揮している。
「お昼用意してるからここでは何も食べないで」

トイレから帰ってきた狩野に、佐元は言った。
お昼を用意しているとはどういうことだろう。レストランでも予約しているのだろうか。
「わたし運転上手でしょ？」
やっと佐元は、自分の運転のことについて、狩野に話しかけた。
「もう10年選手のようです」
狩野は言った。
佐元は、一気に、下田まで走った。見覚えのある道に来た。下田からタクシーでやってきた道である。ラーメン屋に海鮮ラーメンを食べに行った。どうしてわざわざこんな所に、タクシーで食べに行ったのか、いまもわからない。今日は、多分同じ所に行こうとしている。あのラーメン屋だろう。近所は何もない、１軒屋のラーメン屋である。前に来た時は、ラーメン屋の前の桜並木がキレイだった。
どうしてここに来るのだろう。さっぱりわからない。
やっぱり、ラーメン屋の駐車場に入った。
「ここで待ってて」
待っててとはどういうことだろうか。
佐元は、自分だけ車から降りて、さっさとラーメン屋に入って行った。
おかしなことである。狩野が一緒では、まずいことがあるのだろうか。
しばらくして佐元がラーメン屋から出てきた。
「どうしたのですか？」
混んでるから名前書いて待っていたと言った。お店に入ると、確かに混んでいて名前を書くようになっていた。おかしなことに、駐車場には車の姿はなかった。
「まだ順番じゃないから」
そう言って佐元は、椅子に座るように言った。
「この人達はどこから来たんだろう」
佐元に聞くともなく話した。
「バスが向こうで待ってる」
観光バスが止まる場所がないらしい。少し離れた場所で待機しているらしい。

やっと名前が呼ばれて、席についた。佐元は黙っている。鍋が運ばれてきた。海鮮鍋なのか。ラーメンも運ばれてきた。
「いっぱい食べよう？お腹すいた」
ビールも運ばれてきた。
「どうぞ」
狩野は、どうなっているのかよくわからない。佐元は、さっきから何も注文もしないし、何もお店の人に話さない。インターネットで注文をしていたのだろうと思った。時間も指定してあったのだろうか。
「これみんな新鮮ね」

佐元は、海鮮鍋に、つゆを足してラーメンをつくった。こんなにラーメンがおいしく感じられたことはなかった。狩野は、ビールが心地よかった。
主人らしき年配の男が、佐元を呼びに来た。
「これゼンブ食べてて」
佐元は、奥へ入って行った。何をしているのか、さっぱりわからない。
狩野は、おいしいこともあったが、鍋のラーメンを残さず食べようと思った。
バスが迎えに来たらしく、お店のお客さんがバスに乗りはじめた。20人くらいだろうか。残ったお客さんは、狩野たちともう１組の夫婦だった。多分、駐車場にもう１台あった、あの車の人だ。
佐元は、顔をキレイにしていた。もう食べないという印象である。
「ここの並木いいから散歩して行こう」
佐元は、自分からさっさと表へ出た。
「ごちそうさま」
料金を払っていないのだが、店も佐元もそのままだった。奥に行った時に払ったのだろうか。
桜並木が緑の並木になっていた。
「いい眺めね〜」
佐元は、狩野に話しているのか独り言を言っているのかよくわからない。
「あそこまで歩いてこよう？」
このラーメン屋さんは１軒である。桜並木の向こうに、お店が何軒か見え

る。そこまで歩こうと言っている。多分、さっきのバスのお客さんたちも、あそこでバスを降りて、ここまで歩いてきたのだろう。絶好である。
佐元は、狩野に腕にからませてきた。おかしなことだが、はじめてである。ベッドを一緒にしているのだが、外では、一緒に歩いたこともない。ましてや、腕を組むなど一度もない。
最近は、なんでも、佐元のペースで物事が動いているような気がする。
なんとはなしに、狩野も佐元も、ぎこちなく歩いている。ゆっくりである。歩いてみると、桜並木の端から端まで、けっこうの距離がある。散歩にはピッタリである。そして、ここには、バスの止まれる駐車場があった。絶景ポイントと書かれてあった。観光客は、ここでバスから降りて、トイレタイムであったり、絶景を眺めたり、自由時間になるのだろう。レストランが２軒あった。
あのラーメン屋さんへは、知っているドライバーしか行かないだろう。観光バスが、向こうにおいしいラーメン屋さんがあることを教えなければ、誰にもわからないかもしれない。
佐元は、４月の桜の時期に、なぜ下田からタクシーを飛ばして、ここのラーメン屋に来たのだろう。そして、次の日も、遠くからタクシーを走らせて、このラーメン屋さんに来た。そして、今度もである。
今回は、自分が運転してきている。
桜並木を、ラーメン屋に向かっている２台の車があった。標識があった。伊豆一番の海鮮ラーメンと矢印である。伊豆一番と書いても、誰もクレームをつけないかもしれない。
佐元は、絶景ポイントに行くと言った。ずっと腕を離そうとしない。
「ラーメン屋からは絶景だよな～」
どっちが絶景なのか知りたいのだろうか。少し高くなっている見晴らし台からの眺めは、さすがに素晴らしい。海がキレイなのだ。海と陸地のコントラストがなんとも言えない。
「ラーメン屋の方が眺めいいけど」
佐元は、独り言のように言った。狩野は、ラーメン屋からの眺めが素晴らしいなどと感じたことはない。ラーメンがおいしいと思っているだけである。どうして佐元は、ここの見晴らし台の眺めと、ラーメン屋からの眺めを、比

較しているのだろうか。しかも、ラーメン屋からの眺めに、想い入れがある。

〇漁港
古い旅館だった。高級旅館という感じではないが、料亭っぽい旅館である。明日は日本料理だから今日はスペインと言って、スペイン料理をつくっていたが、このことだ。漁港が近いこともあって、魚づくしだろう。
「露天風呂あるけど一緒に入れない」
お風呂に行くけどと言っているのか。狩野は、慌てて立ち上がった。
「これ」
下着が入っているであろう袋を渡された。今着けている下着はここに入れろということだろう。
まだ日がある時間である。朝佐元のマンションを出て、この時間に露天風呂に入っている。佐元の運転が上手であることを表わしている。なぜだろう。ペーパードライバーだったのに。佐元は、どこからか変わった。ペーパードライバーが佐元には似合っていた。リアルには動かないタイプである。しばらく前から変わった。何があったのだろう。
狩野には、こういう時間が少なかった。常に急いでいた。あたかも、時間に追われるように動いてきた。露天風呂でノンビリするような、ムダな時間はなかった。考えてみたら、友子とも、こういう時間を共有したことがない。今から考えると、友子も望んでいたに違いない。
狩野は、過去のことを思い巡らすことはない。狩野には似合わない。最近である。朝の散歩の時間にしろ、この露天風呂の時間にしろ、過去を思い巡らす時間になっている。

「日本酒がおいしいって言うから」
今日は日本酒を飲むらしい。次から次に運ばれる海鮮料理は、文句なしにおいしかった。東京が近いとはいえ、こういう食べ方はできない。やっぱり地元がよい。
佐元は、やっと運転の話をはじめた。運転免許をとる時は車庫入れが難しい

と思っていたようだ。今日は、駐車のバックが、驚くほど簡単だったらしい。
「自信過剰にはならない方がいいけど」
狩野は、半ば嫉妬気味に牽制球を投げてみた。
「制限速度はゼッタイ守る」
よくわかっている。制限速度は、それなりの専門家が、事故をイメージして決めたもので、よくできていると佐元は言う。狩野は、感心して聞いていた。狩野も佐元も、出されるものをすべて食べた。
至福の時間だと思った。何も言うことはない。佐元は、お酒の追加の電話をした。今時、部屋で食べさせてくれる旅館は珍しい。

またしても、酔い潰れてしまった。
そして朝早く、佐元に起こされた。佐元は、どうして目が覚めるのだろう。ケータイに知らせてもらっているのだろうか。佐元のこの頃は激しい。今日の佐元も激しい。佐元に犯されている感じがしていた。
佐元は、なかなか呼吸が整わない。
「すごいな〜」
狩野の独り言を聞き流すように立ち上がった。
「露天風呂に入ってくる」
朝ごはんの前に行きたいところがあると言った。
狩野も、露天風呂に向かった。まだ朝の５時である。

佐元は、化粧もしないまま車に向かった。急いでいる。
「どこに行くんですか？」
着いたらわかると言った。
旅館から山を一つ越えたような気がした。街並みに出て海に向かった。アッという間である。佐元は、昨日１日で運転が更に上手になった。
駐車して、佐元は、海側の建物に向かった。ここは漁港だろう。漁船の乾いたエンジン音が聞こえている。何も躊躇するすることなく、壁のない建物に入った。魚が荷揚げされてセリをするとこだろう。何人かの関係者が忙しく働いていた。大きな漁港ではないが、人が多い。

佐元は、何をしたいのだろう。見学したいのか。
佐元は、さっさと、小太りの中年の男のところに向かった。誰だろう。あいさつではなく話をしている。
佐元が建物の外で待っていた狩野のところにやってきた。
「魚見てもいいらしいから」
まだセリまで少し時間があるそうだ。佐元は、狩野に、魚の名前を言って、どういう料理が好ましいのか、話した。セリがはじまるまでに、ゼンブ回るつもりらしい。佐元が次から次に言う魚の名前など覚えられない。あわびやさざえなどもたくさん荷揚げされていた。
狩野は、なぜ佐元が詳しいのか、聞こうと思った。
「どうして魚に詳しいのですか？」
興味があるからと言った。いつもこういう会話で終わってしまう。曖昧になってしまう。ただ興味があるだけで、魚の名前と料理の名前が、次々に言えるようにはならないだろう。
佐元は、魚をゼンブ見て歩いて、考え事をはじめた。
そして、セリがはじまった。狩野には、なにがなんだかわからない。なぜ佐元が真剣な顔をしなければならないのか、意味がわからない。
セリが、こんなに早く終わるとは思わなかった。考えたら、そうである。セリは、早く終わらないといけない。魚を早く運び出さないといけない。
佐元は、一言も話さなかった。じっとセリを見ていた。
佐元は、発泡の箱を持って戻ってきた。
「帰ったらお刺身食べよう？」
魚を頼んだのだろう。佐元が、魚を調理できることは知っていた。今晩の魚が欲しくて漁港に来たのだろうか。どこかに並べられていた魚なのだろうが、狩野にはわからない。

〇下田のスーパーマーケットと先里に似た男
「おかえりなさい」
旅館の女将さんが、いかにもお馴染みさんらしく、佐元に言った。
「お魚買ってきました」

佐元は、うれしそうに言った。
部屋は片づけられ、朝ごはんが用意されていた。
「いっぱい食べよう？」
佐元は、ごはんとみそ汁をよそった。
「ちょっと聞きたいんだけど」
狩野は、聞いてみたくなった。
「常連さんのように話していたけど」
佐元は、狩野に、狩野が商売したことがないからわからないのだと言った。たとえはじめてのお客であっても、常連さんのように振舞うのが、客扱いでは大事なんだと言った。
佐元も、この旅館ははじめてなのか。４月の桜の季節に来た時には、もっと大きな旅館だった。
「いただきます」
佐元は、おいしそうに酢のモノを食べはじめた。
佐元は、どうして客扱いなど知っているのだろう。佐元は、狩野と同じ、関エトレの勤め人である。客扱いなどやったことがないはずである。
佐元については、次々にわからないことが出てくる。それでいて、狩野を愛していることが態度で現れる。愛は、人が動く押しボタンであるというが、まさしく、佐元の狩野に対する態度は、人が動く押しボタンそのものである。それにしても、わからないことが多過ぎる。

まだ朝の８時になっていない。
今日は、伊豆半島の東海岸を、海岸線に沿って小田原に出ると言う。
「出よう？」
佐元は、身なりを整えて出てきた。
「元気があるな〜」
狩野は、独り言のように佐元に言った。
「ちょっとここに寄って行くから」
佐元は、そう言って、下田の街並みにあるスーパーマーケットで車を止めた。朝早くからやっているらしい。コンビニとは違うのだが。
佐元は、入口の果物と野菜から順番に見て歩いた。何かを買おうとしてい

る。カゴを持っている。マンゴを２つ買った。野菜には手を出さない。マンゴをどうするのだろう。佐元は、値段を見ている感じがした。さっき漁港へ行って魚を買ったのに、また魚を見ている。
「みんな活きがいいよね」
狩野に話しかけているのか独り言なのかわからない。肉の売場まで見て歩いた。おかし売場に行って、チョコレートとせんべいとクッキーをカゴに入れた。
そして、おすし売場で握りを買った。
「景色いいから外でお弁当にしよう？」
やっとスーパーマーケットの意味がわかった。それにしても、隅から隅まで見ているのは、どういうわけだろう。
佐元は、お茶とヨーグルトとティッシュペーパーを買って、やっとスーパーマーケットを出た。
狩野は、一瞬立ちつくしてしまった。
向こうからスーパーマーケットに入ってこようとしている男は、先里である。どんどん狩野に近づいてくる。佐元を見たが、買ったものを確かめている。先里を見てはいない。先里らしき男は、狩野を見ずに、スーパーマーケットのカゴを取りに行った。そして、何事もなかったかのように、中へ入って行った。狩野は、先里らしき男の後姿を追ったが、すぐに左に曲がって見えなくなった。
狩野の見間違いだろうか。それとも、先里が無視したのだろうか。佐元も、同じ会社の人間だった。顔を知らないわけはない。
「どうしたの？」
立ち止まっている狩野に、佐元が聞いた。
「先里さんに似ている人がいた」
佐元は、先里って誰なんだと聞いた。同じ会社であっても、先里と佐元は、話したこともないかもしれない。
不思議なことが多い。それも、みんな佐元の周りのことだ。追って行って、先里かどうか確かめたいと思ったのだが、佐元は、エンジンをかけている。

このまま進むと、また昨日のラーメン屋の前を通ることになる。

佐元は、予定していたかのように、ラーメン屋の駐車場に車を止めた。
まだ朝の９時過ぎである。
ラーメン屋はまだやっていなかった。準備中だった。
佐元は、ラーメン屋の横の畑に行った。トマトが赤くなっていた。
２つを切り取ってラーメン屋に入って行った。狩野は、準備中と書いてるお店には入れない。
狩野は、外で景色を見ていた。確かに、このラーメン屋から見る景色は絶景である。海岸線と海とのコントラストが素晴らしい。
佐元は、なかなか出てこない。何をしているのだろう。休憩するような時間ではない。
やっと、トマトを２つ、袋に入れて出てきた。
「いいんですか？」
スーパーマーケットでいいトマトがなかったから買わなかったと言った。昨日、ここのトマトがおいしそうだったので、今売ってもらったと言った。
どうも佐元の行動は、理解できない。

そもそも今度のドライブは、佐元がはじめて高速道路を運転するので、一緒に行ってくれというものだった。今も、伊豆の東海岸を小田原に向かっているが、狩野は、佐元の運転で気になることは何もなかった。運転の姿勢も固くて窮屈そうなところもなく、リラックスしている。狩野もリラックスしている。
どこか景色の良いところでお昼にしたいと言っている。どこも見晴らしが良い。
「ここ車止められるかな〜」
佐元は、もうペコペコだと言って、峠のテッペンの少しの車留めに止まった。
「反対のとこ草だから」
狩野に見てきてくれと言った。少し階段があって、その上は、見晴らしのよい高台になっていた。ベンチもある。狩野は、大きく輪をつくって佐元に知らせた。
「ベンチがあるの？」

それでも佐元は、ビニールシートを持った。
「ああ〜いいじゃない」
佐元は、気に入ったようだった。うれしそうに、シートを広げてお茶や握りすしを広げた。

## 〇ラーメン屋の先里

またもや佐元に起こされて挑まれた。疲れていないのだろうか。
昨日も、ずっと１人で運転した。替わろうと言ったのだが、練習に来たのだからと言って、狩野と交替することはなかった。まだ明るいうちに、佐元のマンションに着いてしまった。
佐元は、狩野をシャワーに追いやって、朝漁港で買った魚をさばきはじめた。しばらく見ていた。素早くなっている気がした。話ができそうもないので、狩野はシャワーに行った。
そこから先は、またいつものように物事が進んだ。そして、ワインで酔い潰れてしまった。

「駅まで送ってくれるでしょ？」
佐元は、もうＯＬの姿だった。最近は、42歳には見えない。
狩野は、駅のかなり手前で佐元を降ろした。佐元は、名残惜しむこともなく、手で合図して駅へ向かった。
狩野には、気になっていたことがあった。今日、ラーメン屋に先里がいるのかどうかである。11時にならないとラーメン屋は開かない。一旦家に帰ることにした。
壊れるよろいが最初に書かれてあったのは、先里という文字と、壊れるよろいである。佐元が、先里と壊れるよろいという文字を書いた。
昨日のスーパーマーケットで、先里がいたと狩野が話した時、それは誰だという態度を、佐元はした。これはどういうことだろうか。
狩野が家に着いた時には、先里を昨日見た疑問が、自分の中で大きく膨らんでいた。どうしてもはっきりさせなくてはならない疑問であった。
とりあえずパソコンのメールを調べなければならない。ケータイには、誰か

らも連絡はなかった。パソコンにも何もない。迷惑メールだけが、何件も入っていた。
エクアドルのコーヒーを煎れた。
コーヒーを飲みながら、狩野は、佐元にこだわりはじめている自分を感じていた。昨日会った男が先里かどうか、どうでもいいことだ。なぜこれほどまでに自分の中で大きくなっているのだろう。
狩野には、佐元に惚れられているという意識が強い。それは、もう何年も前からである。一方で、狩野が佐元に惚れている感覚は少ない。いつでも佐元からは離れられると思っている。
しかし、いま、昨日の先里が、本当の先里かどうか確かめたがっているのは何だろう。嫉妬などではない、不思議なこだわりなのだ。
考え事をしていると、アッという間に11時になってしまった。狩野は、急いで車に向かった。

狩野には、先里のバンダナ姿が、昨日のスーパーマーケットで、野球帽を深くかぶった、先里に思える。同一人物に見える。
「ネギ醤油とギョーザとサービスライスをお願いします」
狩野は、いつも食べているメニューを、先里に言った。今日は主人がいないらしい。11時半だが、もうお店は混み合っていた。１人で忙しくしている先里に、話を聞く雰囲気ではない。昨日もここで働いていたのか、それだけを聞きたかった。
狩野は、先里が２日続けてこのラーメン屋さんで働かないことを知っている。
「いいえ」と言われればそれまでである。
そもそも、なぜ先里が下田のスーパーマーケットにいなければならないのか、それが理解できない。あの男は、カゴを持ってスーパーマーケットに入って行った。カゴに入れるくらいの買物をしようとしていた。
いきなり３人のお客が入ってきて、カウンターしかないお店は、満席になった。もう先里とは話ができない。
３人のお客さんの注文を聞いて、先里は、狩野の、ネギラーメンとギョーザとサービスライスを運んできた。

「お待ちどうさまです」
狩野は、昨日もラーメン屋にいたのか聞きたかった。流れがそういう流れではない。
帰りに、もう一度チャンスがある。お金を払う時である。
昨日の男は、いまラーメンをつくっている先里だったのだろうか。もし先里だったとしたら、昨日、先里は、狩野と佐元に気がついていないことになる。
「昨日とんでもないとこでお目にかかりました」
先里だったら、こう言うはずである。やはり、他人の空似だったのか。
伊豆でおいしいものをたくさん食べてきたはずだった。べつに、ギョーザにネギラーメンが食べたかったわけでもないし、お腹が空いていたわけでもない。
それなのに、先里のつくるネギラーメンとギョーザはおいしかった。うっすらと汗がにじんできた。こんなにおいしかっただろうか。先里は、ずっとラーメン屋をやるつもりなのだろうか、狩野の前任の研究所長である。狩野には、さっぱりわからない。
「ごちそうさま」
狩野のことばに、ラーメンをつくる手を止めて、先里が狩野のところへやってきた。
「お元気そうで何よりです」
狩野は、いくらですかと聞くことしかできなかった。

結局、狩野は、昨日の男が先里であるかどうか確かめることができなかった。ある意味では、昨日の男が先里かどうかは、どうでもよいことである。狩野らしくないこだわりをしている。帰りの車の中で、どうでもいいではないかと、自分を納得させようとした。
そんなことより、狩野は、前に進まなければならない。狩野の目指している、もっとステージの高い所に立つ自分を、実現しなければならない。
それにしても、狩野は、自分を翻弄しているのは、佐元だと思った。もうすぐ、名東エレク専務の仕事が忙しくなると、狩野は、生産する会社に出向くことになる。佐元とも、今のように頻繁には会えないだろう。それでいいと

思った。どうも、佐元には、疑問符が多い。

〇美薗に電話した

つい先日まで、寒い日が続いて、冬の様相だった。今日は暖かい五月晴れである。狩野は、最近のいつものように、朝ごはんの前に散歩に出た。今日は火曜日である。通常日では、この時間は、外に出ている人は珍しい。出勤や通学の準備で忙しいのだろう。
狩野は、家波が切れた道で、美薗に電話をした。６月生産開始で、８月１日納品だった。３台で２億４千万円である。狩野は、まだ何もやっていない。
「狩野さん連絡が遅れて申し訳ありません」
元気そうな美薗の声だった。
５月28日に名古屋に来てくれないかという話があった。生産を委託する候補２社のうちの１社らしい。三釘製作所である。
狩野は、ホッとした。５月28日に行けばはっきりするのだが、いくらなんでも、機械の製作が進行しているはずである。ひょっとすると、狩野は、そのまま名古屋の可能性がある。
狩野は、歩きながら、軸足を美薗との仕事に移しているのに、佐元に翻弄されている自分が、うまく説明できない。自分が自分にうまく説明できない。
狩野は、急いで自宅に帰って、美薗の論文を読むことにした。この論文にそって機械がつくられているはずである。浸透圧によるナチュラルな水とミネラルの生産である。狩野の特許も使わなければ、機械として成立しないことはわかっている。
大型プラントのような設備では、現在でも、世界では用いられているが、美薗のアイデアは、比較的小型で労力が少なく、24時間無人で稼働する機械である。ほっておけば、真水ができる。

パン生地があれば焼きたいところであった。仕方なく、買っておいた食パンを、納豆と一緒に焼くことにした。卵も焼いて、ハムもそえた。弱ってはいたが、レタスとキュウリと。
アッという間に朝ごはんができる。

もし名古屋に常駐するようなことになっても、狩野は、何も不自由はしないと思った。アパートだけである。近所にスーパーマーケットのあるアパートがあれば、それでよい。なんといっても、食べることが一番大事だ。規則正しく食べることが健康には一番だと思っている。この10年間の狩野の元気さが、それを証明している。
狩野は、器を洗って、パソコンの前に座った。
美薗の論文を読んだ。自分の論文も読んでみた。そして、美薗のつくったパンフレットである。
狩野には、どう考えても、この一台８千万円の機械が、世の中に普及しないはずがないと思えてしまう。
そして、この装置のウイークポイントも、狩野には理解できるような気がしている。三釘製作所というらしいが、けっこう苦労しているのではないと想像できる。
インターネットで探してみた。三釘製作所は、水処理装置を受注生産している小さな製作所である。社長は、三釘十郎だった。
早く三釘製作所に行きたくなった。やはり、狩野は技術者である。身体がうずいてしまう。

狩野は、美薗からの情報で、いつも安心が広がっていくことを感じていた。やはり、狩野は不安なのだ。そもそも、役職定年の封書が発端である。この仕打ちには耐えられない。狩野は、自分では知らなかったのだが、社長になるはずだったのだ。退社を決意しても、狩野には、多くの話があった。現代大学の教授の話は、狩野の研究者としての実績や、商品づくりの技を見込まれたものだった。それも途絶えた。狩野は研究所長だった。狩野を頼っていた下請けの会社が多かった。狩野が声をかければ、その場で決まってしまうほどの関係だった。それも、社長の鮒野の策略で、途絶えてしまった。エレクトロニクスの業界の道も途絶えてしまった。
これだけのことがあると、いくら自信過剰気味の狩野であっても、不安でいっぱいになってしまう。
狩野にとっての、唯一の新しい道は、美薗の仕事である。
これから毎日、28日まで、準備をしておこうと思った。狩野は、こういう

ケースの仕事は得意である。確かに、いままでやってきたテーマとは異なる。エレクトロニクスと水処理である。しかし、わけのわからないことに、ある道筋をたてていくことは、何事にも変わりがない。
狩野は、パソコンの中に、フォルダをつくって、情報を収集しはじめた。
もっと早くからやればよかった。一昨日、下田のスーパーマーケットで会った男が、先里であるかどうかなど、どうでもよかったではないか。
人はおかしなものだ。狩野は、自分が、おかしな穴に入り込むかもしれない可能性があったことを、あらためて認識した。

夜、佐元に、28日に三釘製作所に出向くことをメールした。

〇朝から水処理の勉強をする
狩野は、いつものように、朝早く目覚めた。昨日の夜、遅くまで水処理の勉強をしたのだが、今日も集中しようと思った。
狩野は、集中して勉強することが得意である。楽しい。秋田に出て一人暮らしをはじめてから得意になった。ながい時間、集中していられる。受験勉強も得意中の得意である。何かのテーマが与えられると、そのテーマを追いかけられる。
狩野が、少しまずいと思っていることは、何もない真っ白な状態から、何かを発想することだ。自分には、向いていないと思っている。なにか課題が与えられないと、勉強ができない。水処理のことを勉強している。楽しくて仕方がない。多分、うまくやれると思う。
前任の研究所長だった先里は、いまだによくわからない。狩野とは、違う人種のようである。狩野が先里から研究所長を引き継いだ時、多くの研究テーマが先里の提案したものだった。新製品もガンガン出ていた。先里は、任期で狩野と交替した。しばらくは、狩野から多くの新製品が出た。
しかし、先里が研究所に係らなくなって、研究所からの新製品が急激に薄れた。
狩野自身は、先里のやり方は、失敗も多くて、効率が良くないと思っている。なんでも手を着けるのではなくて、よく調べて、絞って研究に着手すべ

きだと思っている。そのようにやってきた。
先里は、多分勉強が好きではないのだろうと思う。

散歩に行く前に、狩野は、昨日つくっておいたパン生地でパンを焼いていた。焼ける時間が散歩の時間であると思ってはいたが、ピッタリだった。狩野がキッチンに向かった時に、パン焼き終了の合図が鳴った。グッドである。レタスとキュウリとマヨポンである。
朝ごはんがおいしい。満足である。
コーヒーを飲みながら、狩野は、水処理の勉強をはじめた。狩野は水処理が専門ではない。水処理の専門家ではないが、多分、詳しい人になってしまうだろう思っていた。28日まで、まだ少し時間がある。三釘製作所に行くまでには、終わらせたいものだと思っていた。自信もある。
不意に名波から電話があった。８７０ヶ所のうち４９０ヶ所の部品を交換したらしい。
今となっては、狩野の手伝えることはなにもなくて、狩野の意欲も失せている。狩野は、名波の話を聞いているだけだった。
「小康状態なのですか？」
連休明けから徐々にクレームが増えてきて、対応に追われているらしい。いまだ明確なメッセージを出していないために、交換部品の生産は終わっているものの、設置場所の部品交換が進んでいないらしい。
狩野には、名波が、なぜ電話してきたのか、よくわからなかった。もう手伝うことは何ない。
「これ以上クレームが増えたら、狩野さんにもお願いしようと思っているのですが」
やっと電話の意味がわかった。人海戦術をやっている。これ以上クレームが続くならば、狩野にも手伝ってくれということなのだ。しかし、もう狩野は手伝えない事情がある。28日には、三釘製作所に出向かなくてはならない。
「私もそろそろ忙しくなってきていますから」
狩野は、そう言って牽制球を投げておいた。今だって、水処理の勉強中なのだ。時間がほしい。
せっかく忘れかけれいたイヤな出来事が、頭をよぎった。

どうも、名波は、狩野にとって、招かざる客である。

しばらく、全く水処理の勉強が進まない。狩野は、朝ごはんの器を洗って、冷麦の用意をした。それでも、酒向や鮒野の顔が出てくる。森知は相変わらず、鮒野にベッタリくっついているのだろうか。
思いは巡ってしまう。どうにもならない。
狩野は、晩ごはんもついでに用意しておこうと思った。カギを締めて、スーパーマーケットへ向かった。晩ごはんのアイデアがなかった。お店で考えよう。とにかく、今は、名波のイメージを消さないといけない。
スーパーマーケットのお姉さんかおばさん達は、みなさん狩野の顔を知っている。もうずっと買物に来ているお客である。ポイントカードも有効に使っている。最近は、今日のように、通常日のお昼に、買物に来たりする。定年にでもなったのかと勘違いされそうである。
カツオが目に止まった。まだお昼前である。カツオにワインを買った。やはり、早い時間にスーパーマーケットに来ると、うまい買物ができる。
まだお昼までには時間があった。勉強しなければならない。

やはり晩ごはんの買物に出かけたのは、よい選択だった。名波の電話が、頭に残ってはいるのだが、気にならなくなった。また必死になって、水処理の勉強をはじめた。
夜になったことを忘れて、狩野は勉強をした。慌てて、ごはんを炊いて、カツオの背だけを少しフライパンで焼こうと思った。
また不意に、雪乃下から電話があった。
雪乃下は、名波が狩野に電話したことを知らない。４９０ヶ所、昨日まで部品交換したと言ったので、４９０という数字は、確かなのだろう。
狩野は、雪乃下が、どういう意味で狩野に電話してきたのか、はかりかねていた。
午前中に名波から電話があり、夜になって雪乃下からの電話である。何かあったことは事実なのだろう。それも、狩野に係ることだろう。しかし、狩野には、さっぱり思い当たらなかった。イメージすらできなかった。
狩野は、やりかけの勉強をクローズして、ワインを注いだ。そしてカツオを

焼いた。今度は、雪乃下の顔を消さないといけない。
何かが、また動いている。イヤな予感がする。しかし、それが何であるのか、狩野には予測すらできない。

〇知美からの連絡
今日も昨日から続いている水処理の勉強である。集中してやっている。かなり進行する。
お昼にナポリタンをつくっていると、知美から連絡があった。もうすぐ、家を交換しないといけない。
「23日の日曜だけど、荷物を持って行っていいですか？」
知美だけは、フツウの会話ができる。友子と保には、身構えてしまう。
「２階の２部屋はキレイにしてあるからいつでもいい」
知美の電話はそれだけである。狩野は、23日は家にいないといけない。何時に来るのだろうか。狩野は知美に電話した。
朝積み込むからお昼ごろになると言った。車はどうするのだろう。来てくれとは言わなかった。よくわからないまま、また曖昧に電話を切った。
知美は、これでいいのだろう。とにかく、日曜に荷物を運んでおきたいのだ。
狩野は、２階を見てこようと思った。ナポリタンをそのままにして、２階へ上がった。23日に、どのくらい持ってくるのかわからない。ただアパートからである。多くの荷物があるとは思えない。ラクラクだと思った。
狩野は、ピザソースをつくり置いている。なくなったら、トマトの缶詰からピザソースをつくっておく、そして瓶詰めにして冷蔵庫で保管する。そのピザソースを使ってナポリタンにする。これがけっこうおいしい。ハムと合う。

不思議なことに、知美の連絡は、頭に残らない。残らないわけではないが、思い巡らさない。心地よいのだ。多分、知美と一緒に住んでも、うまくいくような気がする。
今日は水処理の勉強が進む。このままだと、28日に、三釘製作所に伺ったと

しても、ピントズレになることはない。
暗くなっていた。
今日の晩ごはんのことを考えていなかった。
こういう時は何も考えずにスーパーマーケットに行くに限る。遠くない所にスーパーマーケットがあって助かっている。交換したアパートの近くには、スーパーマーケットがあるのだろうか、車で買物に行くのだろうか、よくわからない。
塩サバを焼いて身をほぐして、トマトやレタスやキュウリやカイワレやワカメと一緒にして、サラダを大皿いっぱいにつくった。ラッキョウの漬け汁をドレッシングにした。絶好である。我ながら、グッドアイデアだと思った。
ごはんとみそ汁とサラダだけである。
ワインに合うと思ったのだが、控えた。今日は、夜も勉強したかった。

こうやって集中して勉強していると、いままで何をやってきたのか、不思議に思うことがある。もう何年も何年も、明日の研究所の会議のための事前準備を家でやってきた。最近は、研究所長として、どういうふうに発言するかをシュミレーションしてきた。それが、毎日ある。会議が毎日あった。本来は、会社で考えるべきことなのだろうが、会社にいる時は、考える時間などない。何も考えないで会議に出席すると、何も決めきれない。結局、先送りをするだけになってしまう。研究所長の自分が決めなければ、誰も決めきれない。
よくよく考えてみたら、翌日の会議のための勉強をずっとやってきていて、最近やっている、水処理の勉強のように、進捗した感じがない。
こなしていると言うのだろうか。仕事をこなしてきたのだろうか。これでは、ここ数年、研究所の頼りなさをとやかく言われてきたが、それはそうかもしれないと思う。ここ数日である。
もう反省しても遅い。しかし、多分、また名東エレクでも、同じような局面になるだろう。技術的な責任者をやらないといけないのだろう。仕事をこなすという感覚だけは止めなければならないと思った。
これだけ集中して水処理のことを勉強すると、いろいろなことがわかってくる。

夜遅くなって、知美からまた電話があった。
５月30日が日曜である。５月30日に２往復して、布団以外を運び終えたいらしい。31日は、布団と少しの荷物を持って、アパートを出て、自宅へ行くと言った。アパートの鍵は、そこで渡します。
「お父さんは、その後、すぐにアパートに移れるのですか？」
知美がお父さんと言ったことに驚いた。時々知美と電話で話すことはあるが、お父さんと言われたことは一度もない。
狩野は、書籍だけは、納戸に積んで入れてあるから、それは置かせてくれと言った。すると、車で２往復するくらいの荷物しか残らない。
「じゃ～そこでカギをもらっていいですか？２往復したら」
狩野は承知した。
友子や保は、事務的に交換したいのだろう。ひょっとすると、23日も30日も31日も、友子と保は、いないかもしれないと思った。
名東エレク専務の話が先に決まっていたら、自宅とアパートの交換の話はしなかったのだろうと思う。毎月、30万円を友子の口座に振り込んでいる。それが難しくなって、20万円に減額してもらった。自宅とアパートを交換する条件を付けてである。
それにしても、この家の大部分は、何も使われない。狩野は、ほとんど、玄関とキッチンとリビングと風呂とトイレしか使わない。アパートと同じだろう。
熱いコーヒーを煎れて、また集中した。

〇海鮮ラーメン

いつものように散歩に出て、朝のウインナー入りのパンを焼いて、レタスと卵のサラダを食べて、コーヒーを飲んでいた。ここのところの水処理の勉強の進捗には、満足している。勉強をはじめていた。
佐元からの電話である。
「今晩海鮮ラーメンがおいしくできるようになったから」
狩野がヒマかどうか聞かない。

曖昧な返事しかしていないのに、佐元は、仕事中なのか、さっさと電話を切った。
狩野は、少しイラっとした。狩野は、今いい線いっている。勉強がおもしろい。進行している。これ以上進まなければ三釘製作所でうまくいかなくなるといった状態は、過ぎている。通り越えているのだ。機械の試運転で、どんな事があっても、勉強していればよかったといった事態にはならない。
勉強がおもしろい。今晩も、ここで勉強したい。
困ったことに、まだ朝のうちに電話があった。多分、これから夕方まで、集中できない。佐元のことを考えてしまう自分を想像していた。
それにしても、海鮮ラーメンがおいしくできるようになったとはどういうことだろうか。最近の佐元は、さっぱりわからない。それで狩野に驚いてほしいのだろうか。
佐元が、どんなにおいしく海鮮ラーメンをつくれるようになっても、下田のラーメン屋さんの海鮮ラーメンには敵わないと思う。そんなことはわかりきっている。メンドーなことではなさそうなので助かる。先里が下田のスーパーマーケットにいたといったことは、メンドーだ。もう狩野は、水処理に集中しなくてはいけない。
海鮮ラーメンがおいしくできるようになったから食べに来いは、束の間の休息にはいいかと思える。
水処理の勉強が進まない。どうでもいいことなのに、佐元のことを考えてしまう。

やっぱりまずいことになった。お昼になってしまった。そして、ラーメンをつくっている。海鮮ラーメンなど、下田のような漁港が近くにないと、新鮮でなくておいしくない。しかもこの近所には、材料もないし高い。ちくわを切っていれるくらいしかできない。野菜ラーメンになる。暖かくなって、野菜が安くなった。ナスも入れられる。そのままでは色が出てしまう。油で焼いて、最後にラーメンに乗せる。ナスラーメンになった。夜はまたラーメンだろうに。
想像していたよりもはるかにおいしかった。ナスがおいしかった。
ナスラーメンがおいしいのはグッドなのだが、佐元にはまってしまう自分が

情けない。
少しは集中して勉強を進めないと、佐元のマンションでも、後悔して気のない顔をしてしまう。
濃いコーヒーを煎れて、佐元を打ち消そうとした。集中して水処理の勉強をしなければならない。

研究所の社員と同じ電車にならないように、少し早目の電車に乗った。結局、佐元の誘いを打ち消すことができないまま、狩野の勉強は、今日は進まなかった。
「早いじゃない」
佐元も帰ったばかりなのだろう。着替えもしてなかった。冷蔵庫からなにやら箱を出して、皿に移していた。
「グッドね〜」
そう言って、佐元はシャワーに向かった。
ラーメンである。下ごしらえのための煮炊きはない。
冷蔵庫から出した発泡の箱には、下田の漁港の送り状がついていた。海鮮ラーメンの材料を下田から取り寄せたのだ。
伊勢海老もあった。
「一緒にシャワーしてもいいけど」
佐元が、ほとんどハダカのまま言った。
「すぐ出るでしょ？私も早いから」
了解といった顔をして佐元はシャワーに向かった。
狩野は、コーヒーメーカーの横のメモ用紙を見に行った。真っ白だった。狩野の予想としては、黒のボールペンで、壊れるよろいと書いてあるだろうと思っていた。何も書かれていないことは、意外だった。
佐元は、ケータイもテーブルに置きっぱなしである。見たくなる衝動に駆られる。多分、佐元のケータイには、狩野が驚くような顛末が記録されているだろう。
なぜ佐元がこうも警戒心がないのか不思議である。会社でもこうなのだろうか。狩野にだけ警戒心がないのだろうか。狩野には、佐元がよくわかっていない。そもそも味方なのか敵なのかさえもわからない。

アッという間に佐元がシャワーから出てきた。
「早いな〜」
そう言いながら狩野もシャワーに向かった。多分５分とかからないような気がした。佐元は、着替えをしているだけなのだ。そのためにシャワーをする。

「どうかな〜」
佐元は、自信があるのに不安そうな顔を狩野に向けた。
「おいしいです」
佐元は、山のようになっている海鮮をより分けて、麺を出そうとしていた。
「茹で過ぎてない？」
麺を忘れてしまうのだと言った。それはそうだろう。これだけのものが入っている。麺を忘れる。しかし、ラーメンはラーメンである。麺がおいしくなかったら、海鮮ラーメンはおいしくない。
「やっぱり塩がおいしいんでしょうね」
狩野が、そうだと言うだろう質問をした。
「味噌も醤油もおいしい」
佐元は、おいしくつくれるようになったからと言った。ずっと海鮮ラーメンをつくっていたのだろうか。当然のこととして、醤油味も味噌味もやってみたのだろう。今日は塩味である。塩味がやはり海鮮ラーメンには合うのだろうと思ってしまう。
狩野は、伊勢海老を皿に移して、食べはじめた。
海鮮ラーメンは、食べ終わるまでに時間がかかる。特に、伊勢海老などが入ると、時間がかかる。あまり熱いままの汁だと、麺がとろけてしまう。
技があるのだと言った。
なるほどとは思うのだが、なぜそこまで佐元がやるのか不思議である。不思議だが、聞かない方がよい気がした。
これだけの海鮮の材料が入っていると、ラーメンといえども格闘になる。
「やっぱり〜海鮮鍋のしめにラーメン入れるメニューがうまくいくよな〜」
佐元は、独り言のように言った。
「海鮮鍋だと高くなっちゃうからな〜」

佐元が何を考えているのかわからない。高いとは価格のことだろうか。狩野は、かまわず、伊勢海老を食べていた。すごくおいしい。１匹など食べたことがない。

「下田のラーメン屋さんと同じくらいにおいしいです」
狩野は、感じていることをそのまま言った。佐元は、うれしそうに、器を下げはじめた。
「コーヒー煎れてあるから」
狩野は、棚から狩野のコーヒーカップを出して、コーヒーメーカーに向かった。
狩野は、危うく声を出すところだった。
緑色のボールペンで、壊れるよろいと書かれてあった。
さっきこの部屋に入って、佐元がシャワーの間に飲んだコーヒーの時には、メモ帳は真っ白だった。何も書かれてなかった。
また狩野の頭はグルグル巡ってしまった。佐元は、いつこれを書いたのだろう。電話もなかった。コーヒーもさっきのままである。新しく煎れたのではない。いつ書いたのだろう。

## 〇東京のラーメン屋食べ歩き

おいしい海鮮ラーメンを必死に食べていて、ワインを忘れていた。酔わないまま、緑の壊れるよろいに惑わされていた。
「ごはんどうする？」
狩野が返事をしないと、ワインとつまみを出してきた。
「わたしちょっと明日のこと考えるから」
返事もしないで、狩野は、佐元が出してきた東京の地図を見ていた。狩野は、明日どういう予定か聞いていない。今晩すら、帰ってほしいのか泊まってほしいのかわからない。
「明日都内の有名海鮮ラーメンを食べ歩くから」
狩野は、驚いてしまった。狩野も一緒に行けといっているのだろう。
「最初は馬場から行くか」

シャープペンシルで印をつけはじめた。どうしてシャープペンシルなのだろう。どこから出してきたのだろう。あの緑のボールペンはどこにあるのだろう。当然のことながら、赤も青も黒もあるはずである。狩野は、赤の壊れるよろいも、青の壊れるよろいも、黒も見ている。今日は緑だ。
「何時から開いてるかネットで調べて」
急に指示がきた。狩野は、佐元のパソコンに向かった。佐元のパソコンに触ったことはない。
「こっち持ってくれば？」
佐元のパソコンは、真っ白のコンパクトなブックである。料理をする時は、常に小さなキャスターの上に置いてある。気になったら開いて調べている。キャスターは、本当は器を運ぶためのものだろう。
狩野は、キャスターごと持ってきて、馬場の海鮮ラーメン屋さんを検索した。
メールがどうなっているのか見ようと思った。必ず、狩野が驚く内容になっていることは確実である。
「わかった〜馬場だけわかればいいから」
確かにそうだ、スタートが問題である。それにしても、佐元は、あっちこっち印をしている。一日に、そんなに多くは食べられない。
「明日さ〜どっちか水にしないと難しいから」
２杯頼まないで、半分づつ食べるのだと言った。
「恥ずかしくないでしょ？」
狩野は、恥ずかしいと思ったが、そのまま実行されることは確実である。
結局、狩野は、馬場の海鮮ラーメン屋さんの開店時間を調べただけで、そのままパソコンを使うことに躊躇した。
いままで気がつかなかったが、佐元には疑問がたくさんある。にもかかわらず、ケータイにしろパソコンにしろ、狩野には無防備である。佐元がシャワーをしている時にでも、見ないといけないと思った。

今日は、朝早く起こされることはなかった。ゆっくりである。ワインの量が少なかった。寝る前に挑まれた。佐元はピクリとも動かない。もう７時である。狩野は、トイレに起きた。

狩野は迷った。シャワーに行くか佐元の隣に潜り込むか。結局、シャワーに行った。
快適である。佐元のマンションのシャワーは気持がよい。
狩野は、佐元が用意してくれていた下着に着替えて、着替えのために佐元のところへ戻った。佐元は、まだピクリとも動かない。狩野は、着替えて、コーヒーを煎れようと思った。
コーヒーとフィルターがどこにあるのかはわかっている。
狩野は、何もすることがなく、テレビのスイッチを入れた。土曜日である。外国の旅の話をしている。
コーヒーメーカーが出来上がりを知らせた。用意しておいたカップを持ってコーヒーを注ぎに行った。
狩野は、驚いてしまった。少し前、コーヒーをセットした時は気がつかなかった。オレンジのボールペンで、壊れるよろいと書かれてあった。
これはなんだろう。昨日の夜は、緑色だった。今日の朝はオレンジである。佐元が書いていることには間違いがない。朝早く起きて書いたのだろうか。明らかに、狩野に知らせたがっている。どういう理由なのか。
コーヒーがおいしいはずなのだが、味がわからないくらいに驚いてしまった。佐元に聞くべきだろうか。

佐元は、すっぴん美人だと思っていた。もう40を過ぎているのだろうが、色白ですっぴんがキレイである。狩野が考え事をして、見るでもなくテレビを眺めていると、佐元が現れた。
「おはよう〜朝ごはんはないから」
狩野は、お腹が空いていた。それにしても、いつシャワーをして着替えをしたのだろう。オレンジの壊れるよろいのことを、どうやって聞こうかと考え込んでいた。またタイミングを逸してしまった。

「どんぶりを貸してください」
馬場のラーメン屋の店員は、佐元が何を言っているのかよくわからないようだった。
「わたしちょっとだけ食べたいだけだから」

店員は、やっと理解してどんぶりを持ってきた。
多分、こういうお客さんは、子ども連れのお母さんしかいないだろう。自分のラーメンを少ししか食べない子どもに分ける。
狩野は、正直恥ずかしかった。佐元は、どんぶりに、海鮮の具とラーメンとつゆを１／３くらい移した。醤油味だった。
「わたしの方がおいしい」
佐元は小声で独り言を言った。狩野には、さっぱりわからない。２つ頼んで、食べられないからと余せばいいと思った。いつからか、佐元は変わった。こういうことをするとは、想像できなかった。
佐元は、馬場の駅のベンチで、何やら書き物をはじめた。海鮮の具を書いている。価格を書いているようだ。
「わたしのとどっちがおいしかった？」
狩野は、佐元の方がおいしかったと答えるに決まっている。伊勢海老など入らない。
「東京で海鮮ラーメンは難しいですね」
佐元は、うなづきながら、狩野のことばを書いていた。
「どうするのですか？」
やっと狩野は、疑問の１つを聞いた。
「せっかくつくるんだから負けたくない」
負けず嫌いの人はいるが、ここまではないだろうと思った。

新宿でも渋谷でも、海鮮ラーメンを食べた。また佐元は１／３しか食べない。
「お腹いっぱいなってる？」
狩野は、そうでもないと言った。
「横浜行くから」
中華街に行くと言った。横浜の中華街には、すごい海鮮ラーメンがありそうである。
さすがに中華街である。伊勢海老入りのすごいラーメンがあった。佐元は、目を丸くして、２つ頼んだ。
「これいくらですか？」

狩野は、おいしいと思って、値段を聞いた。
「３３００円」
狩野は、下田のラーメン屋の値段を知りたくなった。
「下田で食べると半分になるんだけど」
佐元は、独り言のように言った。
おいしかった。まだ４つ目の海鮮ラーメンである。このボリュームである。
確か。８店行くと言っていた。晩ごはんもラーメンになりそうである。
佐元は、お店でメモを書きはじめた。
「わたしのとどっちがおいしかった？」
いつも同じことを聞かれる。
「同じくらいかな」
狩野のことばを、そのままメモに書いている。

○知美が荷物を運んできた

その夜、佐元のマンションに帰ったのは、夜の10時を過ぎていた。狩野は、疲れて黙りっこくなっていた。佐元は、上機嫌であった。理由はわからない。多分、佐元の海鮮ラーメンの方がおいしいからだろう。
佐元は、マンションに着くなり、パソコンに向かった。
狩野は、お腹がいっぱいであった。
「明日知美が荷物持ってくるから帰るから」
狩野は、帰ってもよいか聞いている気がした。
「わかってる〜平気だから」
狩野は、なぜか必死にパソコンに向かっている佐元を見ながら、佐元の部屋を出た。
狩野には、さっぱりわからない。なぜ１日中海鮮ラーメンを食べ歩かなければならないのか。疲れた。

ケータイの音に目が覚めた。
「11時に行くけどいいですか？」
知美だった。

狩野は、急いで起きて、髭をあたって髪もキレイにした。狩野は、一人で家にいる時でも、髭はあたる。３６０日朝は、必ず髭をあたる。しかし、髪をキレイにすることはない。しかし、今日は知美が来る。キレイにしておこうと思った。
コーヒーメーカーをセットして、散歩に出かけた。
昨日の夜は、食べ疲れていて元気がなかった。今日はお腹が空いていた。佐元はどうしているのだろう。まだ寝ているだろうが。日曜である。
つくっておいたピザ生地でパンを焼いた。ソーセージと一緒に焼くとおいしい。コーヒーがおいしかった。
まだ８時である。11時に来ると言った。何もすることがない。洗濯をしておこうと思った。曇り空だが、洗濯ができる時は、いつもやっている。ソックスの替えがない時は、ガッカリする。
狩野は、勉強の続きをしたかった。勉強をはじめて、あることを思いついた。知美と一緒にお昼を食べよう。
こういう時は、いいアイデアが浮かぶ。天丼にしよう。
早速下ごしらえをはじめた。
海老はない。魚もない。ブタも鳥もあるが、天丼にはならない。狩野は、急いでスーパーマーケットに向かった。
こうまでして知美と一緒に天丼が食べたい。誰かが言っていた。愛は、人が動く押しボタンであると。
狩野は、つくづく、知美を愛していると思った。知美が狩野をどう思っているかは、どうでもよい。狩野は、天丼の材料を買うためにスーパーマーケットに急いでいる。
狩野は、ごはんを炊いた。３人前にした。もし、友子と知美だったら困る。保も一緒である可能性は少ない。
下ごしらえをしながら、11時に来て11時10分に、用事があるから帰ると言うかもしれないと思った。その可能性が高い。
それでも準備するから愛なのだろう。一人で、晩のごはんも天丼でよい。
狩野は集中して勉強をはじめた。水処理の勉強である。

11時ピッタリに、ピンポンが鳴った。

なぜだか、狩野は、ドキドキしている。
「２階だから」
狩野のことばは少ない。玄関をいっぱいに開けて、車に向かった。軽自動車のバンだった。
「この自動車買ったんです」
知美が言った。自動車を持っていなかったのだ。
冬物の衣類が中心だった。ボックスが６本だった。バンなのによく積める。
「お昼一緒に食べようと思って用意してるんだけど」
狩野は、早めに言っておきたかった。
「わかりました」
知美は、意外に、すっとＯＫした。
娘だが、若い女性に食事を誘う感じである。狩野は、ホッとした。もう10年も会っていない。狩野の知っている知美は、女性ではなかった。子どもだった。それでも、フツウに、会った瞬間から荷物運びができるのは、やはり、娘だからだろう。
知美は、家を見ていいかと聞いた。
「自分の家だから」
知美は、狩野から、自分の家だからと言われるとは思わなかったようである。自分が住んでいた家ではあるが、10年が過ぎている。知美は、１部屋毎、見て歩いていた。
「下でごはんの用意してるから」
そう言って、狩野は、キッチンへ降りた。

買ってきた漬物と急いでつくった味噌汁がおいしいと思った。ネットから、つけ汁を探ってつくった天丼のタレもおいしい。
「手伝います」
知美がキッチンにやってきた。
「そこからどんぶりを出してください」
知美は、迷っていたが、大きい方のどんぶりを２つ出した。
「ごはんついでください」
天ぷらを揚げながら、狩野は、知美に言った。

「いっぱい食べていいですか？」
狩野は、３人前つくっていてよかったと思った。知美が、こうなっているとは思わなかった。もっと、狩野に似て、カッコつけではないかと予想していた。
「いただきます」
知美は、味噌汁から箸をつけた。
「おいしいです」
味噌汁と漬物はおいしかった。味見した。天丼がわからない。狩野は、天丼を食べてみた。
カリッと揚がっていておいしかった。タレもおいしい。これは絶好だった。
「おいしくできたな〜」
狩野は、独り言のように言った。
「いつもごはんつくってるんですか？」
知美は、狩野のイメージが違うと言った。自分でごはんをつくるイメージなど、狩野にはなかったのだろう。
知美は、大きなドンブリ一杯の天丼を完食した。そして、話が途切れて、知美は、器を洗いに、シンクに行った。狩野は、コーヒーを煎れた。

狩野は、多分、知美が狩野と暮らしても、違和感がないだろうと思った。やはり、自分の食事を自分がつくれることが、一緒に暮らす人にプレッシャーを与えない。
10年前の知美も狩野も、自分の食事を自分でつくれなかった。今は、知美も狩野も、自分のことは自分でできる。今からだったら、家族が破綻することはないかもしれない。
洗濯物をたたみながら、狩野は、知美の感じを思い出していた。

〇集中して勉強する
寝る前から、今日は水処理の勉強をしなければと思っていた。この週末も佐元から電話がかかってくるに決まっている。佐元から電話があれば断れない。28日には、名古屋の三釘製作所に行かなくてはならない。

顔を洗いながら、狩野は、今日の決心をしていた。
コーヒーメーカーをセットして、狩野は、散歩に出た。
出てすぐに佐元から電話があった。
「海鮮どんぶりおいしくできたから金曜日やるから」
金曜日は28日である。三釘製作所に行っている。何があるかわからない。
「遅くなっても待ってるから」
狩野は、海鮮どんぶりどころではなかった。狩野のプライドもかかっている。電話をしながら、イラっとする自分を感じていた。昔は、こうして友子にムチャを言ったのだと思った。佐元は、狩野の返事にかまわず、自分のやりたいようにやる。最近である。佐元は、こんなではなかった。どこからか、佐元は変わった。

コーヒーがおいしい。焼いたパンもおいしい。もう少し野菜を食べないといけないと思う。野菜は、どうも食べにくい。すぐに傷んでしまうのが難点だ。そんなことより、今日は、集中しないといけない。
狩野は、コーヒーを飲みながら、勉強をはじめた。
やはり、狩野は、こういう仕事が向いている。勉強が得意だからだ。ところが、外顔は、狩野の凛とした態度が、リーダーを思わせてしまう。確かに、リーダーもうまくやっていく自信がある。
ただ、狩野もよくわかってないところがある。先里のことだ。狩野が、先里より劣るところは何もないとは思う。しかし、先里は、何かが違う。先里は、勉強しなくても、何かのアイデアをひねり出す。マジックのようなところがある。それが狩野には不思議だ。
先里が、ラーメン屋でアルバイトをしているのも不思議である。先里は、狩野とは違う。もしかして社長になるかもしれないといった雰囲気はない。したがって、上に嫌われることもないし、リスクもない。先里が、どこかの会社の役員になろうと思ったら、ムリなくできる。なぜラーメン屋なのか、よくわからない。研究を続けたいから資金が必要だと言った。
先里の考えていることはよくわからない。
あの勉強もしないでポッといい考えを出すことが、なぜなのかわからない。
狩野とは、ゼンゼン異なるものだ。

狩野は、コーヒーを注ぎに行った。余計なことを考えはじめている。

それでも、今日は集中して水処理を勉強できている。
12時になって、腹の虫がグッと鳴いた。何か食べないといけない。つくり置きしているピザソースでナポリタンをつくろうと思った。閃いた。こういうことは、よく閃くようになった。なんでも、自分でやっていると、地盤ができてくる。ピザについては、すべて自分でやっている。ピザ生地でパンも焼けるし、ピザソースでナポリタンがおいしい。
狩野は、狩野流のナポリタンはおいしいと思う。最高である。

ノドがカラカラになって、コーヒーを注ぎに行った。集中できている。時計を見ると、もう５時半である。４時間くらい、時間も忘れて集中していたことになる。
ここ数年、誰にもジャマされずに、４時間も集中したことなどないだろう。勉強したことがない。毎日欠かさずやってきたのは、明日の会議の準備だ。会議の最後は、狩野が何かを言って終わりになる。誰も何も決めようとはしない。あたりまえだろう。責任が伴う。
なぜもっと勉強になるようなことをやらなかったのだろう。10年ものながい時間である。研究所の所長になって６年である。新しいことを勉強していない。
水処理のことは、以前に勉強したとはいえ、責任の伴うことではなかった。特許は申請したが、それだけである。しかし、今度は違う。名東エレクの専務として、技術のトップとして、水処理に関する考えを述べなければならない。
勉強は、うまく進んでいる。
晩ごはんをつくらないといけない。
また閃いた。酢豚をやろう。簡略酢豚だ。時々やっている。ブタブロックが安い時にやっている。カレーライスも、このブタブロックだとおいしい。
アッと言う間にできてしまう。とりあえず、ごはんを炊こう。

プロ野球を中継している。サッカーのワールドカップも近い。テレビを眺め

ながら酢豚を食べた。簡略したつくり方だが、実においしい。ネットの中で教わった。
お酒はない。最近、お酒を飲まなくなった。勉強する時間が欲しいからだ。佐元のマンションでは、お酒漬けになる。何も勉強になることがない。だからといって、狩野から、佐元のマンションに行く喜びを消し去ることはできない。
おかしなものだ。狩野は、勉強して何かが得られることに価値があると考えている。それなのに、佐元のマンションには行きたい。自分でもよくわかってはいない。
狩野は、また佐元が大きくなってくるのを感じた。このままだと、また勉強できなくなってしまう。振り払わなければならない。
頭に中の佐元と戦いながら、夜が更けるまで勉強が続いた。

〇真野の転勤

さわやかな５月の朝だった。狩野は、久しぶりに満足感を味わっている。勉強がよくできた後は満足感が大きい。中学時代からずっと続いて、ここ10年くらい忘れていた。この満足感を忘れていた。
少し心配だった、これから先の身分や収入のことも片づいている。狩野には、安心感が広がっていた。そして、勉強の満足感である。
きっと、三釘製作所においても、狩野に満足してくれると思っている。
狩野は、ごはんが食べたくて、炊飯器のスイッチを押した。エクアドルのコーヒーのスイッチも押して、スニーカーを履いた。だれもいないのに「いってきます」と言ってしまった。
歩きながら、今日もガンバローと思った。
狩野が、ごはんを朝食べることは珍しい。時間がかかることもある。しかし、今日は納豆が食べたくなって、ごはんを炊いた。らっきょうのつけ汁のサラダに、卵を焼いた。納豆だけが食べたいのだが、ついでに用意してしまう。
らっきょうは、どういうわけか、自分で漬けている。友子に教わった。教わったというより、今の季節に、必ず漬けていた。子ども達は、あまり好き

ではなかったが、狩野と友子は、らっきょうがなければごはんにならないくらいに、好きだった。
去年から、サラダのドレッシングに、らっきょうのつけ汁を使いはじめて、まいったと思った。最高においしい。酢が効き過ぎの感じもあるが、らっきょうの香りが出ていて、サラダがおいしくなる。
コーヒーを飲みながら、勉強をはじめてしまった。器を洗わなければならない。ごはんの量からして、お昼もごはんだ。牛丼でもつくろうと思った。

11時ごろ、真野から電話がきた。
「お世話になりました」
人事異動だという。熊本の営業所だそうで、酒向からは、無能だとハンコを押されたようなものだと言った。
「狩野さんを引き継げなくて申し訳ありません」
真野には、まだ複雑な権力争いが、わかっていない。
「元気にガンバってください」
そう励ますしか、狩野にはことばがない。結局、中国の新しい生産拠点はつくれずに、現在のままである。中国の会社に、関エトレの商品の生産を委託している。中国の会社は、自分のブランドで、どんどん事業を拡大している。
あれだけ、中国の会社は、関エトレを恐れていた。密約があることを恐れていた。なぜ中国の会社は、いきなり関エトレを無視するような行動に出たのだろう。なぜ鮒野社長は、強く出ないのだろう。狩野には不思議であった。
しかし、理由はわからないが、中国の会社が、関エトレに恩義がありながら、関エトレを無視するカタチで事業を拡大することは、誰にも、止められない気がした。なぜだかわからない。
これで、狩野が、こん身を込めた中国生産プロジェクトは、衰退しようとしている。狩野の功績も泡のようになりつつある。狩野の今後の身分としても、何も期待することができなくなってしまった。
また、頭が勝手に考えてしまう。
狩野は、水処理の勉強をしないといけない。

牛丼をつくりはじめた。料理は、このような時に、うまくいく。集中しないとおいしくできない。それに包丁を使う。危ない。
ごはんを食べるだけであったら、頭は、切り替わらないかもしれない。料理をするから切り替わる。
狩野は、卵をどうするか考えていた。狩野は、牛丼に卵を使う。急いで、近所のスーパーマーケットに行った。晩ごはんの時に、また来なければならないだろう。しかし、今は、卵が欲しい。
卵と一緒にキムチを買ってきた。多分、キムチを牛丼に入れてもおいしいだろうと思う。今日は、漬けものとして食べる。
自分で、おいしくできたと感心する。最近、上達している。なんでもおいしい。
やはり、狩野のやっていることに理がある。コーヒーを飲んでいる頃には、真野の話は消えていた。ついでに器も洗って、水処理の勉強に集中しようと思った。

## 〇三釘製作所に出向く日が明後日になった

三釘製作所に出向く日が明後日になった。
緊張してきたわけではないが、熱を帯びてきていることは確かである。狩野は、集中している。
短い期間であったが、集中して水処理を勉強できた。うまくいった。狩野は、本当は水処理の専門家ではないが、たとえ先生と言われても、体面を保てるようになっていると思った。自信らしきものも出てきた。
今日も５月晴れである。もうすぐ、ここの散歩道ともお別れである。ずっとここに住んではいるが、散歩などしたことはなかった。それが、ここのところ、毎朝の日課になっている。日課にすると、様々なものが見えてきて、けっこうおもしろかったりする。ほんの小さな小川だが、今日は水がキレイだったりする。花が、いきなり咲いたりする。高い壁の立派な家の中から、親子であろうか、怒鳴り声が、今日もする。毎日ではないが、抜き差しならない声である。
狩野は、こういうことがよく見えていなかった。見ようともしなかったし、

聞こうともしなかった。狩野がずっと見てきたものは何だったのか、今はよくわからない。
パンが焼けていた。コーヒーもできている。らっきょうの漬け汁のドレッシングでサラダを食べる。なんとも満足な朝ではある。多分、佐元と一緒の朝よりも満足できる朝である。一人の方が、今は満足できる。

また勉強に集中した。
狩野は、集中すると時間を忘れる。時々、パソコンの時計を覗かないといけない。昔は、ごはんを忘れることがあった。勉強に集中すると、お昼ごはんを食べたかどうか、忘れてしまう。お金がなくなって、アルバイトをはじめた方が、キチンと食事がとれる。
今は、食事を忘れて勉強に集中するようなことはない。多分、自分で食事をつくっているからだ。何をつくろうと考えることが、グッドである。楽しみでもある。たいして時間と手間をとらせることでもない。ギョーザの皮を自分でつくれたりすると、けっこう楽しいものだ。
12時を過ぎた。狩野は、考えるでもなく思い描いていたとおり、醤油ラーメンをつくりはじめた。簡単にできる。頭は、水処理の勉強のことが動いている。醤油ラーメンは、手が勝手にやっている。失敗することもない。今の季節は、しいたけがおいしい。鳥肉としいたけの醤油ラーメンになった。
テレビをつけて、テレビを眺めながら、鳥肉としいたけの醤油ラーメンを食べた。
今日は、醤油ラーメンを食べながら、勉強のことが頭から離れない。深く入れば入るほど、またわからないことが出てくる。
狩野が、まだ正確に掴んでいないことは、新しい機械の詳細である。設計図はもらってはいるが、１号機を見ていない。納入を１カ月遅らせたとはいえ、もう出来上がっているはずである。狩野の頭の中では、水処理機械は動いている。
三釘製作所には、この機械をつくった専門のスタッフがいるのだろうが、どういう人だろう。興味がある。その機械は、人がつかない自動機械である。どうなっているのだろう。次第に、狩野の頭は、リアルになっていく。問題があるわけではない。早く、この機械をつくった人に会いたいと思う。

パソコンの時計を見ると、５時になっていた。コーヒーを飲むのも忘れている。どうしてこのように勉強しなかったのだろう。中国に行くまでは良かった。勉強していた。そして、自分の考えをつくりあげていた。中国に行ってから、何かに集中して勉強したことがない。仕事をうまくやることに集中していた。仕事をうまくやるとは、社内調整であったり、取引先との関係であったり、部下との関係であったりである。毎日忙しいのだが、新しい何かを築いている感じはしない。

15年くらい、もったいない時間を過ごしたのではないかと思いはじめていた。

一生懸命に仕事をした。そのために家族とも離れてしまった。狩野の地位も上がった。見た目も上がった。仕事はうまくいった。

仕事とは何だろう。考え込んでしまう。考え込むとよくない。水処理の勉強をすることが先だ。

足が勝手にスーパーマーケットに向かっている。カツオが食べたくなった。甘くない白ワインを冷たくして飲みたい。頭に浮かんでしまったら、すぐにやらないと、消えてくれない。勉強のジャマになる。

季節は季節である。確かに、おいしそうなカツオが並んでいる。このスーパーマーケットは、近くにあることもあって、頻繁に来る。

友子たちと交換するアパートの近くに、スーパーマーケットはあるのだろうか。車で出かけるのであれば、そうそう出かけられない。

それもあるが、28日の三釘製作所次第では、名古屋にアパートを借りなければならない。そうなる可能性が大きい。

時間は早かったが、カツオを焼いてしまったら、もう冷たいワインを飲んでみたくなった。調べて買ったから間違いはないだろう。まだ完全ではないが、冷たくはなっているワインを飲んでみた。

カツオを切って、ショウガと一緒に手づかみでほうばると、もう止まらなくなる。ごはんはしばらくかかる。

シンガポールの、国をあげての水資源を大事にするプロジェクトのテレビ番組を、パソコンで何度も見ている。やはりこれからは、水資源が、人類が生

き残るうえで、最も重要だろうと思う。狩野は、勉強すればするほど、よい仕事に係れることを感じる。
番組を見ながら、カツオをほうばっていた。ワインもおいしい。

○知美からの電話

もう明日には、三釘製作所に出向く。今日は、朝起きた時から、多少緊張気味である。このような緊張感は、ここ数年、なかった。なぜだろう。この緊張感はなんだろう。
新鮮なのだろう。狩野にとって新鮮である。新鮮なことをはじめるから緊張する。本来、研究などという仕事は、新しいことばかりをやっていないといけない。常に新鮮なはずである。なのに、しばらく、今回のような緊張感を味わったことがない。
ながく研究所長をやっていて、慣れてしまったのだろうか。研究テーマに新鮮味が足りなかったのだろうか。多分そうだ。同じことばかりやっていたのだろう。
新鮮ということばは、大事なのだろうと、今思っている。もっと早く思いつけばよかった。

散歩から帰って髭をあたっていると、知美から電話があった。
「30日にも荷物を運びたいんだけど」
２往復したいと言った。
「お昼を用意していいんだろうか」
娘なのに、若い女性に食事を誘う感じである。
「ありがとうございます」
友子も一緒なのか、聞きたかった。保もである。知美が言い出さなかったということは、また知美一人だろうと思った。
いよいよ、こっちも近くなった。このながく住んだ家とも別れなければならない。
狩野は、10年間、この大きな家で１人で暮らした。数日で終わる。友子と保と知美は、小さなアパートだろう。３人で狭い部屋で暮らした。考えてみれ

ば、おかしい。勝手に出て行ったのだからと言えば、それまでである。
狩野に、愛が足りないと言えば、それもそうである。
焼けたパンを取り出していると、また知美から電話があった。
「31日は、どうすればいいですか？」
友子と保のことだ。
「２往復しないといけないから８時ごろ１度行きます」
そこでアパートのカギを渡してくれると言った。
知美は、友子と保のことを考えている。友子と保が、朝早く出かけることになるのだろう。顔を合わせたこともあるのだが、今回は、会わないようにしようとしている。知美がしっかりしている。
エクアドルのコーヒーがおいしい。パンもおいしい。
明日は三釘製作所で、帰りは佐元のマンションである。多分、29日も佐元のところだろう。30日の朝には知美が来る。準備はしてきた。狩野には、明日の三釘製作所が大事である。今日は、もう掃除はしないことにした。残すは30日である。
それにしても、明日の三釘製作所次第で、大きく変わる可能性がある。そのまま名古屋の可能性もある。考えても仕方がない。
とにかく、今日も勉強しようと思った。
コーヒーを飲みながら、勉強をはじめた。テレビはどうするのか相談をしていなかった。狩野は、大きい薄型のテレビである。持って行くのか。
狩野は、知美に電話した。
「小さいけど薄型で最新だけど」
テレビも交換することにした。ますます荷物が少なくなる。
政治のニュースを朝からやっている。政治もタイヘンである。狩野は、かまってはいられない。

12時になったのは知っていた。一瞬考えて、納豆を探しに行った。１つ残っていた納豆に感謝して、パン生地に挟んで焼いた。朝もパン生地を使ったパンだった。急いでいる時は便利である。まだ冷蔵庫にはパン生地が残っている。
今日はコーヒーがなくなった。エクアドルの新しいコーヒーを煎れた。

こういうことは、手が勝手にやってくれている。ピザ生地つくりは、グッドだった。手が勝手に動いているが、頭は、水処理を勉強している。
パンが焼けた。下手をすると口をやけどするくらいに熱い。コーヒーと納豆の生地パンは相性が良い。
とにかく、何があっても対処できるように、準備しておかないといけない。
狩野は、そのまま、また没頭した。

暗くなって、狩野は、のぞみの時間を確認した。東京８時40分発である。７時にはここを出なくてはならない。
朝も昼もピザ生地のパンである。手がごはんを炊いている。牛丼にでもしよう。一応、メモリースティックも持って行くことにした。勉強の整理が入っている。パソコンはいいだろう。
久しぶりにビールにした。牛丼にカブの刺身にナスの味噌汁と豆腐である。
ビールは少なくなった。特に、勉強に集中しはじめて少なくなった。
そのまま11時になってしまった。
狩野は、慌てて器を洗った。30日朝、ここに帰ることになる。下手をしたら知美が来てしまう。キッチンとリビングの整理だけはしておかないといけない。
バッグと背広を用意した。そしてシャワーに向かった。12時には眠れるだろう。

〇三釘製作所へ
銀の鈴の前で美薗は待っていた。
「早い時間にすみません」
美薗は、つくばからタイヘンだと思っている。実はそうでもない。あまり時間はかからない。
美薗は、駐車所へ向かった。ここから車で行くという。
狩野は、背広で来ている。多分、作業着に着替えないといけないのだろう。
今日は、何も持ってきていない。作業着に、前の会社の関エトレ株式会社という名前が刺繍してある。それ以外の作業着を持っていない。

今日の予定を美薗に聞きたかったのだが、止めた。たとえどんなことがあっても、対応しなくてはならない。
高速に乗って北へ向かった。そう遠くではないと言った。
美薗は、製品の納入を、８月１日から９月１日に延期したと言った。３台同時に生産している。お金は、受注した際に、半額をいただいているそうで、それだけで１億２千万円になる。ポイントは、９月１日に、キチンと３台を納品できるかどうかである。納品できないと、返金を要求されると、美薗は言った。確かにそうだ。

高速を降りてしばらくして、三釘製作所に着いた。
美薗に案内されて、社長室に向かった。工房がいくつかあって、その１つの空き部屋が社長室兼応接室という感じである。
社長の机の前に置かれた会議用のテーブルの前で、三釘十郎が待っていた。62歳になったという。眼光が鋭く、いかにも、技術の叩き上げの人という感じである。一緒に紹介されたのが、唐克左門であった。72歳で、今回の機械の製作を担当している。狩野と係りが大きくなる技術者である。72歳には見えない、若々しい。
狩野は、名東エレク株式会社専務の名刺を出した。狩野は知らなかったが、三釘製作所は、名東エレクの筆頭株主だった。４千５百万円の出資をしている。美薗の出資金は３千３百万円に増えていた。
話を聞いていると、三釘十郎は、美薗にホレている。水を生産する機械を、ここまで仕上げて、三釘製作所の仕事にしてしまった。美薗の腕は、すごい。狩野も、そう思う。
名東エレクも、三釘製作所も、まだ小さな会社だが、前途洋々としている。三釘十郎も、やっと自分の時代が来るかもしれないと言った。
とりあえず、三釘製作所内を案内するらしい。大きな工場ではない。すぐに終わってしまう。狩野は気づかなかったが、三釘製作所は、食品のための機械をつくっている会社である。第一工房は、大きな天井の高い工房で、クッキーを連続生産する機械だという。機械をつくると、そのままクッキーの連続生産ができて、クッキー工場のようになる。第一工房は、クッキー工場である。

水処理の機械の工房は、第４工房にあった。以前は、塩をつくる機械をつくっていたそうである。やはり、天井の高い工房だが、工房は狭い感じがした。クッキーの機械が大きいからだろう。
第４工房での機械の状況は、お昼からの説明になった。お昼を過ぎていた。
三釘と唐克と美薗と狩野は、社長室に戻った。
弁当が用意されていた。

唐克が三釘製作所の作業着を用意してくれた。濃い紫色の作業着だった。誰もこの作業着を着ていない。刺繍は三釘製作所である。社長の三釘しか着ていない作業着だった。背格好が同じだと言った。
唐克は、１台を運転させることに集中していた。２台も組み立てに入っているのだが、１台の実証運転が急がれる。
午後から、機械の説明は三釘から聞いた。唐克は、機械の組み立て作業を行った。唐克がいないと、組み立て作業はストップしてしまう。ある意味では突貫工事をやっている。６月中ごろには試運転に入りたいらしい。
話を聞くと設計図とずいぶん異なっている。あたりまえである。実際に作業を開始すると、思ってもみないことがたくさん出てくる。設計図と異なることをやるのだが、設計図を修正する時間がない。
狩野は、設計図を修正する仕事を引き受けた。狩野は、設計図と機械を見比べながら、チェックしていった。ノギスを片手に大きさや材質をチェックしていった。これは結構な作業である。しかし、設計図を書き直すと、学習できる。狩野には、絶好の仕事である。
美薗は、忙しいからと言って帰った。車は名古屋ナンバーだった。美薗は、名古屋のどこかに住んでいるのだろう。それとも、以前に行ったことのある名東エレクの看板がかかっているところだろうか。もうあそこにあったプロトタイプには、用はなくなっているだろう。三釘製作所が、ここまで仕上げている。
社長の三釘も、第１工房に用事があるからと入って行った。様子がわかってきた。唐克にすべてがかかっている。設計図も唐克が描いた。美薗も三釘も、あまり詳しくはない。この機械には詳しくない。
狩野が、どれだけ唐克をバックアップできるかがポイントである。

狩野が何もしないと、作業は、ますます遅れていくのだろう。唐克に聞きたいことがあるのだが、最小にとどめた。

狩野は、６月１日から、毎日この作業を行いたいと唐克に言った。もちろん、唐克は助かる。どんどん先に進んではいるが、どこかで見直しをやらなければいけないと思っていた。
もし良かったらと、唐克は、狩野を、裏にある、三釘製作所の寮に連れて行った。ホテルに泊まるのも自由だが、ここだと２部屋空いているので、タダで泊まれるということだった。
４畳半で、ベッドと机があるだけの狭い部屋である。布団もあった。トイレとシャワーは共同である。キッチンと食堂も共同で、自分で食事をつくる。
狩野は、今の自分の生活と変わりがなく、６月１日からこの部屋を借りたいと言った。唐克は、誰かに電話していた。70過ぎの管理人がやってきて、狩野に、説明をはじめた。そして、契約書にサインをした。電気代も水道代も部屋代もタダである。
いままでの狩野には考えられないことだった。中国の工場に３年いたが、立派なマンション住まいだった。悠々であった。６月１日からのこの部屋は、三釘製作所の、ひょっとして、外国人労働者と同じ部屋である。
狩野は、以前だったら、ホテルに泊まっただろう。しかし、現在は、そのホテル代の支払いに困る。名東エレクの専務とはいえ、まだ売上がたっていないのだ。

〇佐元の海鮮どんぶり

名古屋を22時ののぞみだった。佐元のマンションには、１時近くになって着いた。
「疲れてそうね」
狩野は、晩ごはんを食べていなかった。だんだんはっきりしてきた。美薗は忙しそうである。社長だからあたりまえだろう。狩野のメンドーなどみられない。三釘社長も忙しい。クッキーの生産機械を仕上げなければならない。唐克は典型的な技術者である。狩野のメンドーなどみていられない。狩野

は、あたりまえだが、自分のことは自分でやらなければならない。
狩野は、シャワーを浴びながら考えていた。しばらくは、つくばと佐元のマンションと名古屋を、行ったり来たりするのだろう。そして、あの機械に、のめり込む気がしてきた。唐克と同じである。
「わたしもペコペコだった」
冷たい日本酒にしてあった。辛口の日本酒である。
狩野も新幹線で弁当の誘惑に負けそうになった。ペコペコなのである。
「ゆっくり食べて」
佐元が言った。３分で食べられそうだった。
いきなり、空腹感がなくなっていく。友子も言っていた。狩野は、ずっと満足には食べてきた。しかし、どこかで、いつも空腹を感じていた。それが、ついつい油断すると出てくる。３分でごはんを食べてしまって、友子をガッカリさせる。佐元も同じである。佐元は「ゆっくり食べて」警鐘を鳴らす。今も同じである。佐元を無視して、空腹を満たそうとする。
「朝まででも待ってるんだからね」
狩野は、自分勝手だと思う。佐元は最近変わった。いままで、狩野に小言を言ったことはなかった。とにかく、狩野にホレていたのだ。
「どんくらいおいしかったか覚えておいて」
明日は、また東京の海鮮どんぶりを食べ歩くのだと言った。
正直、狩野には、そういう心の余裕がなかった。三釘製作所の仕事が気になる。図面を追いつきたい。
「何かあった？」
少々黙りっこくしている狩野に、佐元は聞いた。
ついつい、なんでもないと言ってしまう。
それにしても、佐元の海鮮どんぶりはおいしい。

昨夜は、お酒がすすまなかった。酔い潰れることもなかった。
佐元は、待ちかねていたように、２時半ごろ襲ってきた。狩野は、疲れ切っていた。佐元の魅力は勢いを増してきている。もし前の佐元であったら、応じきれたかどうかわからない。
佐元がキッチンでなにかやっている。朝ごはんだろう。イーストの匂いがし

ている。パンだ。何時かよくわからない。顔を上げるのを躊躇している。
「ごはんできたから」
いきなり佐元の大きな声が聞こえた。狩野は飛び起きた。キッチンで音がしていたと思っていたのに。
アッと言う間にシャワーをしてテーブルに座った。佐元は卵を焼いていた。
「コーヒーお願い」
狩野は、棚から、佐元と自分のコーヒーカップを出して、コーヒーメーカーに向かった。
狩野は、危うく、カップを落としそうになった。
「壊れるよろい」の文字が、大きく、緑のボールペンで書かれていた。
ひょっとすると、昨日の夜も書いてあったのかもしれない。狩野は、このメモを見る余裕がなかった。三釘製作所のことで、頭がいっぱいだったことがわかる。
狩野は、落ち着いて、佐元と自分のコーヒーカップにコーヒーを注いで、テーブルに運んだ。もう一度メモを読んでみた。
「壊れるよろい」
今度はしっかり見た。間違いない。
「パンも少しだし卵も少しだから」
佐元は、あまり食べるなと言っている。今日は、朝から海鮮どんぶりだ。
「海鮮どんぶりは11時からしかやってないから」
佐元は、地図を見ながら言った。
狩野は、どういうわけだかお腹が空いていた。
「パンないよ？」
佐元に見破られていた。お腹が空いている。狩野は、やっと時計を見た。もう９時30分だった。11時まで、もう少しだ。
狩野は、壊れるよろいのことを聞いてみたかった。チャンスを探していた。
佐元は、コーヒーを飲みながら、地図を見ている。
「どうして海鮮に凝っているのですか」
壊れるよろいのことを聞きたいのに、海鮮のことを聞いてしまう。
「せっかく料理するんだったら負けたくない」
なぜか、次の質問が出てこない。狩野だって、ピザに凝っている。どうせや

るんだったら、宅配のピザよりおいしくなりたい。
「10時になったら出るから」
狩野は、佐元のベッドの上から、唐克に電話をした。
「昨日はどうもおつかれさまでした」
唐克は仕事をしていた。機械のどこかにもぐり込んでいるかのような声だった。
「６月１日から伺いますのでよろしくお願いします」
狩野は、急いで切った。唐克は70歳を越えている。なのに、土曜も日曜もないのかもしれない。狩野は、今日は、海鮮どんぶりのお伴である。唐克や美薗や三釘には話せない。

佐元は、いきなり築地に向かった。
「ひょっとしてここが一番おいしいかもしれないから」
そう言いながら、まだ開いたばかりのお店に入った。
「海鮮どんぶりと海鮮うどんをお願いします」
また今日は違った頼み方である。
「ゼンブ食べないで半分にして」
佐元が、何を言いたいのかわかっている。
狩野は、昨日の夜の、佐元の海鮮どんぶりをよく覚えていない。おいしかったことは間違いはないが、今から食べて、おいしさを比較できるだろうか。自信がない。
「わたし先にどんぶり食べるから」
佐元は、出された海鮮どんぶりを食べはじめた。海鮮うどんは、生モノではないので、海鮮ラーメンと、大きな違いはない。もちろん、伊勢海老などはない。
お店を出て、歩きながら、佐元は狩野に聞いてきた。
「どうだった？」
狩野は、答えにならない答えをした。
「ごはんがこっちの方がおいしかった」
佐元は、大きくうなずいていた。
「トイレ行った時に間違えたフリして厨房見たんだけど大きな炊飯器だっ

た」
どうしてそこまでやるのだろう。佐元の炊飯器は、高価な炊飯器だとはいえ、３合が炊けるだけの小さなものだ。このお店の炊飯器とは、比較にならない。勝負しても意味はない。
「１日１００杯くらい出るのかな〜」
佐元は、なにを考えているのかわからない。
佐元は、近いからと、八重洲に向かった。サラリーマンのお昼時になっていた。サラリーマンがお昼に食べる海鮮どんぶりだと言った。夜は、少し高い日本食のお店だろう。お昼は、サービスランチのように、限定で海鮮どんぶりをやっている。
海鮮うどんなどなかった。
「じゃ〜２つお願いします」
さずがに、佐元も、１つを２人が食べたのでは、恥ずかしいと思ったのだろう。２つ頼んだ。築地のお店の半値である。刺身どんぶりのような感じである。
佐元は、ごはんを半分以上残している。狩野は、ゼンブ食べた。
「安いからいいんだろうね」
佐元は、並んでもまで食べようとする海鮮どんぶりのことを、こう言った。
「限定何食とか書いてあるからそれもいいんだ」
限定というより、海鮮どんぶりは、材料がなくなったらできないだろう。
狩野は、佐元が何を考えているのか、よくわからない。
「ごはんどうだった？」
佐元は、炊飯器を覗きに行ったと言った。
「場所がないから大きな炊飯器は置けないんだよね」
どうしてそこまでやるのだろう。不思議だった。狩野だって、ピザは負けたくないが、ピザの仕込みから焼くところまでを、見てみようとは思わない。ましてや、同じものをつくろうなどとは思わない。
佐元は、帰りたいと言った。
確かに、海鮮どんぶりは、もう見えている。海鮮の材料の新鮮さと種類と、ごはんである。

「わたしちょっと研究するから晩ごはん食べて」
狩野は、家に帰りたかった。明日は、知美がやってくる。それに、忘れないうちに、三釘や唐克の言ったことを整理しておきたい。
佐元は、必死になって料理の本を読んでいる。ネットで何かを調べている。ごはんを調べているのだろう。
狩野は、仕方なく、手書きのメモを書くことにした。昨日の整理をしておきたい。日記もつけておきたい。狩野は、コーヒーメーカーの横のメモを取りに行った。狩野の目は、メモ帳に釘づけになった。
壊れるよろいが、黒いボールペンになっていた。
「ボールペン貸して欲しいんだけど」
佐元は、そこにあると言った。
確かに、壊れるよろいの字の横に、黒の、事務用にでも使われそうなボールペンが置いてあった。
狩野が知りたかったのは、オレンジだの赤や緑や青のボールペンだった。この事務用の黒のボールペンでは、ここに書かれている、壊れるよろいの黒い字は描けない。太さが違う。狩野は、メモ用紙を３枚くらい下から外して、事務用のボールペンで線を引いてみた。太さが違う。
この黒い字の壊れたよろいの字は、他の、黒のボールペンで書かれたものだ。
「あなた昨日名古屋に何も持たずに行ったの？」
佐元にビンタをくらったかのようだった。慌てて狩野は、自分のカバンを取りに行った。佐元のベッドの横に置いてある。メモリースティックがある。パソコンがあればグッドだった。しかし、佐元が必死になっておいしいごはんを調べている。仕方なく、自分のボールペンで、昨日のメモを書きはじめた。

〇知美が２往復すると言った

昨日の晩ごはんは、やはり、佐元の海鮮どんぶりだった。不安そうに、佐元は、ごはんの炊けるのを待っていた。狩野は、黒いボールペンで書かれた壊れるよろいが気になっていたが、必死で、メモを書いた。美薗の言ったこと

や、三釘や唐克の言ったことを、とにかく思い出して、メモを書いた。
「もうパソコン使ってもいいけど」
ごはんを仕掛けて、やっと佐元は言ってくれた。明日も忙しい。狩野は、メモリースティックのまま、ワードでメモを書いた。これから、毎日書くつもりである。４ページになってしまった。
「よくそんなに書くことがあるんだね」
佐元は、不思議なことを言った。狩野は、昨日の１日は、重要な意味を持っていた。いくらでも書くことがある。
ごはんが炊き上がって、佐元が海鮮を盛りつけしている間に、終わらせたかった。狩野は急いだ。
心配そうに見ている佐元に、狩野は、感じたままを言った。
「八重洲よりもおいしいし築地と同じくらいです」
佐元の顔がパッと明るくなって、自分も箸をつけた。
「おいしい」
佐元は、安心した声で言った。
どうして急においしくなったのかわからない。佐元は知っている。海鮮ならではの、ごはんがあるのだろう。
「もう少し研究しよう」
狩野にはよくわからない。どうしてそこまでやるのか。しかし、これだけおいしくなるのだったら、グッドである。たった数時間でおいしくなる。
まだ早い時間だった。気分がいいからと挑まれた。佐元は、どうかしている。いつものように、０時にマンションを出た。

夜遅かったのに、早く目が覚めた。今日は知美がやってくる。
朝の散歩の前に家の中を見回った。掃除はしてきたはずである。前回知美が持ってきた荷物はキチンと整理してある。今日の荷物の置き場所も決めてある。狩野が持ち出す荷物も決めてある。
狩野は、確かめて、コーヒーメーカーのスイッチを入れた。パンを焼くスイッチを入れた。
五月晴れである。ここのところ暑くなってきている。ここの散歩道も今日と明日で終わりになる。おもしろいものだ。もう１人で住んで10年なのに、散

歩道を決めたのは、ほんの最近である。毎朝散歩をしていると、道が愛おしくなる。
明日で終わりだと思うと寂しくもなる。
パンがうまい具合に焼けている。ウインナーがおいしそうだ。エクアドルのコーヒーがおいしそうだ。
ピザ生地にウインナーを挟んで焼いてパンにする技は、たまたま見つけたものだ。余りもの同士であった。今は、わざわざウインナーを買ってくる。ピザ生地に挟んで焼くために買ってくる。
狩野は、佐元のパソコンで書いた５月28日の三釘製作所のメモを、整理しはじめた。メモリースティックから自分のパソコンに移して読みなおしている。パンがおいしい。コーヒーもおいしい。
毎日、名東エレクの仕事には、日記をつけようと思っている。
昨日は、何も書くことがない。なにもせずと記しておいた。多分今日も明日も同じだろう。
狩野は、関エトレの研究所長を６年やっていた。日記を書いたことはない。毎日、仕事に追われた。忙しい毎日だった。日記をつければよかったと、今思う。忙しいあまり、同じことばかりやってきたような気がする。流された気がする。

10時に玄関のチャイムが鳴った。
「お願いします」
知美一人だった。狩野は、知美が２往復したいと言っていたのを覚えていた。とりあえず、車から玄関に、荷物を移した。
「上に揚げておくから」
知美は、大きくうなずいて、車に戻っていった。狩野は、玄関の荷物を２階に運んだ。アパートだったから荷物も少なかったとはいえ、けっこうある。狩野が持ち出すよりも多いと思った。
荷物は、よく整理されていて、何回か２階へ運べば、何もすることがない。
狩野は、またパソコンに向かって、今度は、設計図と製品のチェックを見直しはじめた。唐克が使っている設計のソフトは、狩野も持っている設計のソフトである。うまいことに、こうやって、思い返すこともできる。

それにしても、唐克という70過ぎの技術者は何だろうか。不思議な人である。機械の間にもぐり込んでも、違和感がない。さすがに若者のようだとは言えないけれども、とても70には見えない。60歳くらいに見える。パソコンだって、ケータイだって、設計のソフトだって自在に使える。
２往復目の知美はなかなかやってこなかった。１人だとしたら、積み込むのに時間がかかる。友子や保はどうしているのだろう。
12時過ぎて、やっと知美が、２回目の荷物を運んできた。
「お願いします」
狩野は、知美の降ろした荷物を、２階へ運んだ。２人でやれば、さして時間はかからない。
知美は、車を整理して、２階へ荷物を見に行った。
「お昼つくるけど」
知美は、お願いしますしか言わない。
狩野は、ピザ生地を２つ取り出して、大きなピザをつくることにした。ピザソースを取り出していると、知美が、手を洗ってキッチンにやってきた。
ビン詰めにしてあるピザソースを見て、「自分でつくってるんだ」と言った。確かに、ピザソースは、自分でつくる人は少ないかもしれない。つくってみれば簡単である。
「ビン詰めにしておいたらながくもっちゃうのか」
狩野は、熱いうちにビンに移さないと、もたないことがあると言った。
「生地はどのくらいもつんですか？」
狩野は、４日以上にしたことがないと言った。４日で、弱って困ったことはないのだが、イースト菌である。弱るのは確かだろう。多分、おいしくなくなる。
狩野は、たくさんつくって、朝のパンも、ピザ生地にウインナーを挟んで焼くことが多いと言った。おかしな話なのだが、狩野は、娘の知美に、ピザを自分でつくることを勧めている。ものすごく安くつくれるし、楽しいと話している。
ラッキョウ汁の、かぶのサラダとコーヒーである。
大きなピザを切った。狩野は、こんなに大きなピザをつくったことがない。塩サケも部分的に焼いてみた。ちくわと魚のソーセージも乗せてみた。いつ

もだが、納豆がおいしい。
知美は納豆から食べた。狩野は、塩サケが気になっていた。どういう味がするのだろう。はじめてである。ピザはおもしろい。余りものを乗せてみるからだ。だいたい、失敗したことがない。多分、ピザ生地というのは、何を上に乗せようが、おいしくなるようにできているのだろう。イタリア人の知恵だ。

「帰って掃除しますから」
知美は、ピザを食べ終わると、ゆっくりできないという仕草をして、狩野に言った。
「もう何もないので、明日１回で終わりです」
知美は、もう終わりだと言った。
狩野は、２回往復しなければならないと思っていた。朝の８時に１回目の荷物を持って行こうと思った。知美は、地図を描いて、場所を知らせた。
「明日８時に」
そう言って、知美は帰って行った。
おかしなことになっている。狩野と娘の知美は、一緒にお昼ごはんを食べている。しかも、お昼の用意は狩野がしている。しかも、狩野が手づくりで用意したものだ。どこに、親子の亀裂があるのだろう。おかしなものだ。人とは不思議なものだ。一度亀裂が入ると、元に戻すことが難しい。
狩野は、一応、掃除をすることにした。いよいよ明日は、友子と保と知美に、この家を明け渡す日である。

## 〇友子と保と知美に家を明け渡す

やけに早く目が覚めてしまった。
散歩も最後になるだろう。ピザ生地のパンのスイッチを入れて、コーヒーメーカーのスイッチを押して、狩野は、スニーカーを履いた。
あまりゆっくりしてはいられない。ケータイで写真を撮ってみようと思った。これが最後だと思うと、寂しい。
いつもは、朝のシャワーはしないのだが、今日はシャワーを浴びた。少し焦

りがある。８時までにアパートに行く約束をしている。
１回目の荷物は、昨日の夜、車に積んである。本を納戸に入れさせてもらったことで、荷物が少なくなっている。多分、本は、もう取りに来ないだろうと思っている。経験上感じている。同じ本を読み返す時間などなかった。ただ本を読んだ満足感だけで、書庫をつくってしまう。狩野は、段ボールに、本を積んで重ねてある。とても、どこにどんな本があるのか探せない。多分、何も、誰も、問題にしないだろう。いつか、保か知美が、捨てるのに苦労するだろうと思った。
まだ６時30分だった。ゆっくりコーヒーを飲みたかった。ウインナーを挟んだパンもおいしかった。

８時少し過ぎて、知美に教えられたアパートに着いた。２階の２０２号室である。６畳の和室と７畳半のリビングキッチンである。友子と保と知美の３人が、ここで10年生活をしたのだ。その間、狩野は、あの大きな家で１人で暮らした。もちろん、月に30万円の生活費は振り込んだが、なんとも言えなく、辛い気持になった。
狩野は、急いで、車からの荷物を運び上げた。近所は、誰も出ては来ない。
アパートには、ほとんど何もなかった。冷蔵庫と洗濯機とタンスと電子レンジとテレビは交換した。大きなもので運ぶものは何もない。
荷物をすべて運び上げると、知美は、アパートのカギを、３つ、狩野に渡した。
「わたしも一緒に行きます」
知美の車には、もう最後の荷物が積まれていた。
狩野は、アパートのカギを締めて、車に向かった。狩野は、額に汗が漂うのを感じていた。５月31日である。初夏になりそうな天気だった。

今日の朝、この家の写真を撮っていて良かったと思った。この場に至って、名残を惜しむ雰囲気にならない。知美の荷物を２階へ上げて、最後の狩野の荷物を車に積み込んだ。知美も手伝った。慌ただしい。なぜだろう。ゆっくりでも、何も問題はない。
車にすべて積み込んで、コーヒーを飲もうと思った。コーヒーメーカはどう

したのだろう。知美は、置いてきたと言った。
何から何まで交換になってしまった。
狩野は、この家のカギを知美に渡した。２つである。友子が、この家を出る時に置いていったカギと２つだ。
「わかってると思うけど１軒屋は物騒だから」
最後のことばとしては、ふさわしくない。狩野は、そう思ったが、何を話せばよいかわからない。
カギを渡すと、もうながく居てはいけない感覚になってしまう。ゆっくりコーヒーを飲んでいられない。知美も、話すことがないのだろう。黙っている。友子と保はどうしているのか聞きたいのだが、聞くまでもないだろう。狩野が出れば連絡するに決まっている。
狩野は、急いで車に向かった。
「何かあったら電話してください」
それだけ言うのが、精一杯だった。
知美は、ありがとうと言った。

狩野は、高校時代の秋田や大学時代の東京のアパート暮らしに返るような気がした。アルバイトに忙しくて、睡眠不足で栄養不足でもあった。苦しかった。美薗のおかげで、月収が１００万円になる。暮らせないプレッシャーはなくなったが、いままでよりも狭い部屋で暮らすことでは、元に返る。アパートの音の伝わり方も、狩野は、身体に染み着いている。よくわかっている。
とりあえず、今晩のごはんをやってみなければならない。知美に、どこで買物をしているのか、聞くのを忘れた。ネットの地図から探すことにした。
ケータイに電話であった。誰かわからない。
このアパートの、不動産を扱っている会社の社員だった。
「お父さんですか？」
知美はしっかりしている。今日の何時頃交換すると知らせておいたのだろう。テーブルの上に、ガスと電気と水道の支払いの連絡先が書いてあった。
知美はしっかりしている。狩野は、知らせてこなかった。知美から連絡があるのだろう。

狩野は、とりあえず、冷蔵庫を見て買物に出た。けっこういろんなものが残っていた。魚や肉も冷凍してあった。
近所のスーパーマーケットという感じではなかった。５００メートルはある。雨が降れば、車にしなければならないだろう。それでも、大きなスーパーマーケットだった。知美たちも、ほとんどここで買物をしたに違いない。１階が食品とドラックや雑貨で、２階に衣料などがあった。通常の生活は、ほとんど足りる。買物は、いままでよりも、はるかに便利になる。
カレーライスの材料とビールを買って帰った。
鍋や炊飯器やフライパンなどは、すべて持ってきた。カレーライスは、普段つくっているように、おいしく出来上がった。いままでのように、広いリビングとキッチンでカレーライスを食べる雰囲気ではない。ただ、ごはんのおいしさは変わらない。
テレビが小さくなった。冷蔵庫も小さくなった。電子レンジが、冷蔵庫の上に置かれてあった。コンパクトに生活しないといけない。ただ、狩野は1人だ。いままでだって、あの大きな家を使いきれない。けっこうコンパクトに生活してきた。
いつものように、シャワーをしてみようと思った。佐元のマンションのシャワーが心地よい。気に入っている。しかし、このアパートのシャワーとトイレは、いかにも狭かった。あたりまえだ。家賃が家賃である。
慣れればたいしたことはない。昔は、もっとヒドイアパートに住んだ。
狩野は、シャワーを出て、なんとはなしに、テレビを眺めていた。やはり、動く歩道に乗っている自分を感じた。何かがおかしい。定められているかのように、ある方向へ、動く歩道が進んでいて、自分がその上に乗っている。

〇2回目の三釘製作所

狩野は6畳の部屋に、布団で眠った。ベッドではなく布団で寝るのは、東京でアパートに住んで以来のことだ。なかなか寝つかれなかった。
朝は、ピザ生地がない。買っておいた食パンを焼いた。たまごを焼いた。三食キチンと食べることは、続けないといけない。習慣を崩してはいけない。

６時に起きてごはんを食べた。
狩野は、ガスや電気をよく見回した。はじめてである。見落としがあってはならない。
何度も確かめて、アパートのカギを締めた。
駅まで遠い。歩けない距離ではないが、今日は名古屋に行けなければならない。狩野は、車で出かけて、駅の駐車場に入れるしかないと思った。

狩野は、唐克が頼んでくれた部屋に向かった。ベッドと机だけの４畳半の部屋である。それでもカギがあった。部屋に入ると、机の上に、カギが置いてあった。狩野がサインをした、誓約書のコピーが置いてあった。この前は気がつかなかったが、男の汗臭い匂いが充満していた。窓を開けて、空気を入れた。
狩野は、やはり、自動で動く歩道に乗っている感じがしていた。しかも、その自動で動く歩道は、次第に狭くて揺れが大きくなる感じがしている。この４畳半の部屋は、狩野が暮らすことになるかもしれない部屋だ。
狩野は、作業着に着替えて、唐克のところへ向かった。第４工房である。
唐克以外にも２人の作業員がいるが、ほとんど何もしていない。仕事を前進させているのは、唐克である。唐克をバックアップしなければ、また納期が遅れてしまう。
「こんにちわ〜」
狩野があいさつをしても、唐克は、振り向いただけだった。何かに手を焼いている雰囲気だった。狩野は、この前の続きをはじめた。図面と製品をチェックして、図面を修正しなければならない。部品が全く違うものが使われていたりもした。これはタイヘンな作業である。６月中旬に終わるのだろうか。しかも３台である。１台だけ進捗しているが、残り２台は、まだ進んでいない。これだけ修正があれば、進められないだろう。
守谷を早く出たのに、もうお昼になってしまった。２人の作業員は、どこかに出て行った。唐克がお昼をどうするか、見たかった。同じようにするしかない。唐克は、なかなかお昼にしなかった。時間に気がついていないのだろうか。１時になって、やっと唐克が狩野のところにやってきた。
「食事に行きましょう」

言われるままに、狩野は、唐克の後に続いた。
「早く試運転をしたいのですがもう少しかかります」
狩野もそう思う。しっかり図面を修正して、もう一度、頭でシュミレーションをしてみないといけない。
唐克は、第一工房の横のプレハブの建物に入った。おいしい匂いがいきなりきた。
「私もいいんだろうか」
唐克が、今日は狩野が来るのを知っていて、頼んでくれていたらしい。
「お代はどうするのですか？」
晩ごはんも食べるのであれば、名前を白板に書くのだと言った。タダである。狩野は、今日はここに泊まるつもりで来た。下着も用意してきた。白板にみんな名前を書いていた。唐克も名前を書いていた。狩野も名前を書いた。
大盛り中華どんぶりがお昼の食事だった。
何が出るのか、どこにも書いてない。とにかく、食べるのだったら白板に名前を書くのだ。朝ごはんも同じらしい。白板には、朝と昼と晩と書かれてあった。狩野は、朝ごはんのところにも名前を書いた。
「今日は泊まるのですか？」
唐克が聞いた。
「しばらく泊まってみようと思っています」
この大盛り中華どんぶりはおいしかった。キレイではないというより汚いプレハブの食事処である。
「私はしばらく横になります」
唐克はそう言って、自分の部屋に入って行った。自分の部屋と言っても、４畳半にベッドと机しかない。しかし、70を越えている唐克にとっては、身体を休めることが健康を維持する方法なのだろう。
「身の周りのものとはどうしているのですか？」
横になっている唐克に、ワルイとは思いながら、ドア越しに聞いた。
２００メート先にコンビニがあるからということだった。
狩野は、風呂の道具やティッシュペーパーや歯磨き道具などを買いに行こうと思った。

三釘製作所の社員や守衛さんは、狩野の紫の作業服を見ただけで、道を譲ってくれる。社長の三釘しか着ない作業服の色なのだ。特別な人と見てくれる。それがなんとも心地よい。

狩野は必死になって、図面を追って修正個所を探していった。唐克は、はまりそうもない部品を削ったりしながら、組み立てを進めていた。これだけの部品をすべてオリジナルでつくることは不可能に近く、鉄板を切ることから部品をつくる場合もある。気の遠くなるような作業である。
唐克は、なかなか終わりにしない。その間、何度もお茶にして休憩はするのだが、ほとんど何もしゃべらない。唐克にとっては、これを仕上げることが、何よりも大事なのだ。そして、一刻も早く、運転を開始してみたいのだ。不具合がないわけがない。
21時になって、唐克は、やっと切り上げて、機械の底から出てきた。２人の作業員は、もういない。
「私は自分のペースでやりますから」
唐克は、狩野も自分のペースでやってくれと言っている。しかし、今日は、唐克に従っておこうと思った。
唐克は、風呂へ、そのまま向かった。狩野は、慌てて自分の部屋から下着と風呂の道具を持ってきた。
風呂は、プレハブの食事処のつながりにある。どうせ入るのは男しかいない。しかもシャワーしかない。唐克には、お風呂がないことは辛いのではないかと思った。狩野は、もう10年くらい、お湯に浸かったことがない。スーパー銭湯か温泉に行く以外では、シャワーで済ませる。不自由だとか、疲れがとれないなどと感じたことはない。
野球場の選手のシャワー室のようである。キレイではない。狩野にとっては、普段と同じである。違和感は何もない。さっぱりした。
唐克は、食事処に入って行った。冷蔵庫から氷を取り出してきた。多分、唐克の氷で、誰も手を付けないのだろう。氷をどんぶりに移して、水を満たして、冷凍庫にしまった。古株の社員の何名しかできないことなのだろう。冷蔵庫は大きなものだったが、すべての人の氷などできない。
唐克は、キッチンの中から、一升瓶の焼酎を取り出してきた。コップを２

つ。
「どうぞ」
唐克は、ことばが少ない。
狩野は、唐克と自分の晩ごはんを取りに行った。大盛り味噌カツ丼と焼うどんだった。狩野は、冷たくなった焼うどんを大盛り味噌カツ丼を、どうしたらいいかわからなかった。
「電子レンジがあります」
唐克は、焼きうどんだけお願いしますと言った。焼酎のつまみにしたいのだろう。
唐克は、頻繁に時計を見ながら、ポツリポツリ話した。
11時には寝るのだと言った。もう10時に近くなった。晩ごはんを食べるとすぐに寝ることになる。
「余計なことを考えないからこれがいいです」
唐克は、そう言った。朝から必死になって作業をしている。狩野もだが、唐克も疲れているに決まっている。11時になったら、アッと言う間に眠るのだろう。他の何かを考えるヒマがない。
狩野は、唐克が、家族とどうなっているのか、聞きたかった。
「ここで１人でいると気がラクでいい」
奥さんも子どもも孫も、一緒に暮らしているらしい。しかし、土曜と日曜以外は、ほとんど、唐克は、ここで寝泊まりしていると言った。

ポツリポツリの唐克の話でも、やはり11時になってしまった。唐克は、話を切り上げて、一升瓶をキッチンに持って行った。狩野は、慌てて、器を下げた。
「そこのシンクに浸けておけばいいです」
何も余りものはない。
狩野は、共同のトイレに行って、洗面台で歯を磨いた。狩野が毎日欠かさずやっていることに、何も支障はない。
狩野は、数分しか覚えていない。フトンが匂うこともすぐに過ぎ去った。明日天気が良ければ外にフトンを干しておこうと思った。

○６月20日試運転開始のスケジュール

狩野は、いつもの時間に目が覚めた。まだ７時になっていない。多分、仕事は８時だろう。８時半かもしれない。みんな何時頃起きるのだろう。フトンの中で気になった。とにかく、用意だけはしておこうと思った。顔を洗いに行った。髭も剃っておこう。最近、白髪が増えてきた。まだ誰も起きていない。帰ろうとすると、唐克が部屋から出てきた。
「おはようございます」
７時から食事ができるらしい。唐克は、７時には朝ごはんを食べに行くと言った。
狩野は、今日も唐克と行動を共にしようと思った。急いで、プレハブの食事処へ急いだ。
食事処にいたのは、唐克１人だった。
「混むから先に食べるようにしてるんです」
疲れる仕事だから、みんなギリギリまで寝てるだろう。７時半になったら一気に混みはじめるということだった。
ごはんとみそ汁と生卵と納豆と塩サケと漬けものだった。
誰が賄いをしているのか、顔をまだ見ていない。７時までに用意して、もう帰ったのだろうか。
唐克は、朝ごはんは食べるのが早かった。何もしゃべらない。狩野を気遣うふうでもない。狩野は狩野で、昔の、学生アルバイトの時代の感覚で対処している。しばらくは、名東エレクの専務などと言ってはいられない。
７時15分、狩野は、唐克に習って、白板に、お昼と晩ごはんのところに名前を書いた。
部屋には帰ってはみたものの、歯磨きをすることくらいしか、やることがない。テレビもなく新聞もなく、これは不便である。あとで唐克に聞いてみようと思った。ワンセグでニュースを見ていた。
８時か８時半か、狩野にはよくわからなかった。８時には第４工房に行こうと決めていた。
やはり、唐克がいた。体操をしていた。
唐克は、朝８時から夜の９時まで13時間くらい働いていることになる。70

を越えている。すごいことだと思った。定年などないのだろうか。狩野は、55歳の役職定年で関エトレを辞めた。いろいろな会社もあれば、いろいろな人がいるものだと思った。
何時に仕事をはじめるかは唐克の問題であるらしい。社長の三釘は、今日も顔を見ていない。ずっと、おかしの機械に係っているのだろう。
狩野は、コンビニに、お昼に洗剤を買いに行こうと思った。下着を洗わなければならない。毎日、汗まみれになっている。ビニール袋に入れているが、臭う。毎日でも洗濯しないとダメだ。
狩野は、唐克の姿を追わなくなった。余裕がなくなったのかもしれない。これはタイヘンなことである。時間がない。それにしても、美薗は何をしているのだろうか。急ぐように催促をしてきて当然なのだが、何も連絡がない。
やけにノドが渇く。もう梅雨に入っているのに乾燥している。汗も出る。
時々唐克の姿が見えなくなることがある。狩野は、ノドが渇いて、お茶を買おうとして食事処に向かった。唐克が、食事処にいた。ものすごく大きいやかを前に置いて、コップでお茶を飲んでいた。
「お茶はここにあります」
狩野は、キッチンに樹脂のコップを取りに行った。唐克が時々いなくなるのは、ここでお茶を飲んでいるからだ。タバコは吸っていない。

身体を使って仕事をしていると、食事が楽しみだ。この三釘製作所の社員は、恵まれている。３食タダで食べられる。確かに、食事処はキレイではない。豪華な食事ではない。しかし、食いはぐれることはない。今日のお昼は、牛丼だった。山盛である。この三釘製作所には、女性の社員がいないらしい。誰も見かけない。
唐克は、黙って食べて黙って食事処を出て行った。機嫌が悪いのではない。これがフツウだとわかった。
狩野は、器を下げて、そのままコンビニに向かった。洗濯しないと汗臭くて困る。自分の汗の臭いにまいってしまう。
洗濯機も共同になっている。この時間に洗濯機を使う人はいない。狩野は、昨日の下着とタオルを洗った。お昼からでも、今日は乾くだろう。
これから梅雨になるが、どうしたらいいだろう。狭い部屋には、洗濯物は干

せない。
洗濯機が知らせてくれるまで、狩野は、自分の部屋にいた。ウトウトしてしまう。本もなくパソコンもない。何もすることがない。明日からは、食事に行く前に洗濯機を動かしておこうと思った。お昼に洗濯機を使うことを思いついたのは、グッドだった。
今日は、唐克の仕事が、進行していると思った。唐克は、明らかに、試運転を早くやりたがっている。だから、図面を修正しないで先へ進む。もし狩野がいなかったら、どうなるのだろう。いくらなんでも、忘れてしまう。
唐克は、白板にスケジュールを描きはじめた。８月13日船積みにしてあった。９月１日納品に、少しは自信が出てきたのだろう。６月20日試運転開始だった。
唐克は、白板にスケジュールを描くことで、自分の考えを狩野に伝えている。
20時になって、唐克がやってきた。
「ギョーザを食べに行きましょう」
唐克の顔を見て、唐克はギョーザが好きなのだと思った。仕事も、今日は順調に進んだ。
唐克の動きは速い。狩野がシャワーで頭を洗っていると、唐克は、もう身体を拭いている。70を越えているのに素早い。
狩野は、慌てて唐克を追った。ギョーザをどうするというのだろう。電子レンジで温めて食べることになるのだろう。
唐克は、キッチンにいた。大きなギョーザを焼く鍋に、ギョーザを並べていた。狩野も、棚から生ギョーザを持ってきて、鍋に並べはじめた。鍋を熱くしておかないと、ギョーザはうまく焼けない。生ギョーザが、もう２つしか残っていなかった。焼いてあった。これは電子レンジなのだろう。誰が生で誰が電子レンジか、わかっているのだろうか。
それにしても、唐克の鍋は生ギョーザでいっぱいになっている。狩野の鍋は、中央にしか並べられない。
狩野が、いままでに食べたギョーザの中で、１番おいしいと思った。これは最高である。誰がつくっているのだろう。いつもの賄いの人だろうか。
ギョーザは、ゴツイ。男らしい。

○佐元からのケータイメール

この４畳半の部屋も、少し慣れた感じがする。夜は、寝酒どころではない。テレビもないのだが、部屋に入ると、ゴロっとできない。パジャマに着替えておかないとダメだ。そのまま眠ってしまう。
昨日スケジュールが白板に描かれたこともあって、狩野の気持ちは、少し晴れていた。もう先に進むだけである。
狩野は、６時半には起きて髭を剃って。７時に食事処に行った。唐克はもう来ていて、テレビを見ていた。ニュースを見ていた。狩野は、ニュースを横目で見ながら、昨日と同じ朝ごはんを、棚から持ってきた。
政治がタイヘンのようであった。唐克は、テレビを見ながら、朝ごはんの盆を狩野の横に置いた。唐克は、テレビのニュースを見ながらごはんを食べている。
唐克の部屋にはテレビは必要はない。同じようにすれば、狩野も必要はない。そもそも、４畳半の自分の部屋に帰ってくるのは、22時くらいである。テレビを見ている時間もない。
狩野は、部屋に帰って、作業着に着替えた。この紫の作業着は、もう１着ないのだろうか。汗臭い。それでも着ないといけない。今日の昼は洗濯しようと思った。
佐元からケータイメールが入ってきた。
「おかしな写真が送られてきました。差出人不明です。添付します」
狩野は、腰が抜けるかと思った。それほど驚いた。
狩野の寝姿だった。あの、酔ってぶっ倒れて、増渕にベッドに運んでもらって、朝増渕が隣にいて、ベッドから落ちそうになった、あの日の写真である。いつもの狩野の凛とした姿ではない。酔い潰れて苦しそうにしているのだ。上半身何も着けていない。
もう８時になるが、狩野は外に出て、誰にも聞かれそうもない広場から増渕に電話をした。
「狩野さんは、わたしのものだから、佐元さんには手を引いてもらいたい」
狩野は、ことばがなくなってしまった。
狩野は、こういうつもりはなかった。増渕を愛しているなどと、思ったこと

はない。しかし、これは、狩野の甘さが招いたことだった。
狩野は、増渕と話すことばを失って、電話を切るしかなかった。これはタイヘンなことになってしまった。４月30日の写真もあるのだろうか。４月30日には、狩野は、増渕を抱いた。もう佐元とは終わりなのかもしれない。４月30日の写真が送られれば、佐元は、完全に切れるだろう。
タイヘンな時にタイヘンなことが重なってしまう。
狩野は、佐元にメールの返事をしなければならなかった。それか電話をするか。狩野は「すみません」としかメールできなかった。言い訳ができない。最悪である。

狩野は、午前中は、一言も話さなかった。お茶を飲みに、食事処にも行かなかった。それどころではない。とんでもないことになってしまった。深刻な状況になってしまった。何かがおかしい。やっと、自動で動く歩道から抜け出たと思っていた。三釘製作所での仕事も、順調に進むかもしれない。やっとである。しかし、この佐元のメールは、まだ狩野が、自動の動く歩道に乗っているのではないかと思わせた。その動く歩道は、次第に狭くなり、揺れが大きくなっている。佐元は、確かに、不審なことが多い。ひょっとして、狩野を裏切っているのかもしれない。しかし、今もベッドを共にしている。ごく自然に一緒に寝ている。佐元を失えば、狩野にとって、傷が深くなる。
それでも狩野は、必死になって図面とモノを見較べた。もうこっちも時間がない。

唐克はお昼を13時ごろ食べる。朝ごはんは７時で１番だが、お昼は一番遅く食べる。お昼は、12時になったら一杯になる。あたりまえだが、そうなる。
狩野は、12時30分に洗濯をはじめた。作業着を洗った。多分、狩野のように、１日や２日着ただけの作業着を洗う人など、ここにはいそうもない。しかし、狩野には、その汗臭さがガマンできない。
狩野は、ジーパンにシャツのフツウの姿で食事処に行った。
唐克がいた。
「今日は引き揚げですか？」

狩野は、凄い汗で洗ったと言った。唐克は、ケータイでどこかへ電話をした。今日のお昼は、大盛りナポリタンだった。ボウル一杯もありそうな量である。味噌カツ丼の器に入れてある。狩野は、電子レンジで温めた。
ものすごい量である。２人前はある。唐克も電子レンジで温めて、狩野の隣に来て、テレビを見はじめた。政党がタイヘンらしい。狩野もタイヘンだ。
どうしてこんなにおいしくなるのかわからない。ギョーザもすごくおいしかったが、このナポリタンも最高である。これは、誰がつくっているのだろう。一度も見たことがない。そこのキッチンでつくっていることは間違いない。キッチンが、いつも熱い。
狩野も、ナポリタンが得意である。おいしい。しかし、ここのナポリタンには敵わない。
ケータイが鳴った。増渕からだった。電話には出なかった。狩野は、そのまま、ナポリタンのおいしさに酔っていた。ここの賄いをやっている人に会いたくなった。今度、朝早くキッチンに行ってみようと思った。

狩野は、洗濯物を干そうと思って食事処を出た時、管理人の男がやってきた。狩野に、ここの部屋を借りる誓約書を書かせた男である。三釘製作所の社員だろうが、よくわからない。紫の作業着を持っていた。
「これをどうぞ」
狩野は、不思議だった。いかつい男に見えるのに、やっていることは、親切である。
「ありがとうございます」
狩野は、お礼を言って、紫の作業着を受け取った。さっき、唐克がどこかにケータイをしていたが、このことだったのだろう。
みんな親切である。

○週末なのに
金曜日には、いつも佐元から電話がある。海鮮ラーメンや海鮮どんぶりはどうなっているのだろう。
ケータイの目覚ましで起きた。佐元の夢を見ていた。大量の海鮮ラーメンと

海鮮どんぶりに囲まれていた。
多分、今日は、佐元から何も連絡はないだろう。佐元は怒っている。もう、狩野に、さらばをしているかもしれない。
狩野が、役職定年の封書が着た時に、飛び降りて、新しく乗った自動の歩道は、次から次に、狩野から、何かを奪っている。誰かが何をしているのでもないのだが、結果的にそうなっている。今度は、佐元を奪っている。
残るは、狩野の、新しい仕事である。名東エレクの専務の仕事である。それしか残っていない。
狩野は、元気を出して、フトンを出た。９月１日に納品できなかったら、最後に残っているものすら失ってしまうかもしれない。
元気を出さないといけない。
狩野は、顔を洗って、髭を剃って、食事処へ向かった。
唐克は、もうテレビを見ていた。唐克１人である。
狩野は、いつもの朝ごはんを食べようと、棚に手を伸ばした。マーボー豆腐だった。中華の朝ごはんである。ごはんとスープは、自分でよそるのだろう。器が重ねて置いてあった。
まだマーボー豆腐は、温かかった。
狩野は、大きなごはんの器いっぱいにごはんをついで、ごはんを食べはじめた。狩野には、理解ができなかった。こんなにおいしいマーボー豆腐を食べたことがない。これはどうなっているのだろう。
「すごくおいしいですね」
隣の唐克に言ってみた。唐克は、生返事しかしなかった。驚いた様子もない。

お昼は、ハンバーグだった。これも最高においしかった。デカく切ったジャガイモやニンジンもおいしかった。これは誰がつくっているのだろう。11時ごろ来れば見ることができるのだろうが、狩野は、11時には、必死になって図面を追いかけている。
狩野は、お昼を早めに食べて、部屋に帰って洗濯物を干して、部屋で、佐元の連絡を待った。連絡が来るわけがない。あのような狩野の写真を送られれば、誰だって、終わりにしたくなる。

今日は、とにかく、１度守谷のアパートに帰って、パソコンのメールを見なければならない。
なんとはなしに佐元のことを考えてしまう。
狩野は、慌てて、第４工房に向かった。

狩野は、６時半になって、唐克に言った。
「ちょっと守谷に帰ってきます」
そう言って、自分でもおかしいと思った。狩野には、もうここが、自分の帰って来る所になっている。４畳半の部屋でトイレも風呂も洗濯も共同で、ごはんも食事処で食べる。いままでの狩野の目指したものとは遠い。しかし、狩野は、こういうトンネルを通り越えなければ、目指すものがやって来ないことをよく知っている。秋田の高校時代も、東京の大学時代も、食べるのがやっとの、苦しい生活だった。ただ、勉強だけは、しっかりやってきた。
唐克も、今晩ごはんを食べたら、自宅に帰るのだと言った。出てくるのは、月曜日の朝である。
狩野は、明日か明後日に、狩野がここに来た時のことを聞いてみた。土曜と日曜である。そうなる可能性が高い。唐克は、守衛に話しておくと言ってくれた。なぜだか、唐克の一言で、ここの工房は、すべて動くような気がしている。
狩野は、早めにシャワーをして、着替えて、夕食のために食事処へ急いだ。いくらなんでも、晩ごはんをつくっている人がいるだろうと思った。
７時だった。
狩野と唐克は、いつも、９時過ぎて晩ごはんを食べていた。晩ごはんが、７時からだとは知らなかった。まだ誰もいなかった。賄いの人は、もういなかった。キッチンは熱い。ここで晩ごはんをつくったことは間違いない。
コロッケである。大きなコロッケが２つと、溢れんばかりの野菜が、皿に乗っている。狩野は、どんぶりのようなごはん茶碗にいっぱいのごはんをついで、食べはじめた。ワカメとダイコンと揚げの味噌汁もおいしい。豪快なのだが、とにかく、おいしい。
狩野も、料理のことは自信がある。それでも、ここの食事処のごはんには敵

わない。とにかく、おいしい。豪華でもグルメでもないのだが、量がすごいし、おいしい。
狩野は、まだ誰も来ないうちに食事を終えて、正門へ急いだ。守衛に呼びとめられた。
「明日と明後日出勤されますか」
狩野は、その可能性が高いと言った。自分が明日は出勤日なので、第４工房のカギを開けますと言ってくれた。ここの工房は、３６５日動いているようである。唐克が伝えておいてくれたようだ。
まだ唐克のことがよくわかっていない。何かの用事を唐克に頼むと、必ず、狩野の要望のとおりになる。どうなっているのだろう。唐克は、大きなチカラを持っている。

狩野は、守谷のアパートでは、まだ１日しか眠っていない。三釘製作所の４畳半の部屋に較べれば、このアパートは広い。まだ完全に片づけが終わっているわけではない。とりあえず、押し入れに、ランダムに押しこんでいるだけである。狩野は、パソコンのメールを開いてみた。
迷惑メールばかりである。あたりまえだが、メールで狩野に連絡をする人は、もういない。狩野が気になっているだけである。
今日は、食事も済ませてきた。アパートに帰っても、何もすることがない。冷蔵庫には、知美たちが残した卵と野菜が少しあるだけである。明日の朝は、この卵をゼンブ焼こうと思った。ひょっとすると、またしばらく、この部屋には、帰ってこないかもしれない。
やはり、帰ってきてもどうにもならなかった。明日の朝早く、名古屋へ行こうと思った。
佐元からは、何も連絡がない。もう終わりかもしれない。

○土曜でもみんな仕事をしている
狩野は、朝早く起きたのだが、急に、寂しさに襲われた。佐元から何も連絡がないこともあるが、何のためにわざわざ名古屋から守谷に帰ってきたのか、意味のないことをする自分に、怒りがあることも確かだった。

それでも、自分に唯一残されるかもしれない三釘製作所の仕事を、仕上げなければならない。
狩野は、残った卵を、ゼンブ焼いて、野菜にまぶして食べた。パンはない。まだピザ生地をつくってはいない。
パソコンで新幹線の時間を探るのも止めて、狩野は、すぐに、守谷のアパートを出た。
狩野は、下着だけは大量に持った。多分、しばらく帰って来ないだろうと思った。ボストンバックがパンパンになる。
狩野は、新幹線でじっくり考えようと思った。この動く歩道の終点が気になる。この動く歩道は、どこに向かっているのだろう。狩野にとって、状況は、ますます悪くなっている。佐元のことが最悪である。どこかで佐元に連絡しなければならない。今日は土曜日である。マンションにいるはずなのだ。

おはようございます。
まだお昼にはなっていなかった。狩野は、第４工房を開けてもらった。外に出る時は、カギを締めるように、指示をされた。唐克はいない。お昼をどうするのか、守衛に聞かれた。狩野は、駅で弁当を買ってきた。土曜も日曜も、食事処はやっているらしい。狩野は、４畳半の自分の部屋に行く前に、食事処に寄ってみた。11時45分であった。もう、賄いの人の姿はなかった。キッチンは熱い。忍者のような賄い人である。多分、アッという間に、ごはんをつくってしまうのだろう。
狩野は、白板の、夕食と明日の朝食に、自分の名前を書いた。そして、駅で買ってきた弁当を広げて、食べはじめた。みんなが来るまでには、食べ終わるだろう。
狩野は、不思議に思った。土曜日なのに、普段と同じくらいの食事の数が用意されている。明日の日曜はどうなるのだろうか。よくわからない。
今日のお昼は、親子どんぶりのようである。電子レンジで温めて、ごはんに注ぐのだろう。おいしそうである。
狩野は、４畳半の部屋に入って、作業着に着替えた。疲れはない。狩野は、ガンバリ屋なのだ。

狩野は、３時にお茶を飲みに食事処へ行った。
60歳くらいの品のいい女性が、野菜を冷蔵庫に収めていた。狩野は、キッチンに出て行って、あいさつをした。ごはんがおいしくて驚いていると言った。ありがとうとも言った。女性は、うれしそうにうなずいていた。どこかおかしい。フツウの、主婦が買い物に行くスタイルなのだ。エプロンさえもしていない。賄いの人ではないのだろうか。食材を手配しているだけの人なのだろうか。
とにかく、ここまではわかった。この方が、食材を手配していることは確かだった。
狩野は、また必死で機械にもぐり込んだ。そして設計図を修正した。狩野は時間を忘れていた。アッという間に21時になっていた。これはまずい。狩野は、パソコンの電源をオフにして、エアコンのスイッチを切りに行った。電源が動いているのは、この２つである。唐克がいると、なにやらわけのわからない機械が動いていたりするが、今日は、唐克もいなければ、手伝いの作業員もいない。
狩野は、第４工房のカギを守衛所に持って行った。
狩野は、４畳半の部屋に帰って、すぐさまシャワーへ向かった。食事処には、いつものように、もう誰もいなかった。
唐克が一緒だと、焼酎に氷があるのだが、今日はそうはいかない。
もうすぐワールドカップがはじまる。この食事処も、満員になるのだろう。みんな、狭い部屋なので、テレビを持っていそうもない。唐克も、ここでニュースを見ていた。

まだ梅雨にはならないのだろうか。今日も暑い。狩野は、髭を剃って顔を洗って、外に出て体操をした。今日は日曜である。佐元からは、何も連絡はない。
７時ピッタリに食事処へ入った。顔を洗ってすぐに来れば、賄い人に会えたかもしれない。キッチンは熱かった。
魚のバター焼きだった。まだ温かい。納豆に豆腐がついている。ご馳走である。狩野は、感謝して、おいしい朝ごはんを食べた。

狩野は、唐克がいない間に、追いつこうと思った。唐克が、現在やっているところまで、追いつきたかった。多分、もうすぐ終了する。
狩野は、必死だったが、楽しくもあった。先が見えると、何でも楽しいものだ。狩野は、11時過ぎて、食事処へ足が向かった。仕事のピッチがよいのだ。この時間だと、賄い人に会えると思った。
狩野は、やかんからプラスチックのコップにお茶を移して、一気に飲んだ。どういうわけだか、キッチンには誰もいない。もう11時を回っている。11時50分ごろには、食事は並べられて、賄い人はいない。どういうわけだろう。マジックのように料理ができるわけではない。
11時20分になって、三釘十郎がキッチンに裏からは入ってきた。社長が何をするのだろう。お腹でも空いたのだろうか。
狩野は驚いた。野菜炒めにチャーハンだったのだが、いきなり三釘は、両方を同時にはじめた。野菜を猛烈な勢いで切りはじめた。豚肉も取り出して、中華鍋に移した。大きな中華鍋である。それでも、１回ではムリだろう。５分も経たない間に、野菜炒めの野菜とチャーハンの野菜が切り刻まれた。窓越しには、そのように見えた。
誰も手伝っているようには見えない。なぜ三釘が料理をしているのだろうか。三釘が賄い人なのだろうか。今日だけ社長が趣味でやっているのだろうか。
10分もしないうちに、野菜炒めとチャーハンの１回目が終わって、器に移してしまった。やはり、２回目をはじめた。多分、10分もあれば終わってしまうだろう。焦っているふうでもない。狩野は、お茶を飲んで、第４工房へ急いだ。食事処で、三釘を見ている自分が、おかしかった。
狩野は、唐克と同じように、13時に食事処に行った。
チャーハンと野菜炒めが、１つ残っているだけだった。狩野の食事だ。
量が多い。狩野は不思議だった。なぜ社長の三釘がやっているのだろう。しかも、並みの技ではない。社長だから、短時間に終えないといけないだろう。
三釘が食事処に入ってきた。昨日会った60歳くらいの品の良い女性も一緒である。

狩野は、会釈をするしかなかった。
「まさか私がやってるとは思ってなかったでしょ？」
自分のつくったチャーハンと野菜炒めを持ってきた。女性も同じものを持ってきた。
三釘の奥さんだと紹介された。２人で、朝昼晩、みんなと同じものを食べていると言った。みんなが、三釘と同じものを食べている。三釘は、ついでに、みんなの食事をつくっているだけだと言った。
食材は、奥さんが買物に行っている。
「こんないおいしい食事を食べさせていただいてありがとうございます」
狩野は、ただ驚くだけだった。こういう人もいるのだ。

三釘十郎のつくった唐揚げを食べていた。夕食である。こんなにおいしい唐揚げがあるのだろうかと思った。どう調理しているのか教わりたかった。
ケータイである。名波だった。
「大量のクレームが出て、対策を考えなければならないのですが、鮒野社長からも、狩野さんに知恵を借りたいと言ってきました」
狩野は、忘れていた。もう自分には関係はない。
明日だけでよい。知恵を借りたいだけだからという名波の頼みを、狩野は受け入れた。そして、唐克に電話をした。
せっかくの唐揚げが冷めてしまう。

# クレームの責任を負って２０１０・０６０７

〇クレームの責任
狩野は、日曜の最終便で名古屋から守谷に帰ってきた。
新幹線の中で、明日何があるのか予想しようと思った。狩野には、もう、昔の出来事になっていた。はっきり言って、どうでもよかった。狩野には、何の係りもない。
明日のことを予想しようにも、今日現在の状況がわかってない。
狩野は、後悔していた。断ればよかった。狩野は、それどころではない。
守谷のアパートに帰ってパソコンを開くと、名波からの連絡のメールが入っていた。
「９時に研究所で待っています」
狩野は、なかなか寝つかれなかった。

「おはようございます」
狩野は、少し早く守谷のアパートを出て、コーヒーショップへ寄った。朝ごはんが何もないのだ。ベーコンブレッドを焼いてもらった。あまり早く行っても、話すことがない。狩野の近況など、聞かれても困る。
名波の所長室に入ると、社長の鮒野も来ていた。酒向もいた。
「狩野さんどうもすみません」名波が、声をかけてきた。
森知も雪乃下も下野もいた。
知恵を借りたいとのことだった。どういう知恵なのだろう。鮒野が、早速話しはじめた。
昨日、13件のクレームが一斉に発生したらしい。今朝は、朝から、部品交換を急いでいる。ある意味では、クレームがあると、部品交換が進むので、好ましいことでもある。しかし、高温になっているとのクレームは好ましいが、破裂してヤケドしたというクレームもある。
マスコミも、もう黙ってはいないだろうというのが、鮒野の読みだった。残りは23ヶ所である。いままで、鮒野の意向で、マスコミにも発表しなかっ

た。部品交換を、設置場所との交渉で進めてきた。昨日の13ヶ所と残り23ヶ所で終わりである。部品交換さえすれば、何も起きない。いままでも、何もない。狩野は、公表して一挙にすべてを交換すべきだと主張していた。残り23ヶ所になって、マスコミに嗅ぎつかれるかもしれないと、鮒野は感じているのだ。
こういうことでは、狩野が知恵を貸すことが何もない。もう今日にでも、一挙に部品を交換しないとダメである。もう、すべての部品が、消耗している。時間の問題である。
10時前に盛岡の代理店から、雪乃下に電話が入った。
ヤケドを負って、救急車で病院に搬送されたそうである。最悪の事態にはなりそうもないが、社長を呼べになっているらしい。酒向が、急いで盛岡に向かった。
もう、どうにもならない。鮒野社長は、自分の責任しか考えてはいない。
鮒野は、夕方、森知が、本社で記者会見をやると言った。狩野は、なぜ鮒野が自分でやらないのだろうと思った。内容は、自分に任せてくれということだった。
10時過ぎて、全員、急いで部品交換へ向かった。
鮒野と森知と雪乃下は、急いで本社に帰るために、社長専用車に乗り込んだ。名波と下野と狩野が残された。そして、名波と下野は、これから、新宿に部品交換に行くのだと言って、準備をはじめた。
狩野は、なぜ自分がここにいるのか、よくわからなかった。やはり、名波の要請だったが、断るべきだったと思った。名波と下野が出かける前に、研究所を出たかった。

13時には、三釘製作所の食事処で弁当を食べていた。どう考えても、ここの食事処のごはんの方がおいしい。狩野は、白板の、今晩と明日の朝食に、自分の名前を書いた。
狩野は、唐克から、図面の修正について説明を求められた。唐克は、もうすぐ機械の組み立てが終わると読んでいる。設計図を修正しなければならない。１台だけつくっても仕方がない。同じ機械を、何台もつくらなければならない。少なくとも、９月１日には、３台納品しなければならない。

唐克は、何度も何度も狩野に説明を求めた。
17時になって、やっと、唐克は、何も言わなくなった。そして、後半になっているのだろう、機械の組み立ての作業をはじめた。
21時になって、唐克が機械の下から這い出てきた。
「食事に行きましょう」
唐克は素早い。狩野が４畳半の自分の部屋で着替えを用意していると、唐克は、もうシャワーを浴びている。もう誰もいない。
狩野は、シャワーを済ませて、食事処へ急いだ。なぜ唐克の方が素早いのか、よくわからない。唐克は70を越えている。
いつも唐克に焼酎と氷をご馳走になっている。
「焼酎はたくさん部屋にありますから心配いりません」
なぜ部屋にたくさんあるのか、よくわからない。テレビは、ニュースをやっていた。
狩野は聞き逃すところだった。
「すでに５件のヤケドを伴う部品の破損があった」
明らかに、今朝打ち合わせをしたクレームのことだ。森知の記者会見の様子が出ていたが、何かよくわからない。
狩野は、唐克が食事を終えるまで、待った。
守衛室に急いだ。パソコンを持ってきていない。第４工房に入らなくても、守衛室にパソコンがあった。
驚いてしまった。
森知の記者会見の内容が、掲載されていた。
直接の原因は、部品交換の検討の遅れになっていた。森知が、そのように、記者会見の席上で話した。結局、部品交換が間に合わず、事故を引き起こしてしまったと言っている。
責任者は、すでに責任をとって、退社していると言った。
残り23部品なので、早急に部品交換をするとして、結んでいる。
狩野は、唖然とした。この事故の責任が狩野になっている。狩野は、その責任をとって、依願退職したことになっている。
そうではない。狩野は、役職定年の封書が送られてきたことに反発した。森知に電話をしなくてはならない。

「鮒野社長から、狩野さんには了解してもらったと聞いています」
なんのことかわからない。
「今日狩野さんがおいでになったことは、そういうことだとおっしゃっていました」
狩野は、またも鮒野と酒向に、やられたと思った。
救いは、狩野隆一の名前が出てないことである。

狩野は、フトンの中で、考え込んでいた。
いつか、自動で動く歩道に乗ってしまった。その歩道は、自動で動いて、どこかに向かっている。向かっている先は、狩野のとって、よくない結果が待っていそうである。
三釘製作所は、狩野にとっては、助けになった。三釘製作所にいると、自動で動く歩道から、降りた気がする。今日のように、昔の出来事に戻ると、自動で動く歩道に乗ってしまう。次々に、よくないことが起こる。

○試運転が近づいて
クレームの責任のことがあった翌日から３日間、狩野は、イヤな事件を忘れるかのごとく、必死になって設計図を修正した。三釘製作所の人は、この事件には、誰も興味を示していない。その後、名波からも何も連絡はない。朝と昼と夜のニュースをテレビで見ているが、何もない。
狩野は、不満である。とりわけ森知には、ガッカリしている。どういうわけだか鮒野にベッタリになっている。鮒野の指示には、どんな内容でも従いそうである。
唐克は、第４工房に用意されていた大きな水槽に水を張ってみた。この機械は水の中で動く機械である。
試運転の準備をしている。２人の作業員も、唐克の指示に従って、水を張ったり、排水したりしている。もう、１台目の組み立ての終了が近づいている。
15時になって、珍しく、唐克が、「お茶を飲みに行きましょう」と言った。
明らかに、唐克には余裕が出てきた。６月中旬試運転開始のスケジュールが

守られそうである。
唐克は、冷蔵庫から、アイスクリームを２つ取り出してきた。大きなモナカのアイスクリームだった。いつ買ってきたのだろう。
この暑さである。むし暑さでもある。アイスクリームがおいしかった。
三釘十郎の奥さんが食材を運んできた。食材専用の大きな冷蔵庫に、肉魚や野菜をしまっている。アッと言う間に終える。社長の奥さんであるが、忙しいのだろう。とにかく素早い。
そして、多分アイスクリームを、社員用の冷凍庫にしまったように見えた。
唐克と三釘夫婦の関係はどうなっているのだろう。
三釘の奥さんがやってきた。モナカのアイスクリームを持っている。
唐克は、ありがとうとも言わない。なんとも無愛想である。
「いただいています」
狩野は、三釘の奥さんに、お礼を言った。
「晩メシはなんだ？」
唐克は、まるで奥さんか娘さんに話しているように、三釘の奥さんに聞いた。狩野が驚いたような顔をしていると、三釘の奥さんが言った。
「兄です」
三釘の奥さんは、唐克の妹だった。
兄の好きなモナカのアイスクリームを、冷蔵庫に入れてくれていたのだ。唐克が自分で買いに行っているわけでもなかった。あの左端の冷蔵庫は、唐克の専用なのかもしれない。
唐克は不思議な人だ。狩野ももて余すほどの大きなモナカのアイスクリームを、クリームパンを食べるかのように、食べ終わってしまう。そして、お茶をグッと飲むと、さっさと部屋を出て行く。
三釘の奥さんは、まだアイスクリームを食べている。それでも、２人は平気なのだ。

狩野は、また忙しくなった。この機械のアウトプットとして出された水の分析をしなければならない。唐克が行う予定だった。唐克は、２台目と３台目の組み立てに入らなければ間に合わない。
唐克が行おうとしていたことを、引き継いだ。分析するのだ。わざとつくっ

た排水や塩水が、真水になるはずである。
狩野は、マニアルをつくることにした。集中してつくった。
「今日はこれくらいにしましょう」
唐克がさっさと部屋を出て行った。21時になっていた。狩野には、心残りがあった。なぜもっと早く気づかなかったのか。
明らかに、唐克は、狩野が使えると思ってくれている。やっとなのかもしれない。
狩野が食事処に行った時には、唐克は、もう食事を半分終えていた。ブタの夏野菜煮である。山盛である。狩野は、どんぶりにいっぱいのごはんをついで、夏野菜を食べた。どうしてこうもおいしくできるのだろう。不思議である。三釘は、自分の食べるものをつくっているついでだと言った。それにしても、三釘製作所の社員は幸せである。
唐克は、ニュースを見ないで、何かを書いていた。21時40分になって、５人の社員が、唐克のところにやってきた。何やら、細かい指示をしているようだ。第３工房の機械らしい。５人の社員は、食事は終わっているらしいが、着替えをしていない。このまま、また第３工房に入るのだろう。唐克は何だろう。よくわからない。
唐克は、さっさと食事処を出て行った。もう寝るのだろう。
狩野は、しばらく考え事をしようと思って、テレビの前のソファーに座った。なにやら政治のことがタイヘンらしい。テレビも忙しい。ワールドカップもはじまるらしい。狩野は、それどころではない。
狩野は、風呂上がりと満腹感で、アッという間に眠ってしまった。慌てて時計を見た。まだ22時だった。５分くらい眠ったのだ。気持が良かった。
なにを考えたかったのだろう。ムダだとわかって、４畳半の自分の部屋に向かった。

## 〇佐元からバイバイの電話

お昼から大雨になるとテレビは言っていた。
大きなドンブリに、肉野菜うどんである。三釘も、こういう日があるらしい。朝からうどんが食べたいのだ。食材の手配がある。昨日の朝食べたかっ

たのかもしれない。ここの食事処にはメニューがない。何が出てくるのかわからない。三釘の食べたいものをやっている。
佐元から電話があった。
「おかしな写真が送られてきたから転送します。手を引けって脅されてる。わたしバイバイだから」
佐元は、それだけ言うと、電話を切った。
明らかに増渕である。４月30日だろう。４月30日は、狩野は酔ってもいなかった。狩野には覚えがない。写真は、狩野である。百年の恋も一瞬で覚めるような、下着姿の狩野がいた。あたりまえである。増渕を抱いたのだ。どういうふうにしてこの写真を撮ったのだろう。想像してみても思いあたらない。イメージもできない。
もう最悪である。これはもう、ホントにバイバイかもしれない。
おいしいうどんなのに残念だった。途中で、もう食べる元気がなくなった。
唐克が入ってきた。
「うどんか〜珍しい」
そう言って、一瞬のうちに大きなどんぶりいっぱいのうどんを食べてしまった。狩野も、うどんをかけ込んだ。
どうするか考えなければならない。このままでは、佐元を失ってしまう。増渕とは、佐元のような関係になるつもりはなかった。だったら、どうしてこうなったのか。
狩野は、４畳半の自分の部屋に帰って、作業着に着替えて、急いで第４工房に向かった。必死になって仕事しなければ、紛れないのだ。
夜になって、やっとマニアルが完成した。唐克と付き合わせた。明日、実験をしてみることにした。順調である。
週末だった。ずっと週末は、佐元のマンションで過した。もう何年もである。ここで佐元を失うのだろうか。失うのだろう。狩野には、何も残らないのではないかという不安が、一瞬現れた。
外は大雨になっていた。梅雨が近い。

唐克は、昨日の夜、自宅に帰った。もし三釘製作所にいるのだったら、実験をしておいてほしいとの要望だった。

狩野は、６時に起きて体操をした。髭を剃って、顔を洗って、食事処へ行った。やはり、昨日の朝のうどんは、珍しかったのだろう。今日は、卵にハムに味噌汁に漬け物である。三釘十郎夫婦は、どこに住んでいるのだろう。３食を、この食事処で、自分でつくって食べている。奥さんも、遅くなって食事処にやってきて、食べているようだ。近所に住んでいなければできない。
狩野は、朝から実験を開始した。
簡易的に計測する方法も試してみた。食事処の排水溝の水も計測してみた。水道水もやってみた。ボトルの水も買ってきて計測した。狩野は、10種類の水を試してみて、このマニアルでうまくいくと確信した。問題は、試運転する１号機の結果である。
狩野は、楽しみになってきた。まだお昼だった。
狩野は、メニューのないこの食事処のごはんが楽しみになってきている。
今日は焼きそばだった。お昼は13時に食べる。電子レンジに助けてもらわなければダメだ。どうしてこうもおいしく焼きそばができるのか、よくわからない。
お昼からは、狩野は、実験を切り上げて、設計図の修正版の仕上げを行った。唐克は、この狩野がつくった修正版の設計図で、２号機３号機を同時並行して組み立てると言った。
狩野には、クレームの話や佐元のことや増渕のことなど、気にしなければならないことがたくさんあるが、必死になって、三釘製作所での仕事を進行させた。うまく進んでいる。
もちろん、佐元から何も連絡はない。
今日は土曜日だ。

日曜日だった。狩野は、門を出て、近所を散歩してみた。どんよりした梅雨が近い空模様だった。
ひょっとして、ここでしばらく暮らすかもしれない予感がしていた。３食のごはんもおいしい。確かに部屋は狭いが、自由である。仕事も気に入っているし、うまく進行している。
コンビニがあるのは知っている。とりあえず、コンビニの方へ向かって歩いた。コンビニの向こうは住宅街になっていた。だからコンビニがある。そこ

から引き返して、また門のところまで戻って、コンビニと反対側に歩きはじめた。工場が道を挟んで並んでいた。大きな工場ではない。工房である。散歩するならこっちだと思った。三釘製作所の並び、50メートルくらいに、三釘十郎の表札のある家があった。いくつかの工房に挟まれている。敷地が大きい。そのまま時計を見ながら、真っ直ぐ進んだ。景色がよいわけではなかった。小川があるわけでもなかった。ただ歩くのには、車が来ないし人も少ない。よいかもしれない。
散歩をしているのに、ケータイを何度も覗く。佐元からの連絡を待っている。もうバイバイしたのである。それでも、何度もケータイを見てしまう。

○１号機の最終チェック
水の分析の計測結果は、唐克を満足させるものだった。
「どうもありがとうございます」
唐克に、このような言われ方をしたことはない。明らかに感謝されている。
唐克は、６月16日から１号機の試運転をはじめると言った。１度水に浸かると、修理がタイヘンである。何度も見直しをするのだと言った。確かにそうだ。作業を手伝ってくれている２人は、２号機３号機の組み立て場所をつくっていた。広い第４工房も、狭くなってしまうだろう。活気が出てきた。
狩野も、唐克と一緒になって、１号機のチェックを行った。狩野も、１号機の底に潜って、汗ビッショリであった。
「シャワーしてきます」
唐克は、さっさとシャワー室へ行った。
狩野も、グッドアイデアだと思った。機械の底にいると、汗がとめどなく溢れる。
唐克は、バスタオルを腰に巻いただけの姿で、洗濯機に、洗濯物を移していた。今着ていたものも洗っているのだ。狩野も、同じように、バスタオルを腰に巻いて、洗濯機を回した。三釘製作所には女性がいない。社長の奥さんしか見たことがない。
狩野は、シャワーを浴びた。冷たくて気持ちが良かった。
狩野は作業着も洗った。

狩野が食事処に入ったのは、やはり13時になっていた。お昼のごはんが楽しみだった。
ポテトサラダとカツだった。ボウルいっぱいになるかと思うくらいのポテトサラダである。狩野は、これだけのポテトサラダを食べたことがない。
唐克は、あたりまえのように、ポテトサラダをほうばっていた。

お昼からも、唐克と狩野は、１号機のチェックをした。機械の底に潜って、細かいチェックをした。唐克の仕事は、彫刻をつくっていくかのような、正確で細かい作業であることがわかる。狩野には、このような仕事はできないと思った。チェックをすればするほど、狩野に、どんどん安心が膨らんだ。
１号機を、あのタンクに沈めなければならない。上に付いてるクレーンで運ぶのだろう。これだけ重い機械を、70を越えた唐克が動かしているのだ。信じられない。
タンクに水を通した。何も問題はない。明日にも試運転が可能である。しかし、唐克は、もう１度しっかりチェックしようとしている。そのための１日である。
唐克は、２号機３号機の組み立てをはじめた。１号機は、もう終わったという感じなのだろう。多分、２号機３号機は、すごいスピードで組み上がるだろう。
15時になって、唐克は、お茶を飲みに、食事処へ向かった。狩野は、そのまま、タンクのマニアルを書いていた。
「アイスありますけど」
唐克からのケータイだった。狩野は、食事処へ向かった。唐克は、落ち着いていた。モナカのアイスクリームもおいしかった。

夕方になって、唐克と狩野は、明日の最終チェックのための準備をはじめた。唐克には、最終チェックというより、運転のはじまりという感じであった。自信があるのだろう。
唐克のような人を、機械のカミサマと言うのだろう。どんな難しいことでも、与えられたテーマを、機械で実現させることができる。
「冷たいものを飲みに行きましょう」

まだ20時だったが、唐克は、シャワーへ行った。

狩野も、パソコンをシャットダウンした。

狩野にも、やっと余裕が出てきた。

# 名東エレクも途絶えて２０１０・０６１５

〇姿を消した美薗金蔵

狩野は、散歩に出て、朝ごはんを食べていた。見知らぬ番号からのケータイだった。

それは突然にやってきた。

「美薗金治に１２００万円渡しましたか？」

警察からだった。狩野は、何のことか、よくわからなかった。

「名東エレク株式会社という会社に出資しました」

美薗金治は、大阪の３人から、訴えられて、現在調べていると言った。27名が、美薗の指定する口座にお金を振り込んでいると言った。

「三釘十郎もですか？」

三釘製作所から４５００万円らしい。三釘十郎にも確認の電話が入っているのだろう。

これはタイヘンなことになった。

そういえば、唐克が、朝から姿を見せない。どうしたのだろうか。狩野は、急いで美薗に電話をした。何かの間違いだろう。１号機は、もう仕上がるのだ。美薗のケータイは、現在使われておりませんになっている。

何かがおかしい。

狩野は、名東エレクの専務である。狩野は、自分のとるべき態度がわからなくなった。完全にパニックになってしまった。

朝ごはんを食べている場合ではない。狩野は、三釘十郎に謝るべきなのだろうか。しかし、三釘製作所は、名東エレクの筆頭株主のはずである。

狩野は、財布がポケットにあるのを確認して、三釘製作所の門を出た。守衛は、狩野が、コンビニにでも行くのかと思ったのだろう。片手を揚げてあいさつした。

狩野は、そのままバスの停留所へ向かった。とにかく、警察署に行こうと思った。

狩野は、電話をくれた刑事と会うことができた。
美薗を探してるが、バンコクから先がわかっていないということだった。27名から集めたお金を、バンコクに送金していた。
「３台機械を受注して、もうすぐ出来上がるのですが」
刑事は、ビックリした顔をして狩野に言った。
「どこから受注したのですか？」
みんなに３台受注したと話しているそうだが、誰も、受注票を見てはいなかった。みんな美薗の言葉を信じていた。
刑事の驚きは、狩野も同じだったことに驚いたのだ。
「これからどうすればいいですか？」
狩野は、チカラなくこう聞いてしまう自分に、驚いてしまった。
大阪の３名は、美薗に専務の名刺を渡されて、５月25日の報酬１００万円が振り込まれずに、おかしいと思って警察に連絡し、訴えることになったらしい。最近なのだ。電話での調査だけだが、同じように、専務の名刺を渡されて１００万円の報酬を約束されて、資本金を振り込んだ人は20名を越えるということだった。
狩野は、訴えるかという質問に、うまくは答えられなかった。とりあえずは、警察署を出なくてはならない。
狩野は、三釘製作所に帰ることはできない。しかし、唐克や三釘に、お礼も言わずに去ることもできない。いろいろ考えてはいるのだが、まとまらずに、ただ名古屋の街を歩いていた。公園でじっと座っていた。
狩野らしく、決断して動かなくてはならない。そう自分に言い聞かせるのだが、どう動いていいのか、何を決断するのか、何もわからない。
狩野は、自分のお金のことも、急に気になった。美薗との約束では、７月25日から毎月１００万円が振り込まれる約束だった。その約束があるから、自分のお金のことは気にはならなくなっていた。しかし、これはタイヘンなことになってしまった。しかも、１２００万円は返ってはこないだろう。
考えなければならないことが多過ぎる。
明日は、やはり三釘製作所に出向こうと思った。狩野は、唐克や三釘にお礼を言わなくてはならない。短い時間だったが、楽しかった。

お昼も食べていないし晩ごはんも食べていない。食べたくないのもあるが、所持金がなくなってしまう心配も出てきて、ラーメンを食べることさえ躊躇してしまう。
狩野は、いきなり、自分の環境が、大きく変化したことを知った。これは、自動で動く歩道の終点なのだろうか。まだ先があるのだろうか。自動で動く歩道は、狩野の破滅への道だったのだろう。狩野は、すべてを失った。所持金さえも失った。何も残っていない。まだしっかりしていそうなのは、狩野としての誇りのようなことだ。誇りは、生き残ることに意味はない。狩野は、次第に、自動で動く歩道が、生き残ることの終点に向かっていたのかもしれないと思うようになった。
公園のベンチで、ずっと座っていた。何時間も座っていたのだろう。幸い、梅雨の季節なのに、雨もなく、暖かい。
狩野は、７時になったら、バスの停留所に行こうと思った。

○５万円の報酬でもよかったのに
狩野は、三釘製作所の入り口で、守衛室に何といえばよいのか、わからなかった。自分の立場が、どのように思われているのかもわからない。美薗に騙された哀れな男なのか、美薗と一緒に、ありもしない事業に三釘製作所を引き込んだ１人なのか。狩野は、それが気になった。
「おはようございます」
三釘社長と唐克さんが社長室で待ってますということだった。
狩野は、髪を手櫛で整えて、三釘の社長室に入った。
三釘と唐克が、憮然とした表情で、無言で座っていた。狩野が部屋に入るまで、議論をしていたに違いない。
「私もよくわからないままこの仕事に突っ込んでしまって迷惑をおかけしたかもしれません」
三釘は、４５００万円は、中小企業には痛いと言った。これは、自分の責任だと言った。幸いなことに、他の工房の機械が順調で、一時的な資金不足も、なんとか回避できるということだった。
唐克は、今日、東京の、水処理に強い商社を訪ねるということだった。三釘

は、見込みがないから、ここで撤退したいのだ。傷は深いが、致命傷にならないうちに撤退したいのだ。
さっきから、２人の議論が噛み合わないと言った。
もう、この場に狩野がいることが、意味を失っていると思った。本当は、唐克と一緒に、東京の商社を訪れたいのだが、狩野には、資金がなかった。自ら、自分も参加させてくれとは言えなかった。報酬が５万円でもいいから、三釘製作所で雇ってくれとは言えなかった。
三釘は、唐克を諦めさせようとするし、唐克は、まだ夢を捨て切れていない。美薗に騙されたことは事実なのだが、この機械が世の中で成立するかどうか、挑戦はしていない。
三釘と唐克の間に入って、狩野の存在は、次第に無意味になってしまう。
「狩野さんはどうするのですか？」
やっと三釘が聞いた。三釘も唐克も、狩野を、美薗の一味だとは思っていない。美薗に騙された一人だと考えている。
「出直そうと思ってます」
三釘は、シャワーをして、お昼を食べて、ゆっくりしてくれと言った。唐克は、背広を着ていた。社員の１人が迎えに来た。名古屋駅まで送って行くのだろう。三釘は、警察署に出かけると言った。

狩野は、４畳半の部屋に入って、お世話になったベッドに横になり、ある種の安堵感が広がるのを感じていた。やはり、三釘製作所だ。狩野が、昨日の夜から心配していたのは、三釘製作所が、危機に陥るのではないかと思っていたからだ。資金が回らなくなると思ったからだ。狩野の自分の資金も回らなくなってしまったのだが、三釘製作所の資金が回らなくなるのは、辛い。名古屋の人は、みんな良い人が多い。
このままここにいるわけにはいかない。狩野は、起き上って、シャワーに向かった。三釘はお昼を食べて行けと言ったが、警察署のはずである。とにかくシャワーをしないと、ドロドロである。
狩野は、食事処へ行った。まだ11時40分だったが、三釘の奥さんが皿うどんを運んでくれた。
「三釘や唐克はこういう経験が何度もありますから」

三釘の奥さんは、そう言って、キッチンから出て行った。
明らかに、慰められている。昨日の夜、三釘製作所に、どういう顔をして入ればよいのか、思い悩んだことが、ウソのようだった。
昨日のお昼から何も食べていなかった。
大盛りの皿うどんである。狩野は、５分もかからずに食べ終えた。これで、三釘製作所の人とはお別れだろうと思った。みんな、よい人だった。そして、みんな仕事ができる。いままで狩野が出会ってきた人とは、異なっていると感じていた。しかし、狩野には、それが何かわからなかった。

狩野は、ボストンバックに下着や身の回りのものをゼンブ詰めて、部屋の掃除をした。部屋の掃除といっても４畳半である。掃除機で、３分もかからない。窓を開けて、空気を通した。
しばらくの期間だったが、狩野にとって、最も住みやすい空間だった。たった４畳半だったが、自由だった。シャワーもごはんも、満足だった。唐克には世話になった。
狩野は、ボストンバックを持って三釘製作所の門を出た。２人の守衛は、すべてを知っていた。片手を揚げて会釈をするだけだった。
狩野は、バスの停留所に向かった。守谷に帰るところがある。

## ○アパートから一歩も出ずに

三釘製作所から守谷に帰って４日になる。狩野は、一歩も外に出ていない。
名古屋からの帰りに、守谷のスーパーマーケットで、強力粉と薄力粉とウインナーソーセージを買った。ずっと、ウインナー入りのパンを焼いて食べている。
狩野には、何もなくなってしまったのだ。現代大学教授の話もあった。中国の会社の役員の話もあった。いくつもの話があった。すべて失ってしまった。妻の友子も息子の保も娘の知美も失って、佐元も失った。なにもかも失ってしまった。何も残っていない。
この４日、自分がどうすべきか、ずっと考えている。名東エレクからの収入が７月25日からはじまる予定だった。毎月１００万だった。狩野は、収入の

ことを考えなければならなくなった。
週末は、いつも佐元のマンションだった。今週も、佐元からはなにも連絡がない。佐元には、謝らなければならない。連絡しようと思う。
狩野は、頭がキレると思っている。窮地に陥っても、何度も挽回してきた。今度も、その窮地だと思いたがっている。しかし、今度は、いままでの窮地とは違う。狩野の意に反して、物事が進んでしまう。自動で動く歩道に乗っている。狩野は、歩いていないのだが、歩道が勝手に進んでしまう。勝手に動いてしまう歩道は、どう考えても、狩野を破滅に導いている。もうこの動く歩道の先行きが見えてしまった。もう、破滅をしているようなものである。狩野には、希望がなくなってしまった。
この４日間、ずっと考えている。なぜ狩野が、ここまで苦しむのか。いくら考えても、答えなど出てこない。自業自得ということばだけが思い浮かぶ。

お昼から、意を決して、名古屋の警察署の刑事に電話をした。
「美薗が見つからず進展しません」
長期戦になると刑事は言った。
「現在14名が訴えを起こしていますが加わりますか？」
狩野は、また返事を曖昧にした。
美薗の事件が、新聞やテレビを賑わすことは、いまのところはない。もっと大きな事件が、山のようにあるのだろう。
１２００万円は、返ってはこないだろう。美薗に財産がなかったのも、知っているようなものだ。早く忘れて次のことをしないといけない。この４日間、何度もそう思う。しかし、狩野には、やることがないのだ。最後の希望だった名東エレクの話が壊れたのだ。
必死になって、狩野が次にやるべきことを考えている。狩野にふさわしいことを思いつこうとしている。そして、ついつい三釘製作所の食事処に行き着いてしまう。頭が勝手に動いていく。
何度も首を振るのだが、頭が、勝手に佐元を思い出す。

そして、また４日が過ぎた。

狩野は、一度買物に出た。強力粉と薄力粉とウインナーソーセージを買いに出た。このような食生活が良くないことは、承知している。しかし、狩野には、所持金がなくなっているのだ。１２００万円があれば、強力粉と薄力粉とウインナーを食べ続けることはなかっただろう。
梅雨の雨の中で、しかも暑かった。狩野は、アパートの座イスに座って、何かを考え続けていた。考えているつもりだった。
しかし、立ち上がって、何をするわけでもなかった、ただ考えているように思える。何もしないことと同じである。
狩野も生き物である。
生き残れるかどうかは、食べる物が手配できるかどうかにかかっている。豹だって、狩りができなければ、餓死してしまう。今でも、何匹もの豹が、獲物を狩れなくて餓死しているだろう。
狩野も、次第に、狩りができない豹のようになりつつあると思った。
こうなるとは思ってもみなかった。狩野には、生きることに自信が溢れていた。勉強が得意である。何をやっても、短時間に技を取得する。しかも、リーダーらしい雰囲気を出せる。今の日本の中では、好条件で迎えられるにふさわしいと思う。自分こそ、今の日本では、大きなチカラを発揮できると信じていたし自信があった。それは、今でも変わっていない。
何かがおかしい。
今起こっていることは現実なのだろうか。
何度考えても、やはり、何かがおかしい。自業自得と思わなければならないのだが、何かがおかしい。
そんなことよりも、当面の収入を得なければ、どうにもならない。
本気になって考えなければならない。

〇もう１人の狩野

７月最初の日曜になった。突然に刑事から電話があって20日が経過した。今から考えると、この事件は、狩野にとって、ショッキングな事件だった。もう、機械が出来上がっていた。技術的には問題はないように思えた。唐克が商社に出向いたのだが、どうなったのだろうか。狩野は技術屋である。この

ような立派な技術が、美薗のような醜悪さに負けるのは、なんとも悔しい。考えれば考えるほど、悔しさがこみ上げてくる。
狩野は、一時の座イスに座りっぱなしの生活から、朝の散歩もはじめている。シャワーもしている。所持金の都合で、パンにウインナーの食生活は変わらない。お昼を抜いている。朝パンを焼いて、夜にパンを焼いている。１日２食にした。
12時になって、朝焼いたパンの残りを食べている。ほんの１かけらのパンである。
狩野が乗ってしまった自動で動く歩道は、終点に達したのだろう。もう狩野には、持ち駒がなかった。ことごとく閉ざされてしまった。狩野が打った駒は、すべて持ち去られたかのようである。
ハローワークへ行かないといけないのだろう。
おかしなものだ。55才の役職定年の封書に反発して会社を辞めたのだ。狩野は知らなかったが、狩野は、社長候補だった。もっと立派な仕事をする自信があった。だから辞めた。それなのに、ハローワークに行くことになるのだろうか。
もし役職定年を受け入れていたら、今ごろは、一般社員ではあるが、１日２食の生活はしていない。しかも、１２００万円を失うこともなかっただろう。

夕方になってシャワーを浴びながら、一時の感情の混乱はなくなってきていると思った。三釘製作所で朝ごはんを食べている時に、突然刑事から電話があって、その夜を名古屋の公園で過したような、パニック状態は、なくなっていている。落ち着いてきたと、狩野は、自分でも思いはじめている。
落ち着いてきて、すべてを受け入れそうになっている自分が怖くなっていた。自動で動く歩道の終点に来てしまったことを、受け入れそうである。これは運命だと。こうなる定めだったと。
シャワーから出て、狩野は、佐元に電話をした。留守電になっている。
「謝りたいのですが電話をください」
短い連絡になってしまう。連絡するようなことではない。狩野にとって、佐元がいなくなったことは、生きている支えを無くすようなものだ。謝ろうが

土下座しようが、佐元を引き戻さなくてはならない。どこかで、もう一人の狩野が必死になって声を上げている。もう一人の狩野は、明日ハローワークへ行けと言っている。このままでは手遅れになる。バカなことをするなと言っている。みっともないとか誇りとか、どうでもよいと、大きな声を上げている。
ここ数日で、もう一人の狩野が現れるようになった。
いままでの狩野とは違う。まるで生き方が違う。１日に２食になっても、ここでじっとしている狩野を責める。55年生きてきて、狩野に２人の自分がいたことなどなかった。いつも、狩野は狩野である。常に試験の成績を求め、仕事の成果を求めて来た自分である。最近現れるもう１人の狩野は、生き残るのが先だろうと言っているかのようである。
生き残ることなどに、危機はなかった。いままで一度もなかった。
狩野は、大きな声を上げているもう１人の自分を無視するだろうと思った。たとえどんな事態になろうとも、狩野らしくしなければならない。そのように、小さい頃から、自分を培ってきた。立派な人になるように、自らを育ててきた。
いきなり出てきたもう１人の狩野は、なりふりかまわない狩野である。狩野にはそぐわない。多分、もう１人の狩野を無視すると思った。

## 〇もう１人の自分の言い分

やはり、狩野は、最近頻繁に現れるもう１人の自分を無視している。食事も、２食を続けていて、パンとウインナーである。野菜はゼロになった。
今日は海の日である。真夏である。今日、強力粉と薄力粉とウインナーを買ってきて、預金残高が、アパートの家賃を払う額に近くなってしまった。今月末の家賃を払ったら、食べ物を買うお金もなくなってしまうことになる。
狩野は、冷静だった。パニックにはなっていない。よく計算できている。
もう１人の狩野は、大声を上げている。
クレームのことはどうなったのだろうか。狩野が、部品調達の遅れの責任をとって会社を辞めたことになっている。名波からも何も連絡はない。もう、

時間が経過して、過去の出来事になったのだろう。
美薗はどうしているのだろう。バンコクから先の消息がわからなくなっているらしい。狩野達が振り込んだ資本金は、バンコクにあるのだろうか。どうなったのだろうか。警察からも何も言ってこない。唐克は、あの水処理の機械を完成させたのだろうか。あの機械を商社にお願いして、販売をはじめることができたのだろうか。
狩野の周辺で起こったことだ。ただの出来事ではない。事件である。ただの出来事だったら、数多くある。最も理解に苦しむのは、佐元である。あの、壊れるよろいは何だったのだろう。下田に２度も連れて行かれたが、あれは何だろう。もしかして、狩野を裏切っているのかもしれない。鮒野と通じているのかもしれない。狩野を破滅に追い込むことができて、笑っているのかもしれない。
ワルク考えてしまうと、次々に、とんでもないシナリオが頭をよぎる。
狩野が、自動で動く歩道に乗ったのは、役職定年の封書だった。そして５月５日の狩野の誕生日だった。狩野は、退職の道を選んだ。そこから、たった２カ月半しか経っていない。
たった２ヵ月半の間に、狩野の道は完全に断たれてしまった。自動で動く歩道は、終点に達してしまった。
これは何だろう。狩野には、揚々とした未来があった。今でもある。関エトレの社長候補でもあった。自業自得だったら、何が狩野に足りなかったのだろう。何かがおかしい。
狩野は、もう終点に達したと思っている。もう１人の狩野は、まだ時間は残されていると言っている。毎日大声を上げている。ここで座イスに座っている場合ではないと。しかし、多分、狩野は、もう１人の狩野を無視するだろうと思っていた。
このところ、メールの連絡もなければ、電話もない。狩野は舞台から消えてしまったかのようである。
もう１人の狩野は、就職活動を思い出せと言っている。あの頃は、何もなかったが、希望に溢れていた。しかも、食べていかなくてはならない。アルバイトを続けるわけにはいかない。必死だった。関エトレに就職できた時、狩野は、重荷が降ろされたことを知った。

今の狩野はなんだろう。何かがおかしい。もうすぐ所持金がなくなることがわかっているのに、座イスに座ってじっとしている。もう１人の狩野は、大声を上げているのだ。

夕方になった。狩野は、パンを焼いた。多分、もう何度かで終わるであろうパン焼きである。
パンを焼きはじめて、そうながくは経っていない。もともとは、ピザを焼きはじめてからだ。ピザ生地を自分でつくってピザを焼きはじめた。どんどんおいしくなっていった。買い置きのパンがなくなって、仕方なく、ピザ生地を焼いた。ウインナーソーセージを、ピザ生地に挟んで、パンのように焼いた。絶好だった。
狩野の最後の食事がパンになるとは、思ってもみなかった。もう１人の狩野は、いますぐ電話しろと言っている。大学時代にアルバイトがなくて、必死になって歩き回ったことを考えろと言っている。家賃が払えなかったことも何度もある。
狩野は、シャワーを浴びながら、もう１人の自分の言い分を確かめていた。

### ○勘違いしていてゴメンなさい

昨日７月の家賃を払って、２３００円しか残らなかった。
相変わらず、もう１人の狩野が大きな声を上げている。バカなことをするなと言っている。朝から、ずっとわめいている。
狩野は、仕方なく、唯一残っている、増渕へ連絡することにした。増渕は、佐元から狩野を奪った。狩野からの連絡を待っているに違いない。
狩野は、増渕を愛しているわけではない。これは、一方的なものだ。気がすすまなかった。しかし、もう１人の狩野がウルサイ。時間がないと言っている。多分、すぐに来てくれるだろう。本当は、佐元に来てほしいのだが、佐元には電話はできない。
「勘違いしていてゴメンなさい」
思いがけない増渕のことばだった。狩野は、いろいろあって、ピンチに陥っている。所持金もなくなったと言った。

しばらくは、狩野は立ち上がれなかった。ずっと座イスに座っている。立ち上がることは、トイレに行く時くらいのものだ。それでも、増渕のことばは、立ち上がる気力を失わせた。
増渕は、狩野の自宅に２度も来た。１度目は、酔い潰れた狩野の横で、下着のまま眠っていた。２度目は、１度でいいからとやってきて、男と女の仲になった。そして、佐元に、狩野から手を引くように、狩野の写真を送りつけた。わたしの狩野だった。
狩野は、もう１人の狩野を責めた。フツウは、狩野に所持金がないなど、誰も信じない。美薗の事件は、公にはなっていない。はじめて、増渕に、所持金がないことを話した。ピンチだと話した。
誰でもが驚いてしまうだろう。退職金もあるだろうと。狩野が、友子と保と知美に渡したことなど、誰も知らない。知っているのは、佐元だけだ。美薗のことも、佐元は知っているが、事件のことは知らないかもしれない。狩野は、バカなことをしてしまったと後悔した。
増渕は、凛としてカッコいい狩野のファンだったのだ。狩野と一夜を共にすることは、増渕の夢だったに違いない。そして、佐元から、カッコいい狩野を、自分のものにできるかもしれないと思ってしまった。
これは、愛ではない。
「勘違いしていてゴメンなさい」
言い当てて妙である。これは、増渕の勘違いなのだ。佐元も同じだろう。みんな、凛としてカッコいい狩野の、隠れたファンなのだ。ただそれでけである。愛などどこにもない。

# 追いつめられて２０１０・０８１５

○追い込まれて

狩野は、追い込まれた。もう水だけで過して３日になる。今日はお盆の15日である。それくらいは理解している。３日間、窓も閉め切って、朝から座イスに座っている。テレビを見る気力もない。うだるような暑さである。クーラーはあるのだが、スイッチを押す気にならない。

冷蔵庫には、何も残っていない。気にしなかったが、何も入っていない冷蔵庫の音は大きい。なぜだろう。そんな、どうでもよいことを考えてしまう。

預金通帳はゼロになった。現金は38円である。

このままだと餓死することになるのだろうと思った。

３万人の自殺者がいるという。狩野の場合はどういう扱いになるのだろう。餓死者であるが自殺に等しい。こういう死に方をする人も、多いのだと、身をもってわかった。

知美に電話をしても、すぐに来てくれそうな気がする。もう３日も何も口にしていない。顔も骨ばってきた印象である。しかし、知美には電話はできない。したくない。

こうなるのだったら、増渕に助けを求めるのではなかった。

「そういうつもりじゃないから」

増渕の一言は、狩野の動きを止めてしまった。人が何なのか、よくわからなくなった。

佐元は、狩野にさよならを言った。増渕と同じように、「そういうつもりじゃないから」と言われるに決まっている。

名波も、ビックリして飛んでくるかもしれない。

父母や妹も元気でいる。しかし、電話はできない。これはなんだろう。数日で餓死するのがわかっている。今どき餓死である。

昔の武士は、こうして切腹したのだろうと思った。何かの事件があって切腹させられたら、まだよい。狩野のように追い込まれて、切腹するか餓死するかになったのだろう。狩野は、切腹などないから、餓死することになる。

この2日間、こんなことを考えている。なぜ狩野が餓死したのか、生きているうちに考えたかった。ずっと考えているが、狩野には、よくわからない。不思議と、空腹にならない。水を飲みに行く元気はある。

ずっと座っている。多分、眠ってしまった時間もあっただろう。今は、また座イスに座って、何かを待っているかのように、じっとしている。夜になっていた。
ケータイが鳴った。佐元だった。
「まだ生きてるのか」
意外な佐元のことばだった。なぜ狩野がこういう選択をすることがわかるのだろう。役所に電話して出向けばよいのだろう。きっと、当面の生きる手だてを教えてくれるだろう。よくわかっている。
「ここまで来れる？」
狩野は、ガソリンが気になった。どうなっていたか記憶にない。
「わかった」
それだけ言うと、立ち上がって、水を飲んだ。
カギを締めることは忘れなかった。そして、気になるガソリンである。
計算しても、計算できるものではない。もう出るしかない。
狩野は、エンジンをかけた。
佐元が「ここまで来れる？」と言ったのは、どういう意味だろう。「まだ生きてたのか」と言ったのは、どういうつもりなのだろう。
髭をあたってくれば良かったと思った。髪に櫛をあててくればよかったと思った。着替えをしてくればよかったと思った。もう3日もシャワーもしていないし着替えもしていない。眠るのも座イスのままだ。
餓死するよりも、大型のトラックに衝突した方がいいのかと思った。しかし、多分、知美がタイヘンだろう。餓死の方が、誰にも迷惑がかからない。
佐元のマンションに行ってどうなるのだろう。
佐元は、増渕とのことを許すのだろうか。空腹だから、とりあえずごはんを食べてという感じではない。もう通り越えている。

もうとっくにガソリンは空になってアラームが出ている。それでも、走っ

た。止まったところが終点だと思えばよい。まだかなり距離がある。
不思議なことに、まだ車は走っている。狩野と似ている。もう３日も水だけなのに、身体が動いている。正確に運転もできる。気を失う兆候もない。車も、まだ止まりそうもない。
佐元のマンションの駐車場の入り口に、佐元の車があった。佐元が出てきた。
「わたしの駐車スペースに置いてきて」
狩野は、言われたとおり、佐元の駐車スペースに自分の車を置いた。そして、佐元の車に向かった。
「乗って」
佐元は、狩野を見た。髭はそのまま、髪も起きたまま、着替えもしていない。顔はやせている。
佐元は、じっと狩野を見て、アクセルを踏んだ。
佐元は、すべてを察知している。
佐元には、餓死する前に、聞きたいことが山ほどある。しかし、なんだか、どうでもよくなった。狩野は、何も話さなかった。
「わたし一緒に死んであげることにしたから」
夢の話ではないかと思った。驚きもしなかった。なぜなのか、またわからない。佐元は、狩野には失望したはずである。
「こういうつもりじゃなかった」
増渕と同じことを言うと確信していた。佐元も増渕も、狩野のカッコ良さにホレていたのだ。今は、最もカッコワルイ。
狩野は、黙っていた。

佐元は、小田原から海岸に向かった。もうかなり走った。狩野は、どうなるか考えていた。多分、餓死よりフツウの事件として処理されそうである。狩野と佐元が恋仲であったのは、佐元のマンションの管理人が証言するだろう。問題は、佐元である。巻き添えになる必要はない。これは、狩野個人の問題である。意味がわからない。
佐元は、車を止めた。
「ここだったらすぐに見つけてくれるから」

さっぱりしているのが不思議である。
「私の巻き添えになる必要はありません」
佐元は、狩野のことばを無視するように、用意していたと思われる、５００ミリのビール缶を出した。缶が開いている。ビニール袋に輪ゴムでしっかり閉じてある。
「一気に飲めば終わりだから」
狩野は、ずっと餓死を覚悟していた。一気に飲んだ。
「覚悟していたのですか？」
佐元に聞いてみたかった。
「覚悟していた」
そう言って、佐元も、一気に５００ミリのビールを飲んだ。

狩野は、もう意識がなくなってきている。
誰かにありがとうを言いたかった。
不思議と佐元のベッドの笑顔しか浮かんでこない。
「佐元さんありがとう」

〇生き返った？
地獄ではない天国のようであった。
朝日にもうすぐ照らされそうな気配がしていた。
後で聞きなれた声がした。
「今日はたくさん漁があったから安かった」
天国にまで来て、こんな話をするのだろうか。
車から何かを降ろしている。磯の匂いがしてきた。
どうやら助手席が倒されて、そこに横になっているらしい。狩野である。
車の右横を、佐元が、重そうな荷物を運んで、建物に入って行った。もう１人いた。記憶が正しければ先里だった。間違いない。
狩野は、死んだはずだった。餓死せずに、佐元と一緒に心中することにした。それがどうなっているのだろう。理解できない。急に、強烈な空腹感を感じた。もう何も食べないで４日目になる。まだ空腹を感じるのだろうか。

佐元が出てきた。バックドアーを締めて、運転席にやってきた。
佐元は、エンジンをかけて、バックしている。ここは、下田のラーメン屋である。１軒でやっている海鮮ラーメン屋である。
佐元は、急いで、ラーメン屋に入って行った。
なぜラーメン屋なのだろう。それに、佐元の着ている白い洋服はなんだろう。白いバンダナはなんだろう。白いゴム長のようなものを履いている。
佐元は死んだのではないのか。狩野と一緒に死んであげると言ってくれたはずである。
狩野は、考えなければならないと思った。
不思議なことに、狩野は、眠ってしまった。よくわからない。

強烈な暑さに目が覚めた。
車の窓が開けっぱなしだった。それでも強烈な暑さである。狩野は、背もたれを元に戻して、バックミラーで自分の顔を見た。
やっぱり、死んだのではないかと思った。髭は、半分くらい白い。いままで、髭を剃らなかった日はなかった。４日もそのままだと、髭が白いことがわかる。唇は乾いている。皮膚も乾いている。粉がついている。多分塩だろう。もう汗がなさそうである。このままだと、熱中症で死んでしまう。髪もボサボサである。一気に髪が白くなった。
どうしていいかわからなかった。
ラーメン屋から人が３人出てきた。ジャンケンに負けてビールを飲めなかった学生らしき若者が運転して、ゆっくり走り去った。
午後の２時になっていた。
駐車場に車はいなくなった。
佐元が出てきた。
「生き返った？」
ことばがなかった。
「夏休みだから忙しいんだよ〜朝から」
一緒に死んであげるからと、昨日の夜、小田原の海岸で言ってくれたのに、どうなったのだろう。
「ちょっと待ってて」

佐元は、ラーメン屋に入って、スポーツ飲料を持ってきた。
「これ点滴と同じだから」
狩野は、一気に飲んでしまった。
「何日食べてないの？」
４日だと言った。
「わたしの計算が正しかった」
佐元は、なぜ、狩野が何も食べないで餓死する道を選んだことを知っているのだろうか。なぜ計算などするのだろうか。
「わたしと一緒に死んでくれないから」
狩野は、それでも、なにがなんだか、よくわからなかった。よくわからないではなくて、ゼンゼンわからない。いままで、ずっとである。佐元がよくわからない。またもや裏切られている。なぜ一緒に死のうと思ったのだろうか。そして、死んではいない。狩野も死んではいない。
「ちょっと待ってて」
佐元は、またラーメン屋に入って行った。
２台の車が駐車場に入ってきた。狩野は、居眠りを装った。
「おじやだから」
佐元は、スポーツ飲料とおじやのどんぶりを持ってきた。
「わたしお客さんだからここで食べてて」
佐元は、急いでラーメン屋に入って行った。お客さんだからとはどういうことだろうか。
狩野は、おじやを見ても、食べる気がしなかった。スポーツ飲料は、一気に飲んでしまった。おじやのスプーンに、手をつけてみた。４日も何も食べていない感じはしない。
佐元は、こんな哀れな狩野に、何をしようとしているのだろう。一緒に死んでくれるだけでありがたい。
佐元が出てきた。
「どういうつもりですか？」
狩野は、怒ったように、佐元に聞いた。
「お願いだから違う人になって」
狩野は、まじまじと佐元を見た。

佐元は、狩野を殺してしまいたかったのだと言った。別の人になってほしいから。
「もう何年も前から考えてた」

〇佐元の自宅
15時30分になって、やっと佐元が出てきた。ずっとお客さんの車の出入りが激しかった。
「シャワーできる？」
佐元は、いきなり聞いた。
「下着とか着るもの置いてあるから」
佐元は、ラーメン屋の裏の出口から、狩野を案内した。
入口は厨房の入り口でもあって、先里が忙しそうに何かをしていた。なぜ先里なのだろう。あのラーメン屋の主人はどうしたのだろう。女性が２人いたのに、どうしたのだろう。
「温泉だから」
フツウに家庭にあるお風呂ではなかった。小さな旅館の風呂の感じである。温泉とはどういうことだろうか。
死んだはずなのに、生き返ろうとしている。
佐元は、忙しそうに、お店に出て行った。
温泉らしかった。チョロチョロ出ている湯は、60度くらいあった。しかし、チョロチョロである。源泉だろうか。
狩野は、髭を剃り身体を洗い髪を洗い、そして、湯船に浸かってみようと思った。おそらく、何年ぶりである。
狩野は、これから自分がどうなるのか、わかっていなかった。このラーメン屋はどうなるのか。なぜ先里がいるのか。明日は、佐元に追い出されるのか。そしたら、昨日死なせて欲しかった。もう何も思い残すことはなかった。

温泉の匂いに、ゆっくりしてしまった。
狩野は、佐元が用意した下着とパンツとシャツを着た。そして、そっと、厨

房と兼用になっている裏の出口に来た。
佐元が、慌ててやってきた。
「こっちに来て」
佐元は、リビングのようなところに案内した。キッチンもあった。ラーメン屋の自宅だろう。
「お腹すいてるだろうけどちょっと待って」
そう言って出ようとする佐元に、狩野は、このラーメン屋が自宅なのかと聞いた。
「わたしの退職金でここを買った」
もうずっと前からそうするつもりだったと言った。もうラーメン屋をはじめて１週間になるらしい。
すると、ここは佐元の自宅である。それでいろいろなことがわかってきた。
佐元は、何度もここにやってきた。狩野も、２度も来た。
しかし、なぜラーメン屋なのかわからない。それに、違う人になってくれとはどういうことなのか。
それに先里がいるのはなぜなのか。

狩野は、ずっとテレビを見ていた。コーヒーメーカーにコーヒーが煎れてあった。メモはない。あの壊れたよろいのメモは何だったのだろう。
狩野は、お腹が空いた。冷蔵庫を開けてみた。ウニがパックで入っていた。つまんで食べる物でもない。刺身も入っている。狩野の冷蔵庫は、空になって大きな音をたてていた。
仕方なく、コーヒーを飲んでいた。
21時になって、やっと佐元がやってきた。海鮮どんぶりを２つ持っていた。
「お刺身もあるから」
そう言って、冷蔵庫から、ウニと刺身を出した。
「おいしいワインもあるから」
先里はどうしているのだろう。
「わたしちょっとお風呂してくるから先に食べてて」
佐元は、狩野の食べる用意をして出て行った。
狩野は、迷った。待ってようと思った。

先里が入ってきた。
「多分狩野さんには説明ができないしわかってもらえそうもありません」
そう言って、先里は、用意してあったのだろう、ワードで綴られた手紙を差し出した。
「明日からは、狩野さんが、佐元さんを助けてやってください」
そう言って、先里は、静かに出て行った。

〇先里からの手紙

狩野　隆一様

わたしの名前は、まきのわたる　と言います。
先里甲一のペンネームです。電子出版の会社から、「よろい」を出版しています。
佐元さんは、電子出版の書店から、まきのわたる「よろい」を探し当てました。そして、まきのわたるに、相談に乗ってほしいと伝えました。
佐元さんは、同じ会社の狩野隆一という男性を愛していました。佐元さんが新入社員として入社した時から、その愛ははじまったそうです。ところが、狩野という人物は、凛として素晴らしかったのですが、常に、危うさがつきまといました。中国プロジェクトも、自分の名声のために戦ったように見えたのだそうです。そして、妻と息子さんと娘さんを失いました。家族は、狩野さんが、家族よりも、自分の名声や成果を望んでいると思ってしまったのだと、佐元さんは言っていました。
まきのわたるは先里甲一です。この佐元さんの相談に驚きました。なぜなら、狩野隆一は、私の後任の研究所長だったからです。
まきのわたるの「よろい」を読まれたかもしれませんが、まきのわたるによると、人には、愛とよろいの２つの大事なものがあって、通常は、人は、自分のよろいを厚くすることに、懸命になるのだそうです。受験が制度になっているのも、人の、よろいを厚くしたい欲望の表れなのだそうです。人は、肩書が大事だと、誰もがわかっています。肩書や学歴で、人を判断します。つまり、人は、よろいの品定めをして、その人を評価しているのだそうで

す。
よろいの対極には愛というものがあって、通常は、愛は、よろいに覆い隠されてしまいます。愛が大きい人は、よろいが少なく、愛が少ない人は、よろいが大きいことになるのだそうです。まきのわたるの論説です。
これに従うと、狩野隆一という人物は、よろいに覆われた、愛の少ない人物のように見えます。一般的に、会社での評価では、よろいが厚い方が好まれますので、狩野隆一という人物は、会社の評価は高くなり、研究所長になったと考えられます。
そして、佐元さんによると、狩野隆一という人物は、次期の社長候補だったのだそうです。
佐元さんは、狩野さんが、このままでは、家族を失ったように、愛によって得られた大事なものを、すべて失ってしまうのではないかと危惧したのです。狩野さんのよろいを、少なくできないかと考えたのです。
私は、先里甲一です。狩野隆一なる人物を、よく知っています。私は、狩野さんのよろいを壊さなければ、難しいと言ったのです。狩野さんは、立派な方ですが、根に、よろい重視の志向があり、小さな時から、よろいを積みあげてきたと思うのです。狩野さんだけではなくて、現代の日本の人は、だれでもが、よろいにまみれています。つまり、愛がみなさん小さいのです。
私は、狩野さんのよろいを壊す方策として、狩野さんが気がついていない、社長の鮒野さんとの戦いに、挑まないように、佐元さんに伝えたのです。
狩野さんが、自分が社長候補であると気がつけば、戦いを挑むに決まっているからです。そして、佐元さんが、危惧しているように、もっと大事なものを、失うと思ったからです。
佐元さんは、あたかも、狩野さんを裏切るかのように、鮒野社長や酒向専務に近づきました。それは、狩野さんを、関エトレという会社が追い込むという結果になってしまいました。鮒野さんや酒向さんは、狩野さんを、権力争いの敵だと思っていたからです。
佐元さんは、狩野さんに、自分が鮒野さんや酒向さんに、戦いを挑むべきだという考えを、植えつけなかったのです。これは成功しました。
しかし、狩野さんにとっては、佐元さんが、自分が社長になることに、もっと協力していればと思うかもしれません。

佐元さんは、狩野さんを裏切っても、狩野さんのよろいを壊す方を望んだのです。これは、愛としての当然の行為です。もし佐元さんが、狩野さんが社長になることに協力したならば、私が、佐元さんのへのアドバイスを、即刻止めたでしょう。
人が人らしく生きるということは、愛に溢れて生きるということです。佐元さんの決意は素晴らしいものでした。
ついでですが、狩野さんが中国プロジェクトに命を賭けたのですが、中国の会社は、その後、関エトレから離れて、独自の道を歩みはじめました。理由は、佐元さんが、鮒野社長の机から、秘密文書を盗んで、中国の会社に渡したからです。そこには、中国の会社が香港のペーパー会社を経由して、関エトレに納品するという、秘密の契約が書かれていました。表には出せないメモです。鮒野さんの個人的な財布に入ることになることは、当然です。
佐元さんが、鮒野さんの机から秘密文書を盗んだのは、狩野さんを、中国プロジェクトと無関係にしたかったからです。佐元さんは、身体を張って、狩野さんが、中国に係ることを防ごうとしました。
狩野さんは、怒るかもしれません。もし、狩野さんが、よろいにまみれていれば、怒るかもしれません。
しかし、よく考えて欲しいのです。人にとって、何が一番大事なのか。それは愛に決まっています。
狩野さんが、美薗という人物を信用してしまったのも、佐元さんは、狩野さんが、よろいを重視するからだと言っていました。関エトレを55歳で退職したのも、役職定年で、一般社員になることを、狩野さんのよろいが許さなかったと言っていました。狩野さんにとっての次の仕事は、少なくとも、役員待遇でなくては、よろいが許さなかったからです。すべては、よろいによるものです。
このように、狩野さんのよろいは、自分を守ってきたかもしれませんが、自分を決定的な危機に陥れるものでした。佐元さんは、美薗さんとのいきさつを、狩野さんから聞いていて、私の言っている、壊れるよろいを実行したのです。狩野さんのよろいを壊さなければ、愛している狩野さんが、破滅すると思ったのです。
そのことを、暗に、狩野さんに伝えようとしました。しかし、狩野さんに

は、よくわかってもらえなかったようです。まきのわたる「よろい」も、詳しくは読んでもらえなかったようです。
ついに、佐元さんは、決定的な決断をしました。
ここのラーメン屋さんを買ったのです。関エトレを辞めた退職金です。佐元さんも背水の陣です。自分で魚を研究して、海鮮ラーメンと海鮮どんぶりを自分のものにしました。
佐元さんは、狩野さんの美薗さんとの係りを読みながら、急ぎました。佐元さんは、美薗さんが、詐欺師であることを見抜いていました。
時間がありませんでした。佐元さんは、更に、決定的な決断をしました。狩野さんに一旦死んでほしかったのです。狩野さんのよろいは、死ぬまで壊れないと、私が言ったからです。
佐元さんは、すでに、マンションも解約していました。自宅が、ここしかなかったのですが、昨日、狩野さんを、裏切りました。一緒に死のうと言ったはずです。佐元さんは、何度も何度も、狩野さんを裏切ったのです。
私も、佐元さんの裏切りに知恵を貸しました。そして、私は、佐元さんが、プロのラーメン屋になるまで、１週間、ここで手伝いました。

佐元さんの、狩野さんのよろいを壊す作戦は成功したのかどうか、よくわかりません。この状況を、狩野さんは、どう解釈してどう判断するか、定かではありません。
ただ、これだけはわかってあげてほしいのです。人にとって最も大事なことは、愛に溢れることだと、佐元さんは、信じたことです。それは、佐元さんが、まきのわたる「よろい」を読んで、気がついたことです。佐元さんにとっては、決定的なことになったのです。佐元さんは、私も驚くくらいに、大きく変化しました。変わりました。愛に溢れてきました。
佐元さんが、ずっと変わらずに、狩野さんを愛してきたことも、信じてあげてほしいのです。
私の希望としては、狩野さんが、このラーメン屋さんで、佐元さんと肩を並べるくらいの、味のあるラーメン職人になってほしいことです。それは、佐元さんの希望です。しかし、選択するのは狩野さんです。もし、狩野さんが、ここを出て行っても、佐元さんは、後悔をしないでしょう。それは、自

分が愛する人に、すべてを捧げた結果ですから。

私のことを話しておかなくてはなりません。
佐元さんも、私が不思議になっていました。つくばのラーメン屋さんに佐元さんが来て、私を見た時の驚きは、タイヘンなものでした。まきのわたるを訪れたからです。実は、先里甲一でした。失敗したと思ったそうです。佐元さんにとって、最も大事なことを、決して話してはいけないことを、先里甲一という、同じ会社に勤める人に話したのです。
佐元さんは、もう私を信じる以外に、方法がなくなったのです。
ある時、佐元さんは、電話で言いました。
「ブッダのようでいいのですか？」
そうです。私は特殊な人間です。私の周辺が幸せになれば、私はグッドなのです。それだけ、私自身の幸せが少なくなることが多いのですが。以前に、下田のスーパーで、狩野さんに会った時も、私が、海鮮ラーメンを教わりに来ていたのです。佐元さんには、私が教えなければならなくなるからです。私は、そういう人です。私は、佐元さんが幸せになってくれたら、それでいいのです。そして、佐元さんが愛している狩野さんが、佐元さんを愛してくれるようになれば、私は、グッドです。
佐元さんは、狩野さんに、よろいをわかってほしいと願ってると思います。ぜひ、考えてあげてください。
私は、佐元さんが愛しているほど、狩野さんは、佐元さんを愛していないと思っています。佐元さんは、今は、人として素晴らしい人です。
どうぞよろしくお願いします。
人は、絶対的な味方がいなければ生きられません。佐元さんは、狩野さんの絶対的な味方です。狩野さんも、佐元さんの、絶対的な味方になっていただきたいのです。
私は、佐元さんと狩野さんの絶対的な味方です。

８月16日　先里甲一

〇溢れる涙

狩野は、先里がどこに行ったのか気になった。静かに出て行った。狩野は、なみだを流したことがない。

先里が気になった。この夜に出て行ったのだろうか。駐車場に車はなかった。しかし、真っ直ぐ歩けなかった。涙で見えなかった。

佐元が、お風呂から出てきた。

「先里さんはどこに行ったのですか？」

先里は、桜並木の向こうの駐車場に車を止めてあって、今晩、つくばに帰ると言っていたらしい。

「あなたに黙って帰ったのですか？」

佐元は、さっき、先里が海鮮どんぶりを食べている時、よく話し合ったと言った。

佐元は、溢れる涙を隠そうともしない狩野を、じっと見ていた。

壊れるよろい

２０１０年

２０１９年

げんじあきら

『脱げないよろい』『ルイハシのよろい』『嫉妬ーまつみのよろい』『ちかのよろい』『虐待ーさじのよろい』『無視ー太田垣のよろい』『隆家のよろい』を読んでいただきたい

壊れるよろい

著者　　　げんじあきら